

---

# 宝蓮荘の高校生管理人

仙人掌

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

宝蓮荘の高校生管理人

### 【Nコード】

N5015F

### 【作者名】

仙人掌

### 【あらすじ】

宝蓮荘というアパートを基本的な舞台としてで繰り広げられる、高校生管理人と住民達とかその他諸々とのほのぼの戦記風仕立て日常系ときたまハートフル（ラブ）コメディー。話に詰まったのと受験もあるので、暫く更新できないです。すいません。

## 戦闘準備兼物語基礎知識説明

カーテンの隙間から一日の始まりを告げる、紫外線を含んだ日差しがさしこむ。

あくびをしながら古典的なタイプの目覚まし時計を見やると、現在時刻は十時前後。

訂正、とつくに一日は始まっていた。

「さて、起きるか」

ここは「宝連荘」の101号室。

今時の子供の名前並に読みづらいが「ほうれんそう」という。

そんなノリだけで名前がつけられたアパートだ。

築五十年を超える老朽化が進む建物だが、少しずつリフォームしているため所々新しい。

部屋は広いのだが、儲けようとか言う考えはないくらい安い物件だ。ちなみに部屋は、8分の6がうまっている。

そろそろ自己紹介をさせて貰おう。

私の名前は「橘 家人」。

下の名前の読み方は「いえひと」だ・・・私も十分今時の子供の名前かもしれない。

よく初対面で名前を間違えられる。

特に日本史を取っていた方には、ケニンという余り嬉しくない読み方をされる。

詳しくはグーグル先生に聞いてくれ、簡単に言つと昔の奴隷のことだった気がする。

職業は男子高校生、大和高校に通っている。

一人称は私だが性別は、繰り返し言わせて貰うと男なのであしから

ず。

それでもって、副業はこのアパート宝連荘の管理人だ。所有権や固定資産税の話は割愛する、面倒くさいし話しても意味が無い。

何故私が管理人をやっているかというと・・・なぜだろう。

「はぁ・・・」

パジャマを着替えつつ、今日の日付を確認する。

今日は第三日曜、私が一月の中で最も疲れる日だ。

なぜかと言うと、ここの住民は一人たりとも家賃を自分から持つてこない。

そのため私が、一軒一軒まわって家賃を徴収しているのだ。

安いのは何故こうにも渋るのだろうか・・・はぁ・・・

いかんいかん、ため息ばかりでは幸せが逃げる。

「急がないと時間がないな」

放って置くと滞納するために逃げ出す奴がいるのだ！

朝食は少し腹が減っているが後回しだ。

脱いだパジャマを洗濯籠に放り投げ、かかとの部分に指を入れて靴を履く。

「開戦・・・か」

そこまで大げさに言うものでもないが、ソレに近いことになるときもちよくちよくとある。

靴をトントン、ともう一度履きならしてからドアを開ける。

「ふむ、中々にすがすがしい晴天だな」

さて、行くとするか！

・・・と思つたら財布とか色々忘れていた。

出鼻をへし折られた恥ずかしさに耐えつつ一旦部屋に戻った。

## 戦闘準備兼物語基礎知識説明（後書き）

とりあえずプロローグなんで主人公の「家人<sup>いえひと</sup>」というものすごく変な名前だけわかれば読み飛ばしてもいいかもしれません。

勿論今更遅いですが。

はじめまして、仙人掌です。

消える前の「宝蓮莊」を見てくださった方は久しぶりです。

基本コメディなんで通学の合間やふとした時間に読んでいただければ幸い、言うまでも無く一括読みでも。

それでは宜しく願います。

## 第1戦 VS 向陽由華

転んでしまった。

服が汚れたがまあ良いか、人間外見より中身中身。

そんな思いを込めて102号室のチャイムをならす、意味は無い。  
ちなみに私は101号室で一階の一番端だ。

「はあゝい」

たたたたたた、ズテツ！

多分転んだんだろう。

「痛たたた、おはようございま・・・家人さん?!」

そこまで動揺しなくても・・・  
住民にして同級生の一人、【向陽<sup>むかひ</sup> 由華】だ。

「ああ、おはようユカ。先刻転んだようだが大丈夫か？」

下の名前で呼んでいるのは宝連荘特有の下の名前で呼べ、というルールがあるからだ。

それが無くとも普通に呼ぶが。

「はい！全然大丈夫です!!」

彼女は、家賃を自発的に持つてきそうに見える。  
しかし忘れっぽいところがあるからな。

「あ、わあああ！まだパジャマでした!!」

なぜかテンパっている。  
そんなに焦ることか？

たたたたった、ズテ！

今日中にユカは何回転ぶのだろうか、はて。  
嗚呼、いい天気だ。  
洗濯物がよく乾きそうだ。

「ちょっと待って下さーい、痛たたた」

ん、ドア開けっ放しだが入って良いのか。  
・・・覗きになりそうきがするな。  
やめておこーう。

暇だ。

素数でも数えるか。

「1、2、3、5、7、11、13・・・

・・・1113・・・って遅すぎるだろ」



ここまで数えるとは思わなかったぞ。  
あれ、1113って素数か？  
3で割れる気がする。

「もういいかー？」

応答ナシ。

もしや寝てるとか。

・・・ユ力ならありえなくもないな。  
入るか。

寝室と思わしき扉を開ける。

「きゃああああああ！」

やってしまったな・・・

ある意味期待通りか。

着替えに集中してたみたいだな。

ベタだな。

案の定着替え中。

由華のスタイルは中々良い方なんだな。  
って変態か。

「・・・あああああー！」

「ある意味で期待通り、っ？！」

鈍い音を立て、あごに拳が爆裂した。

天へ昇れそうなアップーだ。

いいもの持っている・・・ではない・・・か・・・



ユカは料理がうまかったからな。

「ではお言葉に甘えましょう」

「はい！・・・私が家人さんの料理をつくるなんて、ああ・・・運がいい日です・・・あわよくばこのまま・・・」

ブツブツつぶやきながら台所に向かう。

なんか怖い。

にしても、また暇になるな。

素数をまた数えるか。

えーと1112だったかな？

「朝ご飯、できましたー」

「早っ！！？」

「さ、どうぞどうぞ」

「では、いただきます」

ぱくりと一口。

口の中が産業革命。

・・・言ってみただけだ。

「やはり、かなりうまいな」

「ありがとございます！！・・・もう、とろけそうです・・・」

悔しいが私より、はるかにうまい。

一応自炊している身なのだがなあ。

「由華はいい嫁さんになれそうだな」

「え?! あ、アハハハハハ、そんなこと無いですよ!」

顔を原色のギドギドな赤のように真っ赤にして手をふる。  
もう少し自分の腕に自身を持てばよかるうに。

つてここに来た理由を忘れている?!  
家賃だ家賃。

「・・・・・・・・かなり言い出しづらいな。

朝食までご馳走になって。

もしやここまで計算していたか。

絶対それはないな、うん。

なぜならユカだから。

「あ、そうそう妹に、彼氏ができたそうなんですよ」

「ほぉ」

「・・・・・・・・」

いや、だから家賃だつて!!

「いや、妹に先を越されちゃいましたね」

「彼氏いても、おかしくないのにな」

意外だな。

結構モテていたと思うのだが。

あゝ! 家賃とりに来たんだつて!!

一握りの勇気をふりしぼれ。

言え、言うんだ、私！

ってなんか告白前の女子生徒っぽい。

「あ、これ家賃です、はいどうぞ」

私の苦悩は？！

もういいや素数数えよう。

向陽由華 無事徴収完了

ちゃっかり朝食を完食

ただし大幅なタイムロス

## 第1戦 VS 向陽由華（後書き）

前話のあとがきが長かったので

誤字・脱字等ありましたら、ご報告してもらえると私が狂喜乱舞します。もといありがたいです。

アドバイスとかして下さると更に狂k・・・ありがたいです。

文章力が極低ですが、どうぞ温かいまなざしで見守ってくれたら私がきょ・・・嬉しいです。

しつこくてすいません。

そもそもここまで読んでくださってありがとうございますとつございます。

## 第2戦 VS 宮沢健児

「ごちそうさまでした」

タイムロスは痛い、ご馳走食べれたから、よしとしよう。

「あ、これから皆の所、まわるんですよね？」

「ああ」

「私もついていっていいですか？」

「別にいいが面白くもないぞ？」

「いえ、そんなことはないと思いますよ……それにあの女と二人きりにはできませんしね」

ユカが喋っている時、後半部分が聞き取れないのが多いな。

「まあ、かまわんぞ」

「ありがとうございます！ちょっと食器洗うので待ってくださいませんか？私は食器洗わずに、そのままにしておけないんです」

「いや食器ぐらいが私で洗うぞ、そこまでやってもらうのも悪いしな」

「いいですよ、私がやった方が早いと思いますよ?」

「そうか・・・では頼む」

なんか先刻からかなり悪い気がしてきた。

実際かなり悪い。

む、何だこの箱は?

・・・もう遠慮するのも面倒くさいな。

そもそも遠慮とかキライだ。

開いてみて私は絶句した。

「これは・・・」

なぜか私の写真の山、山、山。

・・・そうか!

これは丑の刻参りの、わら人形に使ったためか!!

そんな恨みがかっていたとは・・・（鈍感以前の問題

もつと優しく接しなければならんな。

「終わりました、さあ行きましょう!」

「ハイ、ユカ様!!」

「・・・様!?・・・え、でもそんなプレイまだ・・・

でも家人さんなら・・・」

丁寧に接しようと思ったが逆に不快だったか（鈍感以前に馬鹿）



「じゃあ、行こうか、ユカ」

「え？あ・・・はい」

隣の103号室にうつりチャイムを押す。  
またも応答ナシ。

「ちょっと離れてくれ」

「え、それってどういう・・・」

「開ければわかる」

バンッ！いきなり扉をあける。  
すると眼前に拳がドアップ。

「んのっ・・・！」

ぎりぎり避ける。

拳を繰り出した奴が残念そうにつぶやく。

「ちっ、なんて反射神経だ」

この男の名前は【宮沢 健児】  
認めたくないが私の友人だ。

「死ね、親友！」

・・・追加事項、私の親友を自称している。

というか死ねはひどいだろう。

手に木刀を携えた健児が接近する。

木刀は中学の修学旅行で買ったものらしい。

何故か知らんが、特に使い道も無いのに買ってしまったのはよくある話。

使い道があつたならあつたならで問題だが・・・

「ハっ!!」

ガンマンの早撃ちのように警棒を取り出してガードする。

何故そんな物持っているかなどは、優しくスルーするのが大人の対応だぞ？

「らああああ!!」

「ぐ・・・」

「えと、これはいったいどういう状況なんでしょうか・・・」

打つ、

叩く、

穿つ、

蹴る、

殴る、

跳ぶ、

弾く、

乱打戦が続く。

ちなみに、いきなり健児とバトルになったのも理由がある。

私が勝てば家賃徴収。

負ければ今回は見逃す。

といったようなルールが自然と健児との間で出来上がっていたからだ。

「必ッ殺！・・・」

「甘いな、健児！」

カウンター狙いの切り上げ。  
が、擦っただけのようだ。

「これって放置プレイですか、ちょっと」

ち、なかなかやるな。

だが負けるわけにはいかないのだ。

「あ、猫ちゃんって何で私の部屋から出てくるんですか」

「又〜ン」

「ぬっ？！相変わらず変な鳴き声・・・」

「又〜ン」

「にゃ〜んってないて下さい、ほら、にゃ〜ん」

「又〜ン」

ガキィ！

まずい、警棒が弾き飛ばされた。

「これで終わりだ家人！」

「あ、ユーフォー」

「ふん、引つかかるか」

ち、馬鹿でもそれくらいはわかるか。  
なら多少趣向を変えてみるか。

「あ、きれいなお姉さん（棒読み）」

「マジい?!」

「隙あり!!」

「かつ・・・」

鳩尾みぞおちに肘鉄を一発。

こんな手に引つかかるなど・・・。

まあ、馬鹿だから仕方がないか。

「ま・・・まだまだぜえ・・・」

「黙れ、喧やかましい」

「ウヴおツ・・・!」

うるさいので、わき腹を蹴飛ばした。

自分でやっておいと言っつのはアレだが、本当に痛そうだな。

「俺が死んでも、第二、第さ・・・ボバァ！」

「どこの魔王だ」

腹にストレート。

かいしんのいちげき。

「最後ま・・・で言わせてくれよ・・・」

「さつさと家賃だ、家賃」

「くそ、ほらよ」

あー、無駄に疲れた気がするな。

「さて次行くぞ、ユカ」

「くかー、もう食べれません・・・」

「またベターな寝言だな。初めて聞いたぞ」

さてどうするか。

じゃあ、俵かつぎで運ぶか。

「よいっ・・・うおおお?!」

思った以上に抵抗するな。

いや、本当は起きているのでは？  
もしやお嬢さん抱っこならいいのか？

「・・・急に抵抗しなくなっ たな」

まあいいか。

さっさと運んで次に行くとするか。

相沢健児　なんとか辛勝？

疲労を引きずりつつ、作戦続行

## 第2戦 VS 宮沢健児（後書き）

どうも、てめーはギャルゲでもやってろ的なもつ仙人掌です。そもそも元のデータがあるのでコピー&ペーストで済むんですが、設定に大幅変更があったり、色々改修して大分遅くなってます。

### 第3戦 VS 後藤真木

104号室前。

・・・疲れたな。

あの馬鹿とやりあうのは疲れる。

ガチャ、ガチャ、ガチャツ、ガチャア！

ガチャガチャガチャガチャガチャガチャツ！！

・・・やはり扉は閉まっているか。

まあいい。

私は、この宝連荘の管理人だ。

合鍵くらいある。

「え」と、104は・・・あつた」

ガチャリ、と扉を開ける。

肝試してお化け屋敷に入る時ってこんな感覚なのだろうか。

「入るぞ、もう入っているがな」

またも応答ナシ。

寝ているな。

一応ノックしてから、寝室に侵入。

「起きろ、真木」

「家人先輩夜這いかけに来たんですかつ」

「今は夜ではないっ！！てか狸寝入りか！」



「あ、夜まで我慢できなかったんですねっ」

「違うわっ！？それにいちいち語尾に記号をつけるな！」

「わたしはいつでもOKですよ\$」

「記号なら何でもいいのか?!」

「気にしないで下さいっ」

「悪趣味な冗談はやめてくれ・・・」

「てへっ」

「てへって・・・」

コイツ相手だとペースが乱れる。

真木もユカくらい恥ずかしがればいいのだろうか。

あ、こいつの名前は【後藤 真木】

大和中学三年生だ。

私のことをいつも先輩と慕・・・ってはないな。  
からかわれ続けているからな。

「家賃だ、家賃」

「まーまー、先輩もいつしよに寝ましようよ？こんなに晴れ晴れと  
している日は、布団の中に引きこもるのが一番です！」

「かなりインドアな発言だな、どちらかというとアウトドア派の癖・  
・・・つええあああ！」

寝台<sup>ベッテ</sup>に引きずり込まれた？！

「ちょ・・・顔が近いぞ・・・」

ああ、なんか理性が持つてかれそう。

「先ばあい・・・」

息が顔につ？！

桃色の吐息ってこんな感じなのか？

更に色っぽい真木の声がクワワアアアンと脳に響く。

いや、そんなことより家賃だあああ！家賃！！

たえろ、耐えるんだ私。

落ち着け、この程度のこと前にもあった。

それ以上のこともあった。

・・・精神的<sup>トラウマ</sup>外傷に触れるのはよそう。

逃げちゃ駄目だ、逃げちゃ駄目だ、逃げちゃ駄目だ、逃げちゃ駄目だ。

いや、この場合逃げるのか。

まずは今現在の状況を整理するんだ！

それから対策を練ろう！！

真木が私を布団に引きずり込んだ。

だからなんだorz

状況把握するまでもなかった。



「きゃっ?!」

「又又又又〜ん!!」

「やあああああ!!」

そういえば、真木は又又猫が苦手だったな。

あ、又又猫がいつからいたかとかそこら辺は気にしないでくれ。  
基本的に神出鬼没だから。

何処にでもいて、何処にもいないのが又又猫だ。

「やめてほしかったら、手錠の鍵をよこせ」

「ひゃあああ、くすぐらないでっ! 鍵なら化粧台の上にiiiiiii  
い!!!」

「そのくらいにしてやれ、又又」

「又〜ん」

ふむ、まったくもって聞き分けのよい奴だ。

人語を解す猫・・・か。

尻尾は一本だよな?

「もうちよつとで既成事実を作れたのに・・・」

「性質の悪い悪戯は、これで懲りたか？」

「いえ、全く!!」

ビシツとした敬礼。

殺意が湧き上がるほどに、清々しい。  
期待した私が馬鹿なのか？

「ま、それより家賃だ」

「じゃあ、ちょっと待ってて下さい」

「ああ」

「えーと、ハイっ」

ドジャラア

・・・はい？

「って全部五十円玉?!」

「私がそんな素直に渡すと思いますか？」

ないな。

しかし一円玉ではないところに優しさが感じられ・・・ない。

「ひーふーみーよー」

「ひふみひふみひふみひふっみー」

「ええい、紛わらしい!!」

く・・・面倒くさい。

「イー、アル、サン、スー」

「なんで中国語なんですか？」

「ウノ、ドス・・・えーと」

「わからないんですね？」

「うるさい！・・・いち、にー、さん、しー、じー」

「最初から普通に数えてればよかったじゃないですか」

やかましい。

もう放って置いてくれ。

「ろく、しち、はち・・・」

よし、もう少しだ。

「先輩？」

「なんだ？」

「こっちにお礼ありますけど？」

「  
.  
.  
.  
.  
.  
.  
.  
.  
.  
.  
」

後藤真木 辛勝、ある意味敗北  
精神的に多大なダメージ

### 第3戦 VS 後藤真木（後書き）

主人公が「何故」という単語を使っているときは、違和感が無ければ「なぜ」ではなく「なにゆえ」と言っています、きっと。



#### 第4戦 VS点鈍克吞

あのと、結局小銭の方を徴収してきた。

苦労したのだからと小銭の方を選んだわけだ。

正直馬鹿なことをしたと思う。

普通に紙幣の方を、取ればよかった。

結構かさばるし、重い。

「ああ、疲れた・・・」

なぜ、私は年下に手玉に取られているのだ？

泣きたくなってきた。

我ながら情けないな・・・

「それよりも次だ」

105号室は二階だ。

カッン、カッンと疲れた体を引きずって、階段を上っていく。  
ふと上に視線を向けると、ターゲットの内の一人の男の姿。

「え？」

「あ」

「しまった・・・！」

「逃がすか！家賃を出せ！！」

やはり逃げようとしていたな、ギリギリ間に合ってよかった。

と安堵できるわけでもなく、敵は逃避する気の様だ。

「右側がから空き・・・!!」

「それは囧だ」  
フエイク

「うぎゃつつつつわあああああ?！」

足をかけ、引き倒す。

ちなみにここは階段。

ゴロゴロと落ちて逝くだろう。

「ぐ・・・病院行きかも・・・あれ?どこいった」

上だ、上。

「危ない、上から襲ってくるうううう!!・・・おっ!!」

「手間をかけさせておつて、まったく」

「今日は見逃し・・・痛だだだだ!!」

「あきらめろ、井モノ」

「井モノって言うなあああ!!」

見た目だけ見れば、かなり整ったほうの顔立ち。

が、実態はかなり重度のヲタクであり趣味が色々和不味い。

しかし学校では正体を知られていないし、趣味さえ抜かせば割とい奴なのでかなりモテる。

彼の名前は【点鈍<sup>てんとん</sup> 克吞<sup>かつどん</sup>】

天井カツ井……

井モノと言うなという方が無理だ。

実家は蕎麦屋らしい。

井モノ作れよ。

「離して〜」

105号室に井モノを投げ込んだ。

「いだあ！」

しかし相変わらず安易に人が呼べないような部屋だな。

清掃が行き届いているのか、小奇麗<sup>こきれい</sup>ではある。

が、壁には美少女キャラのポスター！。

床から天井まで聳<sup>そび</sup>え立つ、大き目の本棚にはびしっと整理されたゲームやマンガ。

棚には所狭しと男女比は1：99くらいで、フィギュアが置いてある。

パソコンの壁紙はどこかのアニメのキャラクター、しかもやたらと露出が多い。

ゴミ箱の中身は……触れないで置こう。

年頃の男児は皆そんな感じだろ。

量が多めだが、何がとは言わない。

「なんで今日はすごく暴力的なんだろ……僕が何をしたんだ」

「こちらまで疲れてイライラしているのだ、家賃出せ」

「だからって僕に当たらないでよ、家賃無理」

「それでも構わないが・・・」

「本当！？今日は欲しいものの発売日なんだ」

阿呆。

この私が、家賃滞納など許すと思うか？

「納めなければ、この部屋にあるゲームを片っ端から叩き割るが、それでもいいのなら」

「や・・・やめろおおお！！」

おもむろに一つ、棚からゲームを取り出し、警棒を振り上げ・・・

華麗なまでの、豪快な破壊音が響き渡る。

「人の宝物を壊しちゃ駄目って親から教わらなかったのか！？」

宝物とかそんな綺麗なものじゃないだろ。

なんかこうもつとドロドロしたものだ。

今壊そうとしたのはカラフルな髪の少女が、パッケージのいかかわしいゲームだが。

ぶっちゃけかなりエロめの18禁ゲーム。

かなりマニアックそうなプレイもある。

よくこれを部屋に置いて平然としていられるな・・・

誰かが入ってきたらどうするのか。

「大丈夫だ」

ぎりぎり外してある。

モノを壊すと後々の処理が面倒だしな。

・・・ゲームが置いてあった机は壊してしまったがまあいいか。  
今度直しておこう。

「さて、次は本当にやるぞ」

「く・・・だけど僕は発売日を一日千秋の思いでずっと待っていたんだ！」

「ではこちらのいやらしいフィギュア達を」

「いやらしくなんか無い！むしろ萌えだ！！」

いや、萌えといやらしいって完全に別物なのか？

だとしても完全にいやらしいに分類されるフィギュアがちらほらと。

「ならば戦うしかないようだね、家人君」

「まあいいか、そちらのほうがりやすい」

私の言葉を聞くや否や、井モノはライトセイバーを取り出す。  
もちろん玩具。

「うらあああああ！」

「どこいその馬鹿と比べるとやはり弱いな」

軽やかに跳んで回避する。

ライトセイバーは空ぶってフィギュアの棚へ。

・・・ゴシヤア！

「ああああ、僕のメイドさんがああ！」

こんな狭いところで長いもの振り回したら、周囲の物を破壊するに決まっているだろう。

「僕のメイド僕のメイド僕のメイド僕のメイド僕のメイド僕のメイド僕のメイド・・・」

「自業自得だろ」

正直怖い。

その狂気に満ちた顔で連呼されると素で怖い。

「まあいいだろ、フィギュアの1つや2つ」

「よくない」

「・・・急に真顔になるな、怖いぞ」

「スキあり！」

「ちい！」

ギリギリ避けて懷からスイッチを取り出す。  
なるだけ使いたくないが・・・  
いいや、限界だ！押すぞ！！

天井から金色のタライが大量に落ちてきて、盛大に音をかき鳴らす。

「いだっ?! あだっ! いたたたた!」

前の管理人が作ったのはた迷惑な仕掛けの一つだ。  
この宝蓮荘は色々と改造が施されていたりする。

中には私も把握出来ない物もあるのだろうな・・・

「タ・・・タライ?・・・バタリ」

バタリと口で言うのもどうかと。

「ほら、家賃」

「こ・・・これ・・・」

「よし」

帰ろうとすると、井モノが声をかけてきた。

「僕を倒しても第二、第さ・・・」

「おまえもか! しつこい!!」

点鈍克吞 割と楽勝  
敵兵は残りあと一人



#### 第4戦 VS点鈍克吞（後書き）

前るときよりパ口ねたは控えめにしようかと思ひます。  
知らない人が見ても違和感ない程度に。

それと井モノは今日だけやたらとテンションが高いですが、普段は割と常識人な突っ込み役だと思ひます。  
趣味を除いて。

## 第5戦 VS 高峰麗香

私は今106号室の前にいる。  
ドアノブを回すが、開かない。  
やはり閉めているか。

「たらたらったらっ合鍵」

ああ、うん。

イタい子だ、我ながら。

こうでもして無理やりでもテンションを上げないと。  
迅速に侵入。

「入ったぞ」

ここに住んでるのは私のクラスの担任。

名前は【高峰 麗香】

間延びした口調が特徴の、基本グータラ人間だが変に超優秀なところもある。

「いらっしゃい」

コタツでぬくぬくしてるな。

そこはどうでも良いのだが、足の踏み場のない部屋の状態をいい加減どうにかして欲しい。

宝蓮荘内で1、2を争うほど部屋が汚い。  
争っているもう一人は健児だ。

「コタツで寝ると風邪引くぞ？」

踏み場はないといったが、散乱物を踏みつけながらコタツに近寄る。

「家人が人の心配をするなんて……明日の天気はテポドン？」

「失敬な、このアマ」

「失礼さじゃ家人に負けるわよ」

先生相手にタメ口で暴言吐いているが、こいつ相手には別にいいだろう。

そもそも私は敬語をあまり使わないが。  
無礼かもしれんがこの話し方が一番落ち着く。

「それよりテストの丸付け、終わっていないのか？」

「実際やばいわね、明日には返却しなきゃいけないし」

……そう思っているならば、コタツで寝てないで丸付けしろよ。

「という訳だから手伝って」

「そんなことを生徒に頼むな?!」

「まーまー、家人は口堅いんだし」

「そんな、面倒なことするか!!」

「成績」

手伝わなければ、成績下げるということか。  
畜生が！このド外道！大馬鹿者！駄目教師！  
・・・心の中で怒鳴り散らしても、虚しいだけか。  
しかし何故こんな奴が教師なんぞやっているのだ？  
それより、テスト返ってこないと困るからな。  
手伝うか。

「じゃあ、さつさとやるぞ」

「イエッサー」

ゆつくりコタツから出てきた。

・・・白いＴシャツに、派手な色の下着<sup>なまめ</sup>つてきついな。  
そんな心を見透かしたように艶<sup>なまめ</sup>かしく麗香が口を開く。

「何なら襲ってくれても構わないのよ？」

「金を積まれてもするか！」

「教師と生徒の関係っていいと思わない？」

「思わない！！」

多分、そういった感じのが好みか。  
禁断系とか背徳的なモノとか。

「丸付けするぞ」

「んー」

赤ペンの音だけが、部屋を占める。

シャッ、シャッ、シカヤッ、シャッ、シカヤッ、シャッ、シャッ、シャッ、シャッ

「飽きた」

「飽きたじゃないっ！」

私がいなかったら、どうするつもりだったのか？

特に意味もない思考をしながら、赤ペンの丸をつける音だけが機械的にする。

もつとも丸だけの音でもないだろうが。

シャッ、シャッ、シカヤッ、シャッ、シカヤッ、シャッ、シャッ、  
シャッ、シャッ、シカヤッ、シャッ、シカヤッ、シャッ、シャッ、  
シャッ、シャッ、シカヤッ、シャッ、シカヤッ、シャッ、シャッ、  
シャッ

以下略

「ふう、これで終わりか」

「あー疲れた、久々に働いたわ」

そついつても、私の方が4倍くらいの量をこなしているぞ！  
この駄目教師が！

「ノド、乾いたでしょう。何か持ってくるわ」

「それじゃ、頼む」

麗香先生について補足説明。

学校だと独特の雰囲気と緩さ、モデル並みの容姿で人気がある。  
大和高校美少女同好団体に例外として、少女ではないが対象に認定されている。

その団体は、いろんな人のファンクラブを、統合したようなものだ。  
母さんが大和高校に在籍していた頃にできたらしい。  
ついでに宝連荘の、女性陣は全員認定済み。

「もってきたわよ」

「それじゃってこれ酒だろ?!?!」

「見ての通り」

生徒に酒を勧める教師。

セクハラをする人よりかはマシかもしれんが・・・セクハラもされてないか？

「まあいいか、いただきます」

ぐびぐびと飲んでいく。

もう、毎回のことになっているからな。  
酒も丸付けも。

さ、本題に移るか。

「家賃」

「みのがして!」

「無理」

「お願い!!」

「却下」

「・・・酒でどうにかなると思ったのに」

「無駄」

私はザルだからな。

「ホント足りないのよ?」

「ふむ」

・・・少年熟考中

「あ、とりあえず酒代は払う」

お金を渡す。

「別にいいのに、もらうけど」

財布を取り出して、金をしまふ。  
チャンスは今しかない!!

「あっ!」

「ひーふーみー・・・ちゃんとあるだろ」

「ばれたか」

そのくらいは見破れないと、宝連荘の管理人は務まらない。  
あくまで宝連荘だ。

普通のアパートの管理人なら別に大丈夫だ。

「それじゃ明日学校で」

玄関の扉に手をかけて開けようとすると後ろから

「やっぱ教師と生徒の関係っていいと思わない？」

「ない」

高峰麗香 家賃徴収最終戦勝利  
単純作業により、さらに士気下降  
でも終戦のため関係ナシ



## 第5戦 VS 高峰麗香（後書き）

ギャルゲからエロゲでもやってるよ的作者に進化しました。  
やったね！（空元気）

まあ、とりあえずは住民紹介編終了です。

次回は登校編！

お楽しみに！（してくれたら嬉しいです）

追伸 お酒は二十歳をすぎてから。

あなたの健康を害する恐れがあります！

説得力あまりないですけどね・・・

フィクションならきつと大丈夫ですよ。

## 第6戦 VS 危険な登校路

カーテンからすがすがしく、紫外線を含んだ日差しがさしこむ。

今日は月曜日。

昨日も言ったか。

「えーと、朝食は・・・」

昨日の夕飯を電子レンジに入れてスイッチを押す。

このレンジも中学生の時、宝蓮荘に住むようになってからずっと使っているな。

最近よくおかしくなるし、そろそろ買い替え時か。

しかし何年も使っていると家電とはいえ、愛着が湧いてくる。

ふうむ、買い換えるか悩みどころだ。

あ、お金が無いから無理か・・・

少し憂鬱な気分になっているとレンジがチンと任務完了の知らせを告げ、それにあわせ自分の気持ちを切り替える。

「・・・あまり温まってないな」

どうせもう一度レンジを使ったところで大して変わらんだろうから、と妥協して箸を進める。

食べ終え、皿を洗う、歯を磨く、服を着る、身だしなみを整えるといった、何千回と人生の中で繰り返してきた動作をさっで行う。

バッグを手に取り外へ出て、「こんな金が無いところに入る泥棒もいないだろうに」と考えつつ鍵を閉めていると聞きなれた声が聞こえてきた。

「お、おはようございます、家人さん」

「ああ、おはようユカ」

「お、おはようございます！」

おはようは一回で十分だろうに。

まあ今日は雲ひとつ無い秋晴れだ。

そんなこともある。

ん、関係ないか？

「それでは行くとするか」

「はい！」

ユカは家庭科部で朝練習がなかったため、帰宅部の私と登校時間が一緒のことが多い。

とはいえ宝蓮荘から学校まで徒歩十分もかからないので、一緒に登校することは少ないが。

しかし立地条件の割りに空き部屋があるのが不満だな。

もともと中々入居希望者がいない理由にいくつか心当たりはついてる。

「そうそう、この前のシフォンケーキ、おいしかったです」

「うちの店長の新作だからな、本人に言ってやってくれ」

私のバイト先は喫茶店なので、あまりモノをたまにもらってくる。店長は大分変わった人だが根は良い人だ

といいなあ。

「ん？」

目的地の学校の一室に窓から何かがキラリと光る。  
その正体に気づいた瞬間、銃撃音。

「チッ！」

とつさに飛びのくと、私がもっていた場所には銃痕が。  
大和高校美少女同好団体か？！

おそらく狙撃班か・・・

銃刀法違反という法律を知っているのか？

ついでに同好団体について追加説明。

非公認で、団員数四桁。

大和高校という名前いる癖に学外にもたくさん居る。  
そして宝蓮荘に入居希望者が中々でない原因の一つ。

「どうかしましたか？」

「いや、なんでもない」

いくら学校までの距離が、かなり短いとはいえ狙撃手はやっかいだ。  
とりあえず、障害物に身を隠しつついか。

「え？」

車？

不味い、こちらに突っ込んでくる！！

「危ない！」

「きゃっ?!」

く・・・事故か？

車から降りてきた男が、ユカに声をかける。

「大丈夫か、向陽<sup>むかひ</sup>！橘は・・・ちっ無事か」

今、舌打ちしただろ！

そうだ、大和高校美少女同好団体の団員は高校生とは限らない。  
全身で俺は体育教師だと叫んでるような見た目の教師。

名前は・・・忘れた。

適当にベンとでも名づけておくか。

「ベン・ジョニー先生、運転気をつけてください」

「誰がベン・ジョニーだ！」

気にいらなかったか。

別に、気に入られる必要もないが。

「それじゃあな向陽、そしてカンガルーに蹴られて氏ね家人」

「お前はカンガルーの袋にねじ込まれて窒息死しろ」

しかし、生徒に暴言を吐くなんてひどくないか？  
何もしてないのに。

してないけど、言ったが。

「ベン・ジョニー先生も授業で」

「ベン・ジヨニーってつなげたら『便所に』だろ！」

あ、本当だ。

たった今気づいた。

しかし世界にベン・ジヨニーって名前の人はいるだろうから謝っておくか。

こんなアホ教師と一緒にしてすまん。

「ベン先生、今更だけど車粉碎してますよ」

「俺のマイ・カーがあああああ！橘くー！！」

いや、自分でやっただろ。

私のせいじゃない。

「それじゃあな・・・」

あ、落ち込んだようだぞ。

捨てられた子犬のごとく、哀愁が漂っている。  
おそらく、財政状況がピンチだったのだろう。  
様を見る。<sup>さま</sup>

「さて、行くか」

「は、はい！」

「「「待てーい！」」」

もういい加減にしてほしい・・・

疲れたぞ・・・

登校路にてベン・ジョニー撃破  
狙撃手は帰ったらしい  
三人敵が出現

## 第6戦 VS危険な登校路（後書き）

テストも終わって、やっと更新できました。

今回はギャグ控えめにしてほのぼのした幹事を出そうとしましたが、無理ですね。スナイパーなんかが出てますし（泣



## 第7戦 VSサンニンジャー

「「「待て〜い!」」」

前回のあらすじ。

ユカと一緒に登校

色々あった

(頭が) 危ない人たちが出現

「誰が頭が危ない人だ!」

「<sup>けな</sup>貶していないぞ? むしろ褒めている」

嘘だが。

いきなり現れて戦隊モノっぽいポーズをとった奴らを、本音で褒めるには無理がある。

「ふ、ふん!褒めてもらったってちっとも嬉しくなんか無い!」

だったらにやけるな。

嘘だということぐらい気づけ。

「で、誰だ?」

「「「よくぞ聞いてくれた!」」」

「俺様はレッド!」」

「イエロー!!!」

「バイオレットブルー!!!!!!」

普通にブルーでいいだろ。

「三人合わせてっ」

「『大和戦隊サンニンジャー!!!!!!』」

掛け声とともに、サンニンジャーの背後がカラフルな煙を立てて爆発する。

一発いくらだろうか。

お金欲しい。

背景が街なので、ものすごくミスマッチだ。

さらに声が出ているくせに、一人は目が死んでいて一人は「やってらんねー」といった顔だ。

「家人さん!」

「なんだ?」

「あ、あの人たちカッコイイですね!」

「・・・そうか」

好みは人それぞれだ。

私ごとやかく言うことはない。

「向陽さんと一緒に登校するなんて、断じて許さん！」

と、レッド。

「うらやましいぞ」

と、棒読みなイエロー。

「大和高校美少女同好団体の裁きを受けろ!!」

と、目が死んでいる何とかブルー。

「大和高校美少女同好団体の誇りにかけて・・・俺様が貴様を倒す！」

やはりそちらの関係者か・・・  
その前に、ひとつ気になることがある。

「なぜ、五人じゃなくて三人しかない？」

戦隊モノの王道はやはり五人だろう。  
中には例外もあったが。

「俺様たちは、少数精鋭。五人も必要ない！」

自信満々だな、レッド。

なんかもうお前の勝ちでいいよ、と言いたくなるくらいに見ていて  
痛々しい。

「本当は五人も人数が集まらなかったただけなんじゃー」

「バイオレットブルー、余計なことを言うな！」

美少女同好団体でも、そんなイタイ事をする奴はそんなにいなかったか。

そもそも戦隊モノ風にする必要があったのか？

「それでは行くとするか」

「待てい！勝手に学校に行こうとするんじゃない！！」

しつこいなレッド。

「行こうか、ユカ」

「は、はい」

「美少女同好団体の俺様をシカトするんじゃない！なあ、イエロー」

「美少女同好団体の方がよかったな」

イエローおまえ・・・

「イエローはロリコンなんだジャー」

ジャーって口癖なのか。

むしろそっちにツツコミたい。

「さてレッド、イエロー」

「な・・・なんだ？」

「お前達は死ななくてはならない」

「ガフウ！！」

「ウギイツ・・・」

人体急所を的確に打ち抜く。

余計な力は一切不要。

嗚呼・・・母さんやその他もろもろに対抗するため、いつの間にか身に付いた武術は今も役に立っている。

母さんのおかげだな。

一切感謝しないが。

「なぜ俺様たちが死ななければならぬっ！？」

「貴様らの死因は・・・たつたひとつだ・・・レッド・・・たつたひとつの単純な答えだ・・・『お前らは井モノと健児のキャラと少しかぶった』」

「なんだよ・・・その理不尽な理由」

そして彼はばたりと倒れた。

残るはブルーだな。

「行くぞ、メタリックブルー」

「バイオレットブルーだンジャー」

バイオレッドブルーが構えたたん、雰囲気は常人には出せないものに変わる。

ふうむ、コイツはやり手か。

「貴様・・・八方陣の一人か・・・」

「その通りで、【東方の蒼弥】って言う冠名ふたつななんだジャー」

八方陣は、大和高校美少女同好団体の中で、能力の高い者に与えられる位だ。

能力は戦闘力だけでなく情報収集力、財力なども見られる。

・・・ただの総合ファンクラブが、何故ここまで大きくなった。

「ちよつと、家人さん遅刻しますよ」

野郎という生き物は馬鹿が多い。

しかし同好団体にも女性はいたな・・・

そんなことを考えつつも、警戒は最大レベルにしている。

いや、私がそうしているのではなく、相手がそうさせていると言ったほうが正しいか。

「そーですか、シカトですか・・・しょうがない人ですね・・・いじけますよ？」

闘気がビビシと伝わってくる。

自分が興奮しているのがよくわかる。

「ユカちゃん、ああなった家人はもう止められないわよ」

「あ、麗香さん。あはようございます」

「あんな変にテンション高い子はほつといて、早く登校するわよ」

「はい」

あたりに静寂が流れる。

ということではなく、周りには登校時間のため学生の姿。

しかも全員なれているから、「うちの学校じゃこれが普通だ」といわんばかりのスル―。

客観的に見たら多少なりともシユールな光景だ。

とか考えて集中力が欠いていると、蒼弥の闘気が膨張する。

「じゃあああああああ！！」

それ掛け声か？！

極自然かつ速やかに警棒を取り出す

蒼弥は、ゼロ距離になろうと間合いを詰めてくる。

「く・・・」

ゼロ距離の場合、警棒を使っているため間合いが広い私の方が不利になる。

ソレを見越して空いた手のほうから、もう一本警棒を投げ飛ばす。

「甘いんだジャー」

アップで蒼弥を狙った警棒は真上に弾き飛ばされる。

しかし警棒は既に宙を舞っていた私の掌に納まり、そのまま蒼弥目掛けて叩きつけられる。

宝蓮莊式、哀死狂不王流「血瑠野」

名はあれど単にジャンプして二本同時に警棒を自重を利用し振り下ろすのみ。

先代管理人が昔見せた動きをを、見よう見まねでしただけだ。

「ジャラアアアアア！」

片手で両方受け止めたか。  
しかし一切問題ない。

「無駄ア！！！！」

受け止められたところを支点にして、流れるようにスムーズに弧をえがき胴に蹴りを入れる。

「ジャツ・・・」

もう片方の手で受けとめたか。  
それでもダメージはあるだろう。

「ジャー」

蒼弥は、ゆつくりと距離を取る。  
互いに再び仕掛けることができない。

ガラガラガラガラ

少し先にあつた校門が閉じられた。  
ん？



ということは・・・

「仲良く二人で、遅刻なんだジャー」

「しまった!!」

家出る前は、20分はあったのに・・・

レッド、イエローには楽勝

バイオレットブルーに引き分け

レッド、イエロー、バイオレットブルー

橘家人の四人は遅刻

## 第7戦 VSサンニンジャー（後書き）

くだらだら書いていたら、いつも長めになってしまいました。  
もっと長めにしても大丈夫ですかね？

追伸、「宝連式」のところ、読めた人いますかね・・・

## 第8戦 VS日本史Aの先生

ガララ！

「先生、セーフにしてくれないか？」

「無理！ユカちゃんを忘れた罰よ」

チ、やはり駄目か。

あれ、クラスの野郎どもから怒気が発せられているぞ？  
麗香のユカを忘れた罰という言葉でこの空気が完成したか。  
八割がた自分のせいか。

「私を忘れるなんてひどいですよ、もーっ」

怖くない怒り方とかあるんだなあ。

とはいえこちらにが非がある。

「その・・・あれだ、すまん」

「じゃ・・・じゃ、じゃ、じゃ・・・」

さっきのバイオレットブルーもとい、蒼弥の真似か？  
近頃は妙なものが流行るな。

「じゃ、じゃあ私と今度映画に行きませんかっ！？」

顔近いって、乗り出さなくていいから！  
次の瞬間、教室が憎悪の念に包まれる。

モームルーム続けろよ、麗香。

うわ、あのアマ。

意地の悪い笑みを浮かべながらこちらを見ている。

あ、怒気が殺気に変わったぞ・・・

井モノ助けてくれ。

「・・・」

目えそむけられたっ？！

「わかった、暇なときな」

ここでNOと言ったら言ったで、また悲しませただのどうたので何か言われるしな。

クラスと戦うしかないか、嗚呼・・・気が重い。

私も男だ、覚悟を決めよう！

「それじゃ、ホームルーム終了よ」

少し空気が緩くなったな。

麗香先生効果か。

キンコーンカーンコーン  
もう一時間目開始か。

ちなみにその後、井モノと数人の友達に変に慰められた。  
その井モノは私の前の席で、井モノの横……わたしの斜め前に  
あたるがユカだ。

「鬼律、隸きりつ れい」

字が違う気がするんだが。

おまけに号令係レッドか……

一緒のクラスだったのか、知らなかった。

「それでは授業を始める」

日本史Aの教師の名前は……忘れた。

人の名前を覚えるのが、苦手なのだろう。

蒼弥はすぐに記憶したが。

「……で……から……」

声が小さく、わかりにくい授業。  
そのため寝てる奴がほとんどだ。

「……スウスウ」

ユカはご就寝中のようです。

元々勉強は苦手だからな。

「井モノ」

「はいはい……ユカちゃん、起きて」

「ふえ・・・ふああ・・・あはようございます・・・」

「おはよう」

その光景を見ていた男子勢（と女子）が羨ましそうに井モノを見ている。

女子の視線には井モノに対する、劣情・・・もとい熱烈なモノも混じっている。

かわいそうだな。

マンガ・ゲーム・アニメ

井モノは二次元の女性にしか興味がないからな。

あ、授業を聞いていない奴らが、80%突破するな。そうすると・・・

「起きろ、この糞餓鬼共があああああ！」

・・・キれたか。

人数が80%突破すると、このボケ老人はキれる。

普段の寝てるような目が開き、声も大きくなる。出るじゃないか、声。

「ねてるんじゃない、ねえ、向陽！だったら読んでみる、橘あ！！」

何ゆえ私なのだ？！

授業を真面目に受けていた方だぞ！

あ、キれたはいいが、大和高校美少女同好団体の殺気にあてられたか。

理不尽。

「全略」

読み終えた。  
本当だぞ？

「橘、全て略すな！」

誤魔化せないか。

どこのページだったか？

真面目に聞いていたはずなんだが。

井モノに教えてもらうか……寝てるし。  
いつ寝た。

すると隣の席の女子が、

「……139ページ、8行目」

「えっ、あー（略）」

よし、何とか読めた。

心の底から……心の中で感謝する。

彼女の名前は【森<sup>もり</sup>林葉<sup>りんよう</sup>】だ。

【木】の多さなら中々負けないだろう。  
女子からのニックネームはモリリン。

「礼を言っぞ」

「……別に……」

クールだ。

クール・ガール。

無愛想なところあたりが私と似ているな。  
そんなことないって？

「森さんに親切にしてもらっなんて・・・」

「次の体育、覚悟しやがれ」

「腹を開いて、自らの臓物を喰らわせてやる」

「犯してやる・・・」

（殺人を）

「𦞑𦞑𦞑𦞑𦞑𦞑𦞑𦞑・・・」

何か聞こえるのだが（汗

ついでに、𦞑𦞑𦞑𦞑𦞑𦞑𦞑𦞑なぶるだぞ？

難しい漢字だな。

しかし、覚えるのは楽そうだ。

「そこら辺、喋るな！だったら喋らせてやろう、読め家人！！」

だからなんで私なのだアアああ！！

この教師も、大和高校美少女同好団体なのかっ！？

大和高校美少女同好団体なんか、滅べば良いのに・・・

大和高校美少女同好団体をつくった、母さんを恨む！

「さっさと読め、古代人」

古代人って言うな！

語呂が悪いしつまらん！！

というか、貴様も古いだろっ！！



80歳超えているように、見えるのだが・・・

「それでは・・・」

キンコンカーンコン

「ちっ終わるか」

疲れた・・・

私の何がいけないのだろうか？

「・・・義務・・・」

何の義務だ。

橘家人

クラスの男子から集中砲火を受ける  
損耗しつつ乗り切る

## 第8戦 VS日本史Aの先生（後書き）

正直この話とはばしたかったんですが、複線と新レギュラー登場なので入れときました。

レギュラーは先生の方じゃないですよ？（笑

それとペンネーム変更しました。

友人に嗅ぎつけられそうになったので。

これ知り合いに広まったら血が吐けそう・・・  
といっても約一名は知ってますが。

## 第9戦 VS 樫野木樺

「いらつしゃいませ」

ここは喫茶カフェという名のケーキ屋だ。

この変わった名前の由来は、この店が以前は喫茶店だったためケーキ屋なのに喫茶店の名前がついたそうだ。

それと喫茶でありカフェでもある飲食店という意味を込めたらしい。どういう意味だ。

喫茶店だったころの名残か、ケーキを持ち帰らず店内でゆっくりと食べる人が多い。

「840円になります」

私はここでバイトしているのだ。

実家からの仕送りは無いし、家賃の収入もたまに赤字になるぐらい少ない。（滞納や修繕、維持費が主な原因）

そのため日々の生活のためにも、働かねばならないのだ。

「ありがとうございます」

ああ、私は一言も喋っていないぞ。

喋っているのは別の店員だ

私はレジや接客業といった、直接客と触れ合うような仕事は向かないからな。

客も私相手だと、無愛想で近寄りがたいだろうし。

といってもここに来る客はほとんど常連しかいないので、私が無愛想に振舞っても慣れているので問題はないが。

それでも他に動ける奴がいれば、接客業やレジ打ちは任せている。

私は大体他の仕事をしている。

「あんたも働きなさいよ、なんで私の後ろに立ってるのよ」

「それはお前がサボらないように見張っているからだ」

「サボってんのはどっちよ!」

「言うまでも無いだろう、私だ」

「わかってんならとつと働け!!」

「働いたら負けだと思っている」

「殴るわよ?」

「・・・・・・・・・・・・・・・・すまん」

少女の名前は【かしのき榎野木けやき 榎】

榎の木なのか榎の木なのか。

バイト仲間で大和高校の同級生だ。

胸が小さな体を、店長の趣味40%露出度15%その他もろもろで構成されたエプロンドレスが包んでいる。

「なんか失礼なこと考えてない?」

「考えてない、特にお前の身体的コンプレックスとか」

「小さくて悪かったわね!」

自覚あったのか。

大和高校美少女同好団体には貧乳の方がいい、とか言う奴なら普通にいるだろ。

そうそう、胸が小さいというのはさしたるコンプレックスでは無いだろう。

ルックスは普通に良いし。

だから安心しろ、まな板。

足の小指に電流のように痛みが走る。

「痛ッ?!」

「励ますかけな貶すかどっちかにしなさいよ、てか口に出てるし」

「すみません・・・」

まさか口から出ていたとは。

「あんたもいい加減自分ひとりで接客しなさいよ、いらっしやいませ」

客が来たか。

見た目青年、説明以上。

「フン、私に接客業など10年早いのだ!ご注文はなんでしょうか?」

「自分で言うな！チーズケーキEXと紅茶ですね、って普通に笑顔で接客できるじゃない」

「知り合いのほとんどからその笑顔と敬語が不自然すぎると言われた、店内でお召し上がりになりますか？」

「まあ納得よね・・・少々お待ち下さい」

この店に来るのが初めてと思われるその青年は明らかに戸惑っている。

そりゃそうだ、店員二人が注文を聞きつつ会話してたら誰だって戸惑う。

「早く紅茶入れなさいよ」

「ぐ・・・只今」

頼むから踏むな！

この橋家人、屈辱の極み！！

「紅茶です」

自分ではそれなりに、紅茶をおいしく注げるようになったと思うのだが。

しかし緑茶に関しては、父さんの方が上だろう。

あ、私にも父親はいるぞ？

単に話に出てこなかったのと、中学入学の時に喧嘩別れみたいに宝蓮荘に移り住んだからだ。

そのうち父さんとはケジメをつけておかないとな・・・

今度実家に帰った時、ちゃんとあの時のことはもう気にしていないと伝えないと。

ふうむ、どうやって話を切り出すか。

「何呆けてんのよ、やることないなら掃除でもしてなさいよ」

「・・・」

不満だ。

別に仕事をせずに考え事に耽<sup>ふけ</sup>っていたのは悪いと思っている。

だが榎野木に言われるとやる気が起きない。

母親に勉強しろと言われた気分だ。

「ご不満があるなら店長に言いつけるわよ？」

「すみませんでした」

榎野木の言葉から回答までの速度、0.00000017秒

店長は怖いから・・・

普通とは違う方向性で。

普通に私が悪いのだから、おとなしく榎野木の言葉に従うとするか。

「いらつしゃいませ・・・あ、リン」

「む、森か」

榎野木と森はいとこだ。

リンとは林葉<sup>りんよう</sup>から来る、榎野木が森を呼ぶときの愛称だ。

「・・・いつもの・・・」

「ああ、わかった」

森のいつものとはハードティーという名前のお茶だ。  
妙な名前だが、実際はただのハーブティー。  
命名は店長。

「リン、何しに來たの？」

森にバイト先に來られたことで驚いている。  
なにせ制服がエプロンドレスだからな。

多少なりともその格好に慣れているかもしれないが、見られて気持ちよくは無いだろう。

その動揺をさとられまいと、言い方に棘が付いてしまったところか。

おお、我ながらなんという洞察力。

「・・・悪い・・・？」

不満げに森が答える。

普通に、榎野木に少しきつい言い方をされたので癢しゃくに触ったのだらう。

「そんなこと言ってないわ、あたしは理由を聞いただけよ」

・・・本格的にムードが悪くなってきたな。

二人ともストレスがたまっていると、よくくだらないことで喧嘩する。

あれ、榎野木のストレスの原因は私か？



「・・・うるさい・・・」

「なによ!」

「二人とも、周りが見ているのだが」

「・・・っ!」

結構客の視線が集まっている。

とはいえその視線は面白半分の目や、またかと呆れながらも温かく見守る目がほとんどだ。

流石は伊達にこの店の常連客ではないということか。

「・・・櫂の声大きいから・・・」

「な・・・」

「二人ともそのくらいにしておけ、森、ハードティーだ、いつもの席で良いよな?」

と言いつつカウンター近くの席にハーブティーを置く。

森はその席について、どこことなく優雅さが混じった仕草でお茶を飲む。

「・・・ありがとう・・・」

榎野木があたし何してんだろと、いったかんじで溜息をつく。  
冷静さを取り戻したようだ。

「・・・おいしい・・・」

「ん、どうも」

やはり褒められると悪い気はしないな。  
そんなことを考えていると、背中に鈍痛。  
って蹴られたのか！？

「何をするんだ、榎野木！」

「さつさと掃除なさい！」

理不尽、実に理不尽だ、まったく。  
私が何をしたというのだ。

「榎野木さんに、家人が虐げ<sup>しい</sup>られているぞ」

と少し離れた席にいた3人の学生客の方から聞こえてくる。

「榎野木さんから罵<sup>のの</sup>りたいなあ・・・」

いやいやいやいやいや？！  
貴様ら同好団員か！

ここは、学校に近いから学生がよく利用するから、いても何ら不思議ではないか。

「踏みつけてほしい・・・」

「いや、どちらかというと撲<sup>なぐ</sup>ってほしい」

「森さんの冷たい視線も気持ちよさそうだな」

マゾか。

確認するまでも無いか。

「にしても、家人むかつくな」

「今度シメるか」

返り討ちにしてやろうか。

「あ、こんなのはどうだ？」

なんだというのだ、もう・・・

「あーこぼれちまったぜ、掃除しろよ家人」

三人のうち一人が、コップに注ぐように飲み物を床にこぼす。  
ふう、こういう嫌がらせはよくないぞ。

大人っぽく冷静にユラリゆらりと同好団員三人に接近。

「貴様ら・・・」

「な、なんだよ」

語彙は強めだが、瞳には恐れの色が見える。  
周りの客は既に観戦モードに入っている。

「死ぬ覚悟があるようだなあ！！！！」

「何を言って・・・ぐあっ?!」

「客に・・・何しててて・・・いるっんだよっ!？」

「かみ過ぎだ!これでも食らって落ち着け!！」

拳を大きく振りかぶる。

そして・・・

「アンタが落ち着きなさいよっ!!!！」

ゴシヤア!

あれ?

意識が遠のいていく・・・

そっか、椅子で殴いすられたのか。

ああ、時が見える・・・わけがないか。  
ドサアと倒れこむ。

「「「家人お?!」」」

「やりすぎたわね・・・これ」

おまえがやったんだ・・・ろ

最近よく・・・このセリフ使う・・・

「・・・大丈夫・・・」

何が・・・大丈夫なんだ・・・

「・・・ギャグだから・・・」

ひどく  
酷い。

榎野木樫に撲殺される  
しかし奇跡的に生き返る

## 第9戦 VS 樫野木樺（後書き）

〔修正前と修正後の変更点〕

- ・この前話にあたるサッカーの話が延期
  - ・喫茶力フエがケーキ屋になつてゐる
  - ・樫野木が森をリンと呼ぶ
  - ・樫野木のデレ要素控えめ
- （以前書いてた時期と私の方針が少し変わったため）

とか盛り込んで修正したら、今までの中で最長の話になってしまいました！

調子乗りすぎたようです・・・

いつそいつもこのくらいの長さの方が良いですかね？

## 第10戦 VS 森林葉

カリカリカリカリカリ

ふと周りに視線を移す。

年季が入った本棚は古臭いというより、知的な雰囲気をかもし出している。

勉学に励む学生達の姿は皆真剣。

ここは図書室。

家より勉強に適した空間なので私はいつもここで勉強している。

私の部屋には暖房とか小洒落<sup>こしゃれ</sup>た物はない！

まったく、何故あんなにもあれは高いんだ。

別に欲しいわけじゃない。

ただあんなものの値段が高いのが不満なだけだ、本当だぞ！

「・・・隣、いい・・・？」

「ああ」

そう言つて森は私の右側の席に座る。

よく彼女も図書室に来る。

私と違い勉強ではなく、本を読みに来ているだけだが。

近い将来、図書室の本を全て読破しそうなくらいよく読む。

カリカリカリカリ・・・

パタン

「ふう、今日はこれくらいであがるとするか」

返ってもやることは特にないし、たまには図書室本来の役割を有効活用してみるか。

数週間前に新しい本が入ったと聞いたしな。

本を借りてから帰ろうとすると、右手に違和感を感じた。

右の方に顔を向けると森が袖を掴んでいる。

「どうした？」

森が手にしているのは心理テストの本だった。

「・・・これ・・・」

「じゃあやってみるか」

「・・・うん・・・」

「じゃあ私が出題するぞ」

適当にバツと、本を開く。

「えーと、あなたの好きな人は誰ですか」

つてモロストレート？！

遠慮がない心理テストだな。

あ、続きあった。

「いない場合は、一番最初に思い浮かべた人を、覚えていてください」



「・・・覚えた・・・」

普通の人に森から感情のゆれを見つけるのは難しいだろう。  
それでも長いこと一緒にいる人や洞察力が鋭い人には、なんとなく  
だがわかるようになってくる（らしい）

今の私には、彼女が少し動揺しているように見えるが・・・気のせい  
か？

「その人が将来の浮気相手です」

浮気が既に決定事項？！

微妙に当たっていきそうで怖いな・・・  
中途半端に真実味がある。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」

「次いくか」

「・・・うん・・・」

何だ、今の間は。

「四字熟語を三つ挙げてください」

「・・・好事多魔、死山血河、空前絶後・・・」

何とか全部知ってる。

好事多魔は、好いときには邪魔が入りやすいつてことだ。

死山血河は、死体の山に血が河のように流れること、激しい戦いのたとえ。

これまたすごいのが出てきたな。

空前絶後は、後にも先にも無い珍しいこと。

「一つ目の熟語は自分の人生観です」

「・・・」

いつも好期に邪魔が入るのか。  
可哀想に。

「次は恋愛はどんなものと見ているか」

「・・・」

死山血河か。

大虐殺をしても奪い取れってことが、怖ッ！

「そんなこと無いよな？」

「・・・（コク）・・・」

だろうな。

YESと答えられたら尚<sup>なお</sup>怖い。

ん、何故目を合わせてくれないのだ？

気のせい、気のせいだ。

そうだ、そうに決まっている。

橘家人、余計なことは考えるな。  
よし。

「最後は死ぬ時に自分の、それまで送ってきた人生をどう思うか」

「・・・」

空前絶後。

森は波乱の人生を送るようだな。

頭がいいからノーベル賞くらいは取りそうだな。

ん、待てよ。

さっきの死山血河とあわせてみよう。

痴情のもつれで、新型核兵器戦争勃発。

ものすごい大胆予想だ。

それは流石にないよな。

アッハッハッハッハ。

私の予想がトんでるだけだ。

けど森の頭脳を持つてすれば、日本くらいは滅びそうだな・・・

彼女の学力は全国トップレベルを誇る。

「・・・次・・・」

「ん、ああ」

人と話している最中に、思考がどこかへ行ってしまうのは私の悪い癖だ。

その内どうにかしないとな。

「あなたは森を散歩しています」

ふむ、自分で読んでても、よくありがちな問題だと思う。  
まあどうでもいいか、と思って続きを読む。

「その森の木はブナですか、それとも杉ですか？」

細かいだろ！

木の種類まで、考える人自体少ないだろう。  
というか、ヒノキとか別の種類の場合はどうするのだ？

「・・・ブナ・・・」

あ、ちゃんとそこまで考えていたのか。  
流石だ。

「ブナを選んだあなたは、花粉症にかかっていないでしょう」

あつてるのか、それ?!  
今冬だぞ。

そもそも花粉症がどうかなんて、心理テストで確かめる必要性がないだろうに。  
病院へ行け病院。

「・・・どっち・・・」

「え、私か、じゃあ杉」

「・・・そう・・・」

と言って森は口元にうつすらと意味深な笑みを浮かべた（ようにも見える）

伏線か、何かの伏線なのか？！

悶々としていると鐘がなる。

キーングコーングカーンコーン

変なチャイムだ。

これになったからには帰らないとな。

「それでは帰るとするか」

「・・・ん・・・」

「あ、この本何処から取ったんだ？」

「・・・貸して・・・」

森は私から本を受け取ると2、3歩離れた位置の本棚のところまで歩く。

背伸びをしてなんとか本を戻そうとすると、何の前触れもなく唐突に本が落ちて

「危ないっ！」

「・・・え」

バタばたばた！！

本が急に崩れてきた。

なんとかとつさに森を押し倒して、本の雪崩から救出。

「大丈夫か!？」

「・・・うん・・・」

よかった。

怪我はなさそうだ。

「・・・・・・」

ん？

森の顔がほんのり赤く、視線は横を向いている。

森を私が押し倒してただけだぞ。

・・・って押し倒した姿勢のまま、互いの顔の距離が20cmを切っているであります、大佐！

ところで大佐って誰？！

「うわぁあぁっ！」

密着した状態。

その場から飛びのく。

「す・・・すまん！」

「・・・ありがと・・・」

あまり気にしていないよう・・・か？

顔はまだ赤い。  
気まずい雰囲気が出る。

「と、とりあえず片付けるか」

「・・・うん・・・」

ふう、今思えば同好団体がなくて助かったな。  
黙々と本を戻していると、森が話しかけてきた。

「・・・ねえ・・・」

「ん」

「・・・うん・・・」

森はそういつて心理テストの本の筆者のところを指差した。  
そこには【高峰麗香】と書いてある。

「何をしているんだ、あの女・・・」

ある意味納得だ。

この時普通に他の生徒もいた  
同好団体の過激派が増大した

## 第10戦 VS 森林葉（後書き）

季節は12月。

年末は師も走り出すほどの忙しい月だということ、12月は師走という名前だとか。

昔の人はうまいと言いますね。

本当に忙しすぎる……

それでもクリスマスに2話更新できたらなあと画策中です。



## 第11戦 VS 又又猫

「帰ったぞー」

「又」

「ああ・・・待っていてくれたのか」

「又」

ボタンキュー

ベッドに倒れこむ。

日は真上にあるが、このまま眠ってしまおう。  
その考えを読み取ったのか、又又猫がカーテンを銜くわえて閉めてくれた。

器用だ。

「又」

「礼を言っぞ・・・」

それにしても疲れた・・・

店長が「これからは24時間営業の時代よ！」とわけのわからない事を言いだしたのだ。

私とその犠牲者として、空がまだ暗いうちから働いて正午くらいにやっと開放されたのだ。

大体労働基準法を守っているからあまり文句が言えないのが悔しい。  
おまけに「やっぱ営業時間を延ばしてもお客様が入らなきゃ意味な

いわよねえ」ときた。

24時間営業はもうやらないらしい。

わかってたならやるなよ。

考え事をしているうちに、だんだん意識が朦朧もうろうとしてくる。  
が、眠りが深くなる前に嫌なプレッシャーを感じる。

ティラリラリン！

何かニュータイプっぽい感覚がしたぞ。

真木が私のところに来て、何か持ってきて私を困らせる予感がする。  
我ながら具体的な予感だな。

「又又猫、私の安眠の時間を守ってくれないか？」

「又〜ん」

真木は又又猫が苦手だからこれで安心だろう。

体を起こして又又猫に念を押す。

「それでは頼んだぞ」

「又〜ん」

ベッドにもぞもぞともぐりこんでいると、玄関からガチャガチャと音が聞こえてきた。

どうやら早速来たようだ。

「く、鍵が・・・仕方ないですね・・・」

チャキチャキ、カチャチャキ・・・

甘いな。

ピッキング対策は完璧だ。

中学校時代のノウハウが役に立ったな。

チャキ・・・

あきらめたか。

これでやつと眠りにつける。

と思つたら嫌な音が聞こえてきた。

バキィ！！！！

おいしい！

超強行手段に出たか。

無茶苦茶な・・・

又又猫に任せたとはいえ心配だな。

重い体を引きずって、玄関の方を覗く<sup>のそ</sup>。

「家人先輩、私が愛情たつぷりの夕食を持ってきましたよ」

やはりか。

玄関から寝室まで距離があるはずなのに、ここまで異臭が漂ってくる。

腐卵臭に加齢臭をプラスしたような臭いだ。

真木の作る料理はすごいからな。

料理という名の、対人最終生物兵器だからな。

その実力は新たな生命を創造するほどだ。

前のハンバーグは、台所の漆黒の大王のように手足が生えて動き出した。

・・・ソレを完食した自分を褒めていいと思う。

「又〜ん！」

真木の前に仁王立ち。

は、できないので四足歩行で普通に立ちはだかる。

「な、私を入れないというのですかっ！」

又又猫がんばれ〜

「ふふふふ、今日の私は対ネコ型完全無敵装備なんですよっ」

タラタラッタラ〜

「猫じゃらし〜」

ハイハイ、なんかイタイ子。

自分も昔同じことをしていた気もするが。

しかし又又猫に使ったこと無いな、猫じゃらし。

今度買ってあげようか。

いや、懐が寂しいので近所の野原から取ってこようか。  
植物の方の猫じゃらしでも良いだろう。

「又又又又又〜！」

「きゃあっ」

おお！

目にもとまらぬスピードで、猫じゃらしにジャブ。

粉状に砕かれた猫じゃらしが、その威力を物語っている。  
又又又ラッシュとでも名づけよう。

「く、ならば第二段っ！」

あ、高級猫缶だ。

ソレを見た瞬間、又又猫の顔が鬼へと豹変する。

「又んッ」

一陣の風が吹く。

「えっ?!」

真木の真正面にいたはずの又又猫が、後ろにいる。  
おまけに高級猫缶の中身までなくなっている。

そんなにひもじかったか、すまん。

給料日前なんだ、許してくれ。

「くう・・・高かったのに・・・仕方ないです、第三弾っ！」

ぬぬぬぬっぬぬうううん

リズムはドラえんのヤツを当てはめてくれ。

「マタタビ」

いったい又又猫にマタタビ使つとどうなるのだ?  
使ったことないからな。

私の妹が使って悲惨な目にあったとかいうエピソードがあったが。

「又ッ」

「感度良好、ほおらこっちこっち」

「又・・・又・・・」

又又猫の毛が明るむを帯びてゆく。

「ぬぬぬんぬ、ぬぬぬ〜！」

逆立った黄金の毛とオーラ。  
つてどこの戦闘民族だ！  
スーパー又又マジンツ？！

「ぬ〜ん〜ぬ〜ん〜」

戦闘力が一点に集中し、高まっている！

「これっていったい・・・」

「やめろ、又又猫！」

しかしすでに時遅し。

掛け声と同時に、又ン又ン派は放たれた。  
安直なネーミングセンスでスマン。

「又ウ〜！！！」

ドシャアアッ！

水道粉碎。

水が撒き散らされる。

「アハハハゝびしょ濡れですねっ」

水道は粉碎したまま、理性を失ったかのように水が出続けている。呆然とそれを見つめていると真木が私の存在に気づく。

「先輩いるじゃないですか」

「う．．．あ．．．」

「ぬう．．．」

申し訳なさに、又又猫が俯く。  
どうしよう．．．

「先輩の部屋だから大丈夫ですよっ」

我が家の経済状況を知らんな。  
水道とドアの修理代。

今月の家計簿も真っ赤だろう。  
そして私の顔も真っ赤だろう。  
うまいこと言った。

「先輩、濡れ濡れの私を見て欲情しましたか？」

「．．．．．」

そんなわけ無いだろう。  
空気を読め。

「せ．．．．先輩？」

「ぬ．．．又ウ．．．」

必死に自分を押さえ込もうとする。  
が、それは無理だった。

私の中で何かがブツンと切れる。

「ふざけるな！どうしてくれる、修理代！！」

5 あ、7、5 あ！

特に意味はない！！

「きゃゝ」

「又ゝん！」

とかいいながら二人（の内片方は一匹）は逃げ出す。  
つて足速ッ！？

「待てい！！！」

「許して下さい、先輩っ！」

「又ウゝ」

「とりあえずそこになおれ、貴様ら！！！！」



被害水道粉碎

この後二人（の内片方は一匹）は捕縛された  
ちなみに今月の水道代は、普段の数倍だったらしい  
それに加え水道とドアの修理費

ただでさえギリギリの家計簿は真っ赤となる  
放水された部分の床は後々腐ったらしい

## 第11戦 VS又又猫（後書き）

すみません。

東方地霊殿やってたら大分遅くなりました（オイ

この時期にゲームにはまるとは。

クリスマスに2話更新する予定なんで、なにぞとご勘弁を。

年賀状も作らなきゃならないし間に合うかどうかは微妙なんですけどね・・・

## 第12戦 VSクリスマス・イヴ

「悪戯用塩ケーキ1つ」

「了解しました・・・っと」

あー忙しい忙しい。

ここはケーキ屋、そして今日はクリスマスイヴ。

その二つの要素のせいで店がとても忙しいため、私がレジ打ちにかりだされている。

ええと、先刻の男性客の注文は、悪戯用塩ケーキだったな。犠牲者の方には心からご冥福をお祈りしよう。

この悪質なケーキが売れていること自体嘆かわしいな。食べると塩分恐怖症になる程の味と評判だ。

「お持ち帰りですか、それともこちらで食べるか？」

あ、タメ口になってしまった。

「もちろんお持ち帰りに決まってるじゃないか・・・フフフフ・・・  
・アーハッハッハ！！」

この男、最早止まらん。

というか次の客が待っているのだ。  
早くどけ。

その男は高笑いをしながら店外に出て行った。

彼が先刻いた場所には、悲しみという言葉が具現化したような男性客がいた。

「い、いらつしゃいませお客様。御注文はなんでしょうか？」

「スターアルベジオケーキを……」

「かしこまりました」

で、出た！

スターアルベジオケーキ！！

クリスマス限定の、彼女に約束をバツくられた男や、失恋した人が食べるケーキだ。

今年も哀れな子羊がまた一人……

「来年はあなたに幸せが訪れますように……420円になります」

このケーキを買った人には、このセリフを言うのが決まりだ。しかし励ました次の瞬間、おだいを請求するのはどうなのか。

「また……頑張ってみるよ」

ぎごちないが、彼は微かに笑みを浮かべた。

良かった良かった。

女なんて30億人くらいいるのだから、そうめげずに新しい恋に向って走れ！

喫茶カフェの面々は皆応援しているぞ。

では次のお客様。

ん？

見覚えがあると思ったら、我がクラスメイトではないか。

「家人ー、男の友情ケーキ4つ、お持ち帰りで」

4つか。

1つ足りんな。

「樫野木ー！男の友情ケーキあるかー！」

「ちょっとまってなさい！」

厨房の奥とカウンターだと、どうにも会話がしづらい。  
級友に目を向けると、寂しげな雰囲気を目に宿していた。

「友情を杯にクリスマスを過ごすか、谷山」

「今年こそは恋人と甘い一時を過ごしたかったんだけどな……  
あと俺は山谷だ」

スマンスマン笑いながら、厨房の奥から出てきた樫野木の差し出したケーキを受け取る。  
そして励ましの言葉をかけてケーキを渡す。

「頑張つて彼女作れよ。ほら、注文のケーキだ、谷山」

「ああ、頑張るよ。それとお前わざと名前間違ってるだろ！」

「ハハハハハ、それじゃあな」

少し寂しげながらも、ケーキを受け取る前と違い、小さくとも確かな希望の灯火を持ちながら山谷は帰っていった。  
お前ならきつと彼女ぐらいできるさ。

良い所はそれなりにあるし、ただ今年は運がなかったただけさ。

私がお前に彼女ができると保障してやる。  
だから安心しろ、谷山。

「次のお客様どうぞ」

グデングデンに酔っ払った女性客。  
常連客の一人だ。

年齢は確か三十路くらいだったはず。

「恋人1つ、テイクアウトで」

「恋人は物じゃないだろ」

言動からわかるように、只今彼氏募集中だそう。  
結婚できなかったあの振られたので、頻繁にこの店に愚痴りに来る。

「榎野木ー！ちょっと頼む！」

はいはいと言いながら、気だるそうにカウンターまで出てくる。  
厨房はカウンターよりさらに忙しいようだ。

「頼むって何がよ……って叔母さん！？」

彼女は榎野木の叔母であり、同居人でもある。  
なんでも榎野木が親との折り合いが悪く、叔母の家に居候している  
そうだ。

ちなみに宝蓮荘住居暦あり。

「ウィーヒック、やっほー櫂いいひひひひーっひっひひひ」

泥酔状態だな。

これは笑い上戸に分類されるのだろうか。

「うわ……どう考えても飲みすぎね……」

「よくもまあここまで飲んだものだ、ということで榎野木頼む」

「えー、仕方ないか……」

「う……なんか気持ち悪くなってきた……」

「ちょ、吐いたら全部食べなさいよ!!」

大分テンパっているな。

はい、次のお客。

常連のカップルさんが来たようだ。

といっても今はまだ、ただの幼馴染のようだが。

「俺は栗<sup>クリ</sup>スマスケーキ1つ」

「それじゃ私はクリスマス限定ホワイトツリーケーキ2つとケーキ・オブ・ザ・トワイライトとサンタズスカーレットとアンシメントリーケーキ、永夜ショートケーキとアーカード・ティラミス、それとパルスイクッキー、サンライトオーバリーエローケーキとゴールド・エクスペリエンストロベリーケーキとクレイジー・ダイヤモンドプラン、ああ、ついでに美味しいアバ茶と紅茶をお願い、御代はツケで」

「お前の胃袋はブラックホールか?!」

む、ツツコミを取られてしまったな。  
残念無念。

「ここまでの金額になると流石にツケは辛いな」

「そつか、今いくら持つてる？」

と隣の相棒に聞く。

当の相棒は露骨に嫌そうな顔をする。

「自分の分は自分で払えよ？」

「アンタのモノは私のもの、私のものは私のもの」

なんというジャイアニズム。

ここまで堂々としてると、かっこいい位だな。  
言ってることは最低だが。

アンタと呼ばれた方は更に嫌そうな顔をする。

流石に空気呼んだのか、大量注文はあきらめたようだ。

「じゃ・・・じゃあウエディングケーキでも買ってみる？」

と頬を赤らめながら、チラッと横を向く。

向いた先のアンタさんは

「何でそんなモン食べんだよ、普通のケーキでいいだろ。おまえん  
トコの家族と食べるんだしょ」

コイツの鈍感力大したものだな。

そろそろ私か誰かが諭してやるべきか。



あっさり拒否された彼女は………ヒツ。  
さ、さて。

次のお客、次のお客。

あ、もう大分並んでいる。

不味い、急がなくては！

「うううううう、吐きそう」

「叔母さん、吐いちゃ駄目よ。吐いたら今まで我慢してきたものが全部無駄になるのよ！」

「うううううう」

「ちょっと、待って！俺が何をしたつつうんだ？！」

「大丈夫、アンタは何の心配もしなくていい。痛いのは最初だけ、後はだんだん気持ちよくなるって」

「やつ、ホントマジ勘弁！その手に持つてるの何？！」

「ウフフフフ」

「え、イヤ、マジでいくのか、これ？無理無理無理無理！！」

「い……イクうううう！」

「せめて吐くって言いなさいよ、いい年こいて！」

「私はまだまだ若……ウオボロロロロ」

「あああああ、もっつー!!」

「アンタいい表情かおしてる……女王様かみさまって呼んでみて」

「ふざけんな!……え、それは無理だって……アッー!」

あー忙しい忙しい。

家人は12時ごろに帰宅

早寝早起きが生活習慣な家人は死にかけた

その後年賀状を書くとして机の上で力尽きた

## 第12戦 VSクリスマス・イヴ（後書き）

メリー・クリスマス！

累計アクセス数が10000を突破しました！！

皆様この『宝蓮荘の高校生管理人』にお付き合いいただき、本当にありがとうございます！

もう一度、メリー・クリスマス！

ハイテンションでスマセンねっ！！

といっても相変わらず恋人がいないクリスマスですが、例年通り。その寂しさを紛らわす、感想という名のクリスマスプレゼントが欲しいです。

最大限の愛情を込めて返信いたしますので。

あ、結構気持ち悪かったですね・・・

それではそろそろお別れの時間です（何の時間だ

明日には番外編をまた更新しますので、そのときにまた会いましょう。

最後にもう一度、メリー・クリスマス！

・・・そっぴやメリークリスマスのメリーってどんな意味なんでしょう？

## 番外戦1 宴の準備

どうも、点鈍<sup>てんどんかつどん</sup>克吞<sup>くつどん</sup>です。

只今午後5時。

家人君を除いた宝蓮莊全員、僕たちは家人君の部屋に侵入してます。音を立てないように慎重に歩いていると、後ろから健児君が大分トーンを落として話しかけてくる。

（家人はしつかり眠ってるか？）

（ちょっと待って）

と、同じく小さい声で返す。

ゆっくりとドアノブを回し、細心の注意を払いながら寢室を開ける。家人君は毛布をかぶって机にうずくまったまま、ぐっすり眠っていた。

その周りには、書きかけの年賀状が置いてある。

どうやら年賀状を書いている途中で眠ってしまったらしい。

イヴの喫茶カフェの多忙さは家人君ですら敵わなかった様だ。

最大のネックだった又又猫は、主人の代わりにベッドで寝ている。

（大丈夫だよ）

（オツケエ）

麗香先生がメンバーを一瞥<sup>いちべつ</sup>し、小さいながらもハッキリとした声で告げる。

（それじゃあ作戦開始ね）

僕たちは無言でうなずき、作戦を開始する。

その作戦とは、家人君が眠っている間にクリスマスパーティーの準備をするという、極々単純なものだ。

クリスマスパーティーは毎年管理人が取り仕切るんだけど、今年は家人君が忙しので中止になっていた。

それを皆に伝えた時の家人君が少し寂しそうだったので、この作戦が行われることになったのだ。

（麗香先生、七面鳥は・・・）

（それはこっちに持ってきて）

ちなみにこの作戦の立案者はユカさんだ。

ニヤニヤ。

愛されてますねえ、家人君。

（井モノ、そういや家人って寝てても侵入者がいたらすぐに起きるよなあ？）

（麗香先生が頃合を見計らって催眠ガスを使っただから象が踏んでも起きないよ）

（・・・そうか）

健児君は言いたいことを吞んで、部屋の飾り付けに黙々と取り組む。余談になるけど、ガスは副作用も後遺症もない優れものだそうだ。むしろ健康にいいらしい。

効果は高いそうだが、家人君の無駄に超人的な策的能力を考慮して静かに行動している。

（先輩達も手を動かしてくださいっ）

（はいよ）

真木ちゃんはいつも通りのイントネーションなのに声は小さい。  
って今すごい危ないものを見た気が?!

（な、何してるのかな、真木ちゃん?）

（何って・・・家人先輩の好物の杏仁豆腐を作ってるんですけど?）

といってまた鍋の中身をかき混ぜる。

その様子は魔女が怪しい毒薬を作っている姿とほとんど同じだ。  
フフフとか笑ってるし。

不味い、非常によろしくない。

料理に殺される!

（ええっと・・・料理はユカさんがやってるから大丈夫だよ?）

（でもほら、杏仁豆腐は先輩の好物ですからっ）

君が作ってるのは杏仁豆腐じゃなくて兵器だから!

このまま行けば宝蓮荘から半径20メートルくらいは更地になる。

（ええっと・・・オリハルコンとクロロホルムを少々・・・）

何が出来上がるんだろ・・・

これ食べなきゃいけないとか勘弁して下さいよ。

こんな時こそ麗香先生だ。

（真木ちゃん、隠し味にプルトニウムはどうかしら？）

（いいですね、それっ）

ちよ、麗香先生！

何悪ノリしてるんですか？！

「やつちやった〜」じゃないから！

舌を出してテヘツとかやめてください。

まったくいい年こいて。

あ、スイマセン。

（健児君・・・どうにか・・・）

希望の光の方を向くと、鼻血をたらしながら妄想に悶えている危ない姿があつた。

そっか。

麗香先生のさっきの仕草にやられたわけね。

僕は2次元の女性にしか興味ないからなあ。

萌殺度<sup>もくどく</sup>高かつたんだ。

（ユ、ユカさん？）

人類の最後の希望に声をかける。

しかしその先にあつたのは、【媚薬】という胡散臭いラベルが貼<sup>は</sup>られた容器から、桃色の液体をケーキにコッソリしこんでいる哀れな少女の姿だった。

それ騙されてるから。

たぶん通販で買ったんだろう。

ユカさんはすごい騙されやすそうだし。

（希望の光は潰えたか・・・）

まあいつか。

食べるのは全部家人君っぱいし。

（さて、私の分担は終わったわよ）

（料理も全部並べ終わりました）

真木ちゃんの作った分も含めて。

（こっちも大丈夫ツス、先生・・・ハアハア）

健児君、ごめん。

今僕には君がゴミにしか見えない。

（井モノ先輩も終わりましたか？）

（あ、うん）

部屋を見渡すと、見ているだけでジューシーだろうとわかる七面鳥。上品という印象さえ抱かせる、生クリームのケーキ。

他の料理も思わずだれがたれそうなくらいに美味しそうだ。

真木ちゃんの杏仁豆腐せいふつへいきを除いて。

なんか動いてる・・・

もちろん準備は料理だけだったわけではなく、天井近くには配色がしっかりしている輪飾り。

1メートルくらいのクリスマスツリーも置いてある。

中々いい仕上がりだ。



これなら家人君も満足してくれそうだ。

（そろそろ催眠ガスの効き目が切れる時間だから皆配置について）

家人君は効き目が切れると同時に、侵入者を排除しに飛び起きるだろうから注意しないと。

皆クラッカーを持って寝室のドアの前に移動する。  
変に緊張した雰囲気張り詰める。

（それじゃ・・・5、4、3、2、1・・・）

バアンと扉が開け放たれ、少し寝ぼけた家人君が出てくる。  
寝癖で髪が乱れ、少しフラフラした感じだ。

眼の焦点があっていないので、多分僕らを泥棒か何かと勘違いしているだろう。

完全に寝ぼけているが管理人としての習性が、僕らに対して怒鳴る。

「何処から入った曲者ども！」

パアン！

一斉にクラッカーを鳴らす。

「へ？」

家人君は何が起こったかわからず、あっけに取られている。

呆けた表情の家人君に畳み掛けるようにして、お決まりのセリフを言う。

口元に笑みを浮かべて、声をそろえて、日頃の感謝の気持ちを込めて、

『メリー・クリスマス！！！』

## 番外戦1 宴の準備（後書き）

オチを取ったら似非爽やかになりました。  
今度はちゃんとしたホームドラマ的なモノを書きたいです。  
精進、精進。

追伸

クリスマスプレゼントありがとうございました。  
キーボードをうつ手は冷たくとも、心は温かいです。

オチを取ったらほんの少しだけ爽やかになりました。  
自分で読み返して、改めて自分は未熟だなあと思いました。  
コメディも温かい話もうまく書けるよう精進します。  
ちなみにクリスマスパーティーは夜まで続いたそうです。  
過労でそのうち家人君は倒れることでしょう！  
朝っぱらから滅茶苦茶に食べたそうですし。  
以上、戦況報告代わりを作者がやってみました

それとクリスマスプレゼントありがとうございました！  
キーボードを打つ手が冷たくとも、心は温かくなりました。  
・・・自分で言ってて恥ずかしい気がしてきました。  
それはともかく感謝してます！！

ではまた次話のあとがきで。

### 第13戦 VS 橘カンナ

プルルルルル  
プルルルルル  
プルルルルル  
プルルルルル  
プルルルルル  
プルルルルル!!!

布団に入ったとたん電話がかかってきた。  
冬の夜はとても寒く、屋内とはいえ暖房器具のないこの部屋はその寒さを嫌というほど体感させてくれる。

「もしもし、こちら橘」

眠い目をこすりながら、受話器を取ると久しい声が聞こえてきた。

『あ、お兄ちゃん?』

「ん?」

『ボクだよ!』

「ああ、カンナか」

【橘カンナ】私の妹だ。

カンナの漢字は、鉋と書く。

大工さんが使う、木を削る道具のアレだ。

あのシャーっというヤツ。

戸籍上では神奈という漢字になっているのだが……まあ色々ある

ということだ。

「久しぶりだな、元気にしているか？」

『うん、けどお兄ちゃんがいないと少し寂しい・・・』

「ああ、すまん」

確かにここ最近帰っていない。

たまには家族に顔を見せないといけないな。

『お正月には帰ってきてよ？』

「わかった、基本的に暇だから」

勉強に関しては自主学習だし、部活もやっていないからな。

暇人、万歳マンゼ（意味あってるよな？）

・・・微妙に虚しい。

あ、バイトがあったか。

『先に言うけど、店長にはお母さんが話を通してるよ？』

「ということは母さんは帰ってきているのか？」

母さんは職業がデザイナーで、世界レベルで活動しているためあまり家に帰ってこない。

もっともデザイナー業よりアマゾンで財宝見つけてきたり、半そで短パンでエベレストに登ったりと冒険バカしているが。

嫌いではないむしろ尊敬している所もあるが、最低でも肋骨の1、2本は覚悟しないといけないから・・・

おそろおそろ聞いてみると、答えは

『うん、今も電話してる後ろでなんか騒いでる』

生命保険はどうだったかな？

確認してこよう。

『お父さんも仕事が一通り終わったって、他の大和家の人も大体は帰ってくると思うよ？』

大和は母さんの旧姓だ。

大和家とは・・・財閥のようなものだと思ってもらえばいい。実際は大分違うが。

『そういえば、今誰が住んでいるの？』

宝連荘のことか。

えーと、一人一人説明するのは些こさか面倒だな。

「全員が大和高校関係者だ」

『その中に女の子はいるのかな・・・かなあ？』

何か様子がおかしいな。

不安定な印象を受ける声だ。

「女性は3人だが？」

ミシミシミシッ・・・

なんだこの受話器を握り絞める音は？！

『お兄ちゃん、その中に彼女とかふざけた存在はいないよね?』

「あ、ああ」

ふざけた存在で。

『その前に今、恋人なんかいないよね、ねえ?』

殺気が声からにじみ出ているのだが・・・

こ、この私が震えているだとツ?!

いったいどうしたのだろうか。

声に恐怖心が出ないように極力気を使い、なるべく安心させるように言葉を紡ぐ。

「いないぞ?」

『そっか安心したあ・・・』

声が元に戻ったな。

電話越しに殺されるかと思った。

まだ体が震えている。

何か悪いことは言っていないよな?

『あ、お兄ちゃん』

「なんだ?」

『ボク宝連荘に住むことになったから』



「何イ!!」

初耳だぞ?!

『ボクも大和高校受けることにしたんだ』

「しかし・・・」

『お兄ちゃんとはボクと一緒に暮らすの嫌なの?』

泣きそうなのをギリギリでとどめている様な声だ。  
私はこういうのが一番苦手だ。

「そ、そういうわけじゃなくてだな」

『そうだよ、ボクは本当の妹じゃないもんね・・・』

「わかった、わかった!! いつでも宝蓮荘に越して来ていいぞ」

『えへへ、今の言葉に嘘偽りはないよね?』

今の芝居か・・・

『我儂言っちゃってごめんね?』

「別に構わないぞ」

やけくそだ畜生。

あ、本当の妹じゃないっていうのは、つまり血が繋がっていないってことだ。

・・・言い直す必要性はなかったな。

カンナはうちの養子だ。

私が家族にしてくれるよう頼んだのだが、詳しい話はまた今度。

『じゃあそっちに住むことになるから、少し決めておきたい事があるんだけど・・・』

「ああ」

『あれは一緒にする？』

む、部屋か。

どうしたものかな。

『お風呂』

「考える余地がないだろ！」

兄妹水入らずから程遠い。  
上手いこと言った。

『じゃあお布団』

「何故そうなる?!」

考える余地があるのか、ソレ?!  
部屋以前の問題か!  
年頃の娘なのに・・・

『ちえっ』

「あたりまえだ、舌打ちする様な子に育てた覚えはないぞ」

『ごめんごめん、それとお正月に兄ちゃんが来て帰る時にくっついて行くから、物理的に』

無茶言うな。

橘カンナに宝連荘居住権を奪われる  
家人の実家の帰省が確定した

### 第13戦 VS 橘カシナ（後書き）

1日12時間以上勉強という生活に慣れてきた自分が怖いなあと考える冬の明け方。

友人とオリオン座を見ながら野郎と星座とは寂しきことかと思う寒空の下。

私は今日も元気です。

ハイ、ということで新キャラ登場です。

ちなみに人物の描写をいつもどおり省いています。なるたけイメージを自由に広げてもらうためです。

単に自分の中のイメージがしっかりしていないとも言いますが（オイ宝蓮荘に関しても描写はほとんどありませんが、一応補足させてもらうなら、お風呂はありません。

と、ちょっとあとがきで伏線を張らせていただきました。

## 第14戦 VS 渡部

「カナナよ、私は帰ってきた！」

「お帰り、お兄ちゃん」

電車に揺られること1時間。

東京ドームいくつ分だ？と問いかけたくなるような豪邸。

周りは緑に囲まれ木々が生い茂る、今が夏だったらの話だが。

広大な面積のクセに、どこか質素で落ち着いた雰囲気をもっと出す和風建築物。

それが私の実家、大和邸。

「お帰りなさいませ、家人様」

お手伝いさんの渡部さんだ。

顔に刻まれたしわや白い髪から老成して落ち着いている感じに見える。

それでいて眼鏡や質素な和服が従者としての印象の方を強く与える。執事服もなかなか似合うだろう。

「ああ、ただいま」

大和家には従者が多数存在する。

私も中学生になった時に宝蓮荘に引っ越すまでお世話になった。

従者とはいっても敬語を使う渡部の方が珍しいくらいで、ほとんどフレンドリー、悪く言えば適当な奴が多い。

実家の大和家について説明。

代々さまざまな才能を開花させて、いろんな分野の一流に大和の名がある。

政府官僚、設計士、教育関係者、デザイナー、企業の社長&会長、病院の院長etc・・・

しかしそれらは大和グループという集団を成しているわけではない。  
長はいるが、<sup>おさ</sup>群体ではなく大和家同盟のようなものだ。

「旅の疲れを温泉につかって、癒しますか？」

実家には温泉がある。

なんでも大和邸を建てる時の大和家の中心人物が大の温泉好きだったそうだ。

「それよりも・・・」

「あ、それともお食事になさいますか？」

「いや、そうじゃなくて・・・」

「わたくしめには、それとも私にするう？といった選択肢は無いの  
でございます」

「いらぬわ！そんな選択肢！！」

60過ぎた老人にいわれても嬉しくもなんともない。  
それよりも・・・

「それよりなんで貴様らがここにいるのだ？！」

「ははは、先輩、たまたま偶然ですよっ」

「どう考えても偶然じゃないだろ」

「す、すいませんでした!」

「ああ、ユカは別にいいぞ、真木は駄目だが」

「差別反対っ!」

しかし何故ユカと真木がこの場所を知っていたのだろうか。  
ふとした疑問が脳裏を掠めると、いきなりカンナが腕をつか  
んできた。

「お兄ちゃん!こんな人たち放っておいて、ボクと一緒に  
お風呂入ろう!」

「ああ、一緒には入らんが」

「そ、そうですよ、何言ってるんですか!家人さんは私と  
入るんです!」

「照れるなら最初からそういうことは言っ  
な!」

「駄目ですよユカ先輩、そういうのはコッソリ入るモノ  
ですよ」

「それも違うだろうがああ!」

風呂くらいゆつくり入らせろよ。  
頭が痛い。

「ではわたくしめが・・・」

「渡部えっ!!?」

いや、同性なら問題ないか。

私は何を過敏反応しているんだ。

「で、ユカと真木はどうやってここに来たのだ?」

「麗香先生に教えてもらいました」

やはりあの女は災厄創造神トラブルメーカーだな。

実家で普段の疲れをきれいさっぱり落とそうと思ったのに・・・  
あ、母さんがいる時点で無理か。

「とりあえず中に入りましょうか」

「ああ、そうだな」

今私の目に映るは、和風建築物の超巨大豪邸。

一族全員の財力を結集して、作つたらしい。  
いまだに父さんが増築中。

「ユカさんと、真木ちゃんだったけ? 話があるのでちょっとついてきて」

と殺気を撒き散らすカンナ。

目が既に正気ではなく、瞳にはうっすらと狂気の光がちらつく。

「こちらと同じですねっ」



「同感です」

他の2人からもどす黒いオーラが出ている。  
顔が笑っていても、目がまったく笑っていない。

「では温泉に案内いたしましょう」

あの3人は放って置くとするか。

「それでは頼むぞ」

大和邸は広くて迷いやすい。

増築を重ねていて構造がかなりこじれている。

屋内だが遭難して、餓死しかけた奴がいたとか何とか。

カポ  
ン

という音は実際の風呂では聞いたことが無い。

にしてもこんな大浴場を、一人で独占できるのはなかなか気持ちがいいな。

体を洗い終え、湯船につかると背後からニタニタした声が聞こえてきた。

「やあ、家人君」

先客がいたな、畜生ー。

「どうも、校長」

コイツは大和高等学校校長。

教育理念もしっかりと持ち、それを実現する手腕もあるが変態というイメージの方が先行する人物だ。

「ははは、とりあえず死んでくれないかな？美しい女性達に囲まれていて羨ましいことこの上ない」

「ハッ、貴様は肥溜めに沈んで窒息死している」

「悪いがそれは断らせてもらおう。自分は肥溜めではなく、たくさんの美女達に囲まれて窒息死すると心に誓っているからな」

「貴様はいつも女の尻ばかり追いかけているな」

「女性はこちらから追いかけないと逃げてしまっただろう？」

追いかけるから逃げられるんだろう。

警察に通報されても知らんぞ。

「あんた奥さんいるだろうが」

仲よく(?) 学校と一緒に経営中。

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい」

ガタガタと震えて、焦点のあっていない目でうつむき、つぶやいて

いる。

喉をかきむしって死にそうなくらい謝っている。

「そんなに奥さんが怖いのか？」

優しそうな人に見えたがな。

疑問に思い聞いてみたが、校長から返答が帰ってくることはなかった。

どうやら心は現実こころにないようだ。

「おまえ、悪かった。悪かったから蠟燭ろうそくは勘弁してくれえ！」

「・・・夫婦で仲がいいようだな」

キャサリンからのメールでも見られたか。  
まあ、愛ゆえにとってやつだ。  
ところでキャサリンって誰だ？

置いてけぼり組

森、檜野木、井モノ、麗香、健児など  
備考

キャサリンはキャサリン

## 第14戦 VS 渡部（後書き）

楚人に楯と矛

有名な故事成語、「矛盾」の最初の部分です。

学校で習ったことが皆さんあると思います。

私も前に習いました、多分。

内容は

「この盾マジすごい、だって何も攻撃通さないし。

こっちの矛もすごいぜ、だって何でも貫くもん。」

「じゃあその盾をその矛で攻撃したらどうなるの？」

「・・・う、うわーん!!」

みたいな内容だったと思います。

何せ結構前の話なんで記憶があまり定かではないですが。

え、何が言いたいんだと・・・

ええとですね、つまりは・・・すいませんでしたっ！

前話の時

最初「風呂あがりに」

後書き「お風呂はありません」

これぞ正に矛盾。

後書きの方が正しいです。

すいませんでした。

設定の方をしっかりと書いてないせいです。

もうちょっと細かい部分まで設定を突き詰めていきたいです。  
それでは新年までのカウントダウン！

（書いている時の話）

残り約3500秒！

約3499秒！

以下略

## 第15戦 VS 大地の母

「ふう、やはりここは落ち着くな」

カコーンと、ししおどしの音が静寂な庭にちよつとした明るさを添える。

流石は大和邸の庭だ。

優秀な庭師がいるようで、手入れが細かくされている。縁側にいるとすぐに昼寝してしまいそうだ。

ここにくると、日常の悩みなど吹っ飛んで・・・

「家人ゝ！」

不味い、この声は母さんだ！！

上か！

右か！

左か！

後ろか？！

じゃあ裏をかいて前・・・

「下だ！」

「うえああああっ?!」

地面から手があ！

ホラーはよしてくれ！

母さんは地面から手に続き顔だけ出して、無邪気にカラカラと笑う。

「いやー久っしぶりだね、家人<sup>いえひと</sup>」

「あ、ああ」

できることなら会いたく無かった気もする。

母さんの「ほっ！」という掛け声と共に、台無しになった着物がその全貌を現す。

赤を基調とした高そうな着物だ、もったいない。

見た目は大人、中身は子供な私の母親。

それが【橘 蓮】という人間だ。

それでは説明モードに入る。

職業は世界レベルのデザイナー。

母さんの父親（私のジジイ）から武術の手ほどきを受けている。人としてのスペックは遥かに凌駕している。

説明終了。

「元気にしてた？」

「ぼちぼち、な」

「元気ないなあ、せいじゃ私が稽古してやろう！」

「だが断る！」

言い終わるか否や、全力ダッシュ！

今ならベン・ジョニー、もといベン・ジョンソンすら抜ける気がする。

気がするだけだが。

「うーん、まだまだ遅いな」

ゾツとした感覚を感じ、振り返ると涼しい顔の母さんが間近に。  
こっちは必死なのに！

「そいやっ！」

足に痛みがしたと思ったら、既に転ばされていた。  
顔に地面が迫る。

「ぐあっ！？」

痛たたたと音を上げながら頭をさすっていると、またゾツした感覚  
がする。

顔を上げると、そこには目を爛々（らんらん）と輝かせた母さん。  
その姿は悪魔や鬼といった存在を想起させる。  
瞳は純粹そつに見えるが故に、何か恐ろしいものを感じさせる。

「待ってくれ、今さっき風呂に入っただけなんだ。だから汚れる  
からやめよう」

手を上げて戦意がないことを示しながら、座ったまま後退おひきずりりする。  
しかし母さんは私の言葉をを即座に却下する。

「後でアタシと入ればOK」

「だから何故一緒に入る必要性がある？！」

「いや、成長した息子の息子を見てみたいし」

「息子の息子言っな！」



日本人として、もっと恥じらいを持つべきだろう。

「そうゴチャゴチャ言わないの、ソレツ」

「うおつとおつ!？」

前触れのまったくない母さんの正拳を、寸前のところで反射的に避ける。

顔の近くを拳が通過しただけで、タラリと血が頬を伝う。

「それじゃあ・・・行くよっ!」

「ヤケクソだ、畜生ッ。来い!」

ガッ、ズガッ、ガッ、ガガガ、ガッ、ズガガガガ。

リズム感のない荒々しい音が鳴り続ける。

ちよ、途中から一方的になってないか?!

「天竜之顎粉碎爆裂玉碎拳・亞式天来無想撃い!」

「ギイッ!」

長々しい名前だが、実際はただのアップー。

ただ力が半端ない。

何とかモロに食らうのは防いだが、数メートル殴り飛ばされ「今日の飯は何だろうか」と現実逃避する。

重力によって落下して現実を再認する。

これでもまだ意識を失わないあたりが慣れという奴なのだろう。

「さあ、ここで人生にピリオドを！」

「待て待て待てえ！殺す気が！？」

「そんなわけがない、愛する息子を殺すわけないでしょ」

「今、人生にピリオドって……」

「漢なら細かいことにこだわるな」

「人の生死に関わることを細かいと言っなよ……」

「ごめんごめんとまたカラカラと笑っているところを見ると、絶対反省してないな。」

「こういう人だから仕方ないか、と思っていると先刻のアップーが遅れて効いてくる。」

「そろそろ意識を手放そうかと考えていると、向こうからカンナが走ってやって来た。」

「あー！カンナちゃん久しぶりー！」

「お母さん……こんなにお兄ちゃんをボロボロにして……お母さんなんて大っ嫌い！」

「そんなっ、カンナちゃんごめん！」

「世界が終わったような顔。」

「まるで悲劇の主人公のようだ。」

「どちらかというと私の方が主人公だろ、2重の意味で。」

相変わらず喜怒哀楽が激しい。

「許して！」

「許す！」

変な会話だな。

明後日の方向を向いていると、ユカと真木も来た。

「「お義母様！」」

お義母様あ？！

それってどういう・・・

そうか、カンナに二人とも一目ぼれしたのか！

「貴女たちにお義母さんなどと呼ばれる筋合いなどないわっ！」

やはり同性愛は認められないものなのか・・・

ここはひとつ私が

「私はおまえたちの愛を否定しないぞ」

とさわやかに微笑んでみる。

「家人さん、絶対勘違いしてますよね」

はあ、とため息をつくユカ。

続いて同じように呆れる我が妹、カンナ。

「だね、お兄ちゃんっていつもこんな感じ」

「カンナちゃん辛かったでしょうに・・・負けないですけどねっ」

何だ？

この呆れた感じがにじみ出た雰囲気。

「私は昼寝でもするぞ」

とりあえず逃げよう。

離脱。

「雰囲気能耐え切れず逃げましたね」

「敵前逃亡か、わが息子ながら情けないっ！」

寝室に瞬間移動。

は、無理なので足早に自分の部屋に向って歩く。  
ふうむ、何か変なことでも言ってしまったのか？

「・・・・・・・・」

待て。

ここは何処だ。

「もしかして私の今の状況は、【迷子】なのか・・・？」

不安に満ちた心境を表す震えた声で問うが、答えるものは誰もいなかった。

数時間後、渡部が白くなった家人を発見する  
迷子は人を精神的に追い詰めるようだ

## 第15戦 VS 大地の母（後書き）

あけましておめでとうございます。

宝蓮荘も年が明けてリニユアル！は、しませんが気持ちを改め、  
今まで以上のものを執筆していきたいと思っております。

連載再会から早1ヶ月半（微妙な数字）

ここまで付き合ってくれている方々、どうもありがとうございます！  
そして今年も宝蓮荘をどうかよろしく願います！！

以上、仙人掌からの新年の挨拶でした。

## 第16戦 VS 大海の父

こんばんは、向陽ユカです。むかひ

とうとう私の視点の話がやってきました！

今日はなんと大和家の夕食にご招待されました。

とても広い和室に机が並べられています。

ここにたくさんの料理が運ばれて来るんですね。

まだ橘家の人しか集まっていないので、余計に広く感じられます。何だか中学校のときの修学旅行を思い出します。

おや、台所の方から美味しそうな匂いがしてきました。

「蓮さん、私も料理を手伝ってもいいですか？」

「駄目駄目！ユカちゃんは客人なんだからじっとしてなさい！」

うんうんと私の真正面にいる家人さんは頷き、更に言葉を付け加えます。うなづ

「それに今日は大和家の料理人たちも気合が入っているから、邪魔したらどうなるか知らんぞ？そんなことより、おまえらここに一泊していくつもりか？」

「もちろんです」

「・・・まあいいか」

隣の真木ちゃんのほうを向くとイエイ！と笑顔。ついつい私も釣られて微笑んでしまいます。

「カンナ、そういえばジジイどうしたんだ？」

「どこかの山で熊とかと格闘してるんじゃない？」

「ありうるな・・・」

どんな人なのでしょう、家人さんのおじいさま。

「家人」

声の主は家人さんの父親です。

【橘 曲尺さしがね】という名前だそうです。

さしがねっていうと、大工さんが使うあのL字のものですよね？  
職業は建築士さんなのでこういう名前なんですか。  
でも大工さんと建築士というところが・・・

「何だ？」

「いや、なんでもない・・・」

互いに気まずそうな顔。

何かあったんでしょうか？

「あなた、あ〜ん」

「ぐ」

家人さんのお父さんは物静かな人です。

とっても明るい、お母さんとの凸凹夫婦ですね。



「お兄ちゃん！」

「なんだ？」

「あゝん」

くっ、油断して遅れをとってしまいましたね。

「・・・・・・・・・・」

口元が引きつり、視線は右に逸らしています。  
どう乗り切るか迷っている模様。

「家人さん！」

「あゝん、先輩」

い、家人さん。  
私を選んでください！

「家人様、あーんでございます」

「渡部も悪ノリするな！」

その箸はいつたい？  
渡部さんまであゝん志望ですか？！  
ライバル出現ですね。

「ちょ、ちょっとトイレに行ってくる！」

家人さんは部屋を風のように脱出。  
逃げましたね。

「ヘタレですねっ」

「むうゝお兄ちゃんめ」

「真に残念です」

「「渡部さんは本気で言ってるの!?!?!」」

全員の心がひとつに。

三心融合。

渡部さんは質問に答えず、老齡の方特有の笑い方するだけ。  
不安に思っていると、ちょっと呆れたかんじの曲尺さしがねさんからのフ  
ローが。

「渡部には妻ツレがいるぞ」

是非ぜひとも奥さんの方を大事にしてあげてください。

フオローの後、曲尺さんは少し迷う素振りを見したと思ったら、

「家人は今、どのような生活をしているか教えてくれないか?」

「真面目に勉強とバイトの日々ですねっ」

「ふむ・・・」

先ほどの疑問をひとつ聞いてみましょうか。

遠慮しても仕方ない気がしますし。

「家人さんと何かあったんですか？」

「・・・・・・・・」

複雑そうな表情で、眉には皺をより口は閉ざされています。

「説明しよう！小学6年の時の話なんだけどね」

蓮さん、夫のことはスルーですか。

「蓮、私が話すよ」

「さっちゃん・・・」

この雰囲気ですっちゃんはちょっと・・・

話を要約すると以下のような内容です。

家人さんは小学生のとき、友達といっしょに地元の公立中学校に行きたかったそうです。

しかしその時の中学はとても荒れていたそうです。

将来大和家の中心人物になるかもしれない家人さんを、私立に行かせたいというのが大和家全員の意見でした（父親<sup>さしがね</sup>さんも含めて）

そして大和高等学校付属中学校に通わせることが、一族の間で決定したそうです。

家人さんはもちろん不服に思い、それから色々あり、喧嘩別れのようになってしまったということです。

「それから家人にどう接して良いかわからないのだ・・・」

ちよつとしたすれ違いですね。  
互いに不器用そうですし。

「多分私は嫌われてしまったのだろうな」

「それはないですねっ」

「そ、そうです！いつも家人さんは反省すれば許してくれますから」  
その分、反省してないと容赦ないですけど。

「君達・・・」

「ほ、本音で接するのが一番です！」

「そうか、わかった」

遠慮がちにふすまが開かれました。  
入ってきた家人さんに全員の視線が集中します。

「え、皆どうしたんだ？」

無言。

沈黙を破ったのは曲尺さしがねさんです。

「家人、学校はどうだ」

「疲れるが、それ以上に楽しいといったところだ」

親子そっくりの、ちょっと照れているような素振り。

曲尺さんはゆっくりと息を吐き、そして

「家人、お前の意志を無視して、進路を私が勝手に決めてしまつてすまなかつた」

そう言つて、曲尺さんは頭を下げました。

家人さんは少し目をパチクリさせた後、真顔になって自分の気持ちを語りました。

「父さん、私はその時は確かに恨んだ。その頃私は公立で友達と一緒に部活をするのを楽しみにしていたからな」

「・・・・・・・・」

辛そうな表情の曲尺さん。

すると家人さんは微笑みました。

「しかし今は恨んでなどいない」

こちらの方を見渡し言葉を続けます。

「今の友人に出会えて、そちらの方が幸せだと思っている」

ずっと言えなかったことを言えたのか、家人さんの顔には気持ちよさすら感じさせます。

「大切な友人と出会えたのは父さんのおかげかもしれないからな、むしろ感謝している」

「しかし私は、お前の意志を無視したことに変わりはない・・・」

「父さん、私は子供の気持ちを尊重するだけでは、親は務まらない  
と思っている」

「家人・・・」

曲尺さんは家人さんに向かって、苦笑交じりだけど温かく微笑み  
ました。

家人さんも自分のお父さんに向かって、笑い返しました。  
よかったですね、家人さん！

橘家人とその父親である曲尺との父子間冷戦終結

## 第16戦 VS 大海の父（後書き）

やはり真面目に書くのは中々難しいです。

いつそ思いつきり喧嘩させた方が、まだマシだったような気が・・・  
懲りずにまた温かい感じのは書いていきます。

期待されてなくとも・・・

たまにはコメディー以外でもいいじゃない！

そんな私の泣き言はひとまず置いて。

私の都合で、2週間ほど更新を休ませていただきます。

2週間たったら更新速度が10倍にッ！・・・はなりません、  
ある程度早くなるかもしれせん。

いつもどおり長々しい後書きを読んでもくれた方、ありがとうございます  
ました。

また2週間後に。

といってもコメントには2週間たたなくとも、返信させていただきますが。

## 第17戦 VS百薬と百毒の長である聖水

「それでは明けましていただきます!」

皆もいただきます、と母さんに続く。

先ほどまで何も無かった高そうな座卓に、実に美味しそうな御節おせちが並んでいる。

大和家の料理人達の気合が入りすぎてしまったようで、その量はかなり多い。

恐らく全ては食べきれないだろうが、御節は保存が利くから大丈夫だろう。

いざとなったらポチ食べさせれば良いか。

「大和家の方のお正月の席なのに、私達に参加してもいいんでしょうか?」

「ユカがそんなことを気にする必要はないだろう。どうせ大和家の連中は忙しいから出席率も低いしな」

「でも・・・」

「お前は宝蓮荘の住民だから私の家族だ。私の家族だから大和家の家族だ。これでいいだろう?」

「家人さ・・・」

「今夜は飲め飲めえ、ワシのおごりじゃ!」

「・・・」



「自分の家なのだからおごりも何もないだろ、ジジイ」

「そうかゝ飲め、家人！」

「スルーか！」

もう大分酔っているようだ。

顔が天狗のように赤くなっている。

「そういえばジジイ、先刻まで何処へ行っていたんだ？」

「ちよつくらジャッカルを退治しにな」

「ここは日本だ」

そんなホイホイ日本にジャッカルがいてたまるか。

象だったら大和邸（こゝ）にいるが。

前述のポチは、その象の名前だ。

「家人くうん、この校長めと飲もうではないか」

酒臭い吐息が顔にかかる。

何故だか急に服をはだけさせる。

拳句の果てに校長は、うふふと笑いながら私の着ているものを脱がそうとしてきた。

「・・・・・・」

「家人、無言で校長の頭を座卓に叩きつけ続けるのはやめなさい」

「父さんは少し黙って子供の気持ちを尊重してくれ」

「……程々にな」

何かを悟ったような顔つきで、父さんはあきらめた。

そして父さんは普段から酔っているようなテンションの、更に酔って笑い上戸となった母さんに絡まれた。

南無阿弥陀仏。

「ふう……やはりここは大和家だ」

妙な言葉をぼやきつつ、校長の頭を座卓に叩きつける。

ふうむ、最初のほうは聞こえていた「ギッ」とか「グバツ」という声が聞こえないな。

どうやら意識を失ったようだ。

流石にやりすぎたかと思うが、校長だから大丈夫だろう。

「家人さぁん……」

「暑いすよねっ 脱いじゃいましょうよ、先輩が」

「お兄ちゃん……ジュル……」

「こいつらに飲ませたのは誰だ、出て来い！」

未成年の飲酒は、健康に害する恐れがあるので要注意だ。

私はちよくちよく飲んでいるが、そこには触れないでいてくれると嬉しい。

「アタシに決まってるじゃない！」

「堂々と言っな」

まあまあ、と母さんは笑いながら酒を飲む。

既にビンを10数本飲み干している。

私の肝臓のアルコール分解能力が優れているのは母さんの遺伝のよ  
うだ。

「えへへえ・・・」

ちよ・・・三人とも・・・

「体格よくなってるね、お兄ちゃん・・・」

「父さん、助けてくれ！」

「にゃ？」

「誰だ」

父さんのキャラが大分崩壊したなあ・・・

母さんに飲まされて、ぐでんぐでんになっている。

私と違って父さんは酒に弱いからな。

「わ、渡部え！」

「・・・ハッ、ざまあみろ」

だから誰だ？！

渡部はそんなヤツじゃない！

何故皆キヤラが崩壊している？！

酒は万病の元どころか、性格崩壊の元だな。

「先輩、いただきます・・・」

「何をだよ?!」

「ナニをつてねえ、カンナちゃん」

「決まってるよ!」

流石に女性相手に、手を上げるわけにもいかない。  
こついうとき都合よく眠った、とかないのか?!

「ハアハア・・・家人さん・・・」

誰かどうにかしてくれ!

「え?」

ガコツ、ドカア!

畳が抜けた?!

「ハハハハハハ、引つかかったな家人オ!」

・・・妙なトラップ仕掛けるなよ、ジジイ。

まあ、助かったから良しとするか。

しかし頭にたんこぶができたか。

痛い。

「というわけで三途の川を下見して来い」

「何を言っ・・・ぐあ!？」

とりあえず手元にあつた校長を投げてみた。

ここまでやると、少し良心が痛むな。

ひどい扱いの校長を押しつけて、ジジイがユラリと立ち上がる

「クハハハハ！家人よ、今は宣戦布告と見てよいな？」

「上等ッ！」

互いの拳がぶつかる。

周りは観戦モード。

「フン、足を踏ん張り腰を入れい！」

「くっ！」

「アタシも混ぜて！」

「ぎあああああああ!!?!?!」

ズガン、ザザザザ、ボチャン！

母さんの不意打ちを喰らったジジイは吹き飛び、障子を破り、林を通過し、池に落ちた。

「おー、よく飛ぶよく飛ぶ」

また障子の修理代がかかるな。  
ジジイは大丈夫だろう。

三途の川の日帰りツアーぐらいは、いったかもしれないが。

「いーえーひーとー？」

手が母さんにつかまれて・・・  
全身の全細胞が逃げると叫んでいる！  
もう何がしたいんだ、この人？！

「せえのお」

「話せば分かり合えないことなどない！・・・はずだ」

「漢は拳で語り合うものだっ！！」

終わった・・・

「大和流亜式、天龍紅蓮獄炎双刃脚、旧曆神無月！」

おかしいって。

空中ジャンプして踵落としはおかしいって・・・  
何をどうすれば人間の限界を超越できるんだろうか・・・

「愛の力」

私は意識を手放した。

向陽由華 泥酔  
橘力ンナ 泥酔  
後藤真木 泥酔  
大和武 死亡  
渡部 精神崩壊  
橘曲尺 精神崩壊  
橘家人 意識不明  
橘蓮 君臨  
影が薄かったというより無かったに近い大和家の皆さん  
e l e s s P r i c

## 第17戦 VS百薬と百毒の長である聖水（後書き）

ただいま帰りました、お久しぶりです。

2週間ぶりの更新です。

私としては2ヶ月くらいは経った気がします、様な気がします。随分間が空いてしまったので、登場人物たちはまだお正月です。

・・・まだ時期的にお正月に当たる話、2つも残ってるので非常に不味い事態となっております。

現実はどうにかして喰らいついていきます。

それと大和家の皆さんは描写がありませんでしたが、実はいたんですよ。

と、言うことにしていただけたら幸いです（オイ



## 番外戦2 リンと櫂の運命

疲れた体を紅茶を飲みながら癒す。

何が悲しくて正月をバイト先で過ごさなきゃいけないのよ。

正月なのに需要があるこの店が原因よね。

客はおせち風ケーキなどを注文して、それぞれ持参してきたお酒を飲んで盛り上がっている。

ん、私が誰だって？

櫂野木櫂よ、喫茶カフェの店員の。

「休憩終了よ」

「はい店長、今行きます」

肌は浅黒く、頭はスキンヘッド。

サングラスとタキシードを身に纏えばマフィアのような外見だろう。

いかつい風貌に不釣り合いな店の制服を着て、オネエ言葉で話す。

それがこの喫茶カフェの店長だ。

チリンチリン

「いらっしやいませ・・・ってリンか」

「・・・失礼・・・」

林葉しよつちゅうここに来るわね。

家でも毎日顔合わせてるから、嫌になっちゃうのよね。

あたしと林葉は大和高校に通うため叔母さんの家に居候している。

そのあたりに色々とエピソードがあるけど、その話はまた今度の機

会に。

「・・・橘君は・・・？」

「あいつは休みよ、なんでも里帰りとか」

「・・・そう・・・」

つたく、あの馬鹿は急に休むとか言い出して。

ウチは変な店だから、ただでさえ人手が足りないのに。

頭の中で愚痴をこぼしていると、リンがいきなり突拍子の無いことを言った。

「・・・追い出されることになった・・・」

「は？」

いきなり唐突にわけがわからない言葉を聞いたので、聞き間違えかと考える。

しかし私の耳は確かに「追い出されることになった」と聞こえた。はい？

「・・・二人とも、家を・・・」

「はああああ？！！？」

何であたしらが追い出されなきゃなんないの？！  
なんか悪いことしたっけ？

「どういうことよ！リン、あんた何かしたの！？」

「・・・説明する・・・」

林葉の話はこうだ。

私達を居候させてくれた、独身だった叔母さん（29）が結婚することになったらしい。

叔母さんについては、クリスマスイヴのときの第12戦参照。

それで叔母さんは、結婚相手側の家に嫁ぐことになったそうだと、住んでいた家は売ることになったため、私達は移住を余儀なくされたというわけだ。

「私達はどこに住めばいいのよ!!」

「・・・アテならある・・・」

「え、本当？」

「・・・だから期日の三日後までに・・・」

「荷物をまとめておけてこと？」

コクリとリンが頷く。

林葉のアテっていったいどこ？  
気になる。

「ねえ、リン・・・」

「ちょっと、樫野木ちゃんサボらないで！」

「あ、スイマセン店長」

といつても客は勝手に宴会を開いてるので、別にサボってもいいと思うんだけど・・・  
それもそれで問題かも。

「欒ちゃん、俺らのトコにダンデーナッツ4つ追加で頼むわー！」

「はいはい、ちょっと待ってるこの腐れ男」

「・・・客に向って腐れ男は無くな？」

はあ。

なんかさつきから、ため息ばかりね。

「・・・帰る・・・」

「ん」

何しに来たんだか。

せめて何か食べていきなさいよ。

「・・・あと、コレ・・・」

林葉が差し出したのは、雑誌からある観光スポットのページだけを切り取ったものだった。

大体ここから1時間ってところね。

「・・・叔母さんがお別れ会だって・・・」

私達は居候させてもらってただけだから、別にいいのに。  
ま、どうせだから言葉に甘えるようかしら。  
ありがとう、叔母さん。

「・・・叔母さんは行かないけど・・・」

「それもう、お別れ会じゃないでしょ!!?」

森林葉と櫛野木櫛の移住決定

## 番外戦2 リンと樺の運命（後書き）

タイトルから内容をシリアスだと予想した人がいたらごめんなさい。今回はいまいちタイトルが思い浮かばなかったものでこうなりました。いつも通りコメディー調です。

嗚呼、今日も平和ですねえ。

深い意味はありません。

タイトルは置いといて、遂に店長登場です。

チラッとでしたけど。

店長は今の強面オカマが気に入ったので、わざと見た目の描写を試みました。

今度の店長の出番はちゃんと取ります、もしかしたら。

## 第18戦 VS 東行桜

「しゃる・うイー・花見？」

朝起きた私に母さんが放った一声は、あまりネイティブな発音ではなかった。

「家人さん、明らかに季節間違えてませんか？」

ユカの吐息は白く、体はかすかに震えていた。  
私も大して変わらないが。

「母さんに聞いてくれ……寒い」

この時期に桜が咲いているわけが無かるうに。

まあ、ここは大和家から10分もかからない位置だからな。

本邸を囲んでいる山に、ちよいと散歩に來ただけだと思えば良いか。

「さあ皆、着いたわよ！」

花の無い桜も、もしかしたら風情かも知れんな。

葉桜という言葉もある事だし。

今の時期は葉ですら無いが。

……って

『えええええええ？！』

「わあ、すごいですねっ」

「すごいきれいです・・・」

「何故咲いている・・・」

そこにはとても大きい桜が満開となっている。

周りはほとんど落葉した木が多いので、一際美しく咲いている。

「あ、そっか。お兄ちゃん知らないんだっけ」

「どういうことだ？」

「説明しよう！」

「いや、母さんはいい」

冷たくあしらうと、母さんは「いーもん・・・ふんだ・・・」とか  
言いつつ地面に『の』を書き始めた。

母さんは説明が下手だからな。

理解するまでに、何時間かかるかわからん。

「ということ、父さん頼む」

「あれは東行桜という名前の桜だ。その昔、とてもせっかちな事で  
有名な東行法師という人物が、その桜の下でモテないことを悔や  
んで自殺して以来、咲くのが普通の桜より早くなってしまったそう  
だ」



「笑えるような、笑えんような・・・」

我が家の近くにそんな珍しくてアホみたいな桜があるとは。

私がリアクションに困って間に、渡部がレジャーシートをひいて宴会のセッティングをしていた。

「母さん、昨日も１０リットル以上飲んでいたのだから、酒は控えの方が良いんじゃないか？」

「花がある、酒がある、これで飲まずにやいらんってもんよ！」

「・・・未成年には飲ませるなよ」

止めても無駄だろう。

どうせ母さんが飲みすぎで体を壊すことも無いか。

飛行機からヒモ無しバンジーをしても死ななかつたくらいだしな。

「それにしてもせっつかちな桜か・・・金取れそうだな」

「お金はいただいておりますが、ちょっとした穴場として、通な旅行好きには知られているそうですよ」

たまにそれを見に来た客を大和家に泊めたりもしますよ、と渡部は続ける。

客は大和邸内で道に迷ったりしないのだろうか。

「あ、さっそく通な旅行好きの方が来てますよっ」

「あれ、橘!？」

「榎野木、どうしたんだこんな所に？」

「……橘君……」

あ、森もいた。

「いや、うちの叔母さんが（以下少略）」

通な旅行好きは、どうやら林葉達の叔母さんのようだ。  
しよっちゆう振られて傷心旅行に行っていたからな。

「……それで実は……」

「ああ、分かった」

ということとは森と榎の木が入……

「又又くん」

「って又又ちゃんいつからいたんですか?!」

「いつと言われても……」

「又くん」

大体又又猫は私の肩にいつの間にか乗っていたり、ついてきたりしているが。

描写が無いだけで。

今回はバッグの中で丸くなっていた。

我が家の猫はコタツだけでなく、バッグの中でも丸くなるらしい。  
流石に宝蓮荘の猫は一味違うな、と考えているとカンナが自己紹介  
を始めた。

「おにいちやんの友達ですね、はじめましてボクは妹のカンナです」  
なんか友達をやけに強調してないか。  
気のせいかな？

「よろしくカンナちゃん、私は榎野木櫨よ、隣のはり・・・森林葉  
よ」

笑顔で榎野木が答える。

ほんの少しの間をおいて、それに林葉が続く。

「・・・はじめまして、家人君の妹さん・・・」

こっちはこっちで妹を強調しているし。  
どうかしたのか？

「家人の父だ、こちらが妻だ」

「・・・はじめまして・・・」

「ないす・テウ・ミー・テウ！」

相も変わらず母さんはテンション高いな。  
ふうむ、にしても人数が大分多いな。  
整理すると

渡部（使従）

橘蓮（母さん）

橘曲尺（父さん）

橘力ンナ（妹）

橘家人（私）

後藤真木（後輩）

向陽由華（友人）

森林葉（秀才）

檉野木櫛（同僚）

どう考えても多い。

まあ花見は人数が多ければ多いほど良いだろう。  
肝心の桜は一本しか咲いていないが。

「母さん、未成年は勿論、父さんにも酒は飲ますなよ」

「ほえ？」

父さああん！？

もう、遅かったか・・・

あなたの死は無駄にしない。

妙な感傷に浸っていると、何やら後ろからねっとりとした妖気を感じる。

全身から冷や汗を流しながら、ゆっくりと振り向く。

そこには聖母のような笑顔の真木だった。

「先輩、私の料理食べてくださいっ」

そう言っつて、真木が差し出してきたのは重箱。

聖母のような笑顔だが、手に持った重箱は悪魔にしか見えない。

ギョルリヴオオオオオ・・・

そのおぞましい啼き声に身が固まる。  
これを食えと言うのか？！

「さあ、先輩っ」

に、逃げたい。

しかし女性の作ってくれた料理を拒否するのは無礼に値する。  
私はいつも逃げてばかりいた・・・  
だからもう逃げない！

「ただこう・・・」

わけのわからない覚悟を決め、おそろおそろ重箱を開く。  
オーラ、いや可視できるほどに濃くなった腐臭がもれる。  
腐臭の中から現界したものは・・・

（え、エイリアン？！）

ちょ・・・なんか蠢ぐさいている。

手の平サイズの昆虫の進化系のような生き物、十匹ぐらいがワシヤ  
ワシヤと蠢く。

無理無理無理無理無理無理無理！！  
すまん、これは無理だ！

先刻の覚悟は、絶対気の迷いだ！！

「家人様」

「え？」

酒に酔い、顔を僅かに赤らめた渡部がそれを口に放り込んだ。  
私の意識はそこで途切れた。

橘家人病院搬送

そのときの後藤真木の言葉

「失神するほどおいしかったんですねっ

」

## 第18戦 VS 東行桜（後書き）

言うまでもなく、東行桜は西行法師の西行桜のパロディです。

東方や古文の勉強で縁があつたので一丁やってみました。

知らない人は調べてみるといいかもしれません。

私自身あまりよく知りませんが・・・

実際の西行桜の下で西行法師が死んだという史実は無い（と思いません、きっと）

誰か間違えてたら教えてください。

にしても古文・・・か・・・（遠い目）

## 第19戦 VS 引越の荷物

「これより、第23次引越紛争の開幕を宣誓する」

「23つて数、適当に言っただろ」

「健児、そこにはツツコむな」

何回引越があつたかなぞ知るか。

宝蓮荘は歴史が長いから、もしかすると3ケタくらいはあるかもしれん。

「てか家人、部活で疲れてるから帰っていい？」

「僕もたまってるゲームが・・・」

「お前ら12月分の家賃、滞納してるよな？」

「「ごめんなさい」」

そんな大した額ではないのだが・・・

井モノは浪費家だし、健児は食費がかかるからな。  
金欠状態なのだろう。

「二人とも、懐ふところの温度は？」

「僕は何とか食いつなげるくらいの温かさは」

「ぶつちやけ水で米を食べるレベル・・・」



「・・・いつでも私の部屋に来ていいぞ」

健児は「すまねえ、恩にきるぜおやっさん」と泣きながら感謝してくる。

誰がおやっさんだ。

大和家から色々と食材を持ってきたからな。  
人に分けるくらいには余っている。

「ん、来たぞ」

森と樫野木の荷を積んだ、軽トラがやってくる。  
時間ジャスト、運転手はいい仕事をしているな。

「家人・・・何でデコトラ!？」

「知り合いの軽トラを貸してもらっただけだ」

軽トラにしてデコトラとは中々のセンスだな。  
無論、本気でそんなことは考えていない。

「誰だよ、その知り合いってのは・・・」

母さんだ、とは言わずに口をつぐんでおいた。  
デコトラなんて甘い甘い。

過去に自家用ヘリで引越した奴もいたそうだしな。  
ちなみにそれも私の母さんだ。

「・・・よろしく・・・」

「ああ」

運転席から降りてきたのは森。

ということは運転していたのか？

まあいいか。

過去にジェットを未成年で運転した奴もいたそうだな。  
ちなみにそれも母さんだ。

「・・・不束者ですが、どうぞよろしく・・・」

「いや、何か違うだろ」

井モノが「バターだなあ」と呟く。

たぶん「ベターだなあ」と言いたかったのだろう。

一応、言うまでも無いと思うが、森から花見のときに入居者希望を  
受けたということだ。

「ん、榎野木はどうした？」

森と榎野木は二人でひとつの部屋を借りることになっている。  
後から来るのか？

「・・・いる・・・」

「  
んー！んー！」

む、何かトラックの荷台のほうから聞こえてくる。

・・・埋まっているのか？

「重いな」

タンスをどけて冷蔵庫を開けると、中から榎野木が出てきた。  
よく入ったものだな。

「窒息死するかと思った・・・」

「何故こんなところに入っていたんだ？」

「色々あったのよ、主に叔母さんと。てか何でアンタがここにいるのよ」

「私はお前が引越す宝連荘の管理人だ」

聞いていなかったのか。

「なんですってー！」

「バターな反応だね」

だから井モノ、ベターだろ。  
叫ぶ必要性が無いだろう。

「にしてもよく冷蔵庫の中にはいったね、榎野木さん」

「まあ私はこれでも、結構やせてる方だし」

「胸が小さいからだろ」

禁句を呟いてしまった健児は、榎野木によって即座に悶絶させられた。

その檜野木は足元で気絶している哀れな男を気にも留めず、ダンボールを一つだけ持って自分の部屋に向っていった。

「健児ー、死んでるか？」

「死んでたら返事しないでしょ」

そうだな、と井モノに相槌を打ちながら、しゃがみこんで健児の頭をぺしぺしと叩く。

起こすのは無理そうだな。

「家人君、埒が明かないから運んじゃおうか」

「そうだな」

井モノ、ナイス提案。

趣味さえ除外して考えればいい奴だ

てかさつきつからまったく作業が進んでいないな。

「このタンスから運ぼうか」

「ああ、せえのっ」

なかなか重いな。

2、3歩進むと、転がっている健児が邪魔になり前に進めない。

「健児、起きろ」

「……………」

返事がない、ただの肉塊のようだ。  
井モノとアイコンタクト。  
オーケー。

「「セーの」「

健児がギッツ！と悲鳴をあげる。  
痛そうだな。

「おまつ・・・何しやがる！！」

「何ってダンスを腹に落としたただだが」

「おまえらイノシシの皮をかぶったセールスマンだろ」

「人の皮をかぶった鬼だろ」

イノシシの皮をかぶったスーツ姿のセールスマンが家を訪ねてくる。  
中々にシニールな光景だ。

「ほら健二君、さっさとやろうよ」

「ちつ、わかったよ」

量はそんなに無いからすぐに終わるだろう。  
しかし10分も経たないうちに、健児が飽きてしまった。

「家人、ちよつとくらい中身見ても平気だよな？」

「下着類は一番最初に檜野木が持っていたぞ」

「・・・まだ何も言っていないんだけど」

「貴様ごときが考えることなど、たかが知れている」

「無いとはわかりつつも、開けてみつか」

「やめとけ、見つかったときのことを考えろ」

制止したにも関わらず、「俺は人間をやめるぞー！」とわけのわからないことを叫びながら、健児はダンボールを開けた。

パカア

ボタン！

「・・・」

「・・・」

「・・・」

沈黙。

「家人、これはもしかして・・・」

「もしかしくても藁人形わらにんぎょうだな」

「そこら辺は森さんのものだよね」

「・・・」

「・・・」

「・・・」

再び沈黙。

「とりあえず、私たちは何も見なかったという方向で行こうか」

「うん、健児君運んでよ」

「何で俺なんだよ！」

「僕だって嫌だよ」

「触ったら呪われそうだな」

「・・・」

「・・・」

「・・・」

三度目の沈黙。

「・・・それ・・・」

「「「うわあ!!?」「」」

森、急に背後から声を掛けないでくれ！  
心臓のバクバクする音が止まらない。

「・・・内職・・・」

内職で藁人形なんかを作るのか？！  
誰が買うのだろうか。  
知りたくないが。

藁人形を商売なんかにしてるのは何処のどいつだ！

「ちなみにどこに納品するんだ？」

「・・・大和通販・・・」

そんなことやってるのか、うちの実家・・・

一時間後に第23次引越紛争終結

その後家人の部屋でパーティを開くことになったらしい



## 第19戦 VS引越の荷物（後書き）

読者数20000人突破しました！

ありがとうございます。

単純なアクセス数は60000・・・うおっ。

6万と叫びたら私の所持金より多いです。

・・・当然か。

皆様、これからもよろしくお願いします！

## 第20戦 VS 黒ビール

「これより、第23回引越祝賀会の開幕を宣言する」

前話とはじめ方が同じだつてもれなく回数の方も適当だ。

「新しき入居者、カンナ、森、榎野木を祝つて乾杯！」

『乾杯〜！』

皆、天に向つて各自の飲み物を振り上げる。

あまりこぼすなよ？

というわけで、私の部屋で引越祝賀会だ。

大和家特性ジュースに口をつけていると、麗香が勝負を挑んできた。

「家人、飲み比べするわよ〜！」

「フ、上等だな麗香！つて何だ、その樽たるは？！」

でかつ！

コレ一人で飲むのか？

「これくらいも飲めないの〜？」

「そんなわけ無いだろう！」

私とて母さんの子だ！

・・・誇つていうものではないか。

「はい、家人の樽はこつち」

「む、黒ビールか」

それではグイっと一本。

と同時に口から盛大に噴出す。

「これ醤油だろうがあああ!!?」

喉が痛い。

殺す気か・・・

ちなみに醤油を1.5リットルも飲めば死ぬらしい。

「ご、ごめんなさい私のせいです！両親が引越祝いに何か持ってきて・・・」

「大丈夫だ、私は気にしていない」

ユカ、だからその泣きそうな顔をやめてくれ！  
ものすごい罪悪感が沸いてくる。

「ところでユカ、何時どうやってその樽の醤油を持ってきたんだ？」

「宅急便で送られてきました」

運ぶの大変だったろうな・・・  
ご苦労様。

「お兄ちゃん、お酒飲んでばかりじゃ母さんみたいになっちゃうよ

？」

「わかった、よしておこう」

酒を飲み続けると年がら年中あのテンションになるのか。  
怖い怖い。

そもそも未成年は飲んでではなんのだからな。

「よし、801番相沢健児、歌います！」

「いいわよ、歌いなさい！」

檜野木酔っているなあ・・・

と思っただけ飲んでるのは酒ではなく子供の飲み物だった。

何故酔える。

雰囲気か？

「待つて、僕が歌う！」

「ぎあ！」

歌い始めた健児に、井モノがフライングクロスチョップ。

珍しくハイだな。

2人はそのままもつれ込み、駄菓子屋さんで売っているマイクの争奪戦を始める。

「2人で歌えばいいじゃないのよ」

「それもそうだね」

「最初に言ってくれ・・・」

井モノと健児は手を胸にあて、無駄に高い歌唱力で君が代を歌い始めた

檜野木は手を叩きながら爆笑している。  
どうやら笑い上戸のようだ。

「・・・橘君・・・」

「ん、どうした？」

「・・・名前で呼んで・・・」

そうだった。

宝連荘条約第三項「住民は呼ばれる方が希望すれば下の名前で呼ぶ」  
なるルールがあるのだ。

「り、林葉」

何か気恥ずかしい・・・  
しばらくすれば慣れるだろう。

「・・・家人君・・・」

「ひよれひゃ、あたひもお」（それじゃ、あたしも）

酒を飲んでいるというより、酒に吞まれている檜野木。  
飲んでいるのは酒でなく子供の飲み物だが。

「櫂」

「ひゅん」

あ、寝た。

よく顔を覗き込んでみると、頬がとてもやわらかそうに見える。  
どれ、日頃の仕返しだ。

「んー」

フニフニフニフニ

コイツほっぺがプニプニだな。

榎野木が熟睡して起きないことをいいことに、更に頬をいじくる。

フニフニフニフニ

「んんー！」

ドム、と鈍い音と共に腹に鈍痛。  
痛たたたた。

眠ったままこの私に蹴りをいれるとは良い度胸だな！

さて、どうしてくれよう。

色々と悪戯を考えていると、後ろから呼ばれたので少しびっくりする。

「先輩っ」

「お兄ちゃん！」

「ん、どうした？」

「健児先輩が自分から、醤油飲んで気絶しました!」

どという経緯で自ら醤油を飲んだのだろうか。

はあ。

部屋を一望すると、ものすごく混沌とした空間が広がっていた。

健児はテンションのためか、醤油を自ら飲んで気絶。

麗香先生はいまだに飲み続けている。

井モノは健児が気絶したことに気づかず、君が代を歌い続ける。  
櫂は私の足元で酔いつぶれて就寝中。

林葉は部屋の端の方でブツブツつぶやいている。

ユカ、真木、カンナはなにやら論争を開始しているし・・・  
又又猫はあやとりをしている。

「まあいいか」

寝よう。

未成年は酒を飲んではならない

## 第20戦 VS黒ビール（後書き）

読者数20000人突破の嬉しさが勢い余って、1日2更新という暴挙に出してみました。

このままだと節分の話が間に合わないというのがありますが、スピード優先だったので今回は短めです。

予定通りいけば、ここから3日連続更新になります。

基本的に私は1日の勉強のノルマを果たしてから、趣味の時間へ突入というライフスタイルですので、あまり保障はできないんですけどね。

ちよっくら頑張ってみます。



## 第21戦 VS大敵の妹

「お兄ちゃん、ボクは嫌だよ!」

「そうは言っても仕方ないだろう」

こちらデルタ1、こちらデルタ1。

戦況を報告する。

只今橘カンナと交戦中だ。

というか、ただの兄妹喧嘩だ。

「何でお兄ちゃんと一緒に部屋じゃ駄目なの!？」

「それはお前が猫アレルギーだからだ」

「ぬーん（謝罪の意）」

まあそういうことだ。

カンナは私と一緒に部屋のつもりだったが、又又猫も一緒になる。猫アレルギーであるカンナは、私の部屋には住めないのだ。

「お兄ちゃんの意地悪!」

「意地悪ではない、カンナのためを思っ言っているのだ」

「むう」

にしてもワガママだな。

確かに一人より、二人の方が節約になるがアレルギーはアレルギー

だ。

仕方が無いだろう。

「納得しろ、な？」

「だったらおにいちやんの恥ずかしいエピソード皆にバラすよ！」

待て、早まるな。

それはブラッドクリスマスか、それとも金曜の十三日の話か？

いや、もしかや一二・一事件？

落ち着け、素数でも数えよう。

そうだ、カンナの知っているエピソードは少ないはずだ！

「小3のとき友達の男子が泊まりに来て、寝室で二人きりになった時・・・」

「人のトラウマに軽々しく触れるなあああああ！」

何故あの夜のことを！？

思いだ出しただけで鳥肌がたち、冷や汗が頬を伝う。

私はそんな奴だと知らなかったんだ。

全身に悪寒が這う。

「それじゃあ、えっとね」

「本当にやめてくれ・・・」

涙が出そう。

勘弁してくれ。

これ以上トラウマをえぐられたら死ぬ。

「ふふ、弱気なお兄ちゃんもそそるね・・・小4のときの運動会に・・・」

「ええい！駄目なものは駄目だ！！」

私の精神耐久力ライフポイントはもう0だ。

恥辱の歴史を思い出すことがどれだけ辛いことかわかっているのか？！

「でも夜に一人なんて怖いよ・・・」

「む、それがあつたか」

そういえばそうだったな。

幼い頃の経験か、カンナは暗闇を異常に嫌う。

「だったら電気をつけっぱなしにして寝ればいいだろう？」

「そうだけどボク、一人じゃ寂しくて死んじゃうよ？」

「ウサギか」

もつともウサギが寂しいと死ぬというのは迷信らしいが。  
カンナはまだ納得いかない様子だ。  
ふうむ、どうしたものか。

「話は聞いたわ」

「ゲ」

神出鬼没、高峰麗香登場。

どこから入ってきた。

鍵は掛けていたはずだが。

「窓からよ」

当たり前じゃないの、とでも言いたげに進入口を指差す。

「お前また窓壊したな・・・」

窓の鍵の部分が、きれいに切り抜かれている。

いつそ強化ガラスにでも変えてみようか？

あ、金が無いか。

「ちゃんと帰りに直していくわよ」

そういつて麗香は、窓を直すためのものと思われる工具を掲げてみせた。

最初からインターホンをならして、普通にドアから入ってくればよかるうに。

「で、本題。カンナちゃんが私の部屋に来るってのはどう？」

成る程。

他の誰かと一緒ならば大丈夫か。

「そ、そうだけど・・・お兄ちゃん・・・」

「カンナちゃん」

「？」

いつに無く真剣な表情だ。

しかし目が何か違う。

なにやらぼそぼそ話を始めた。

「・・・近すぎて意識されない・・・でしょ」

「あ・・・」

「妹として・・・識されないんじゃ駄目、女として意識・・・ないといけないわ」

「はい！」

麗香はカンナに囁きつつも、チラチラと私の方を見てくる。

どことなく、いたずらっ子のような目だ。

聞かれたくない話を無理やり聞いても仕方ないか。

腕組みをして、明日の夕飯をどうしようかと考える。

「部屋が一緒なら・・・なアドバイスも・・・」

「是非！」

「それと家人は・・・」

自分の名前が聞こえたので、再び意識が目の前の2人に戻る。  
あのな、本人の前でヒソヒソ話って精神的に堪えるものだぞ。  
何を喋っているのか。

「ということで、ボクは麗香さんの部屋に同居することになったよ！」

「なるほど、ではよろしく頼むぞ」

カンナはできた妹だからな。

それほど迷惑を掛けることはあるまい。  
どちらかというと麗香の方が心配だ。

「ええ、よろしくされるわ」

他に何か言うべきことは特にないだろうか？

・・・一応釘をさしておこう。

麗香に顔を近づけて、脅すように低い口調で囁く。

「あまりうちの妹に妙なことを教えるなよ？」

案の定、麗香は目を逸らして舌打ちをした。

このアマ・・・

「では荷物を空き家から麗香の部屋に移して・・・」

「駄目！ボクがやるの！！」

「む、そうか・・・」

自分のことは、自分でやりたいらしいな。

それとも何か見られたくないものでもあるのか？

まあ荷物は少ないし、家具は無いので恐らく大丈夫だろう。

「カンナちゃん、手伝っわよ」

「お願いします」

では私は寝るとするか。

ふあゝあ。

「あ、さっきのクラスメイトのお話聞かせてもらえるかしら？」

「えゝと・・・そのクラスメイトがお兄ちゃんを」

「頼むからやめてくれえっ!!!!!!!!!!」

橘カンナの部屋決定

高峰麗香との同居

ちなみに家人の話はこの後暴露された

## 第21戦 VS大敵の妹（後書き）

カンナといえば、巷では二十世紀少年が人気のようですね。  
マンガとは違う展開という噂を聞いたのですが、どうなのでしょう  
か？

まあ私は大分前に猛スピードで全館読破しただけです、あまり  
内容が記憶に残っていないんですけどね・・・  
あれ、これ後書き？



## 第22戦 VS 節分

宝蓮荘では行事を重んじる。

仏教だろつとキリスト教であろうとお構いなしだ。

わいわい騒ぐのが好きなのだけでも言う。

今日の日付は2月3日。

節分ということで私の部屋で豆まきだ。

『鬼はー外!』

ズガガガガガガガ!

「痛!」

鬼のお面をかぶった健児を散弾が襲う。  
ジャンケンの結果で公平に決めた結果だ。

「ちょ、ストップ!」

ソファーの後ろに隠れて、白旗を揚げた。  
どこから取り出した。

「どうした、健児?」

「なんで大豆じゃなくて落花生なんだよ!つか威力がおかしい!!」

「知らないのー?北海道や東北の方じゃ、ほとんどが落花生をまくのよ」

ニコニコと笑いながら、麗香は思いっきり落花生を投げつける。  
何気なく素肌の部分を集中的に狙っている。  
そういえば麗香は東北地方出身だったな。

「落花生だと片付けるのも楽だもんね」

と、さつそく落花生を拾うカンナ。

落花生の方が大豆より安かったただけなのだな・・・

「そういえば鰯の目刺はどうしたのよ？」

「おお、そうだそうだ。悪いが冷蔵庫から取ってきてくれないか、  
櫂？」

「はいはい」

「・・・恵方巻<sup>えほうまき</sup>・・・」

「それならユカが作っているぞ」

台所の方を指差す。

真木と一緒に仲よく作っているようだ。

「・・・え？」

「ちょっと待ったああああ！」

「先輩うるさいですよー」

「す、少し落ち着け、真木」

「まず先輩が落ち着いてください」

落ち着いていられるか！

真木を台所に入れたら、恵方巻が弾道ミサイルになってもおかしくない。

「真木、もっとあの鬼に豆をぶつけてやれ、悦ぶぞ」

「仕方ないですね、豆まき再開ですっ」

ニンマリと笑い、健児に興味を移す。

よし。

これで恵方巻危機回避成功だ。  
危ない危ない。

「家人ー、鰯がないわよ」

「又ーん」

「そついえば昨晚、又又の飯にしまったのだったな」

困ったものだ。

ふうむ。

「家人君、代わりにこの魚使えば？」

「他にも魚があつたか……いやマグロの目刺は大きすぎないか？」

それ以外にお魚がないよ、と自分の身長より大きいマグロを掲げる。

力持ちだな。

「そもそも何でこんな馬鹿でかいものが置いてあるのよ！」

「大和家から持ってきたのだが、よく考えたら捌ける人物さばがいなくてな」

「それで冷凍保存してたってわけか」

井モノはマグロとにらめっこをしながら、ある不安を口にする。  
その視線は恋人を見る視線にも似ている・・・気がしなくもない。

「これ傷んでるんじゃないのかな、大丈夫？」

そっついながら井モノはマグロの頭をさする。  
気に入ったのか？

「大丈夫・・・だと思っただがなあ・・・」

まあどちらにせよ解凍するまで時間がかかる。  
それまでに考えよう。

「皆さん、恵方巻が出来上がりましたよ！」

おおくと歓声上がる。

皆それぞれ、ユカから恵方巻をもらう。

「お兄ちゃん、今年の方角はどっちなの？」

「東北東だ」

ここで恵方巻について、少し説明しておこうか。  
節分に食べる巻寿司のことだ。

盆のおはぎやぼた餅、正月の御節のようなものだと思うてくれれば  
良い。

ただし恵方巻には食べ方が存在する。

一に恵方を向いて食べること。

恵方は年によって違うので要注意だ。

二に・・・

「目を閉じて、絶対に喋らないようにしろよ」

『はい』

ということだ。

三は願い事を思い浮かべること。

余談になるが、恵方巻は元々は関西地方の習慣だったそうだ。  
それが近年飛躍的に広まったらしい。

「・・・」

「・・・」

「・・・」

「・・・」

以下ループ。

誰も喋らないので、部屋からはモグモグという音だけが聞こえる。

「家人」

「……………」

一足先に食べ終わった健児が、早速妨害しようとする。

無論それに答えるわけがなく、代わりにモグモグという音で返す。

「おい」

「……………」

「ちょ、いきなり無言で殴るな！」

邪魔をする方が悪い。

途中で喋ったら縁起が悪くなりそうだ。

にしてもこの恵方巻、なんか変な味だな。

「……………?!」

視界がグニャグニャに歪む。

この感じ、真木の味だ。

おかしい。

恵方巻はすべてユカが作ったはずだ！

あ。

真木は触れた材料ですら兵器に変えられるのだった……

遅れて真相にたどり着いた瞬間、私の意識は深い闇へと墮ちていった。

恵方巻の当たりは1本だけだったらしい  
マグロの目刺は一時、見物客が現れるほど有名になる  
それほど美しいマグロだったのかもしれない

## 第22戦 VS 節分（後書き）

真木の料理をついついオチに使ってしまいます。

書いている方は楽なんですけど、ちよつと単調になりがちです。

ちなみにこの話を書くためにちよつと恵方巻について調べました。

私も恵方巻食べたんですけど、目をつぶっていないんですよね・・・  
大丈夫かなあ。

P・S・

恵方巻が近年広まったのは、バレンタインデーのチョコと大体同じ理由だそうです。



## 第23戦 VS 戦乙女

彼女らは戦乙女だ。

敵をなぎ倒し、蹂躪する。

行く手を阻むものには容赦などしない。

彼女らの戦場には、弱者はその地に足を入れることすらかなわない。

欲望渦巻き、力だけが物を言う世界だ。

だが私はそこに足を踏み入れる。

私が戦うべき敵、そして同じモノを求める同志。

そう、彼女らの名は【戦乙女<sup>しめい</sup>】

百戦錬磨の猛者が集う。

そして始まる聖戦の真の名前は【タイムセール】

彼女らの、そして私の戦いが今、始まる。

「開戦の時間までもう少しだな……」

「あら橘さん、今日も来てらしたんですか？」

「どうも」

主婦の齋藤さんだ。

全盛期と比べれば腕は落ちているものの、長年培ってきた経験は侮れない。

「お互い頑張りましょうね」

「ああ」

彼女ら戦乙女は、戦闘しているとき以外は仲が良い。

だが戦いが始まれば話は別だ。

タイムセール

聖戦に情けなど言語道断もつてのほか。

恨みっこなしの真剣勝負。

情けをかけられることは今までの己を、全てを否定されると同義・  
・・・・らしい。

「やあ家人君」

「・・・校長殿、コレはまた珍しい」

校長がタイムセールに来ているのは、始めて見たな。

そもそも戦いが始まった段階で、戦乙女や私などの熟練者以外の人  
間は近寄ることすら難しいからな。

タイムセール

聖戦に一生トラウマを持つことになる。

しよくひつうちうば

二度と聖地に入る事ができなくなる。

「家内に言われてな」

どこか遠くを見つめる校長。

「そうか」

恐らく喧嘩したな。

片目に青痣ができているからな。

これはグーで殴られたと見える。

「後十秒つてところね」

齋藤さんの言葉で空気が張り詰める。

一般客はこの空間にいただけで、気絶してしまうだろう。  
現に校長はすでに泡を吹いて倒れている。

店長がメガホンを構えた。

代々タイムセールの合図は店長がする決まりになっている。

『これより、超高級純国産牛肉のタイムセールを開始します。お一人様につき一つなのでお気をつけ下さい』

『おおおおおおおおおおお！！！！』（一同）

店長の一声で獣どもが解き放たれる。

これを止めるのは、軍の一個師団を一人で相手にするようなものだ。

「お客様・・・落ち着いて・・・・・・・・・・ぐああっ！！！」

「て、てんちよー！」

「店員Hよ・・・俺の屍しかばねはこのスーパーに葬ってくれ・・・」

「何を言ってるんですか・・・・・・・・弱音をはかないで下さいよぉ・・・」

「メガホンはお前が継いでくれ・・・」

「そんな・・・・・・・・店長は貴方ですよ！しっかりしてください！！」

「できれば最後に子供の顔が見たかったな・・・フッ」

「店長来週結婚式でしょう？！親をようやく説得できて、何度も辛

酸をなめてやっとなどり着いたゴールですよ！あきらめないで下さい！！」

だがその問いに答えるものはいない。

店長の手はダランと垂れ下がっている。

「店長・・・店長・・・店長？！店ちよおおおおおおおおお  
お！！！」

といつても毎度のことで、タイムセールが終わる頃には復活しているがな。

毎度おなじみのパターンだ。

「あ、先輩！」

「ん、真木か」

こんなところで会うとはな。

戦場ではないどこか別の場所ですれ違っていたら・・・あるいはも  
っと別の・・・

「何考えてるんですか」

「気にするな。ふうむ、不味いな。大分後方に位置してしまったな」

「じゃ、先輩お先にっ」

「な！」

と・・・飛翔<sup>と</sup>んだ？！

他の戦士の肩を次々と伝い、空中を移動しているだと！

「見ましたか、先輩！」

こちらを振り返り嘲笑う。

あの機動力は私は無い。

が、しかし。

「おまえの敗因は・・・たったひとつだ・・・真木・・・たったひとつのシンプルな答えだ・・・」

「え？」

「前方不注意」

気づいたときにはもう遅い。

真木の顔は少し大きめな棚に吸い込まれていった。

そしてそのまま地に堕ちていき、戦場に吞まれていった。  
リアイア恐らくこれで再起不能だな。

「さて、そろそろ切り込むとしよう」

私が人に誇れる能力が1つある。

それは視界の広さ・・・つまり全体の戦況を把握することだ。

戦場の中でもものを見ずに、盤上から見るような感覚に切り替える。

押し合いへし合いになってる分、ある程度パターンが見えてくるはずだ。

ダメージがすくなさそうな場所を潜り抜けるしかない。

「行くか」

頭の中にルートが完成する。

しかしそれは一本道でなく、枝のようになっている複雑な道だ。視覚情報、空気の流れ、音、勘。

ありとあらゆる情報を駆使して、臨機応変に道を選び進む。

「邪魔だ、どいているおおお！」

「貴女、もうお終いなよ」

「負けるかあああ！」

「喰らえッ！」

「オラオラオラオラア！」

「私はもう駄目・・・先に行つて・・・」

「でも！」

「この私の前では全てが無力ッ！」

彼女らの闘気がビリビリと肌に伝わってくる。

だが私も負けるわけにはいかない。

着実にダメージが体内に蓄積される。

足がきしむ。

肺が空気を求め悶え苦しむ。

集中力を限界に近い。

それでも「諦める」と言う選択肢はない！

「うおおおお！」

あと数十センチ。  
届け！

「甘い」

最後に立ちはだかったのは齋藤さん、その人だった。  
腕をはじかれる。

「ここは一騎打ちと行きましょうか」

周りがゆっくりと引き、私達と肉を囲う。

一騎打ちを邪魔することは何人たりとも許されない。

「勝っても負けても互いに遺恨は無し」

「当然よ、橘さん」

「いざ……」

「尋常に……」

「勝負！」「」

このプライドと肉をかけた一騎打ちは後の世に語り継がれるほどの  
名勝負となる



## 第23戦 VS戦乙女（後書き）

次回に続きません。

・・・正直、やりすぎました。

書いてるときが楽しくて楽しくて止まらなかったんです。  
そのくせものすごく眠い。

どうやら疲れていたようです。

またこんな話やってもいいですかね・・・

## 第24戦 VS 銭湯「桜姫路」

宝蓮荘に風呂は無い。

そのため近くの銭湯に行く必要がある。

というわけで、今日も掻いた汗を流しに来た。

「店番ご苦労、谷山」

「だから俺の名前は山谷だって言ってるだろ！」

山谷は私達がいつも通う銭湯、【桜姫路】の家の息子だ。そのためこのように、受付で店番（？）を暇なときにする。山谷については第12戦参照。

「それじゃ行こうか、家人君」

「ちょっと待った。健児、替えの下着は持ってきたか？」

「子ども扱いすんなよ！……あ、忘れてた」

ほら見たことか。

4回に1回の頻度で忘れるからな。

宝蓮荘を出てくるときに注意し忘れる私も私だが。

「まあいいか。今はいてる奴があるし」

「取って来い」

「……わかったよ、取ってくりゃあいんだろ？」

後で追いつくから先入ってろ、と言って外の闇夜に健児は飛び出した。

ここから宝蓮莊までは大した距離ではないので、すぐに戻ってくるだろう。

「それでは先に行くとするか」

「うん」

井モノと一緒に漢とかかれた暖簾のれんをくぐる。  
すると銭湯こいには滅多にこない人物を見かけ、少し眉をひそめる。

「やあ、家人君と克吞君」

「校長……」

「こんばんわ、校長先生」

ハハハハと笑う校長の目には、またも青い痣が増えていた。  
前話の痣も含めて、両目の周りに痣ができていた。  
可愛くないパンダだ。

「……女生徒のメルアドを聞いたぐらいいいじゃないか」

「お大事にな」

また奥さんに殴られたのか。  
どうやら銭湯に來ているところを見ると、家を追い出されたようだ。  
井モノも呆れた表情をしている。

校長の愚痴に付き合いながら服を脱ぐ。  
井モノと並んで、足早に更衣室を抜ける。

「校長先生も大変だね」

「約10割が自業自得だな」

同情の余地はあまり無い。

「お邪魔します」

「他人の家へあがる訳ではないだろうに・・・」

ドアを開けると視界には、富士山の代わりに壁に描かれた美しい桜の絵が飛び込んでくる。

もともと西日本には富士山の絵すら描かれていないそうだが。

この銭湯の桜姫路の名の元になっている絵だ。

姫路がどこから来ているかは知らん。

今度谷山に聞いてみるか、と思いながら木製の小さいすに腰掛ける。

「家人くうん、今日泊めてえ」

体を洗い始めると、校長が身の毛もよだつほど気色の悪い声で話しかけてきた。

「・・・校長」

「そこまで嫌そうに顔を歪めなくても・・・」

更にもう一つ痣を増やして許されるよな？

まあここは銭湯だ。

あまり暴れると他の客に迷惑だ。

「今日、家内に家を追い出されてしまつて泊まる所がないんだ。と  
いうことで宝蓮荘に泊めてくれまいか？」

「ダンボールくらいなら分けてやろう」

櫂と林葉が引越しの際に使つたダンボールが、今も大量に残つていて処分に困っているのだ。

「・・・この寒空の下、野宿しろと君は言つのかね」

「公園に行つてみる。ホームレスの方々はお前の嫌がるそれを毎日  
やっているぞ」

それにダンボールで家を組み立てれば、野宿のカゴテリーには当て  
はまらないだろう。

私の知り合いにもホームレスをやっている奴がいるが、ダンボール  
の中は外に比べればはるかにマシだそうだ。

「うちの店長にでも頼んだらどうだ」

私が体の泡を流し落しながら提案すると、校長はではそうす  
るか、と言つて体を洗い始めた。

店長と校長はやたらに仲が良い。

喫茶カフェにも校長が仕事の合間を縫つて顔を見せに来る。  
ちなみに店長の家は喫茶カフェの2階だ。

「さて」

手早く片付けて、湯船の方に移動する。  
少し熱いがそこは我慢だ。

「ふう・・・」

よく風呂に入ると「生き返る」という表現がある。

しかし私は天国に来たような気分なので「死んだ」と言う方が意味としては合っている気がする。

いや、皆が湯船につかって「死んだ」と言うのはおかしいか。

「いい湯だね、家人君」

「ああ・・・」

どうやら考え事をしていたので、井モノが隣に来ていたことも気づかなかったようだ。

「本当にいい湯だ・・・」

それこそ魂が抜けそうなくらいにな。

今、私は幸福感に満ち溢れている。

そしてその幸せを壊す男が現れた。

「いやっふうううっ！」

ドポーン！

勢いよく呼び込んだせいで水柱があがる。

とんだ湯が顔にかかる。

「痛ててて、思ったより浅かった」

「いつも入ってるのだから、それくらい分かれ、この大馬鹿者！」

「ちょ、痛いつて！ぬれたタオルで素肌を叩くのがどん位痛いかわらかってんのか？！」

「黙れ！マナーがなつとらん、マナーが！」

「ごめんなさいごめんなさいごめんなさい！！！」

「まったく・・・」

人の幸せな気分をぶち壊しておって。  
まったく。

「ふう・・・」

「で、今度は何してるの、健児君？」

「見て分かるだろ。銭湯に来たら女湯を覗くのがマナーってもんだろ」

「そんなマナーがあつてたまるか」

とはいえ男女を仕切る壁は大分高さがあるからな。  
普通には上れない。

「健児、梯子ならここだあ！」

「サンキュー谷山！」

「だから山谷だ！！」

「待て待て待て待てえ！何をしている、お前一応この銭湯の息子だろ！」

「人間は壁を超えることで強くなる生き物だ」

「声をそろえるな、声を！」

「よし、この校長も参加しよう！」

「俺もまぜてくれ！」

「ワシもじゃ！」

「俺も！」

「貴様らいい加減にしろおおお！」

この後山谷の母出現  
家人とタッグを組み説教口撃



## 第24戦 VS 銭湯「桜姫路」(後書き)

銭湯(もしくは温泉)と来たら覗きは定番だと思います。

肝心の覗く部分が長さと私の描写力が足りないのでカットしました  
が・・・

あと桜姫路は完全に語呂だけでつけました。

姫路市在住の人はスイマセン。

・・・いますか、姫路市の方？

## 第25戦 VS チョコ会社の陰謀

喫茶カフェは名前の割にケーキ屋なので、クリスマスなどのイベント前は必然的に忙しくなる。

近頃はバレンタインが近いので、目も回る忙しさだ。

イベント前は忙しい。

忙しいと人手が足りない。

人手が足りないと私がカウンターに出る。

ということとで今喫茶カフェに来ると、もれなく無愛想な店員がカウンターで出迎えてくれるぞ。

まあ私のことだがな。

「注文は何だ、山谷？」

「俺は山谷だ・・・って合ってるし。つかちゃんと仕事しろよ」

山谷も名前間違えられることに、慣れてしまったようだな。

ぐてえ、と適当に持ってきた椅子に座り、カウンターに倒れこむ。

「それでも会計をしたり、仕入れをやったりと色々働いている」

「それってバイトが手を出していいのか？」

「うちの店長はパティシエとしては十分一流なんだが、経営に関してはてんで駄目なんだ」

天は人に二物を中々与えてくれないものだ。

その点私は子供の頃に経営などに関して仕込まれたからな。

「で、注文は何だ」

「【慰め】 4つ頼む」

「クリスマスに引き続き今回も、か」

「……………」

「……………山谷」

「何もいわずにチョコをくれ」

感情を押し殺した震えた声を前に、私はご要望どうり何もいわずにチョコを渡した。

いや、何も言えなかったのだ。

「400円だ」

「ん、1つ多いぞ」

「おまけだ。もってけ」

「家人、俺は慰めならいらない」

そういつて山谷はチョコをつき返してきた。

先刻【慰め】という名前のチョコケーキを注文したのは何処のどいつだ。

仕方ない。

「これはあくまで次への希望を込めてだ」

あと桜姫路での礼も込めてな、とチヨコを押し返す。

「家人・・・」

「ほら、次の客が待っている。さっさと帰った帰った!」

「ありがとな」

山谷はそう短く言い残して去っていった。  
今度の声はもう震えてはいなかった。

「じゃあな」

さて、次だ次。

「腐れ男、注文は何だ」

「だから客に向ってその口の聞き方は無くね?」

「腐った男さん、注文はなんでございましょうか?」

「肝心な部分が改善されてねえし!何かドラクエに出てきそうなんだけど!」?

私はFF派だからな。  
よくわからん。

「ところで相方はどうした?」

いつもカップルで来ているのにな。  
詳しくは12話。

「チョコは？って聞いたら今年は逆チョコとか言われてんでパシッてる・・・」

たぶん照れ隠しで口をついた言葉なのだろうな。  
向こうは既に高めのチョコを予約しているし。

「じゃあこのチョコを持っていってくれ」

「？」

「金はいいから渡してやってくれ」

どんな顔をするだろうか。

まさか自分の予約したチョコが、渡すはずの相手から届けられるとは思わんだろうな。

「はい、次の奴ー」

「ふふん、相変わらずシケた店だ」

クリスマスの日に塩ケーキを注文した奴だ。  
私以上に偉そうな奴だ。

「チョコ型爆弾1つ」

「そんな物うちには置いていないぞ。そもそも何に使ったつもりだ？」

「何に使うか、だと？そんなもの決まっているじゃないか・・・フフ・・・アーハッハッハ！！」

その男は高笑いをしながら店外に出て行った。  
何がしたかったのだ？

「やつほー、家人！」

「・・・母さん、何故こんなところにいる」

汚れた服をキラキラと輝いた顔できているのは、私の母さんだった。  
親が仕事場に来る恥ずかしさがよくわかった。  
私の母さんの場合だと別の感情がわいてくるが。

「いやあ、太平洋横断水泳やったらおなか空いちゃって。何かおごつて！」

「コンクリートでも食べている」

「えーん、えーん。息子がいじめるよう」

母さんには是非とも自分の年考えて欲しい。  
ある意味永遠の14歳だな。

「はい、次の方ー」

「スルー！？」

いいもん、いじけてやるもんと言って母さんは帰っていった。  
言い過ぎたかと思わなくも無いが、母さんのことだから3歩も歩い

たら忘れるだろう。

一応あとでチョコでも送ってやるか。

「家人君、ちゃんと働いてる？」

「ん、井モノか。しっかりと働いてるぞ。注文は？」

「チョコモランマ・モンブランをお持ち帰りです」

それはともかくさ、と井モノは私の後ろを見ながら続ける。

「その後ろのチョコはツツコミ待ち？」

私はケーキを包装しながら答える。

「ああ・・・これか」

私の後ろで異様な存在感を漂わせているのは、チョコでできた1/1スケールの聖・バレンタインの像だ。

聖バレンタインの姿がわからないので、店長の妄想でデザインしたせいかイケメンになっている。

歯だけが白いのでやたらに目立つ。

「バレンタインは聖バレンタインを弔う日だから、そういうものを作って欲しいと依頼が来たのでな」

「頼む方も頼む方だけど、作る方も作る方でどうかしてるよ」

「私に言うな」

わからない人のために解説。

2月14日は元々、聖バレンティンという人物が処刑された日だ。多分弔うための日では無いだろう。

「じゃ、仕事頑張ってね」

「ああ、帰り道には気をつけてな」

「？」

私の言葉に少し疑問を持ったようだが、そのまま帰っていった。井モノが店を出たとたん、私の忠告は現実となった。

「君は宝蓮荘に住んでいた親子井君だったかなッ！」

「いや、点鈍克呑ですけど・・・」

「まあまあ、細かいことは気にしないで。ちょっと息子に振られて暇だから、アタシについてきて貰おう！」

「え、ちょ・・・うわあああ！」

母さんは井モノを担いでどこかへ連れて行っただけだ。だから気をつけると言ったのに。

「お前も気をつけろよな」

後ろにいる聖バレンティンに話しかけてみるが、白い歯をギラギラと光らせるだけで何も答えてくれなかった。



その日、克吞はボロボロになって帰ってきた  
何があつたか尋ねても、もう許してくださいと呟くだけだった

## 第25戦 VS チョコ会社の陰謀（後書き）

タイトルは単なるヒガミです。

バレンタインはモテないならモテないなりに楽しめばいいんだ！  
今年は期待が本気でゼロなのでがっかりすることもなさそうです。  
負け惜しみとは言わないで……

世界中チョコ会社に踊らされているだけなんだよお！  
うわあああん！

……泣いてもいいですか？

それとバレンタインが近いのでちょっと紹介。

よく感想を下さる、うゆさんが小説書いているので。  
と言っても結構前からですが。

題は「姉妹と静けさと音」

恋愛モノです。

他にも色々書いていらっしやりますが、うかつに人に勧められない  
のが多い……

## 第26戦 VS バレンタイン

「今日、2月14日はバレンタインデー」

「そうだな。だからどうした、健児？」

手元の本を読むのはやめず、面倒くさを凝縮したようなため息をつきながら、それでも一応友人の言葉に相槌を打ってやる。

揺り椅子に座り優雅に読書をたしなむ私に向って、健児は己の内の欲望を吐き出した。

「チヨコおおおおおおお！！！！！！」

私の耳が壊れそうになり、窓が震えて悲鳴を上げ、近所には迷惑がかかる。

やかましい事この上ない。

急に私の部屋に入り込んだと思ったら、愚痴を言いに来ただけか。

「チヨコ！チヨコ！チヨコ！チヨコ！チヨコ！」

「そんなにチヨコが欲しいなら井モノにでも言え。そろそろ両手にチヨコが満杯の紙袋を携えて帰ってくるはずだ」

井モノは女子に人気が高い。

スポーツ万能。

成績は上の下。

端正な顔立ち。

しっかりとした身だしなみ。

女子に対しては、さわやかな笑顔で対応。

尚且つ現実の女性に性的興味が薄いため、いやらしくない。

其の他様々な要素もあってか、大和高校内で1、2を争うほどモテる。

趣味は犯罪レベルだが。

「神よ。俺にチヨコの恵みを！」

まったく聞いていない。

とりあえず読んでいた本のカードを使って、効率的に頭にダメージを与えてみる。

本は文庫本ではなく、それ相応の重みを持っていたので健児の意識を奪うに値した。

「・・・チヨコ！チヨコ！チヨコ！チヨコ！チヨコ！」

しばらくするとゾンビのようにむくりと立ち上がり、また同じ単語をただひたすらに繰り返す。

中にはチヨコさんが紛れているが。

「仕方ない。私が作ってやろうか？」

「・・・・・・・・」

健児は私が同性愛なのではないのか、という疑問の視線を無言で向けてくる。

その視線の中にはお前が女だったら、という絶望も含まれている気がする。

「チヨコが欲しいならうちの店で買えばよからう」

「俺が欲しいのはチョコではなく気持ちだ！」

魂の咆哮の後、健児は空しいチョココールを再開し、2分で飽きた。

「あゝ、チョコをもらっている男が憎い」

「そういう奴らはチョコ会社の陰謀に踊らされている、馬鹿な奴らだと思えば良い」

「そ、それもそうだな！」

いやっほう！と言って健児はソファで跳ねる。  
再び私は揺り椅子の上で読書を楽しむ。

「チョコ持ってきました！」

「・・・チョコ・・・」

「はい、お兄ちゃん」

「まあ同じところで働いてるし一応あげるわ」

「チョコゼント・フォー・ユーです」

「味わって食べてね」

チャイムを鳴らさなかったところは不問としよう。  
どうせ壊れているのだからな。

「皆、ありがとう」

「家人、お前も馬鹿になるのかああああ？！！」

「馬鹿はどっちだ」

「お前は仲間だと思つてつたのに！」

「私は貴様と違つて付き合いが良いのだ。それでも2桁に達する数のチョコをもらっている」

とはいえ大半は喫茶カフェの客だ。

常連客はチョコを1つ余分に買つて、その場で私に手渡す。

ちなみにそのチョコはすぐさま元のショーケースに戻され並ぶ。

無論そのことは向こうも承知だ。

店の売り上げに貢献するのがチョコ、というシステムかもしれん。  
しかしそうすると、実質は店長にチョコ渡しているようなものだなあ……

「うわああああん！みんな敵だ、グレてやるチキシヨオオオ！！」

健児は涙を流しながらどこかへ走り去った。

「健児さんへのチョコもあるんですけどね……」

「行つてしまったものは仕方が無いだろう」

そして私にも、立ち向わなければならない敵がいるのだつたな。

賢明な読者の方はもうお分かりだろう。

マッダサイエンティストチョコ  
後藤真木の生物兵器だ。

「それじゃあ家人にはこの場でチョコを食べてもらおうか」

多分わかって言ってるのだろう、この女。  
ものすごいニヤニヤしている。

「それではありがたく頂戴するとするか」

まずはユカのチョコだ。

真木のは後回し。

「ユカはチョコレートケーキか」

「えへへへ。ちょっと頑張りすぎちゃいました」

本当に頑張りすぎだ。

バースデイケーキを更に一回り大きくしたサイズだ。

質量的に胃に入りきらないな、このケーキは。

適当に切り上げて冷蔵庫に保存し、林葉、櫂、カンナのチョコを順  
でに食べる。

そして麗香のチョコを食べると同時に吐き出す。

「ゲホッゲホッ・・・何を盛った！」

「塩と砂糖間違えちゃった」

麗香が私ったらドジっ娘と言って自分の頭を叩いたのを見て、本格  
的に殺意が沸いてくる。

この女油断もスキもあつたものではない・・・！

「先輩っ 最後に私のを・・・」

「まあ待て。その前にやることがあるだろう」

「ヒック……何だよ家人まで……畜生」

「健児、ドアのロックを開けろ」

「健児先輩マジ泣きしてますね……」

「まあ男の子だもんね」

さて。

どうやってこの大馬鹿者を引きずり出すか。

「チョコッ！チョコ！チョコレエエエエイツッ！！！」

面倒だ。

強行突破を選択。

といっても合鍵を使うただけだが。

「健児」

「何だよ」



「皆が渡すものがあるそうだ」

『はい、チョコレート』

「う、うわああああん！」

更に号泣し櫂に抱きつこうとするが跳ね除けられ、私の懷に飛び込んできた。

何故？

「それじゃ健児。早速ここで食べようか」

「ああ・・・いや、待て家人。お前まさかそのために」

健児が真実に気づき顔を青くする。  
よく気づいたな。  
だがもう遅い。

「健児先輩っ」

「う・・・あ・・・」

真木の超生命体漆黒帝王を喰らうが良い。

フハハハハハ。

毒を喰らわば皿までならぬ、チョコを喰らわば兵器までだ！

「地獄の底まで付き合ってもらっぞ、健児」

「はい、あーん」

「何かうねってる！待って。色々と待ってください！ほんっ・・・  
うぎあああああ！」

宝蓮荘より男子生徒2人が病院へ緊急搬送

貰ったチヨコに押しつぶされ失神していた男子生徒1人も病院へ緊急搬送

その男子生徒たちの病院でのぼやき

「バレンタインデーとか滅べばいいのに・・・」

## 第26戦 VS バレンタイン（後書き）

バレンタイン本当に土曜日よかった・・・

変な空しい期待もありませんからね！

まあ私は二人つきりで出かけてましたけどね。

もちろん相手は同性ですよ（泣笑）

道行く幸せそうなカップルに少しイラッとききました。  
まったくもって嫉ましいものです。

## 第27戦 VSテレビ・オブ・テレビ

「・・・暇だな、テレビでも見るか」

昨日で今週の予習・復習のノルマは終わらせてしまったしな。リモコンを取り、我が家のアナログテレビをつける。

そろそろデジタルに買い換えるべきか。

あ、金が無いから無理だ。

「はあ・・・」

家賃は宝連荘の維持費程度しかとっていないからな。仕送リモナシ。

必然的にバイトの収入が、私の生命線になる。ため息をしたい私の心境を察してくれたのか、又々が頭の上に乗っかり慰めてくれる。

慰めてくれていると言って良いのだろうか？

「ん、テレビショッピングか？」

『わら人形の7セット、今ならプロの呪術師が三日三晩かけて呪った五寸釘もつけて三十万円！さあ、コレを買って皆で牛の刻参りに行こう！！お問い合わせは大和通販まで』

「・・・30万は高いだろ」

ツッコミどころの多いCMだな。

渋谷並み人口密度で、皆が丑の刻参りが行っている光景が脳裏に浮かぶ。

そこまで行くと呪術の効果も落ちそうだな。

『ノモまゝでも、ノモまゝでも 私立大和高校は、バカ安い学費と高い設備が揃っています！さらに部活や同好会も充実！』

どこかで見たような映像が流れる。

大和高校CMあったのか。

出演している校長は、いつもよりいいスーツを着ている。

バカ安いというけれども、当たり前だが公立よりは高いからな。  
あゝ学費もバカにならん。

『キャラの濃い教師陣が、貴方に勉強を教えます。更に可愛い子は試験ナシで面接だけで合格！！』

前半部分に特に何か言うつもりは無いが、後半の試験ナシって良いのか？！

校長……なんだから……

『入学して、美少女達と屋根ひとつの下で暮らしている、怨やましい男子生徒を……ちょ、おまえ何故ここに……ぎああああ！  
！！？』

あ、校長の奥さん。

多分死んだな、校長。

にしても羨ましいを超えて、怨やましいとは……  
大変そうだな、その男子生徒。

『喫茶カフェ〜午後の一時を喫茶カフェで〜』

店長、いつCMなぞ作ったのだ……

私は知らんぞ。

『うちの看板娘を紹介するわぁん』

・・・櫂。

顔を真っ赤にして、フリフリの付いた服で店長に引っ張られて出てくる。

『べ、別にアンタなんかに来てほしくないんだから！』

もし私が櫂の立場なら首を吊る。

前に井モノがこんな感じの店に行ったとかほざいていたな。どつりで最近変な客が増えていたわけだ。

まあ客は増えたから別に良いが。

『3・・・2・・・1、今日のニュースを伝えます』

化粧のやたら厚いキャスターが出てきて、ニュースが始まった。素顔はきつとすごいのだろうな。

『通称、先走り桜の名で微妙に知られる東行桜が大変なことになっています。では現場の渡部さん』

東行桜と言えば、大和邸から目と鼻の先ではないか。ん、今現場の渡部って言わなかったか？

『エイリアンのような生物が大量発生しています』

あの時の真木の御節いいいい！！

まあ生きているのだから、繁殖もするか。

『中には4mを超えるものまで、家人様どういたしましょう?』

私に聞くなよ、渡部!!

何故私がニユースを見ているとわかっているのだ?!

未曾有の生物災害だ。バイオハザート

怖ろしい。

それに対し又又は私の頭の上で毛づくろいをはじめ。

『え、エイリアンの数が減っています』

キシヤアアとエイリアンもどきが悲鳴を上げ、緑色の体液を撒き散らす。

誰だ?

『うるあああああ!!』

・・・母さん。

薄々そんな気はした。

『蓮様がエイリアンを瞬く間に、破砕していきます』

内容がグロテスクな為かモザイクがかかっている。  
生放送なのによくやるものだ。

『ま、ざっとこんなもんな』

緑色の返り血を浴びまくったマイマザーこと橘蓮。  
浴びすぎで全身緑色で誰だか判別が付かん・・・  
とりあえず今のは見なかったことにして、煎餅食べよう。

「ネギ煎餅は確か台所だったか」

台所に足を踏み入れた瞬間、世界の時間が停止する。  
単に私が固まっただけだが。

「これは……」

ここにいたのがゴキブリだったら、どれだけ良かったろうに。  
キシアアアと、私を威嚇しているのは先刻テレビに映っていたエ  
イリアンもどきだった。

「シャー、シャー」

「……」

一匹や二匹ではない。  
目算で30はいる。

エイリアンもどきが101号室に大量発生

これより討伐を開始する

繁殖力が高い為、一匹たりとも逃すことは許されない  
備考・チャンネルは地方



## 第27戦 VSテレビ・オブ・テレビ（後書き）

小学生のとき、アナログとアダルトを同じ言葉だと思っていました（実話です）

どうも、仙人掌です。

我が家のテレビはデジタルなんですが、機能が多くて使いこなせません。

ボタンなんてチャンネルと電源、音量だけでいいのに。

番組表が出てくるまでの時間にイラつときます。

新聞見たほうが速い気がします。

アナログの時代が懐かしい・・・

## 第28戦 VS エイリアンもどき

「さて、どうしたものか」

前回の続きからだ。

ん、あらずじだと？

「俺が思うに、又又猫が芋ようかんでも食って巨大化したってところだろ」

「違う。もっと現実的に考えろ、大馬鹿者」

「エイリアンっぽい生物が出てる時点でリアリティの欠片もねーよ、アホ」

「というかどこから入ってきた、この変質者」

「窓からに決まってんだろ。後変質者じゃなくてせめて不審者にしてくれ、奇人」

「ほう、窓から家に入ることが最近の流行なのか。ってそんなわけないだろ！後奇人ではなく変人にしてくれ」

「変人も奇人も変わんないだろ」

「だったら変質者と不審者も大差がないだろ」

「でもよ。不審者の方が変質者よりマシな気がしねーか？」

「怪しいという点においては両者とも・・・ええい！」

駄目だ。

健児と話しても、不毛なだけだ。

あらずじは台所に真木の御節エイリアンもどきが発生していた。  
以上。

「で、どうすんだ？」

「どうすると言われてもな・・・」

先刻からエイリアンもどきはガサガサうごめくだけで、特に何かするわけでもない。  
ふうむ。

「ん、待てよ」

「どうした？」

「必ずしも攻撃性が高いわけでもない・・・か」

そうだ。

見た目は怖グロイが、中身は純情乙女だったりするかもしれないではないか。

エイリアンを外見だけで判断するのは視野が狭すぎるしな。  
うむ。

「というわけで、健児逝ってこい！」

「俺かよ！字が違っしー！」

「気のせいだ。病は気からとも言つではないか」

「意味関係無ツ！もうやだ、ぜってえ行かねえ！」

「勇気ある特攻に溢るる漢気、エイリアンに突っ込むだけでモテま  
くるだろうな」

「いくぞおおおおお！！！」

冗談で言っただけなのだが・・・

まあ棚からぼた餅が出てきたとも思つか。  
カビていそうだが。

「ぎああああああ！！！」

数秒で健児が肉片に解体される。

凶暴性が高く、戦闘力もそれ相応に高いようだ。  
すまん、健児。

お前のことは10分くらい忘れないだろう。

「うグウ・・・死ぬ・・・」

「チ、生きていたか」

「・・・露骨に舌打ちすんなよ」

相変わらず生命力はゴツキー並だな。

そうか、ゴツキーか。

あれがあつたではないか！

「家人、俺はもう動けねえ・・・」

「そのままでいろ」

押入れをゴソゴソあさってみれば・・・発見。  
じゃあせーのッ。

ブシュー

「バルサ、バサン、家族を守るう　　っておいしい！俺ここから動けないつつたよなあ!？」

おー白い虫殺しの霧が部屋に広がってゆく。  
さて、別の部屋に避難するか。

「家人おおおお、シカトしてんじゃねえええええ!!」

「まあ、ルサンは害虫用だしな」

「俺が害虫って言いたいのか?!」

「誰もそんなことなど言っていないだろう?」

逆に害虫で無いから大丈夫だという考え方もある。  
まあ健児の考えで正解だが。

「おまえもつと優しくしてくれ！俺のこと人として扱ってねえだろ  
!!!」

「ソナナコト思ッテイナイゾ」

「じゃあなんで棒読みの上に眼を合わせねんだよ!!」

煙が濃くなつて来た。

読書でもするか。

「ま、待てえええええ!!」

聞こえない聞こえない。

容赦なく戸を閉める。

「ゴホゴホゴホゴホオ！」

流石に死ぬか。

しかし健児だから大丈夫だろう。

バアンと音を立てて戸が開け放たれ、顔を上気させた健児が怒鳴る。

「いい加減にしろ、この野郎！」

「バルサ は何処へ行つた？」

「エイリアンもどきが排除した」

ク、やはり強敵のようだ。

知能も中々だ。

「健児、こうなったら武力介入するぞ！」

「応！」

そういつて健児は木刀を取り出す。  
どこから出てきたのだろうか？  
出所不明物を構え、そして・・・

「はあああああ！」

次々とエイリアンもどきを仕留めていく。  
それはいい。

しかし同時にマイホームが破壊されていく。

「健児、ちょっと待て！」

「どうした家人」

「どうしたもこうしたもない！それ以上家を壊すな！！」

「俺の前では全てが無力！」

「聞けよ」

ドォーン！

「何だ？！」

「外か」

ドアを開けて外に出る。

外は信じたくない事態になっていた。

『クイシイヤアアアアア！！』

10mくらいあるエイリアンもどきだ。

でかい……

コイツがボスか。

いや違う。

ただのボスではない、ビッグボスだ！

「何を食ったらあんなに大きく成長するのだろうか……」

「家人、だから芋ようかんだろ」

「何故芋ようかんを推す」

「昔から芋ようかんは巨大化……ギヤア！？」

健児死亡。

人が死ぬというのは、存外あつけないものなのだな。

「どうする……」

『ギシヤアアアア！！』

万事休すか！

眼をつぶったその瞬間……

「先輩ッ！」



「真木?!」

『ぐ、グルウ……』

ビッグエイリアンもどきが大人しくなった。  
なるほど、真木はコイツの親みたいなのなのか

「真木、そいつにもう誰も二度と襲わずに、遠くに行くように行ってみてくれ!」

「え、はあ……」

真木が命じると、ビッグエイリアンもどきはどこかへ飛び去った。  
夕日に向かって飛ぶ、巨大なエイリアンもどき……  
奇妙な光景だ。

「えと、コレ私のおかげですねっ」

なにはともあれ宝連荘に平和が戻った。  
一人の殉職者を出して。

「……まだ死んでねえ」

宝連荘崩壊エンドを回避

健児はこの後自然治癒

ビッグエイリアンもどきは太平洋のどこかの島に移住したようだ

## 第28戦 VSエイリアンもどき（後書き）

芋ようかんで巨大化。

は昔見た戦隊モノに芋ようかん食べると巨大化するという設定があっただんです。

閑話休題。

ユニークアクセス数が30000人突破しました！

ヒット数はもう少しで100000に届きそうです。

本当にありがとうございます。

ということで宝蓮荘の外伝を書きました。

とはいえ喫茶カフェの常連客の男女のカップル（超脇役）が主人公ですので、あくまで登場人物が同じだけの別の物語と言った方がいいかもかもしれません。

題名は『いつも隣に腐男子』

腐要素はたいしてありません。

誰でも読める（ハズ）

宝蓮荘より恋愛要素が多め（になってしまった）です。  
気が向いたら読んでやってください。

## 第29戦 VS 雪上に舞い降りた2人の悪魔

「お兄ちゃん、雪が積もってるよ！」

「……とりあえず窓から侵入するのはやめてくれ」

朝起きたら何故かわが妹が枕元に立っていた。

ベッドなので枕元という表現が正しいかどうかは、かなり怪しいところだが。

カンナはニット帽にジャンパーという、いつ雪山で遭難しても割と安心ないでたちでニコニコと笑っている。

金縛りかと疑<sup>うたぐ</sup>つてみたものの、寒いだけで五体満足で手足の自由も利く。

「妹よ、私は今とても寒い。なので窓を閉めることを要求する」

「じゃあボクはお兄ちゃんと遊ぶことを要求する！」

「そちらの要求は却下。こちらの要求が、速やかに行われることを切に望む」

「いーいーから！雪が積もったら遊ばなきゃ損だよ！」

「仕方ない……」

息は雪と同じように白い。

存外、白い吐息は雪と同じ成分かもしれない。

と面白くも無い冗談を考えてみながら、着替えをしようとする。

「カンナ、着替えるので外で待っていてくれ」

「兄妹<sup>きょうだい</sup>なんだから気にしなくていいと思うよ」

「一理あるが……コラ。子供ではないのだから一人で着替えく  
らいできる」

そっついながら頭をぺしぺしと叩くと、カンナは私の服にかけた手  
を離して不満げに返事をして外へ出て行った。

「まったく……」

手早く長い付き合いの防寒着に着替えながら朝食を取る。

昨日の夕飯の余りが無いので、喫茶カフェから持ち帰ったシューク  
リームを胃の中へ入れる。

ふむ、甘すぎず後味も中々良い。

「又又、外へ出るか？」

「又〜ん」

否定のイントネーション。

毛布をかぶりここから一步も出ないという強い意志が瞳に宿ってい  
る。

猫はコタツで丸くなるといいうくらいだ。

寒いのは苦手らしい。

仕方が無いので、又又猫を置いて外へ出る。

「ふうむ」

今年は例年のようにたくさん積もらなかったようだ。  
地球温暖化の影響らしい。

「お兄ちゃん。こっちこっち！」

又又とは正反対に、カンナはいつもより元気だ。  
子供は風の子という奴が。

「で、麗香。それは？」

「題名【北極の白き星】」

「凝り性だな」

人の背丈より大きい雪でできた白熊は、妙な威圧感さえ持っている。  
大きさはともかく、その繊細なつくりは札幌雪祭りのレベルだ。

「まるでホッキョクグマを雪でコーティングしたようだな」

余りにも良くできていて、本物ではないかと疑ってまう。

短時間でよくこんなものができるな、と感心しながら雪像に触る。

「コーティングしたのは熊じゃのいけどね」

「は？」

突如、触れていた白熊の雪像が音を立てて崩壊する。  
雪の鎧を脱ぎ捨て彼女が現れる。

「やあ、息子！バレンタインデー以来だね！」

「あー・・・うん」

頭の隅ではそんな気がした。

「家人なかなか起きないから、心配したよー」

「数時間雪像の中に入りっぱなしだったのよー」

凍死したら困るからカンナちゃんに頼んで起こしに行ってもらったのよー、と麗香は言いながらカンナの頭をなでる。  
何故すぐ呼ばずにしばらく放って置いた・・・

「それじゃあ皆で遊ぼうか！」

「はい」

「はあ」

母さんは風邪を引かないのか？  
やはり馬鹿は風邪をひかないのが相場らしい。

「じゃあ雪合戦！」

「ルールは？」

「命尽きるまで」

「別のにしるー！」

何故そんな漢のルールにしなければならない。

「じゃあ当たったたら負けでいいじゃないの？」

「フィールドは屋根の上！」

「陸上で」

「はあい・・・」

チームはグツとパーの結果私とカナナ、母さんと麗香だ。

「カナナ、準備は良いか？」

「ばっちり！」

「レン、どうする？」

「決まってる・・・全殺しだ」

「よし、逃げよう」

「ちょっと待とうか、お兄ちゃん」

色々と無理だつて。

あの人たち怖い。

黒い瘴気が駄々漏れしている。

二人とも目を爛々と光らせ、口を悪魔のように歪めて笑っている。

「逃げてばかりじゃ何も変わらないよ！」



「・・・わかった」

妹に言われていたのでは、私の立つ瀬が無い。  
私も男だ、腹を括ろう。

「行くぞ、カンナ！」

「うん！」

私達の戦いは、まだ始まったばかりだ！

仙人掌先生の次回作にご期待ください（大嘘）

## 第29戦 VS雪上に舞い降りた2人の悪魔（後書き）

シリーズ、打ち切ってみよう。

宝蓮荘はまだまだ続きます。

10000hit突破しましたしね！

読者の皆様、どうもありがとうございます！！

### 第30戦 VS 暗闇の中の呪い

暗闇だ。

私の周りは黒で塗りつぶされている。

それでも手探りで自分の求めるものを、暗闇をかき混ぜるよう探し続ける。

見つかるかもわからないものを探し続ける。

最初から無いのならば、それはとても空しいことだ。

それでも今日という日のために一心不乱にまた暗闇をかき混ぜる。見つからない。

光が・・・光が欲しい。

この暗闇の世界を反転させる光が欲しい。

「先輩、懐中電灯が欲しいなら普通に言うてください」

「すまん、ありがたい」

真木が持つて来た懐中電灯によって、先刻まで暗闇だった押入れの中が照らされる。

するとすぐに求めるものが見つかった。

「それ何ですか？」

押入れの中から普通のダンボールより、一回り大きめの木箱を取り出す。

そしてその木箱に腕をかけて、真木の質問に答えるかわり質問を返す。

「お前は今日が何の日だかわかるか？」

「3月3日……あ、雛祭りですねっ」

「正解だ」

「ということはその中は雛人形と見たっ」

「2問目も正解」

固くなってしまった木箱の蓋<sup>ふた</sup>をあけ、中から雛人形を取り出す。  
男女2人の最も少ない人数だが仕方あるまい。  
少数精鋭ということにしておこう。

「大和邸の方はもっと大きい雛壇があるんですか？」

「3問目も正解だ」

20段くらいの雛壇がある。

多ければよい、というものでもないだろうに。

「さて、誰の部屋にこれを飾るか」

「先輩の部屋じゃないんですか？」

「私は男だ」

雛祭りは女の子の為の日だからな。

「女装すれば問題ありませんよっ」

「問題大有りだ!」

一応宝蓮荘の女子、全員のための雛人形だからな。  
いつそ屋根の上にも飾ってみるか?  
勿論冗談だ。

「真木の部屋はどうだ?」

とりあえず一番手短にいた人物に声を掛けてみる。  
すると真木は躊躇うそぶりを見せた。

「普通の雛人形だったらそうしたんですけどね・・・」

「何処からどう見ても世間一般常識における雛人形だが?」

「その人形、呪われてるような気がするんですよ」

「失敬な。ちゃんとその筋の霊媒師せんもんかに頼んで除霊済みだ」

「本当に大丈夫なんですか?!」

「大丈夫だ。金さえつめば何でもやる霊媒師だからな」

私は幽霊を見たら裸足どころか全裸で逃げ出すほど苦手なので、さっさと処分してしまいたいのだが。  
その知り合いの霊媒師は捨てたらもつと大変なことになる、と言うので捨てるに捨てられないわけだ。

「とりあえず屋根の上に十字架を立てて、そこに縛り付けるのはどうですか？」

「……………そのような和洋折衷は私の好むところではない」

「てか先輩。さっきから手がガタガタ震えてますよ」

「人間苦手なもの1つや2つはあるものだよ、真木」

幽霊とか本当に勘弁して欲しい。

嗚呼、ホラー映画を見る人の気が知れん。

ガタリ

「うわああああ?！」

「先輩ツ!？」

「又〜ん」

「何だ……又又か」

ほっと胸をなでおろす。

「……………先輩、その……恥ずかしいです……」

「あ……………スマン」

私としたことが取り乱しすぎてしまった。  
後輩に抱きつくとは我ながら情けない。

「ぬぬぬん」

又又猫が雛人形を見つめる。

その瞳は恋人を見ているかのような熱視線だ。

「又んッ！」

雛人形をの片割れを啜えて玄関の外へ持ち出す。  
つてええええええ！！？

「又又、それは捨てたら呪われてしまう！」

「え！？」

「又ん」

駄目だ。

完全に気に入ってしまったている。

「先輩……」

「何だ？」

振り向くとそこには……雛人形が。  
意識が暗闇に溺れる。

「ドアップで雛人形を見せたただけなんですけどねー。まあさっきの  
仕返してことで」

雛人形の捨てたら呪われるというのは、完全にデマである  
霊媒師の嘘だったらしい



### 第30戦 VS 暗闇の中の呪い（後書き）

宝蓮荘もこれで30話。

次は登場人物紹介をして、そしたらずっと放って置いた伏線を回収します。

ちなみに今回の話は3月3日に合わせる為に猛スピードで書き上げました。

なにせ雛祭りの存在を忘れていたもので・・・

そのためミスが多いと思うので、発見次第報告してくださいとあらりがたいです。

## 宝蓮莊住民録

我輩はいつも話の最後に戦況報告をしている者だ。

今回はちよつとしたオマケだと思つてくれればよい。

作者の作者による作者のための設定資料集だそうだ。

何でもたまに細かいところを忘れるとか。

まったくもつて論外だ。

実際の人物とズレがあるかもしれぬが、そこは了承してくれ。

「命が惜しくば家賃を置いて行け。家賃が惜しくば命を置いて逝くが良い」

家賃回収ターミネーター

橘 家人

101号室

・主人公にして宝蓮莊の管理人

・顔が広い

・大和家の英才教育を中途半端に受けて育つ

・喫茶カフェでバイト

・実は重度のお節介焼き

「きつと私達はこのなる運命だったんですよ・・・」

一般女子高生

向日 由華

102号室

- ・料理の腕は地味に宝蓮荘内トップ
- ・敬語が基本
- ・運動は苦手
- ・地味と言えば地味かもしれないとたまに思う、それが悩みでもケーキが美味しいからいいですよー、が結論

「俺、この戦いが終わったら結婚するんだ……無理か」

犬も歩けば棒に当たる、三歩歩けば全部忘れる漢

宮沢 健児

103号室

- ・扱いの酷さは地味に宝蓮荘内トップ
- ・剣道部所属
- ・腕はそこそこ
- ・馬鹿と言えば馬鹿しれないとたまに思う、それが悩みでも周りもあんま変わんねーよな！が結論

「暴力的な美味しさの料理を貴方につ」

料理の殺人

後藤 真木

104号室

- ・彼女が作る料理は生命を持ってしまう
- ・家人の1つ年下
- ・家出娘という裏設定

- ・ 橘カンナと仲が良いらしい
- ・ 好きなスポーツはバスケットボール

「僕に攻略できない<sup>ヒロイン</sup>砦など存在しないよ」

3次元に絶望した2次元の支配者

点鈍 克吞

105号室

- ・ 自己紹介するといつも「名前をもう一度言ってくれませんか？」
- ・ 2次元の女性しか愛せない
- ・ ゲームは鬼畜系から犯罪級まで
- ・ 学校では爽やかなサッカー部のエース、モテる
- ・ 彼がエロゲに手を出したのは深いわけが……無い

「あなた、もうお終いなのよ」

万能型ぐうたら人間

高峰麗香

106号室

- ・ 大和高校で教鞭を振るう
- ・ 橘カンナと同居中
- ・ 宝蓮荘在住暦は家人より長い
- ・ 稀に腹黒くなることも
- ・ 片づけができない

「お兄ちゃんはおクのモノなのとおおおお!!」

狂気の妹

橘 カンナ

106号室

- ・ 家人の妹、血は繋がっていない
- ・ 高峰麗香と同居中
- ・ 後藤真木と仲が良いらしい
- ・ 暗所恐怖症
- ・ 別にヤンデレでは無い………と思う

「……兵どもが夢の跡……変人<sup>レアモ</sup>たちが集う家……」

機械文明的黒魔術師系秀才少女

森 林葉

107号室

- ・ 全国トップクラスの頭脳
- ・ 藁人形を作るバイトをしている
- ・ 家人は読書仲間
- ・ 檜野木櫓はいとこ
- ・ 部屋が危ない感じ

「お客様、棺桶は注文済みですかコノヤロウ」

鉄拳絶壁

檜野木 櫟

- ・貧乳
- ・喫茶カフェでバイト
- ・森林葉はいとこ
- ・運動能力かなりは高い
- ・口より先に手が出るタイプ

## 宝蓮莊住民録（後書き）

キャラの数が多いので作ってみました。

何でホントこんな多くしてしまったのやら。

次回作はちゃんと登場人物を絞ろうと思います。

でも沢山いたほうがワイワイしてて楽しいんですよ・・・

### 第31戦 VS おやつ会

はむ、とかぶりつくと円が欠けて、不恰好な月の形になる。

欠けた部分が大きければ三日月だ。

口の中に入った方は、恐らく彼女の舌に存分に甘さを感じさせていることだろう。

「どう、美味しいかしら？」

「とっても美味しいです、このどら焼き」

喫茶カフェから持ち帰った売れ残りが櫂と私だけでは処分できないので、ユカの部屋に乗り込んでお茶会を開いたところだ。

もっともお茶会という響きほど瀟洒なものでなく、もう少し軽いものだ。

おやつ会とでも言うべきか。

「アキちゃん、もう一ついいですか？」

「いいけど・・・アキちゃんて私のこと？」

「そうですよ。ケアキから後ろの2文字を取ってアキちゃんです！」

「ユカ、ケアキじゃなくてケヤキだ」

「え！？」

そ、そうなんですかとユカは顔を真っ赤に染める。  
それを見た櫂は口元がかなり緩んでいる。



どうやら可愛い物好きらしい。  
ふうむ、それにしても・・・

「どうしたのよ、家人。さっきから落ち着きが無く見えるわよ？女の子の部屋に入って興奮してるの？」

「そういうわけではないのだが・・・」

「じゃあどうしたの？」

「こんな女の子らしい部屋を始めて見たのだ・・・」

「そんな感慨深く言わなくても・・・」

所狭しと置かれたぬいぐるみの数々。

ふかふかのベッド。

お嬢様という言葉のを想起させるカーテン。

花を主題とする絨毯。

家具の全てがこの部屋の主は女の子であることを示している。

今まで私が見てきた女性の部屋は、麗香のゴミ屋敷のような部屋。母さんのスポーツジムのような部屋に、先代管理人のトラップブルーム。

カンナも私と部屋が同じだったため、女の子らしい部屋ということは無かった。

「これが・・・女の子の部屋・・・っ！」

「あんた端から見るとただの変態よ」

やかましい、余計なお世話だ！

という言葉が喉まででかかったが、ユカの方を見て詰まってしまう。

「どうしたのよ？」

「櫂、アレ……」

私が指差すと、あっち向いてホイの同じように櫂がその方向に首を向ける。

その先には幸せそうに蒸しパンを頬張っているユカがいる。

「和むわ……」

再び口元が緩む櫂。

今のユカを見たら10人中9人は「可愛い……」と口に出してしまっただろう。

残りの1人は目の不自由な方が、言葉が話せない赤ん坊などだ。

そのユカは花形にあしらえたクッキーを見て、思い出したようにハッと顔を上げた。

「家人さん！」

急に身を乗り出してきたので、こちらの体がビクリと驚く。

「な、何だ？」

「宝蓮荘の敷地を使って花壇を作ってもいいですか？！」

「ああ、全然構わないが……」

自分の心中を見透かされたような気がして、必要以上に驚いてしまった。

心臓はまだバクバクと音を立てている。

「でも何で急に花壇を作ろうと思ったの？」

「昨日テレビで見て影響されただけです……」

そう言うとユカは顔をうつむけ、真っ赤にしてしまう。

「そんなに恥ずかしがることでは無いだろう」

「でも宝蓮荘に住んでるからには、ちょっと変わった理由じゃないと駄目だと思ったんです」

「だそうよ」

地味に心が傷つく。

別に宝蓮荘はそんな場所ではない。  
変な奴が集まりやすくはあるが。

「まあラフレシアを育てたいと言われるよりマシだ」

「そんなこと言うわけ無いじゃないですか」

「人食い花を育てたいと言っただけでしょ」

「それも無いです。人をなんだと思ってるんですか！」

「すまんすまん」

怒っても怖く無い人は稀にいるようだ。  
むしろ可愛いぐらいだろう。

「でも料理で人食いの怪物を生み出す子はいるわよね」

「……まあな」

「暗い顔をしないで下さいよ……ほら、もっと笑って下さい！」

「そうね、顔を貸しなさい」

「人の頬を引っ張るものではない、この貧乳……痛だだだだ！  
！」

「コノヤロウ」

「アキちゃん。それ以上やったら家人さんの顔に、モザイクが必要  
になってしまいますよ」

「胸がある女に私の気持ちはわからないわよ！」

「いいじゃないですか。アキちゃんはスレンダーなんですし」

「スタイルの王道、ボンキュッボンからは外れるがな」

「家人さん！」

「家人……とりあえず齒あ食いしぱりなさい」

「2人とも落ちついてって言ってるでしょう!？」

「ユカは静かにしてくれ」

「黙りません!」

「！」

「!」

「××！」

この後3人とも口論で疲れて昼寝に突入

### 第31戦 VSおやつ会（後書き）

ほのぼのとした雰囲気を意識して書いてみました。  
と言うのは嘘で、室内なのでドタバタさせにくかったのですが。  
ここからデート編に繋がります。  
たまにはそんな感じのも。

### 第32戦 VSデート「商店街とストーカーズ」(前書き)

『』の会話は家人たちには聞こえていません。  
会話文が入り乱れてわかりずらいと思いますが、ご容赦ください。

### 第32戦 VSデート「商店街とストーカーズ」

よくデートの待ち合わせに使われる噴水の公園を思い浮かべて欲しい。

今私はそこにいます。

何故私がここにいるかというと、ユカとの映画を見に行く（詳しくは第8戦参照）ためだ。

約束してから随分と間が空ってしまった。

別に忘れていたわけではない。

断じて忘れていたわけではない。

「ご、ごめんなさい家人さん！服を選ぶのに時間がかかって」

「べつにそんなに待っていない・・・ぞ・・・え？」

そこに現れたのは天使だった。

本人の純粹さを表すような白を基調とした服。

短すぎず長すぎないスカートは足を魅せるためというより、全体を魅せている。

照れるような仕草は犯罪モノだ。

あれ、細かく分析していたら変態っぽくなってきてないか？

「あ、あの・・・私変ですか？」

「いや、よく似合っているよ」

「えへへへへ褒められました・・・このまま・・・で・・・を・・・」



「おゝい、戻って来ゝい」

駄目だ。

もう自分だけの世界に突入している。

「置いて行くぞゝ」

「映画を見た後さりげなく手を組んでそれで・・・・・・・・キャッ」

スタスタスタ

「ちょ、待ってくださいゝい！」

「早くしろ」

怨ヤマシイ、怨ヤマシイ

「  
」!

「どうしたんですか？急に振り向いて」

「気のせいか・・・」

後ろから殺気がしたと思ったのだがな。

というか怨念が。

半端ない気だったな。

気のせい・・・・か？

特に異常はないしな。

『怨ヤマシイ・・・あ、こちらエージェントワン、標的はなかなか

鋭いもようですっ  
』

『なんで私がここにいるのよ?』

『ボクは・・・じゃなかったエージェントツー、真木ちゃん大丈夫なの?』

『全てにおいてパフォーフェクト!大和高校美少女同好団体の手を借りてるよ  
』

『・・・大丈夫なの?ボク帰ろっかな』

『おい』

『カンナちゃん、このままユカ先輩が告白・・・とかあったたどうするの!』

『むう』

『オイ、無視してんじゃないわよ。後輩二人組み』

『樗先輩も気になりますよね?』

『別に私はそんな・・・』

『じゃあ、異性不純交際を監視するってことでっ  
』

『不純なのかしら・・・まあいいわよ』

『あ、見失っちゃっよ』

『それではLet's go』

私達は並んで商店街を歩いている。  
というか何処へ向っているのだろうか。  
当ても無く歩いても無駄なだけだ。  
ドライブじゃあるまいし。

「とりあえずガーデニングに必要なものを買いに行くか」

「・・・え、あ、ハイ！」

「家人ー、可愛い彼女つれて何処行くのよー！」

少し離れてきたところから声をかけてきたのは、八百屋のおばちゃんだ。

喫茶カフェによく来て、低カロリーケーキを食べている。

「彼女ではない。友達だ」

「日向の反対で向<sup>むか</sup>日ユカです」

「そう、ユリちゃんね」

「ユカです」

「アハハハハ、年食うと耳が遠くなっちゃってねえ。ところで旬の小松菜あるんだけど。恋人ができた祝いとして安くしてあげるわよ！」

『恋人なんて・・・』

『カンナちゃん、ハンカチを噛むのはよしなさい』

『私が予備のハンカチ持ってますから大丈夫ですよっ』

『何でそんなに準備がいいのよ?!』

『もしものときのために、銃火器もありますよ?』

『銃刀法違反という法律を知ってるのかしら』

『アメリカでは良くあることです。櫛先輩』

『ここは日本よ』

『だから恋人じゃないって・・・小松菜はその奴を1つ頼む』

パツと見で一番量の多そうなものを指差す。

おばちゃんは笑いながらそれを手渡した。

『アハハハハ、年食うと耳が遠くなっちゃってねえ』

『さっきからそればかりではないか』

『アハハハハ、年食うと耳が遠くなっちゃってねえ』

『ループするな、ループを!』

『冗談冗談。ハイ、毎度あり』

持参のバッグに小松菜を入れながら、衝動買いしてしまったと思う。

近頃はバレンタインで店が繁盛したため、バイト代が多く入ってせいか自然と財布の紐が緩んでしまったようだ。

小松菜を買って先に進もうとすると、魚屋のおじさんから声をかけられた。

「家人。こっちにもいい魚が入ってるぞ！」

「魚か・・・今は節分のときに買ったマグロがあるので遠慮しておく。また今度頼むよ、マイケル」

「そうかー、じゃあ仕方ねえな！」

「ま、マイケルさんですか!？」

ユカが目を丸くする。

彼は何処からどう見ても、浅黒い肌に伝統的な魚屋さんの服を着た日本人男性だからな。

驚くのも無理は無いか。

「おうよ。俺ん名前は魚沼マイケルだ。変な名前だろ？」

「え、そんなことは・・・」

「嬢ちゃん、無理しなくていいよ。お袋が二枚目な外国人に憧れたからこんな名前なわけよ」

マイケルは一瞬寂しそうな顔を見せる。

もしかして子供の頃、この名前をからかわれたのかもしれない。  
しかしおじさんは私の肩を力強く叩きながら、白い歯を見せて二力  
つと笑ってみせた。

「家人もこの嬢ちゃんと子供こさえたときは氣いつけるよ？変な名  
前だと子が悲しむ。俺あ客に覚えてもらいやすいから、この名前を  
それなりに氣にいつてんだけどな。ハハハハハ！」

「こ、子供ですかっ？！」

「あくまでこっちは友達だからな。妙な誤解はするなよ」

「友達、ねえ……」

マイケルはユカの方を見て目を細くした。  
ふう……と息を吐くと今度はユカの肩を叩き始めた。

「嬢ちゃん。こいつは中々鈍い奴だ。だが悪い奴じゃねえことは保  
障する。苦労するたあ思うが頑張れよ！」

「は、はい！」

「？」

馬鹿にされたのか褒められたのかよくわからなかったので、また来  
るとだけ告げて再び歩き始めた。

「家人さん。何処に向ってるんですか？」

「餅は餅屋なのだから花は花屋だ」

「きゃー、引つたくりよー！」

「！！！」

次回へ続く

### 第32戦 VSデート「商店街とストーカーズ」(後書き)

デート編開幕です。

正直ストロベリーな話は書くのが恥ずかしいので、割とほのぼのしてます。

マイケルさんは気に入ったので、いつか再登場させたいと思います。



### 第33話 VSデート「引ったくりばあさん」

「キャー、引ったくりよー！」

「家人さん、あれ・・・」

「引ったくりだな」

事件の場合は私達の位置より少し先。

50歳くらいのばあさんが引ったくりに合っている。  
否、その逆だ。

50歳くらいのばあさんが引ったくりをしている。  
ちなみに悲鳴はたまたまそばにいた齋藤さんだ。

「ってそんな驚いてる場合じゃないです！」

「む、そうだな」

「アハハハハハ！私にに追いつけるかのお！」

「早ッ！」

これがあの100キロババアというやつか？！

アメフト選手顔負けのフェイントとスピードで私とユカを抜き去った。

致し方ない！

「マイケル！」

「合点承知！」

マイケルが引ったくりばあさんに飛び掛る。

しかしばあさんは嘲笑うかのように、ひったくったバッグを宙に放り投げ、続いて自分もマイケルを飛んで避ける。

空中で身動きが取れなくなった標的。

これを逃す手は無い。

「喰らえ小松菜！」

ゴンッ

「・・・明らかに小松菜を投げた音じゃないんですけど」

「今小松菜は旬だからな」

マイケルと拳をぶつけ、喜びを分かち合う。

引ったくりおばさんは気絶したままなので、頭をわしづかみにして持ち上げると「ああ、やっぱりか」という思いが胸に広がる。

「花子・・・」

「やあ、家人。おつきになったのぉ！」

ゴンッ

『カンナちゃん、あの小松菜何製だと思う？』

『99%の努力と1%の閃きとかじゃないですか？』

『欲しいですね・・・あの小松菜』

『絶対に真木ちゃんの手には渡って欲しくないわね』

「お知り合いですか？」

「知り合いも何も親戚だ。大和花子。そして今回の目的地、花屋の店主だ」

「やたらと都合がいいですね・・・」

「うちに用かい？なら付いておいで」

ゴンッ

「その前に引ったくったバッグをどうにかしろ」

「盗んだ品物はもうマイケルが返してくれたよ」

「それでは警察に突き出すか」

「待っておくれ！こんなの日常茶飯事じゃあないか！」

「それもどうかと思うんですけど・・・」

「ばあさんが引ったくりを行うのは趣味だったりする。」

「スリルが楽しいだけなので、盗んだものは後でちゃんと返すそうだな。なんとも迷惑な趣味だ。」

「で、何をお求めで？」

「仏壇一式。勿論おまえのだ」

「家人さん。花壇ですよ、花壇！」

「あいよー」

「花子おばさんが店に入ったので、私達もそれに続き店内へ足を踏み入れる。」

「ユカが驚いたように店内を見回す。」

「意外と普通なんですなー」

「いや。品揃えは絶滅したはずの植物や、法に触れるようなもので多様多種だぞ」

「ですよー」

『リンは多分、ここで仕入れてたのね・・・』

『先輩。そんな暗くならずにつ』

『どういことですか？』

『黒魔術とかそんな感じよ・・・』

「これでどうだい？」

奥から出てきた花子おさんは花壇一式を手になっていた。  
花壇一式は袋に入れて、一つにまとめてある。

「妙なものは入れていないだろうな？」

「せいぜいマリファナ程度」

「・・・」

「嘘嘘嘘、冗談だって！この店じゃそんなモン扱ったらんよー！」

「家人さん、小松菜食べなくなりますよ」

「もう遅い。こいつはもう血まみれだ」

「値段をまけるから許しておくれ、なあ?!」

その言葉を聞きたかった。

マイバッグに小松菜を詰め込み、花壇一式をおばさんの手から引きたくる。

料金を支払い小松菜で殴りつける。

「大丈夫ですか?」

「流石の私も女性に荷物持ちはさせないさ」

「そうじゃなくておばさんの方です」

「放っておけ」

頭から血が流れているが心配ないだろう。

50過ぎとはいえ、私の母と同じ血が流れているのだ。

「家人さん。そのサンタクロースみたいな格好で映画館に行くつもりですか?」

「む、確かに」

どうしたものか。

花壇一式はとても大きく、運ぶのに不便だ。しかし一旦宝蓮荘に帰るのも面倒だな。

ふうむ。

あ、そうだ。

「又又」

「又〜ン」

「・・・何で花壇の袋から出てくるんですか」

「細かいことは気にするな。又又よ、これを家まで運んでくれ」

「又ン」

又又猫が又〜ンと鳴くと、何処からともなく猫の大群がやってきた。もうひと鳴きすると、猫達は花壇一式の袋をみこしのように担いで持って行った。

「又ン」

「ご苦労だ」

又又猫は元々私が持っていたバッグに潜り込んだ。  
ユカはただただ戸惑っている。

「えと・・・」

「次はスーパーだ。袋にはじょうろが入っていなかったなので、じょうろを買う」

「は、はい!」

次の目的地

第23戦のときのスーパー



第33話 VSデート「引ったくりばあさん」(後書き)

話が進まなかったorz  
デート編は3話のつもりが4話になってしまいました。  
そのうち5話に増えそうで怖い・・・

### 第34戦 VSデート「店員H」

「スイマセン、お客様。当店ではじょうろは取り扱っておりません」

「だそうですよ?。」

「実は隠しているのだろう?早く出せ!」

「家人さん。時には間違いを認める勇気も大切です。100円ショップにでも行きましょう?。」

『そもそも何でじょうろを買いにスーパーへ行くのかしら?。』

『あのスーパー品揃えがいいんですよ。ボクは前にマスキット銃とかクレイモアとか売ってるのを見ました』

『何でそんなモノが売ってるのよ・・・』

『武器マニアの店員が、諸事情によりコレクションを売りに出したそうですよっ』

『ここはフリマか』

『フリマに武器は置いていないと思うんだけどなあ・・・』

『あ、見失いましたっ!』

『100円ショップという去何処の100円ショップだと思う？』

『フッフ、安心してよカンナちゃん。まだ策はあるのですっ！！』

「というわけで100円ショップだ」

文字数を考慮しろ、と言わんばかりの移動スピードだ。

一応これでもバスに乗って駅近くのエリアに移動してきている。

「何処を向いて話してるんですか」

「細かいことは気にするな」

自動ドアをくぐり店内を歩き出す。

「じょうろはどこだろうな」

この100円ショップは来るたびに地形が変わるので、何処に何があるかわかりにくい。

一説によれば店長が模様替えが好きなんだとか。  
たまにあるゲームのダンジョンのようだ。

「じょうろさん、どこですかー」

「ハハハハ、そんなことを言ってもじょうろは出てこないぞ」

「ですよねー」

「僕がじょうろですけど何か御用でしょうか？」

「・・・少しそんな気はしてました」

ニコニコと私達の前に現れたその店員に、私は見覚えがあった。この前スーパーに行ったとき見かけたような気がする。確かこの顔は・・・

「店員Hか！」

「正解です。苗字が上臈<sup>じやうろう</sup>で、名前が叡智<sup>えいち</sup>です」

話を続けると、店員Hはスーパーと100円ショップのバイトを掛け持ちしているらしい。それぞれの店長が友人のため、色々とこじれて掛け持ちすることになったそうだ。

「で、じょうろは何処だ？」

「ですから僕はここにいます」

「いや、そっちのじょうろじゃない。水を出す方のじょうろだ」

「僕からも液体は出ますけど？」

「・・・・・・ああ、唾液か」

答えるまでに間があったことに関しては何も言わないでくれ。

私とて健全な男子生徒なのだ。

店員Hが若干にやけている所を見ると、どうやら狙って言ったよう

だ。

「じょうろは奥から二番目の棚です」

「ありがとうございます！」

「それでは」

そして彼は次の客に対応しに行った。  
私達は言われたとおりの棚へ足を運ぶ。

「え」と

「ユカ、反対側にあつたぞ」

「あ、はい」

ユカが棚のじょうろに手を伸ばすが、悲しいことに高さという壁に  
阻まれてしまったようだ。  
懸命に背伸びをするも届かない。

「取ってやろうか？」

「いいえ、自分で取ります！」

妙な意地ができてしまったらしく、断られてしまった。  
頑張っているのだから、少し放って置くかと壁に寄りかかり見守る。

この判断が後々大惨事を招くとは、このときの私には知るよしも無かった。

「わっ！」

ユカはいきなりバランスを崩し、商品棚へ倒れこんだ。  
何とか途中でユカを抱きとめる。  
しかし棚はもう止まらなかった。

「え」

倒れた棚は隣の棚に倒れこみ、そのお隣さんの棚は隣の棚を押し倒す。

というように棚のドミノが倒れていく。

私達が数秒間固まっていた間に、じょうろのあった棚の列が全て倒れる。

さらに間をおいた後、なんとなく思い出したように呟いてみる。

「・・・中々良い眺めだな」

「そんなこと言ってる場合じゃ無いですよ。うう」

ユカは頭を抱え込んでしまった。  
仕方ない。

「店員H、いるかー！」

「殿、こちらに控えております」

「お前この状況でよく冗談が出るな・・・」

自然とため息が出てくる。

「僕がこの状況をどうにかしましょうか？」

そう言いながら店員Hは表面的にはニコニコと、深層的には腹黒そうに笑顔を浮かべる。

あまりいい気はしないが、背に腹は変えられん。

「では頼む」

「それじゃ今度、飯でもおごって下さいね？」

ま、それくらいならいいか。

「僕の胃袋が宇宙並ですけどね」という言葉が付け足されたが、その言葉は聞かなかったことにして、頭を抱えたユカの手を引っ張る。

「え、このままでいいんですか？」

「ああ。多分あいつならなら上手くやるだろう。さっさと映画館に行くぞ」

パニックに陥った地震後のような店の中で手を振る店員Hに別れを告げ、外へ出る。

本来ツレがやったことに責任を取らないのは不本意だが、飯をおごるのだからよしとするか。

「こちら大和高校美少女同好団体校外団員、上臈叡智。ターゲットを確認。これから映画館に向う模様です」

『わかりました、了解ですっ  
』

店員Hこと上臈叡智のその後

「店員Hこれはどういうことだ！」

「すみません店長。少しドミノで遊んでいただけです」

「そうか。ならいい」



### 第34戦 VSデート「店員H」(後書き)

更新が遅れてしまい、すいませんでした。

遊び呆けていたら、趣味に当てる時間がろくになくて・・・  
とか思ったらユニークアクセス数が40000人突破！  
ありがとうございます！！

ちなみにページ総表示回数は130000hitです。

次回でデート編は終わりになります、きつと。

予告風に言っと

二人のデートはいつたいたどのような終焉を迎えるのか！？  
続きは次回へ！！

### 第35戦 VSデート「橋上の告白」

今回の話はボク、橘カンナ視点だよ。

映画が終わった後も、おにいちゃんを尾行続行。

橋の上にお兄ちゃんとユカさんがいるのを、ボク達は少し離れたから木の陰から見ている。

「だ、大丈夫ですか、家人さん？」

「……ヒック……ホラー映画なんて二度と見るものか……」

『泣いてるけど、アイツ』

『ギャップ萌えですねっ』

『そつえばお兄ちゃんは、昔からホラー映画が苦手だったなあ』

「泣いてなんか……いないっ……！」

「家人さん……ふふ」

「笑うな！」

ユカさんすごく楽しそう……

もしやS気質？

彼女は笑顔のままお兄ちゃんに提案する。

「さ、さっき買った杏仁豆腐があるんですけど、食べますか？」

「……ああ、悪いな……」

「はい、どうぞ」

「すまん……いや、何処で買ったのだ？」

「映画館で」

「……そうか」

二人は橋の上にあった椅子に並んで座っている。  
ぐ、ここから見ると恋人同士に見えないことも無い

「市販にしては、なかなかうまい杏仁豆腐だな」

「その分、普通より少し高いんですよ」

「いくらぐらいしたのだ？」

『何か交通人の視線が痛いんだけど』

『櫻先輩、それくらい我慢して下さい。心頭滅却すれば火もまた涼  
しって奴ですよっ』

『端から見たら、ただのストーカーだもんね』

『・・・カンナちゃん、元々ストーカーでしょ』

『いいえ、愛の追跡者です』

橋の上に風が吹き続ける。

少し目を離れた隙に、二人の間にただならぬ雰囲気が漂っている。と言うよりユカさんの顔がいつもとは別物の、こわばったものになっている。

お兄ちゃんはいつものままの自然体で、その雰囲気気づくことなく杏仁豆腐に没頭している。

「家人さん」

「なんだ、どうかしたか？」

ユカさんの瞳はろうそくの炎のようにユラユラと揺れているように見える。

ほんの少しの間なのに、長く、永久とも思える時間に感じる。

木の陰に隠れているボク達三人も言葉を発することなく、じっと二人を見ている。

同時に本当に美味しそうに杏仁豆腐を食べているお兄ちゃんに少し苛立ちを覚える。

なんだかなあ・・・

「その・・・」

「？」

橋の上に吹いていた風がやむ。

それとともに迷いを振り切り、たかのようユカさんの瞳には、決意の炎が燃え上がるのがうつる。

「い、家人さん、好きです！付き合ってください！！」

セリフは何処でもあるような普遍的なもの。

噛みそうになりながらも一気に出し切った言葉。

前置きもまったく無い。

にもかかわらずそれには重みを感じられる。

「ああ、私は一向に構わないぞ」

「家人さん・・・」

お兄ちゃんがそれがさも当然のように返されたの返事に、ユカさんは緊張が含まれたような息を吐き出し安堵する。

ボクの頭はそれを見て頭の中が真っ白になってしまった。

『家人先輩』

『・・・・・・・・』

お兄ちゃんが付き合うことにしたということは、僕の失恋を意味する。

その事実を頭で理解したとたん、胸が締め付けられる。

好きな人がどこか遠くへ行ってしまったのかのよう。

苦しいよ・・・

「ほら行くぞ、杏仁豆腐を買いに」

「え？」

『は?』

『よかったっ  
』

はい?

なんて今言ったの?

まさか・・・

「ああ、私も好きだぞ、この杏仁豆腐」

なるほど。

ハイハイハイハイ。

好き 杏仁豆腐が

付き合う 杏仁豆腐をもう一つ買いにいくのを  
だと思ったと。

あはははははは・・・はは・・・は・・・

「・・・・・・・・」

「どうした?」

『どうしたじゃないでしょうが・・・!』

『ま、先輩ですからねっ  
』

まさかおにいちちゃんの鈍感力がここまでのものとは・・・  
決死の告白をかんちがいなんて・・・  
はあああああ。

とりあえず

「「「ふざけるなあっ!!」「」」

「グハアッ・・・?!」

ドボン!

ユカさん、ボク、櫂さんのトリプルキック。

そのままお兄ちゃんは橋から落ち、河にはドボン。

「で、なんで櫂さんとカンナちゃんがいるんですか?」

マズい、非常にマズい。

どうしよう・・・

「真木ちゃんも出てきてください」

まだ隠れてたってことは、絶対やり過ぎす気だったんだろうな・・・  
少しずるいなあ、まったく。

「えへへ、バレちゃいましたかつ」

「ずっと尾行してたんですね?」

「え、いや、あの・・・」

怖ッ。

修羅がそこにいる!



体感温度が5度くらい下がった。

「すみません……………」

「ごめん……………」

「ごめんなさいっ」

真木ちゃん、よくこの空間で笑顔でいられるね。

僕は怖くて仕方ない……………」

あ、真木ちゃんも冷や汗ダラダラだった。

「いいですよ、私も怒っているわけではありませんし」

ふう、とまたため息をつく。

その割にはさつきから殺気がもれてるよ……………」  
ほんとに怒ってないの?!

「私が怒っているのは家人さんにです」

そっちなあ。

ま、お兄ちゃんは自業自得だよな。

「それじゃ帰りましょう、宝蓮荘に」

「はい」

「疲れたわ……………」

ユカさんの勇気を振り絞った告白がなしになったら、お兄ちゃんの

鈍感さへの怒りと安堵で複雑な気分だ。

まあいつか。

川を流れてるお兄ちゃんは放って置いて帰ろ。

「へつくしゅ！私がいつたい何をしたというのだ……へつくしゅ！」

橘家人は川に流されて帰宅。  
後日風邪をひく

### 第35戦 VSデート「橋上の告白」(後書き)

ハイ、これで4話にわたるデート編はこれにて終了です。

主人公はデートだとは思って無いでしょうけど。

しかし映画館に行くことになったのは、昨年の12月の頭に更新したはなしです。

今は3月(もうすぐ4月)。

この4ヶ月間何してたんだ！

ナドの苦情は主人公様をお願いします。

決して私が忘れてたわけではありません。

ただ忘却の彼方へトんでいただけです。

・・・ごめんなさい。

### 第36戦 VS 風邪と玉ネギ

「ゴホッ、ゴホッ……はぁ……はぁ……」

はぁ……風邪（&熱）をひいてしまった。

そのためベッドの中で悶え苦しむ羽目にあっている。

何故私が河に突き落とされなければならんだ。

理不尽、実に理不尽。

「……リンゴ……」

「ああ。すまん、林葉」

情け無いことにベッドを出るのも億劫だ。

林葉の剥いてくれたリンゴを食べようと手に取ろうとしたがさえぎられ、直接口に入れられる。

そのくらいはまだできるのに……

リンゴを頬張って堪能していると、更に熱が上がりそうな人物が現れた。

「呼ばれて飛び出て、ジャジャジャーン」

「呼んでない。帰れ……」

「ヒドい。麗香先生、超ショックう」

「……」

麗香は年甲斐もなく、わざとらしく落ち込む。

とりあえず罵ろうかと思ったが、すっかり年齢のことに触れそうになったのでやめておこう。

麗香の年の事に触れて、怒らせると怖いからな。

「で、何しに來たのだ？」

「心配だから一応見に來たのよ」

「麗香に心配されるとは・・・早く治さないとな」

本当に不甲斐無い。

何か早く風邪を治す手段は無いだろうか？

「・・・玉子酒・・・」

「ああ・・・ありがとう」

実は真木の作ったモノではあるまいな？

というオチを警戒して、においを嗅ぐが、異常は無い。  
今回は無臭性か？

「・・・大丈夫・・・」

どうやら考えを見透かされてしまったようだ。

安心して玉子酒を飲みほす。

しかしすぐにぱっと風邪は治らない。

風邪を治す手段が何かないか。

「・・・ネギ・・・」

布で包んだネギを首に巻きつけるのは、よくある民間療法だが・・・  
効果の程はどうなのだろうか。

「お尻にいれても効果があるって聞いたことがあるわ」

「・・・やるなよ？」

座薬なんかより大分辛い。

そこまでして風邪を治したいとは思わない。

事が済んだ後、ネギはどうするのか。

次の朝のみそ汁なんかに・・・と思うとぞっとする。

「・・・口からなら・・・」

「リンちゃんったら　　なんて、おませさんね」

ネギを男性のアレに見立てるなあああ！！

今までそういつつもりで言ってたんだな？！

ってよく考えると、私が啞える立場じゃないか！！！！

叫びたくとも悲しいことに怒鳴るだけの力が残っておらず、ヒュー

ヒューという音の呼吸になるだけだ。

林葉は顔を下に向けている。

わかりずらいが、恐らく恥らっているのだろう。

「下・・・ネタは・・・やめ・・・」

「あらららら？体力の限界が近づいてるみたいね」

周りの景色が僅かに歪む。

麗香の声が、どこか遠い世界からのもののように感じる。

頭が意識と無意識の境界線上で揺らいでるかのように朦朧としてくる。

「これはもう、ネギしかないわね」

何故か混濁した意識の中でその言葉だけが、やけにクリアに聞こえてきた。

「へぶらっ!!?」

「どうやら成功したみたいね」

「・・・ネギが無いから・・・」

「ほ」・・・!?!?んぐ・・・!?!?」

ネギの代わりに台所にあつた玉ねぎがああああ!!  
顎が外れるっ・・・!!

「もういいわね」

心情的にキュポンと、私の口から玉ねぎが吐き出される。  
涙目になりながら麗香を睨みつけるが、豆腐にかすがい、暖簾に腕  
押し、ぬかに釘。  
まったく意味を成さなかった。

「で、おいしかった?」

「ふざけるなああああ!死者に鞭打つような真似をするとは・・・  
本ッ当おまえって奴はああああ!!」

「死者じゃなくて病人じゃない。むしろ風邪が治って健康になってるわよ？」

「あれ？」

声も普通に出るし、ためしに測った温度計は平熱を示していた。のしかかるような倦怠感も無い。

今で風邪が完治したのか？

「これがショック療法って奴かしら？」

「・・・不思議人間・・・」

「違う、私は正常だ！」

恐らくは玉ねぎだ。

あの玉ねぎには何らかの特殊な作用が・・・

「家人は蓮の息子じゃない。それで十分な説明になるわ」

「・・・」

そう言われると納得せざるを得ないような気もする。

母さんは40の熱でも巨大雪だるまを作るような人だから・・・どこかと遠い目をしながら、超人な母に思いをはせる私であった。



3分後、橘蓮来襲

### 第36戦 VS 風邪と玉ネギ（後書き）

ここだけの話、家人の母（橘蓮）のモデルとなったキャラクターは私の母親です。

流石に私の母はあそこまで超人ではありませんが。

喜怒哀楽がハッキリしている、という点です。

あと子供っぽいところとか。

今思えば宝蓮荘の大人たちは子供っぽい奴ばっかだ・・・

### 第37戦 VS ガーデニングと箱

空は雲ひとつ無い晴天。

今日は絶好の昼寝日和だな。

又又猫は早速、屋根の上で昼寝を堪能中だ。  
そんな日に不釣り合いの表情をした人物が。

「家人さん、おはようございます」

麦藁帽子に軍手という農家スタイルは別に良い。

ただ口調こそ静かなものの少し不機嫌そうに見えるのだ。  
怒っていると言うより、いじけていると言った方が正しいか。

「おはよう、ユカ。で、何故私を呼び出したのだ？」

「はい。今日はガーデニングをしようと思ひまして。家人さんが元気になるのを待ってたんです」

顔が笑っているが目があまり笑っていない。

「えと・・・何故怒っているのだ？」

「いいえ！怒ってなんかいませんよ！！」

と言いつつ怒る。  
ふうむ。

「・・・ユカ、私が何か悪いことをしたのか？なら謝る」

「・・・・・・・・・・・・・・・・・・はあ」

呆れた目をした彼女は、少し何かを考えた後目を閉じてため息をつく。

更にボそりと独り言をつぶやくと、少し呆れた様子で微笑む。

「ま、家人さんですからね。そのくらいは覚悟してます」

「？」

「何か自分が悪いことをしたと思うなら、ガーデニングを手伝ってください」

「ああ、わかった」

とりあえず大きめのスコップで穴を掘る。

機嫌をなおしてくれたユカと他愛の無い世間話をしながら20cmくらい掘り進めると、スコップに何か固いものがぶつかった感触がした。

「む？」

「これなんでしょうか？」

埋蔵金だったりしたら嬉しいのだがな。

未知の物体を掘り出してみるとそれは古びた箱だった。

大きさはランドセル程度で、中世ヨーロッパ風の怪しい装飾が施されている。

「何が入ってるんですか!？」

「そう急かすな．．．む、鍵がかかっている開かないな」

「あ、ちよつとここを見てください」

「ん？」

ユカの指差した場所を見ると、そこにパズルがあった。

パズルは鍵の部分についていて、正方形の形の中に8つのピースと9つのスペースがある。

カシャカシャと上手く動かしていけば、1つの絵が完成しそうだ。

「このパズルを完成すれば、蓋が開くと言うことですな！」

「じゃあ私は花壇作りの方を進めているから、ユカはこのパズルをどうにかしてくれ」

「わかりました！」

ユカが眉間にしわをよせパズルを解いている横で、私は花壇作りを進める。

しかし土いじりとは良いものだ。

何処か清々しい気分がする。

そういえば昔は砂場で遊んでいたものだ。

一緒になって遊んでいた母さんが、泥団子を私に無理やり食べさせた思い出が強烈なのが残念なところだが。

その後、下痢で3日3晩苦しんだのは本当に辛かった．．．

「む」

私が花子おばさんから貰った土を穴に入れ替え、周りにレンガを積み始めた時点でユカにとうとう飽きが来たようだ。

「家人さん、ギブアップです……交代お願いします」

「ああ。では後は頼んだ」

適当にそこら辺に腰掛け、パズルの攻略に取りかかる。  
ふうむ。

風化していて見にくいが、絵はどうやら何かの建物のようだ。

ここにこのピースを入れるとこっちが動けなくなってしまうから……

・ああもう！

パズルを睨みつけていると、我が家の住人が帰ってきた。

「……ただいま……」

「あ。おかえりなさい、リンちゃん！」

「おかえり、林葉。何処へ行っていたのだ？」

「……図書館……」

ユカに花壇について2、3質問をすると、今度は私の持っている箱に興味を移した。

「ああそつだ。林葉、これを解いてくれないか？」

「……ん……」

林葉は箱を受け取った後、数秒の間パズルを見つめる。

何かがピンと来たらしくカシャカシャとピースを素早く動かしている。

「・・・はい・・・」

「おお、ありがとう」

ユカが長い時間をかけても解けなかったものを、林葉が1分もかからずに解いてしまうとは・・・  
努力賞の方に目をやると、案の定いじけていた。

「・・・私も頑張ったんですよ？うう・・・」

「・・・えと・・・」

林葉は少し困ったような仕草をしながら、ユカを慰めようとする。  
さて、パズルの絵はどうやら宝蓮荘の絵だったようだ。  
ということはここに縁があるものが残っていたものか。  
中身あるものは何だろうか？  
カチリ、と鍵を外し蓋を開ける。

「これは・・・」

どうやら私が勝手に見てはいけないもののようにだ。  
後で本人に渡してやるとするか。

「あ、家人さん。中身はなんだったんですか？」

「んー内緒だ」

にやりと笑う。

しかし2人は納得がいかないようで、ブーイングを受けてしまった。

「そ、そんなのずるいですよー!」

「・・・閲覧を所望する・・・」

仕方ない。

中身が何かくらいは教えてやるとするか。

「なんてことは無い。ただのタイムカプセルだよ」

へえーとユカは爛々と目を輝かせる。

林葉も控えめだが少し見たがつているようだ。

「駄目だ駄目だ。こういうものは無闇に他人が見ていいものではない」

「えー」

「・・・不満・・・」

2人ともまだ納得がいかないようだ。

ユカはともかく、林葉も意外と好奇心旺盛だな。

「まあまあ。2人とも交換日記やメールの内容はあまり他人には見られたく無いだろう?その人たちだけの少し恥ずかしい話などもあるわけだしな」

「夢を語り合ったり、好きな人の話を人に見られるのはちょっと嫌



ですね・・・」

「・・・なら諦める・・・」

おもちゃを買ってもらったのを諦めた子供のようにだ。  
その光景に思わず口元が緩む。

「さあ、花壇をさっさと完成させてしまおう！」

「は、はい！」

「・・・支援する・・・」

林葉も手伝ってくれるなら大助かりだな。  
ありがたい。

皆で花壇を作り始めると、あのタイムカプセルの箱に少し目がいく  
中であつた手紙に名前が書いてあつたので、誰のものはわかつて  
いる。

息子に泥団子を食べさせるようなあの馬鹿は、渡したらどんな顔をするだろうか。

タイムカプセルは橘蓮や曲尺、高峰麗香達のもの  
久々に集まった彼らは、それを杯に居酒屋で盛り上がったようだ

### 第37戦 VS ガーデニングと箱（後書き）

新生活が始まり、多忙になったため更新が遅れました。すいません。

・・・まあ欲しかった某シューティングゲームを友人から貸してもらったのも原因の1つですが。

本当にすいません。

更新は遅いとは思いますが、思い出した頃にお付き合いいただけたら幸いです。

で、今回の話について。

思うようにギャグが出ず、結局ギャグが少なめになってしまい失敗かなーと思ったんですが、終盤のあたりは書いてるほうは楽しかったです。

ほのぼのを書いているときが一番かもしれません。

私だけが和んでいるのも微妙ですが。

読者様と一緒に楽しめたらいいなあと。

にしてもエイプリル fools を逃してしまったのは大きな痛手だった・

・

### 第38戦 VS 井モノ暴走形態（前書き）

約一名、いつもとキャラが違う人がいます。  
春だからです。  
ではどうぞ。

### 第38戦 VS 井モノ暴走形態

本日も快晴。

雨が降るよりか幾分マシだが、少し暖かすぎる気もしなくも無い。そんな天気のため私は窓際で、ゆらり、ゆらりと揺り椅子に揺られる。

手元の本を優雅に楽しむ。  
が、予期せぬ不法侵入者。

「家人君、新しい入居者がいたりとかしない？」

「別に特にはないが………どうかしたか、井モノ？」

急に私の部屋に来て、藪から棒になんなのだろう。  
揺り椅子で読書を嗜んでいたのを邪魔されたので、少し眉間にしわを寄せて聞き返す。

これで毛布を膝にかければ、私の理想のゆったりライフが過ごせるのだが、部屋があまりそぐわない気もする。  
どちらにせよ訪問者が来ている時点で無理だが。

「突如宇宙人が浴室に現れたりとか」

「ない」

「実は僕の妹がいたりとかしない？」

「親に聞け」

春の陽気を通り越して暑さを感じる。

学校の周りの桜の木も散り始めていたしな。

葉桜も葉桜で風流があつて良いが、毛虫が多くなると辛い。

「ほら、父親が再婚して義理の妹ができたり・・・姉でもいいから！」

「やかましい。貴様の両親は二人とも永遠の新婚カップルみたいなものだろ」

「大きくなったら結婚しようねとか言つてた僕の幼馴染とかいる？！」

「頭を冷やせ！！」

怒鳴つたせいでまた暑くなつたな。

夏本番はまだまだというのに、すでに夏真っ盛りだ。

地球温暖化めえええ！！

「ぜえぜえ・・・」

違うか。

地球温暖化よ、すまん。

暑さに当てられた井モノが原因だ。

待てよ？

井モノがこうなつたせいで暑くなつたのか、それとも暑さに当てられたからこうなつたのか？

やめだ、鶏が先か卵が先かなぞどうでもいい。

「家人君、僕は妄想を現実に変える力が欲しい」

それは無理そうだが、妄想を現実と間違えることは無いとも言いきれないな。

というか井モノの暴走は止まらないのか？

「とにかく僕のラヴコメ的なものは?!」

随分と露骨になってきたな。

早くもとに戻れ、井モノ。

「その前に問題がある。お前は女性が苦手だろう」

「二次元なら問題ないよ」

「問題大有りだ!」

リアルを直視して欲しい。

よく見ると井モノ目は焦点が合っていない。

変なものでも口にしたのだろうか。

こういう話になったとき、いつもこんな感じだった気もするが。

「運良く女の子だけが住む島に漂流しないかな」

「漂流してる時点で運が良いのか悪いのか・・・」

「仕方ない。電車で誰か女の人を助けてくるよ!」

「痴漢に勘違いされてしまえ」

人の趣味にどうこう言うつもりは無いが蒸し暑い。

おそらく湿度は井モノから分泌されている汗が加湿器の役割を担っ

ているせいだ。

窓を開けたいが、開けると麗香が入ってくる予感がするので開けたくない。

というかそこにいる。

前回割ったときしかられたせいかな、窓ガラスを割る真似はしないよ  
うだ。

どちらかと言うと私が今、にらんで威嚇しているせいだが。

「（入れて）」

麗香は口パクとジェスチャーで私に窓を開けるように頼む。

私は勿論それに答えず睨み返すだけだ。

しかしそれでも帰りそうも無い。

「（１１０番するぞ）」

そう言うて私が受話器を手にとると、麗香はおとなしく帰っていった。

寂しそうな背中をして。

何がしたかったのだろうか？

「深夜に何かの戦いに巻き込まれたい」

「宝蓮荘内でもちよくちよくあるぞ」

この井モノはどうにかならないものか。

あ、そうだ。

「宇宙人っぽい女の子ならすでにいるぞ」

「何処に?!」

ぱちんと指を鳴らす。

すると又又猫が押入れをスウツと開ける。

「って何このエイリアンんんんん!!」

宇宙から来たつぼくてメスも恐らく混じっているだろう。  
ご要望どおりだ。

エイリアンもどき達は井モノの体に群がる。

「う……あ……」

彼の叫びは声になることは無く、ただただ恐怖に落ちていくだけだった。

その声にならない叫びを音楽にして、私は再び椅子に揺られる。

エイリアンもどきは猫族が天敵らしい  
101号室の食物連鎖は下記の通り

猫 エイリアンもどき 虫



### 第38戦 VS 井モノ暴走形態（後書き）

久々に書いたら、いつものようにうまく進みません・・・  
キャラが把握できずにいます。

あと今回、色んな所からのネタが多かったので解説してみます。

「突如宇宙人が浴室に現れたりとか」

ジャンプのTOLLOVE です。

最初にこのマンガをジャンプで立ち読みしたとき、本気で日本の将来が不安になりました。

人のこと言えやしませんが。

「実は僕の妹がいたりとかしない？」

どれ？ということはありません。

まあどっかにはあるよね、ということでGO。

「ほら、父親が再婚して義理の妹ができたり・・・姉でもいいから！」

上記に同じ。

ある意味王道。

「大きくなったら結婚しようねとか言ってた僕の幼馴染とかいる？」  
「！」

上記に同じ。

私のイメージとしては「ご愁傷様、宮君」です。

タイトル間違つてたらスイマセン。

いや、けどそんなセリフは無かったような・・・

「家人君、僕は妄想を現実に変える力が欲しい」

正確には「理想を現実に変える能力」だったかと。

植木の 則です。

絵を1巻と最終巻比べると、成長っぷりがよくわかります。

「運良く女の子だけが住む島に漂流しないかな」

これは「流されて 島」

タイトル間違えているかもしれません。

読んだこと無いのに内容を大体知ってる謎。

「仕方ない。電車で誰か女の子の人を助けてくるよ！」

有名な電 男です。

私も電車で女の子の人を助ける勇気が欲しいです。

「痴漢に勘違いされてしまえ」

知ってる人いるか、わかりませんが痴 男。

関西可愛いよ、関西。

オ ニーマスター黒沢もタイトルは面食りましたが良い作品です。

「深夜に何かの戦いに巻き込まれたい」

これと言って特には。

しいて言うならF a eとか。

PS2版なら買っても大丈夫ですよね？  
あれ、何か巻き込まれてましたっけ？

ハイ、長くなりましたが以上です。

### 第39戦 VS月光町プリン

夜。

外を窓から覗く。

曇りのせいか月明かりはないが、人工の光のおかげで明るい。  
暗闇だらけの昔とは大きな違いだ。

宇宙から見ても光がわかるほどの光を人は実現させた。

人の欲<sup>ユメ</sup>への願う気持ちと、先人達の努力。

しかし欲望である以上、他への弊害も多い。

これもその欲<sup>ユメ</sup>が起こした弊害の一つ・・・

プロローグ終了、以下本編。

「ボクは絶対に謝らないもんね！」

「あー、うん」

麗香が私の部屋に来て「カンナちゃんに追い出された」といって泣きついてきたので、仕方なく問題解決のためにカンナと麗香の部屋にきた次第だ。

どちらが居候だかわからなくなってくるな。

「で、何が原因なんだ？」

「これ！」

カンナが指差したその先には空になったプリンのカップ。  
寂しげに倒れている。

喧嘩の原因はプリンのようなのだ。

「お前プリンぐらいで追い出さなくても……」

「お兄ちゃんはわかってない！これは喫茶カフェの月光町プリンなんだよ！？」

ああ、ウチのあれか。

月光町プリンは1ヶ月に1度くらいに50個限定で売り出される高級プリンだ。

店長曰く、作るのが大変だから毎日作ってられないとのこと。

名前の由来は某NHKアニメからだそう。

「結局はプリンを勝手に食べられたただけだろう？」

「じゃあ楽しみにしてた杏仁豆腐を勝手に食べられたら、お兄ちゃんはどう思う？」

「血祭りに決まっているだろう。当たり前だ」

「当たり前、じゃない！」

スパーンと後ろからスリッパで叩かれる。

この感触は……っ！

「嚙。何をする」

振り返ると腕を組み、少しきつい目をした嚙。

「話が余計こじれるでしょ。らしくもない」

「す、すまん」

いつの間にか櫂が不法侵入していた。

私の部屋ではないので、とやかく言つつもりはないが。

「えと・・・櫂さん・・・」

「話は大体わかったわ。麗香先生は今どんな感じ？」

「泣きつかれて眠っている」

「子供・・・？」

「麗香さん、精神年齢は低かったり高かったりだから」

フツ、とカンナの顔に影が差す。

どうやら苦勞しているようだ。

「麗香は謝ったのか？」

「謝ってたけど・・・」

「カンナ。麗香のことを許す気はないのか？」

「元々そんなに怒ってるわけじゃないんだけど・・・」

と言葉の後を濁らせる。

ふうむ。

追い出すまで起こってしまった以上、こちら側からは和解しづらい  
というところか。

「カンナちゃんはこのままでいいの？」

「そ、そんなわけないよ・・・！」

うつむいた顔を上げ反論するカンナはどこか泣きそうだ。  
どうしたものか。

私としても早く麗香に部屋を出て行って欲しいところだ。  
宝蓮荘をおさめる者としても放って置くわけにはならんし・・・

「ボク・・・麗香さんに嫌われてたらどうしよう・・・」

「あー、もう！まどろっこしい！！」

「家人？！」

「え、お兄ちゃん？！」

ドアを開け放ち、夜の暗闇に突っ込む。  
階段を駆け下りて、一階の自分の部屋に向う。

「全く手の焼ける・・・」

やるべきことは一つだけだ。

ドアを開け放ち、台所でうずくまっていた麗香の名を呼ぶ。

「麗香！」

「え・・・？」

「ちょっとこっち来い！」

動揺している麗香の腕を引っつかみ、106号室へまた戻る。  
また階段を駆け上がる。

「！」

小言を言っているが、そんなもの全部無視だ。  
知ったことではない。  
カンナたちが待つ部屋のドアを開け放つ。

「はぁ・・・はぁ・・・ほら。つれて来たぞ」

ぱいっと麗香を投げて、かなと向かい合わせる。  
後は当人達の問題だ。

「カンナちゃん・・・」

「麗香さん・・・」

気まずい雰囲気が漂う。  
そこで櫂が動く。

「ほら、早くなさい」

そう言ってカンナの背中を押した。

「えと・・・出てけなんて言っちゃってホントにごめんなさい!」

「悪いのは私の方よ・・・ホントにごめん。お詫びに今度どこかへ一緒に遊びに行かない?」



「行く行く！」

それじゃ何処へ行こうかしら、と休日の過ごし方を二人は相談し始めた。

もう大丈夫だろう。

「櫂さんとお兄ちゃんも一緒に行く？」

「いや、遠慮しとくよ」

「私も」

「そうなの？」

残念そうな麗香の声にもう帰ると告げる。  
櫂も帰ることにしたらしい。

二人で外へ出る。

「これで一件落着ね」

「ああ、そうだな」

「私が今度、月光町プリン作ってあげてもいい？」

「その時はちゃんと2人分頼むよ」

また2人が喧嘩するのはごめんだ。

「何言ってるの。あんたも合わせて3人分よ」

「それならお前も合わせて4人分だろ」

「じゃあもう宝蓮荘の全員分つくるわよ」

笑いながら家路につく。

と言っても距離は無いに等しいが。

そんなこんなで櫂と別れ、自分の部屋に戻る。  
仲直りしてくれて本当に良かった。

「ふう・・・」

台所の電気をつけるとそこには寂しげに倒れた杏仁豆腐のカップが・  
・

この後「血祭りじゃああああ！」と叫んだ家人を、櫂が殴りに来たのは言うまでも無い。

### 第39戦 VS月光町プリン（後書き）

週一更新になってます。

もう読者様から見放されてる気がします。終わらせるまではしっかり更新していきたいです。

今回、色々ミスがあるかもしれませんが、その時は指摘お願いします。

とりあえず謝るトコらへんが納得いかないのです、そのうち書き直したいです。

## 第40戦 VS 新商品

「さあ、新メニュー開発会議を始めるわよん！」

「「おー（棒読み）」」

意気込む店長、やる気の無いバイト二人。

閉店後の喫茶カフェに私、櫂、店長の三人が集まっている。

日は暮れてお月様がそろそろ顔を出すだろう。

早く帰って又又猫の餌をやらねばならねば。

「なによお、ちゃんとやる気出さないよお」

「部活の後で疲れてるのよー」

「図書館で勉強して頭痛の状態で、急に呼びつけられたんだぞ」

「今月ピンチなのよん」

「それは櫂が思いっきり客に暴行を加えて、いろんなもの壊してたからだろ」

「あんたは笑いながら傍観してたじゃない！」

櫂が性的に嫌がらせしようとする客に、

あれはおもしろかったな。

常連客の方は「櫂ちゃん頑張れー」とかはやし立てていた。

「その件はちゃんと、その男をアチキが脅しといたから大丈夫よお」

「？」

悪役のようにニヤリと笑う店長。

その男に同情したい気もするが自業自得だ。

「それじゃ新メニュー提案を3つ用意したわ。まずはその1！」

テンションのやたら高い言葉とともに、銀色のドームを取り出した。名前がわからない。

ドームの中身は私と櫛から言葉を奪い去るに十分なものだった。

「……」

「その名もゴツキー！」

「「やめろ」」

ドームが取り除かれた皿の上には、ねずみサイズのゴキブリ君が。食えたものではない。

「えー。力作なのよお？」

ここまでリアルにあの漆黒の生命体を再現されても……本物と見分けが付かない。

しかも普通より大きい分、余計に気持ち悪い。

「その2。ビグロハマグリ・チョコケーキ！」

また微妙なものを。

色モノ以外のは無いのか。

「家人」

櫛が私の名前を呼ぶ。

どうやら「食え」ということらしい。

「・・・ビクビクと動いているのだが」

これ生きてるのではないか？

見た目を追求しないで、味の方で努力して欲しい。

「一応聞くがこれを作ったのは店長か？」

「後藤真木って子よお」

「うわあああああ！」

いつの間にか体についていた虫を払うように、ビグロハマグリ型チヨコケーキを投げる。

はあ・・・はあ・・・

「家人、何してるの！」

「うるさい、やかましい！店長に私の気持ちはわからない！！」

「気持ちはわかるけど、とりあえず落ち着きなさい。ほら、ヒッヒッフー」

「ヒッヒッフー、ヒッヒッフー・・・ラマーズ呼吸法に精神安定作用はあるのか？」

「さあ？」

ラマーズ呼吸法とは

「その3。あなたの隣に私はいない、よ」

「そんな題名の恋愛小説ありそうだな・・・」

おそらく恋愛関連の何かを見た後に作ったからだろう。

店長が自慢げに蓋をあけると、今までで一番まともな見た目のケーキが現れる。

「一応ショートケーキに見えるわね」

「だが変な形であることには違いない。何故カドケシの形でできているのだ？」

「経費削減よん」

微妙なせこさだな。

しかし削る分、労力要るだろ。

作る方は面倒くさそうだ。

ショートケーキの強度で、カドケシの形だと崩れやすいから製作難易度がかない高いな。

「そこは櫂ちゃんが作るから問題ないじゃない」

「それならば問題ないな」

「大有りよ」

スパーンと出所不明のスリッパで店長と一緒ににはたかれる。  
私まで叩かんでも・・・

「これは少しショートケーキの材料をを硬めにするか、心材のようなものを入れるべきよね」

「ではこれは、もう一度再検討だな」

「また協力してね、櫂ちゃん」

「暇な時に」

「あなたの隣に私はいない、の方はもって帰ってもいいわよ？研究用に」

「はいはい」

「コレで全部か、では帰るとしよう。帰るぞ、櫂」

「櫂ちゃん、送り狼に気をつけてね」

「それは私のことか？！」

「大丈夫でしょ。あんた羊だし」

うるさい。

硬派と言え、硬派と。





・あなたの隣に私はいない

・ハマグリキャノン形チョコG

・ゴツキー

以上の3つは全て発売

全て大人気商品になり、喫茶カフェの赤字の危機から救う  
(後、ハマグリキャノン形チョコGに中毒性を確認)

## 第40戦 VS新商品（後書き）

遂に40話ですよ、40。

まさかここまで来るとは・・・

感慨深い気がします。

あと真木について一応補足しておきます。

家人のためにケーキを作って喫茶カフェに持って行っただけです。

店頭販売しているモノは誰が作っているかと言うと、誰も作っていません。

勝手に増殖してるのを売ってるだけです。

死にはしない・・・はず？

## 第41戦 VS こともの日

「あゝといゝくつねゝるゝとおおゝしょゝうゝがゝつゝ」

「真木、正月はとづくに終わっているぞ」

今日は5月5日。

五月のお節句だ。

「ハハハハハ、見よの兜を！」

健児が腰に手をあて、実家から送られてきたものは兜をかぶっている他にもミニこいのぼりなどが送られてきている。

「家人お、この兜カッケエだろ！」

「ああ。まるでバケツをかぶっているようだな」

「やっぱかつこいいよな！」

「俺、今最高にかつこいい！」と自己陶醉に浸る健児を見てため息をつく。

ストレートに皮肉を言ってみたが、馬鹿にはもっと単純でないと伝わらないようだ。

それとも意図的に無視しているのか。  
無いな。

多分前者の方だろう。

鏡を見てナルシズムに陥っている健児をぼおつと見てみると、カナが声をかけてきた。

「お兄ちゃん。千歳あめがあるんだけど舐めていい？」

「ああ」

千歳あめ？

それはこどもの日ではなく七五三だろう。

恐らく送ってきたのは母さんだな。

全く・・・

「家人君、僕の足元にガタガタ動いてるダンボールが二つあるんだけど・・・」

井モノはそう言うて目でダンボールをさす。

誰が入っているな。

開けたくない気もするが致し方ない。

「どうする？」

「少し怖いが開けるしかなからう」

アーメン、南無阿弥陀仏、と出鱈目に色々唱えてみる。

質より量だ。

覚悟を決めて一気にガムテープをはがしてダンボールを開ける。

「ゼエゼエ、ハアハア・・・やっと出られた・・・」

少し大きめの段ボール箱から出てきたのは、私の父親だった。  
「生き返った・・・」と言いながら汗をぬぐう。

「って父さん、何をしているのだ?!」

「蓮にダンボールに詰められて……」

「父さん……」

父さんが弱いんじゃないのだ。

母さんがおぞましい程強いだけだ。

妻に段ボール箱に無理やり詰められる夫を想像してみる。  
シュールだ。

「お父さん、もう一つのダンボールに入ってるのは？」

「蓮だ」

母さん、何がしたかったのだ。

夫婦揃ってダンボール箱にinっていたい……

「とりあえず母さんが入っている方の箱は、放置しておこう」

「「異議ナシ」」

母さん、そのまま鈍ボール箱に詰まっている。

開けても問題起こすだけだろうしな。

触らぬ神にたたり無し、出てこぬ母に災い無しだ。

「かしわ餅できました!」

「そうか、では早速いただくでしょう」

「家人はお茶を入れなさいよ」

「わかったから背中を蹴るな」

「早く」

「この・・・」

腹が立ったので足を掴んでくすぐってみる。

案の定、もう片方の足が飛んできた。

こうなったらOLの如く、お茶に雑巾の絞り汁を入れるしかあるまい。

こないだご近所から貰った茶葉は何処だったか？

「家人、これか？」

「ああ、有難う父さん」

父から茶葉を受け取る。

次は・・・湯飲みはどこだったか？

「これか？」

「ああ、って何処から持ち出したのだ、その縄文土器！！」

「・・・違う・・・！」

「な、何がだ、林葉・・・？」

「・・・コレは弥生土器・・・」

「知るか!！」

「早く入れなさい！」

「嚙、そうせかすな」

「腹減っちゃったよー」

「健児さん、一応そこに猫の餌がありますけど・・・？」

「食えって?!」

多分ユカは本気で心配して、本気でそういつているのだろう。  
猫の餌はそう捨てた味ではないしな。

お、注ぎ終わった。

「それでは、いただきます」

『いただきます』

「あれ、これ放置プレイ？誰かダンボールから出して！」

橘家人の母親、橘蓮



深夜になりようやく脱出

どうやら橘家人が何らかの処置を段ボール箱に施した模様  
その後出番のなかった高峰麗香と酒に溺れる

#### 第41戦 VSこどもの日（後書き）

間に合わせようとした結果、いつもより少し短めです。

GWで更新のチャンスと思いきや、思うようにいきません。

・・・まあ累計14時間くらいカラオケで歌ってた自分が悪いんですけどね。

すいません。

それと喫茶カフェの新商品【あなたの隣に私はいない】が小説化しました！

よく意味がわからない方は感想欄を覗いていただければ。

書いてくれたうゆさんにこの場を借りてお礼を言わせていただきます。

ありがとうございました。

## 第42戦 VS最強の漁師「母」

「家人、そもそも釣りは生活のための糧を得る・・・」

「わが父よ、今魚がかかったところなのだ。邪魔をするな」

ゴールデンウィークということで、一家で釣りに来ている。なにやら寂しげな父さんを放って置いて、釣りにいそしむむ、うおう！

「お兄ちゃん、餌持ってかれちゃうよ」

「く・・・のっ・・・！」

なんだこの重さは？！

カジキマグロレベルだぞ！

釣ったことはないが。

「手伝ってくれ母さん！」

「了承した、わが息子よ！！！」

2人でさおを握る。

母さんが足を踏ん張ると・・・

「うらあ ああああ！！！」

「わっ、母さん強すぎ・・・！」

さおの方が耐え切れなそうだ。  
しかし流石は大和家特別製。  
母さんの馬鹿力に悲鳴を上げるが、折れはしない。

「おおおおおおお！！」

ザパーンと釣り上げたものが中へ舞い踊り、ドカァ！と品無く着地する。

さおはどこかへ吹っ飛んでしまった。

「釣れた釣れたあ！渡部が」

「ああ、渡部がな……ってえええ？！」

「家人様、こんにちはでございます」

落ち着け、落ち着くんだ私。

渡部が釣れた。

整理すればそれだけのことなのだ。

それだけのカゴテリーに入るかどうかは微妙だが。

口からだらだらと流れて出る血は見ていて痛々しいが、顔に痛みが出ていない。

恐るべきポーカーフフェイスだ。

「別に構ってもらえなくて、寂しかったわけではありません。ただ主様たちの身を案じここに参ったのであります」

「「普通に来たかったと言えばいいだろう」」

秘儀、父子ツツコミ。

父さんが渡部を叱り始めた頃、母さんが歓声をあげる。

「良し、キタ　　！！」

「お母さん、さおが折れるって・・・」

「ちゃあああああ！しゅううつうつ！めえええええん！！」

水しぶきが・・・否、水柱があがる。

周りの水面も、波で大荒れだ。

シヤチが釣れるか、鯨が釣れるか・・・

あたりが闇に包まれたコンマ数秒後、ありえないものが宙を舞っているのを認識する。

「ふいい、流石にきつかった」

「って船が釣れたあああ？！」

あ・・・ありのまま今起こった事を話すぞ！

『私は母さんがなにか大物を釣ったと思ったら、沈没したらしき船が釣れていた』

な・・・何を言っているのかわからないと思うが、

私も何が起きたのかわからなかった・・・（わかっているが、信じたくないものはある）

頭がどうにかなりそうだった・・・氣の力だとかテレキネシスだとか、

そんなチャチなもんじゃあ断じてない。

もつと恐ろしいものの片鱗を味わったぞ・・・

（この間、わずか数秒）

バシャアアアアアア！！！！

追い討ちをかけるように、もう一度水柱が出現する。

母さんが釣り飛ばした沈没船は、泊まっていた漁船を巻き込んで海に再び沈んでいった。

ノアの洪水を連想させるほど、海は荒れた。

「お兄ちゃん、人間の力って普通さ……」

「何も言わないでくれ。わが妹よ、頼むから何も言わないでくれ」

勘違いのないよう補足しておく。

母さんが釣り飛ばしたのはそこいらの漁船とは違う。

タンカーだ、タンカーなのだ。

「息子よ、よく見ておけ。あれがお前の母親の姿なのだ」

「現実逃避くらいさせてくれ」

自分の妻を見る父さんは、全てを悟りきった少しすれた仏を思わせた。

母さんの足元は軽く陥没して崩れ落ちている。

何秒後かには崩れ去って跡形もない。

更に発生した津波が私達に襲い掛かりずぶ濡れだ。

ぬれた程度で済んだのは、母さんがとっさに障壁のようなものを張ったからだろう。

……んなわけあるか。

「少し張り切りすぎちゃった、アハハハハハハ」

「タンカーを一本釣りするような人間は、危険物として処理した方がいいと思うのだが」

「ふえーん、あなたー家人がいじめるよー」

「そうか」

母さんを抱きとめる呆れたともさめたとも取れる目をした父さん。何故平常心を保っているのだ。

「ヒトはすぐに慣れる生き物なのだよ」

「お兄ちゃん、慣れって怖いね……………」

「ああ、そうだな……………」

「蓮が私に告白してきた時はこんなものではなかったぞ」

更に枯れる父さん。

魂がどこかへ逝ってしまった様だ。

「アタシの愛の力って素晴らしい」

母さんに聞いた話はこうだ。

幼馴染の父さんに大和高校に入ってから、自分の懐いていた気持ちを自覚したらしい。

父さんに近寄る他の雌豚どもを排除するため、大和高校美少（以下略）を影で手を回し設立。

結果自分の首を絞めることになったが、団員の首を絞めることで解

決。

母さんの告白は毎回負傷者、建物全壊といった惨劇を毎回巻き起こした。

100回目の告白でやっと承諾。

「99回断り続けたのか・・・父さん、尊敬してもいいよな？」

「ボクもそうするよ・・・」

「・・・蓮を抑えることができる男は私ぐらいだからな」

父さんは尻に敷かれつつ、手綱を握っている。

ちなみに母さんは今、シャチを尻に敷きつつシャチを喰らっているが。

「父さんは・・・父さんは何故母さんの告白を受けたの？」

確かに。

99回しのいだから、それ以降も大丈夫そうだが・・・

「そうだな。不器用で馬鹿力で猪猛突進だが、意外ともろい部分があるからな」

もろい部分か。

普段の母さんを見ているとそうは思えんがな。

「蓮は少し精神的にもろくなる時がある。だから近くにいて、その時守ってやりたいと思ったから・・・と言うところだな」

「なんだか素敵だなあ」



「それでも99回断ったよな」

「それに私自身途中から意地になっていたからな、その告白戦争すら日常の一部と化していたし」

単に100回だったからそろそろいいか、と思って付き合い出したらしい。

今回は普段聞けないエピソードが聞けたので、いい休日だったとしておくか。

「お兄ちゃん、渡部さんは？」

5時間後渡部が溺死寸前で発見

釣ったシャチは水族館に寄付

半分食われた状態だったが、何とか生き延びた  
どうやら橘蓮になんらかの影響を受けたらしい

## 第42戦 VS最強の漁師「母」(後書き)

更新が遅れ気味だったのは短編書いてたからです、なんていい訳。気が向いたら読んでくださるとありがたいです。以上、広告でした。

もう後書きのネタがないのでキャラについてるろくに剣心っぽく書いて見ます。

題して「キャラ製作秘話」

・・・まんま、るろ剣からとってますが。

キャラ製作秘話第1回「橘家人」

一人称が私の男キャラ、というだけでできました。

- ・コードギアスのゼロ(ルルーシュではなく)
- ・HELLSINGのアーカード(たまに俺とか言ってるけど)
- ・ハンター×ハンターのクラピカ、等

他にも上げればキリがないんですけど、そこら辺に憧れて・・・書いてる内容のベクトルが違うからアレですけど。性格は特になし。

その場の流れのままなので。

名前に関しては何でこんな変な名前なのかわかりません。けどこの名前がよかった・・・

言葉で表現しにくいのでその時が来たら。

文章力ないなあ。

個人的には気に入ってます。

実際にこんな人いたら違和感バリバリですが。

### 番外戦3 子供な母の日

白い壁に独特な雰囲気。

夜になれば人に恐怖を与える場になるだろう。

ここは病院。

そして私は橘曲尺、家人の父親だ。

「渡部は444号室だったか」

何とも不吉な番号だな。

察しの良い方は気付いていただろう。

GWに釣りに出かけ、色々あつて渡部は怪我を負った。半分以上我が妻、橘蓮のせいであるのだが……  
珍しく余り忙しくないので見舞いに来た訳なのだ。

「恐らくこの階だな」

「メロン食べたい！」

……今、蓮の声が聞こえた気がしたのだが。  
気のせいということにして、通り抜けるが上策と見た。

「おー、マイルスウィートじゃないか！」

無理だった。

更に

「ニオイがしたんだよね」と続ける。

犬並みの嗅覚だ。

「で、何故こんなところにいるのだ？」

「それだ、聞いてよ」

よよと泣きながら抱きついてくる。

こういうとき、下手に引き離そうすると有り余る腕力に粉碎されてしまう。

それ故適当に頭をなでてやる。

「どうしたんだ？」適当な感じで聞く。

「家人とカンナが母の日を忘れてるの！」

「へー」

「投げ槍！？」

私なんか家人と気まずい仲だったから父の日、何もありませんでした。たぞ。今年は期待できるだろうか。

「うわぁあん！」

ゴロゴロと病院の廊下を転げ回る大の大人一人。

そんな彼女を放っておいて、私は缶コーヒーを購入する。

「放置プレイしないで〜！」

「結局病院に来た理由は何なんだ？」

頭をペットの容量で撫でてやると大人しくなった。「だから我が子達に母の日を忘れられたから、心の病気にかかったやつだ」

「それにしても元気だな」

「ぶっちゃけストレス解消に遊びに来た」

ここはカラオケか。

言っても無駄なので缶コーヒーを与える。

そつえばここは大和家お抱えの病院だったな。

蓮が暴れても下手に口が出せなかったのだろう。

お抱えでなくても蓮を止めるのは不可能だろうが。

「2人ともアタシのことなんて忘れちゃったんだよね…」

「高校生活が忙しいからではないのか？」

「少し日が経ってから電話したら……」

「はあ?!」という答えが返ってきたそうだ。

蓮はダムが決壊したかの如く泣き崩れる。

ここで泣いていると人の目に付くので、渡部の病室に移動しよう。

「渡部、見舞いに来たぞ」

「……………」

渡部が「何故つれてきたのですか」という目をしている。  
仕方なかるう。

あのまま放って置くわけにもいかん。

「奥様」

「？」

顔を上げると蓮の目は真っ赤に充血していることがわかる。

渡部は彼女に何かを差し出した。

ベッドの上であるに関わらず、従者としての雰囲気は漂っていた。

「母の日の誕生日プレゼントです」

先程まで泣きじゃくっていた子供は、やはり子供のような笑顔になった。

プレゼント箱を宝物を持つように抱えた彼女は、ゆっくりとそれを開けた。

「すみません、入院してたものでして・・・」

「原因は蓮だからべつに構わん」

待たされた分、感動も大きかったしな。

彼は「直接渡すのが恥ずかしかったそうですよ」と付け加えた。

「プーレゼントは、なんだろ、なッ！」

「それと旦那様。これが壊した漁船などの請求書です」

「知らないプレゼント、どうもありがとうございます」



### 番外戦3 子供な母の日（後書き）

母の日だということに当日気づいたので、こういう形になりました。  
大分遅くなりましたが・・・

にしても父親が主人公に似すぎて困ります。  
いっそもっとちゃらけた人にすればよかった・・・

## 第43戦 VSモンスタープラント（前書き）

何故かいつもより長いです。

## 第43戦 VS モンスタープラント

空は私の心とは正反対に気持ちよく晴れ渡っている。

熱血な太陽のせいかな、それとも冷や汗かわからないが額に汗が一滴流れる。

何をしたらいいかわからない。

何が起きているかわからない。

パニック陥って、思考がぐるぐると回る。

「ここは何処？私は誰だ？」

「ここは宝蓮荘の花壇前で、お前は橘家人だろ。何言っただ。」

「ああ、健児か」

少しパニックになっていたようだな。

私としたことが・・・

「で、これは何なんだよ？」

「あまり近づきすぎるな。食われるぞ」

「お、おお」

私の真剣な顔を見て、健児はゴクリとつばを飲み1歩後ろに下がる。そろそろ今の状況を説明しようか。

要約するとユカの花壇に触手を持つ、危ない植物が発生している。

「シャアアアアアア！」

バケモノ植物が奇声を上げ、のた打ち回る様は今日という晴れの日  
に全く似つかわしくない。

とりあえずモンスタープラントとでも命名しておこう。

「変な種植えてねーだろな？」

「ユカに聞いてくれ。あーでも種はうちの親戚が用意してモノだ」

「原因それじゃね？」

十分にありえるな。

むしろそれが原因としか思えないな。

あのひったくりババア・・・！

「どうすんだ・・・？」

「貴様といるとエイリアンもどきが部屋に大量発生してたことをデ  
ジャヴする」

「返答になつてねーよ」

互いに淡々と話しているが、健児も私も冷や汗がダラダラと流れている。

なんとかユカが帰ってくるまでにどうにかせねばならん。

「とりあえず真木から火炎放射器を借りてこよう」

「銃刀法ってちゃんと機能してんのか？」

泣きそうな顔をしている健児を見て、何も言う気が無くなった。美しいバラには棘があるということだ。

「しかし真木は今留守だからな。勝手に触れたら爆発が起きるかもしれない」

合鍵はあるがそういうものは素人が扱うと不味いと教えられたからな。

この案は棄却だ。

「除草剤なんかはどうだ？」

「NON。かろうじて残った別の植物への悪影響が予想される」

「ライターとガソリンは？」

「NON。宝蓮荘が燃えてしまう危険性がある」

「じゃ、いつそ素手で」

「お前が言ってくれるなら歓迎だ」

「俺はウハウハモテモテハーレムな状態で死ぬって決めてんだ」

「そしたらお前はいつになっても死ねないな」

「どういう意味だそれ」

「そういう意味だこれ」

「表出る家人お！」

「もう出ているだろうが」

ギヤーギヤーやかましい健児を無視して自分の思考に閉じこもる。  
手詰まりか。

他に何か有効な手段は無いものか。

「ギシャアアアアア！」

「成長して花が咲いてるんですけどお！！」

「先刻のはまだ蕾の状態だったのか」

どうやら人食い花だったらしいな。

モンスタープラントの花の中心は、口らしきものから消化液が垂れ流しになっている。

今日の晩御飯のおかずどうしようか？

「家人。現実逃避してもしゃーない……。だ、ろ？」

「あ」

「うわあああああああ！！」

間合いの外と油断していた。

成長したため触手（？）の攻撃範囲内に収まってしまったらしく、健児が捕まる。

「男の触手プレイなんておもしろくもなんともない」という井モノの声が聞こえてきた感じがした。  
気のせいだが。

宙吊りになった健児は私に助けを求めてくる。

「た、助けてくれ！」

「わかった！……。うわあああああ！」

私も間合いの中にいたようだ。  
健児に並んで私も宙吊りになった。

「家人。お前実はすごいバカだろ」

「馬鹿に言われたくないな。大馬鹿者」

「バカバカ言ってるバカになんぞ。バカ」

「お前も馬鹿って言うてるから馬鹿になってるだろう」

「今お前2回バカって言ったから2バカな」

「お前も今2回言ったから2馬鹿だな」

「今1回バカって言ったな、家人？ホントにバカだなあゝ、バーカ」

「これで累計5馬鹿だな」

「あ、俺のバカ！でも家人も1回バカって言ったから5バカだ！！」

「これで3回追加だから・・・」

「あんたら2人とも馬鹿よ」

逆さまな状態の櫓に馬鹿といわれた。

櫓は宙吊りになっている私達に呆れ顔になっている。

「何やってんのよ、全く」

「見ての通りだ」

「あ、やば。なんか口みたいなのがあああああ？！」

「ちょっと待ってなさい・・・きゃああああ！！」

あ。

「・・・・・・・・」

「・・・・・・・・」



「・・・・・・・・」

「馬鹿が3人に増えたな」

「・・・・・・・・」

「つか櫛は今日、スカートじゃねえの？」

「私、あんまスカート好きじゃないから」

「下品じゃなくて、もっと気品のある方が好みだ」という天から声が聞こえてきた感じがした。  
気のせいだ。

幻聴が聞こえるということは、自覚はないが相当参っているようだ。

「家人、どうしよう。頭に血が上ってきた」

「よかったではないか。滅多に血が巡ることのない頭に血液が供給されたのだから」

「いいことなのか。じゃあいいや」

「おい」

本当に皮肉が通用しない。

良く見ると目がマンガの如くぐるぐると渦を巻いている。  
もしかしたら血の上った私の頭が誤認しているだけかもしれない。

「で、どうすんの？」

「どーもこーもねえだろ、って消化液みたいのがたれてきたたあああああ！」

そろそろ本格的に不味い。  
ふうむ、どうしたものか。

脳内思考では余裕な私も、実はピンチだったりする。  
頭がクラクラしてきている。

ぼやけ始めた視界の中で、私の目は救世主の影を捉えた。

「又又、助けてくれ！」

「又〜ン」

「・・・大丈夫なの？」

「・・・」

確かに猫一匹でバケモノをどうにかできるとは思えない。  
あ、消化液がッ、うわあああ!?

「ヌウウウウウウウーん!..!」

又又猫が天に向って鳴いた。  
否、百獣の王の如くほえた。

「キシヤアアアアア！」

「キシヤアアアアア！」

「キシヤアアアアア！」

「キシヤアアアアア！」

笛に呼ばれた蛇のように、我が家に住み着いていたエイリアンもどきが出てきた。

前門のモンスタープラント、後門のエイリアンもどきだ。  
万事休すか……

「どおすんだよ！」

「いや、待て。良く見る！！」

わらわらと集まったエイリアンもどき。

なんと彼らはモンスタープラントをむしゃむしゃと食べ始めたではないか！

モンスタープラントも迫る来る数の波にはかなわないようだ。  
ウチにはこんなに住んでいたのか……

「家人、こんなのが大量にいて大丈夫なの？」

「食物連鎖がきちんとしていれば、数は安定するだろう」

自然はそういうシステムになっている。

増えすぎた種は、死に逝く定めだ。

む、そうすると人間は食物連鎖に入っていないのだろうか？

例えばだ、人間という種が急に滅んだとして、他の生物にどのような影響を与えるのだろうか。

食物連鎖から外れてしまった種族として、私達はこの位置だからこそできることはないのか。

そう私は思った。

「……あれ、私は何を考えていたのだ？」

「思考に閉じこもらないで、ユカにどう言い訳するか考えようぜ」

「あ……あ！」

「どうかした？」

「花壇を良く見ろ」

そこには完全にもとの状態の花達が美しく咲いていた。

モンスターのプラントは、他の花達を守り育てていたのかもしれないな。

ちょうど雛を守る親鳥のように。

そう思うと複雑な気分になった。

「でも何でこんなのが出てきたんだよ？」

「そういえば昨日、真木がお米のとき汁をこの花壇に捨ててたわよ」

この夜、101号室に橘家人の姿は無かった

代わりに後藤真木の部屋からは、絶えず悲鳴が聞こえたという

### 第43戦 VSモンスタープラント（後書き）

バイオハザードです。

モンスタープラントという名前は。

私もネットで検索して、はじめて名前知ったんですけどね。  
いまだにクリアしてない・・・

今はとにかく時間が欲しいです。

## 第44戦 VS ブレイクタイム・プレイカーズ

ゆらりゆらりと足が弓の形をした安楽椅子に身をゆだねる。

家の中にまで浸透する陽気の効果もあってか、安楽を通り越して極楽にまで逝けそうな心地だ。

昼寝に突入しても良いが、林葉から借りた本がまだ読み終わっていないので、早く読んでしまおう。

本を読みつつ、紅茶を楽しみ、椅子に揺られる午後のひと時。

この雰囲気についてまでも浸っていたい……

「家人、遊びに来たぜ！」

「……安らぎの時間のなんと短いことか」

本にしおりを挟んでから閉じ、そして脇へ置く。

ため息を吐いてから、そのまま虫取りににでも出かけそうな健児の方を見る。

「お邪魔するよ、家人君」

女三人集まれば姦<sup>かしま</sup>しいと言うが、男三人が集まると何になるだろうか？

むさ苦しい、といったところか。

「悪いが二人とも今日は帰ってもらおうか」

「何でだよー」

「たまにはゆっくりと優雅に午後を過したいのだ」

「この部屋で優雅って難しくない？」

「……………家賃」

私はその単語を口にしたや否や、全力で二人とも駆け出し私の部屋を出る。

あれほどの加速力があれば、ロンドンオリンピックも夢ではないのではなからうか。

家賃滞納はまだ一ヶ月だからおおめにみてやらないこともない。

ああ、大目に見てやらないことにしよう。

明日辺り出向くとするか。

「さて」

再び本を手にとろうとすると、櫛が入ってくる

「入るわよー」

「……………」

本ではなく、この先の展開が手に取るようにわかる。  
アレだろ。

どうせ私に優雅な午後は無いのだろう？！

「あのさ……………」

「何だ？」

櫛らしくも無く、もじもじと恥らっているようだ。

恥や外聞など、当に捨てていたものかと思っていたがそうでもないようだ。

何故か一発はたかれた。

読唇術でも持っているのか。

「勉強教えてくれない？」

「プッ」

（鉄拳的制裁中）

「人が恥を忍んで頼んでるつてのに・・・」

「ああ、うん。今のは私が悪かった。しかしスリーパーホールドは無いと思う」

「もう一発別のが欲しいの？」

「独り言だ、気にするな」

そこ、弱ッちいと言っな！



冗談さておき、あの櫛ともあるうものが私に頼みごととは何かあったのか。

「中間考査が4教科赤点すれすれで・・・」

彼女は小さい声で「期末考査、本当に赤点取るかもしれない」と続けた。

補習で時間を持っていかれると、ただでさえ部活とバイトの二重苦が余計辛くなるからな。

「しかし何故、林葉に頼まなかったのだ？」

「頼んだわよ。そしたらリンがちよつとにやつと笑って、ケンカになったのよ」

「本当にお前ら仲が良いな」

全く、とため息をつく。

どちらにせよ林用は教える方には向かなそうだしな。それなら仕方ない。

「まあ勉強を教えるくらい良いだろう。で、教科書ノート諸々は？」

「家人ので」

「今日は勉強する予定が無いからほとんど持って来ていないぞ」

かるうじてあったのも、只今ユカに貸し出し中だ。  
櫛は苦笑いを浮かべた。

「……全部置き勉してるんだけど」

（少年説教中）

「他力本願もいいところだな」

人に教えを請おうというのだから、そのぐらい準備して当たり前だろう。

散々に叱り飛ばした後、お帰り願った。  
いい加減読書に……

「家人さ〜ん」

「……なんだ？」

人の家屋に入るときはノックはいらないという法律でもできたのだろうか。

ウチの住民は不法侵入上等か。  
不機嫌さを隠そうともしない。  
眉間にしわを寄せ答える。

「あれ、もしかして来ちゃ不味かったですか？」

わかっていたはずだ、この展開は。  
これは運命と受け入れようか。

「別にもう良い。で、何のようだ？」

「用が済んだので、ノートを返しに来ました！」

「ああ」

何となく受け取ったノートをパララとめくる。  
するとそれに合わせて、右下の猫のようなものが動く。

「って人のノートでばらばらマンガを書くな！」

「痛っ！」

ユカの頭に拳骨を落とす。  
そして説教。

「勉強に集中できなくて・・・ごめんなさい」

「まだこれくらいだから許してやろう」

健児に貸したら「あの教育実習生の人、可愛くね？」のような内容  
が延々と書き続けられ、井モノにいたっては18禁絵だからな。  
その辺りに比べれば、まだまだマシなケースだ。

「もう落書きはするなよ」

「はい」

軽やかなステップでユカは帰って行った。

拳骨のとき、何処と無く喜んでいたことは……気のせいにして  
おこう。

そろそろ午後のブレイクタイムと行こうか。

と思ったら電話が鳴り出した。

おい、私にも堪忍袋の緒はあるぞ。

「いい加減にしろ、誰だ！」

「お、お兄ちゃん……助けて！」

「!?!」

結局、家人にブレイクタイムはなかった  
次回へ続く

#### 第44戦 VSブレイクタイム・ブレイカーズ（後書き）

もう更新は来週にしよう・・・

と、完全に惰性に陥っていましたが、コメントに救われ更新しました。

多分これがなかったらとくに連載やめてるんだろうな・・・  
コメントを下さる方々、本当にありがとうございます。

## 第45戦 VS要塞「DUST」

空は陰鬱な灰色で、空気は湿気を帯びていて生ぬるい。  
今日はろくな事が無い。

そのせいか一日がヶ月ぐらい長く感じる。  
四字熟語に直すなら一日一月といったところだ。

そろそろ現実へ目を向けてみよう。  
カンナのSOSを受けて、早速助けに来たのだが私はドアの前で躊躇している。

なぜなら部屋の中から妙な圧迫感が発せられているからだ。  
入りたくない、帰ってリアルへ帰還できないくらいに読書をしたい。

「という訳にはいかないしな・・・」

一応ノックを試みるが、帰ってくるのは沈黙という応答。  
仕方ないのでドアを開けた。

「・・・・・・・・」

そしてそのまま閉じた。

「いや、無理だろ」

再び勇気を振り絞りドアを開ける。  
先程見た幻覚は、どうやら本物だったようだ。  
入り口の先はもう部屋と呼べるものは無かった。

テレビの画面でしか見れない、伝説の『ゴミ屋敷』がそこにあった。

「・・・カンナも随分と思い切った模様替えをしたものだな。まさかゴミ屋敷にするとはい」

冗談兼、現実逃避はこれくらいにしておこうか。

おかしい点がいくつかある。

混乱しきった頭を静めるために、まずは疑問点を整理しよう。

其の一「先刻電話で救助を求めたカンナはどこにいるか」

其の二「数日前は普通にきれいな部屋だった（カンナが掃除を行うため）」

其の三「高峰麗香は何処へ消えたのか」

結論、整理してもどうにもならんな。

カンナのケータイはさっきの会話で、電池を使い果たしている。

居場所は確認できないが、恐らくカンナの使っている部屋にいるだろう。

根拠は兄としての勘という、何とも疑わしいものだが。

「・・・」

直感に従い、カンナの部屋の前まで来たわけだが・・・いや、それは正確ではない。

足の踏み場もない、から数段レベルが上がったためドアの前までたどり着けない。

ゴミの海からゴミの山へ進化した現状が、物理的に超えられない壁

となって私の行く手を阻む。

「カンナー、聞こえるかー」

「お兄ちゃん・・・!」

竦った感じの声が聞こえてくる。

部屋の中にいることはこれで確定だ。

しかしどうやってドアの前のゴミ山を処理しようか？

突如、頭の中に会議場が展開される。

〈脳内会議〉

家人A「このまま帰ってもいいか？」

家人B「肉親を見捨てて帰ろうと言っのかッ?!」

家人C「とにかくあのゴミの要塞を崩す術を考えるべきだ」

家人D「そんなことはわかっている!」

家人F「火は？」

家人G「カンナが死ぬという本末転倒的結末を迎えかねないぞ」

家人H「ちょっと待て。家人Eは何処へ行った？」



家人I「絶望しきつて私の足元で寝ているぞ」

家人J「起こせ」

家人K・L「おらあ！」

家人E「ぎゃああっ!？」

家人N「ちなみに脳内家人は何人いるんだ？」

家人O「多すぎる気もしなくも無い」

家人P「アルファベットだから26人じゃないのか？」

家人Q「おい、議題がずれてるぞ」

家人R「ちよつとお前ら意見は無いのか？」

家人S「そういうお前はどなんだ」

家人T「そんなお前は・・・いや、やめとこう」

家人U「今、永久ループの予感したな」

家人Z「普通に片付けると言う意見は無いのか？」

家人V「おい、何順番抜かして喋っているんだ」

家人W「んなこと、どうでも良いわ!」

家人X「ちよつと飲み物買ってくる」

家人Y「私の分も頼む。ドクターペッパーで」

家人本物「話進めろよ!!」

「脳内会議終了」

大分時間かけたのに全く意味無かった。  
役たらず共め。  
自分を罵っても仕方ないか。

「そうだ、窓を割ればあるいは」

「又〜ん」

「あー、ここは二階かだったな」

ん、今猫語を理解できたような気がしたぞ？  
・・・気のせいだ。

「地道に片付ける、か」

たまたま見つけたビニール袋にモノを詰めていくと、あることに気づく。

散らかっているゴミの多くが、元々この部屋にあったものだ。  
注意深く観察すると、リビング、台所やカンの部屋の前にゴミが多く和室やトイレの方は少ない。

ここから何か推理できないだろうか？

十中八九、麗香が原因だ。

つといかんいかん。

頭を動かしていたら手が止まってしまった。

このゴミ要塞を崩す方が先決だ。

「よし、ちよつくら頑張るか！」

「又〜！」

今回、オチは無し

家人M「ってハブられたあああ？！」

## 第45戦 VS要塞「DUST」(後書き)

皆様お久しぶりです、仙人掌です。

オケラだって、アメンボだって、私だってみんなみんな生きてます。  
では。

更新完全ストップしててすいませんでした!!!

忙しい上にこの話、全然筆が進まないという状況に陥ってしまったため、このような状態になった次第です。

オチがつけづらく、結局オチを次回へと逃がしてしまうという体たらくぶりでした。

絶対に完結だけはすると誓っていますので、多分大丈夫かと思っています。

本当に申し訳ありません。

ドクターペッパー10 & # 8467 ;飲んで反省します。

無理です。

嗚呼、ドクタッペッパーというと友達から借りた「神様のメモ帳」

(ラノベ)を思い出します。

中学時代、それが机から掃除中に落ちて、これ誰のだろうと女子が広げてたのはいい思い出です。

「こんなの読んでのの?」といわれましたが、無事(?)無理やり回収しました。

女子なんて、女子なんて・・・!

・・・話が半分飛びましたね。

ではこの先、しっかりとこの話を執筆していくことで、読んで下さっている方へのお詫びとさせていただきたいと思う所存です。

長い文でしたが、付き合ってくださいった方、ありがとうございました

た。

女子なんて、女子なんて・・・！

## 第46戦 VS要塞「諸悪の根源」

「終わる気がしない・・・」

「お兄ちゃん、ちょっとは休んでも大丈夫だよ？」

「いや、大丈夫だ」

「ぬん」

夏休みの宿題をラスト一日で頑張っている気分だ。  
日記とか難関だよな。

もつとも言つまでも無く、私はコツコツやって終わらせる派だが。

「ん？」

ゴミ山の中に妙なものを見つけた。  
チェックの模様のノートに南京錠がくっついている。  
少し小さめで厚いノートだ。  
もしや魔導書グリモワール・・・？

「ヌーん」

「そんなはず無いか」

「どうしたの？」

「鍵がつけられた珍しいノートがあったのだが、これが何かわかるか？」

「うわぁあああああ!!」

カンナが大声を出したのでビクリ、と少し驚く。  
いったい何だというのだ。

「お兄ちゃん・・・それ開いてないよね・・・?」

「ああ。鍵がついていて開けられんな」

「それを床に置いたら、一步下がって両手を挙げて」

「強盗か」

良く見ると「diary」の文字が。

つまり中身は日記帳というわけか。

見ないから安心しろ、との旨をカンナに伝え作業に戻る。

「これは・・・?」

「お母さん」という題名の作文があった。

書いたのは・・・私だ。

黄ばんだ紙に書かれた字を読む。

これだけ年月がたつと、自分ではない誰かが書いたように思える。

この頃から私はこの口調だったのだな、と思うと同時に母さんこんな感じだったのか・・・と軽く嘆きなくなる内容だった。

勿論、自らの青臭さに目を覆いたくなつたのは言つまでもない。

「で、何故この作文がこんなところに?」





「せえのっ」

バキバキィ！

「・・・お兄ちゃん」

「これはあくまでカンナが助かった嬉し涙だ・・・ドアの崩壊など大したことない」

「どーみても嬉し泣きじゃないんだけど」

無理に開けなければ良かった。

宝蓮荘の老朽化は思った以上に深刻なようだ。

修理にかかるお金を考えると・・・ハア・・・

そもそもこの原因は何だ？

麗香だ。

あのトラブルメイカー・・・ッ！

「あ、ただいま。どうしたのこの惨状？」

「死ね」

「うわ!？」

とりあえず手短にあったビール瓶をぶん投げた。

スローモーションできれいに弧を描きながら、麗香の顔面へと吸い込まれるように飛んでいく。

が、空中キャッチされてしまう。

「いきなり何よ」

「この惨状はお前の仕業だろう？そくに決まってる」

「え、違うわよ？」

「・・・カンナから状況報告頼む」

「えーつとね」

話を要約すると、カンナは真木と遊んでいて帰ってくると麗香とウチの母さんがいっしょに飲んでいた。

疲れていたので絡む2人を避けながら、飯と風呂を済ませ就寝。休日のため遅くまで寝ていたらこの部屋に閉じ込められていた、ということだそうだ。

「私の予想としては・・・」

「家人の思うとおり、多分犯人は蓮よ」

そういえば実家にいた頃に、母さんは酔ってモノをこれでもかと散

らかすことがたびたびあったな。  
ハハッ。

「麗香、今母さんは何処に？」

「暇な時期だそうから、大和家の邸宅にいらっしゃるわ」

すべき事は・・・成すべき事はたった一つ。  
受話器を手に取る。

「お兄ちゃん、その怖い顔止めてよ」

顔の筋肉の感覚が怒りのせいで鈍って、イマイチ自分の顔がわからない。

フハ、フハハハハハ！！

「それでは征ってくる」

「い、いつてらっしゃい」

この後の親子喧嘩

「息子おおお、アタシが倒せると思ったかああああ！足を踏ん張り腰をいれい！」

「渡部」

「ハッ、家人様」

「ちょ、渡部?!」

「今回は蓮様に非が御座いますゆえ」

「さて、やり放題だな・・・」

#### 第46戦 VS要塞「諸悪の根源」(後書き)

作文が宝蓮荘にあったのは、2人が酒の杯にしてたからです

久しぶりです、仙人掌です。

こうして更新できるのもインフル様様ですね。

ほんと時間に縛られないぐうたら生活・・・最高！

大分前回と間が開いていて、久々に書いたら文字が打てないのなんの。

腕がなまった感が拭えません。

でも次の分は書き終えてるので少し間を空けて更新します。

来週もお楽しみに！

でも・・・更新遅れて本当にスイマセン。

気づいたら更新してやがるなーくらいに思っていてください。

## 第47戦 VS 球技大会「クラスの士気」

行事というものに最も重要なのは、クラスの団結力だとよく聞く。楽しむことに関しても結果に関しても確かに重要だ。私のクラス、2年A組はどうだというとな……

「それでは球技大会の第二回会議を始める」

『ええ』

全然駄目だ。

やる気が無いという方向で結束しているとも言えるが。

「おい、どうにかしてくれ」

と、同じく委員長を務めている櫛に助けを求める。

「やる気ないのは男子が多いでしょ、見て見なさいよ」

「そうか？」

ふつとクラス全域に目を見渡してみる。  
するとありがちな光景が広がっていた。  
高校では良くあるのかは知らないが。

「ちょっとやる気出さないよ、男子！」

「うつせー、ばーか！」

・・・まあ仕方ない。

あまりこれはやりたくなかったが。

「皆、少し話を聞いてくれ」

「なんだなんだ」

「家人がリーダーみたいだな」

実際私がリーダーだ。

「このクラスの男子はある共通点があるのを知っているか？」

首をひねる男子勢。

女子は訳知り顔をしている。

「このクラスでバレンタインデーの日に愚痴るヤツが多いのは何故だ？  
だ？」

クリスマスに招集をかけると、ほぼ全員集まるのは何故だかわかるか？

恋バナをしていると最終的に暗くなってしまうのはどうしてなのだ？

答えはとてもシンプルな、たった一つの答えだ。

そう・・・このクラスの男子は全員彼女がいないのだっ！！」

その時、クラス（の男子）に衝撃走る。

「な・・・そんな馬鹿な・・・」

「しかし確かにそうだ」

「そーいやそうだね」

「遂に驚愕の事実が・・・」

ざわざわとし始める。

むしろ今までよく気づかなかつたな・・・

とりあえず、何とか声が通る間に次の言葉をつむぐ。

「今の私たちの現状だとどうなるかわかるか？」

彼女にかっこいいところを見せたい連中の、引き立て役になるのだ！

私達を追い抜き去ったあとに、敵は恋人といちゃいちゃする。

これ見よがしにラブラブな弁当を見せ付けられる。

私達はこれで良いのか？

否、違っだろう！

「そうだ！」

「彼女が欲しい！！」

「怨ヤマシイ！！！！」

「つか家人に言う権利あんま無いだろ」

「うおおおおお！！！！！！」



女子が引き気味だがかまうものか。  
大切なのは勝利だ。  
形振りかまっていられる私たちではない。

「嫉妬魂で我らの力は復讐の女神となる。  
カラシニコフの裁きのもと、我らの力で奴らの面子を食い千切れ  
！！」

「Y A A A A A A A A A !」 「おおおおおおおお！！！！」 「  
やってやるぞおお！！！！」 「雄雄雄雄雄雄！！」 「ぶっ潰す！！  
！！」 「覇嗚呼嗚呼嗚呼嗚呼！！！！」

「私たちが最高級の醜態をさらしてやろうではないか！」

「応ッ！」 「もちろん！」 「当然」 「恥かせてやる！」 「いくぞ  
！」 「おおおお！！！」

あれだな。

馬鹿とハサミは使いようというやつか。  
男子はほとんど馬鹿しかないようだ。

『をooooooo！！！！！！』

「櫂、女子も乗せてくれ」

女子が引き気味だからな。  
・・・前言撤回、ドン引きだった。  
これ異常ないレベルの白い目で男子を見ている。

「んな無茶な・・・」

「大丈夫だ、これを優勝のご褒美にしてやればいい」

「うげ、こんなモノ大量に何処でに入れたのよ」

「細かいことは気にするな」

色々あるんだ、色々。

その話は機会があつたらまた今度。

しかし男子の声がうるさいな。

今までの会話の間、ずっとやかましい叫び声がとどろいていた。

その叫び声よりも音量は上回ってはいないが、圧倒的な存在感を持った櫂の聲が発せられる。

「みんな、優勝したら喫茶カフェの最高級ケーキ【エンジェル】の予約チケットを贈呈するわよ！」

「その話、乗ったわ！」

「前から一度食べてみたかったんですよね……」

「……是が非でも……」

クラスの9割はもう乗っているだろう。

残りの連中も流れさえ作ってしまえば、乗らざるを得ないはずだ。

「私たちが望むものは何だ！谷山、言ってみろ！！」

「優勝であります！！」



第二回会議決定事項

特に無し

士気超大幅上昇

## 第47戦 VS 球技大会「クラスの士気」(後書き)

球技大会編、始動。

・・・今回の話は色々と暴走してしまったのを、深くお詫び申し上げます。

しばらく執筆してないとホント駄目だ・・・

でも次回もこんな感じなので、よろしくお願いします！

## 第48戦 VS 球技大会「校長宣誓」

小学校の運動会の日、校長先生が「今日はみんなの元気で雲を吹き飛ばしてしまつたようです」とか言っていた。

小学生ながらに少しひねくれていた私は「何を馬鹿なことを・・・」と思つたものだ。

だが今日はその言葉が最も当てはまる気がする。

雲が逃げていったというのが正解なのだが。

そんな元気が・・・もとい殺気があふれ出ている我らが2年×組。グラウンドに並んだ他クラスは必要以上に距離をとっているように見える。

「それでは校長より一言お願いします」

「校長宣誓、諸君らはこの球技大会において正々堂々戦え！」

校長、何をしているのだ。

宣誓と先生をかけた駄洒落ならば、かなりきついぞ。そもそも宣誓になつてないだろ。

「今大会にはなんと余つた予算があつたので景品がある！」

変なものかしよばいものかどちらかな。

大半の生徒は「どうせ校長のブロマイドとかだろ」といった顔つきをしている。

「3位には学食のタダ券！」

大和高校には食堂はないのだが。

「2位、ノート一年分」

ああ・・・リアクションが取りづらい。  
中途半端だ。

「そして1位は・・・」

ダラダラダラダラ

どこからともなくBGMが聞こえてくる。  
かと思いきや校長の口から出ていただけだった。  
そして妙なポーズをつけて校長が叫ぶ。

「パジエ口を贈呈する！！」

どんだけ予算余りすぎだ！  
てか学生が車貰ってどうするのだ？！

「次、生徒代表」

「選手宣誓！」

坊主頭の3年生が前に出てきた。  
松葉杖をしているが大丈夫なのか？

「優勝するのはこの俺だ！！」

違ったる。

やってやったぜとも言いたげな顔で壇を下りるな。  
彼は自分の位置に戻るまで1mにつき、一回づつ殴られていた。

(中略)

「それでは2年×組集合！」

「家人君、もう集まってるよ」

『その通りだ!!』

「やる気に満ち溢れているな・・・」

動機はともかくとしてだが。

私がやったとはいえ、クラスの熱気が恐ろしい。

編集さん、CGでオーラをつけるのはやめていただきたい。  
いないけど。

そして櫻が私から一言、といって皆の目線を集める。

「皆、優勝したら喫茶カフェで打ち上げよ！」

『おおおおおおお!!』

「家人のおごりで」

『リーダー最高!!』

「って何言ってるじゃああああ!!」



喫茶カフェは打ち上げ対応可能だけでも、けども！  
胸倉を掴みながら激しく櫂をゆする。

「士気は完全に崩壊するくらいまで上がったから良いじゃないの」

「私の生活が崩壊するわッ！」

「冗談よ。店長と蓮さんが奢ってくれるだって」

「・・・大丈夫なのか？」

「代わりにパジェロをあげちゃえば良いじゃない。誰も文句つける  
ような人はいないでしょ？」

「まあいいか」

皆の士気は確かに上がったしな。  
どれ、ついでにもうひとつ。

「では私からも」

さっきまで暴徒と化す勢いだった全員がシンと静まり話を聞く体制  
に入る。

団結力もここまで来ると恐怖を覚えるな。

今日一日限りのファシズムクラスだ。

後ろで腕を組みながら皆の前を歩く。

「諸君に問おう。私達は何のために戦う？」

「イケメンに地獄を見せるためだ！」

「この世の理不尽を打ち砕くためであります！」

「ケーキを食べるため！」

「焼肉のため！」

手を天に上げ、拳を握り締める。  
そしてクラスに向って叫ぶ。

「ああ、私達の目的はバラバラだ．．．しかし求めるものはたった一つ、同じものだ！それは何だ？！」

優勝ッ！！！！

「その通りだ。我らは僅かに一クラス、40人に満たぬただの高校生に過ぎない。だが諸君は一騎当千の古強者だと私は信仰している。ならば我らは諸君と私で総兵力3万と1人の軍集団となる」

YES! YES! YES!

「第60次球技大会。状況を開始せよ！」

 Y  
A  
A  
A  
A  
A  
A  
A  
A  
A  
A  
A  
A  
!  
!  
!  


大袈裟すぎるかもしれないが、今のこのクラスにはこれくらいが適しているだろう。

私の戦場はサッカーだったな。

「さて、地獄を作るとするか・・・」

「家人君。そういうキャラだったけ？」

井モノは若干呆れ気味だ。

それに対し、むしろ私は笑みすら浮かべてかえしてやる。

「私はただ最強の証が欲しいだけだ・・・やりすぎて後に引けなくなっただけとも言うが」

「言わないよ」

勿論、後者が本音だ。

ここで降りるのも・・・なあ。

「ま、何でも良いさ。僕もあの数量限定生産ケーキ【エンジェル】は食べてみたかったしね」

乗り気ならば結構なことだ。

井モノはサッカー部のエースだから、相当の戦力に値するだろう。

競技は男子がサッカーとドッジ、女子がバレーとバスケットなっている。

ちなみに人数は正規ルールと比べ少し変則的。

1学年6組程度、1年から3年までごっちゃんの乱闘、一種目につき上位8位まで点数が入る。

「で、勝算はどんなの？」

「3年は部活を引退しているし、2年である私達は十分に優勝を狙

えるはずだ」

女子にいたっては体力の差は皆無に等しい。  
むしろ3年の方が少ないかもしれん。

「総員戦闘配備！」

『イエッサー！』

「<sup>ユニフォーム</sup>戦闘服を着ろ。グズグズするな、戦場では1分1秒が生死を分ける！」

『イエッサー！！』

「敵はまとめて・・・」

『ぶつ殺す！！！！』

「なんだかなあ・・・」

相手チーム

「降参します・・・」

#### 第48戦 VS 球技大会「校長宣誓」（後書き）

宣誓してた坊主頭はこの間書いた短編「下へ下へと」の主人公です。  
暇な方はどうぞ！（宣伝です）

登場人物が他の作品でひょっこり顔を出すのが大好きです。  
だから伊坂幸太郎さんとか大好きです。  
勿論それだけが理由ではありませんが。  
興味のある方は是非読んでみてください。

## 第49戦 VS 球技大会「なサッカー」

「それでは2年A組と3年D組の試合を始めます、礼！」

『お願いしやーす！』

汗臭い感じの声の挨拶。

それに続くかのように放送が入る。

「さあ、いよいよ始まりました決勝戦！実況は放送部部长、ハイテンション伊藤がお送りしますー！！」

今年は決勝だけ放送がつくらしい。

それにしても売れない芸人みたいな名前だ、ハイテンション伊藤。

「ついに決勝か・・・」

「長い道のりだった・・・」

聞いている通りこの試合は決勝戦だ。

展開が早い、などの類の苦情は一切受け付けない。

そもそも一回戦からだとなタが尽きるし、見て誰が楽しいんだ。

この小説はコメディなのだ。

省略しても構わんのだろう？

って誰かが言ってた。

「解説は人気No.1セクスイー教師、高峰麗香先生です！」

「どーも」

・・・どうにもあの方は暇でおられるらしい。

実況には突っ込まずにしよう。

それよりも試合だ、試合。

「それでは行くぞ！」

『Y A A A A A！』

ふむ、我がクラスの危ないテンションは健在だ。  
よく続くものだ。

「家人君」

「ああ」

私がボールに触れ、井モノが谷山にパスする。  
そして私にマークがつく。  
イケメンだ。

「キャー、池沼先輩！」

「頑張つてー！」

黄色い声がワンキャン頭に響く、やかましい。

羨ましくはない、断じて羨ましくはないと自分に言い聞かせていた  
ら、イケメンに話しかけられた。

「君、にしても地味な格好だね」

「あ？」

言葉に嘲りが含まれていたのでイラっとしてガラの悪い返事になる。実際、馬鹿にしたような笑い方なので無礼どころは言わないで欲しい。

「そう突つかからないでよ。染めろとは言わないけどワックスぐらいはつけたら？まあボクほどにはならないだろうけど（笑）」

大きなお世話もいいところ、単にワックスにさける金が無いだけだ、チクショ！。

にしてもこの男・・・

「わかりやすい死亡フラグだな」

「家人！」

「それどういう意味・・・へぶらっ!？」

一瞬、辺りがスローモーションになる。

イケメンの顔にボールが食い込むぐらいに命中する。顔面と一緒に面子を叩き潰す。

「これは・・・っ！」

「イケメン君から見て、ボールを家人で見えない位置から蹴って、家人が当たる瞬間ギリギリに避けるという後ろに目があるかのようなチームプレイね」

あの男にしてみれば、相手が急に動いたと思ったら、いきなりボー



ルが出現したといった具合だろう。

前にも言ったが私の場を読む力をなめないで貰いたいものだ。  
後ろから飛んでくる物体の気配を読むなど造作もない。  
空気は読めないが。

「あーっと、痛快な一撃でしたがイエローカードです」

「悪い家人・・・あのイケメンのツラを見たら自分の中に沸々と黒い感情が・・・」

判定を取られた谷山が謝る。

もつとも顔は良い塩梅あんばいに歪んでいる。  
怖い。

「いや、良くやった。相手の士気はそこそこ下がったはずだ」

逆に怒ったとしても、ここに有利な要素だ。  
イライラした連中程ハメやすい奴はいない。

「大丈夫かー池沼（棒読み）」

「ざまあないな、ハハ」

「て、てめえら・・・」

いらぬ考察だったようだ。

中々に愉快的仲間達からフリースロー。

ちなみにサッカーのルールは非常にアバウトに設定されている。  
球技大会なんてそんなもんだ。

「もらったよ」

「この・・・っ」

「おっと点吞選手、ナイスカット！」

「流石はサッカー部2年生エースだけはあるわね」

放送席のマイクにお茶を啜る音が入る。  
解説者としてそれはどうなんだ。

「井モノ！」

「はい」

ボールが足に吸い付くような良いパスだ。  
そろそろやるか。

「総員、上がれええ！！」

「おおっと、開始早々△組は橘選手以外が敵ゴールに突進したあ！」

「なだれ作戦ね」

「ほほう、なだれ作戦とは？」

「キャプテン翼においてふらの中が使った技よ。ま、解説は見ればわかるから要らないわよね？」

私の一声でタガが外れたように闘牛の群れが相手ゴールに向かって

突撃する。

キーパーは今すぐそこから逃げ出したい恐怖にかられているだろう。  
タイムセール時の戦<sup>しゅふ</sup>乙女並みの気迫だ。

「ちっ」

急いで戻る、がもう遅い。

スライディングしてきたイケメンをかわしてから、大きく前へパスを蹴り出す。

「くっそおおお！」

ロングパスは上手く通った。

まず是一片。

多少の小競り合いを経て、ゴール前まで上がった井モノにボールが渡る。

「・・・つと！」

「ゴオオオオル！」

ネットに色々とおかしな軌道のシュートが突き刺さる。

どう回転をかけたらSの字に曲がるのか。

キーパーは舌打ちを小さく打ち、センターサークルにボールを送る。

「なめた真似しやがって！」

「やれるものならどうぞ自由に、先輩殿」

なんて洒落てもみたりする。

我ながら小ざかしいな！。

「喰らえ！」

イケメンが大きく振りかぶる。

どう考えてもボールを私にシュートするつもりだ。  
そうは行くか。

「丼モノ！」

「了ー解っ」

「んなッ！？」

「これは・・・流星のような速さのスライディング！その姿はまるで芝生を駆ける白馬のような華麗さ！」

脳内でその輝かしいスライディングとやらは補充してくれ。  
上手いが別段そんなすごくくない。

「うちのグラウンドは芝生じゃないけどね」

「いいんですよ、細かいことは」

実況が話す間にボールは進む。

多少の小競り合いを経て、私は仕方なく山谷にバックパスすると、同時にシュートできる位置まであがる。

「またロングパスか・・・そうは行くか、皆動け！」

3年D組のリーダーと思わしき人物の声で、チームが身構える。しかしどちらにせよやることは変わらない。

「家人ッ！」

ボールが何故かジャイロ回転しながら飛んでくる。

そんな技いらんから、取り辛いだけだ  
心の中でぼやいていると敵チームが動く。

「なんと・・・何故かD組がゴールをフリーにした?!」

「これはオフサイドトラップ・・・！まさか球技大会でこんな高度な技を見えることになるとは驚きね」

「なんですかそれ？」

「知らないのね・・・簡単に言うと相手キーパーとの間に他に、もう1人敵を挟んだ状態じゃないとパスしちゃいけないってルールがあるのよ」それを意図的に起こさせることをいうの」

そして私視点へ。

ボールはまだ移動中だ。

長くないか？という疑問ももつとまだがそうでもない。

キャプテン翼なんかの実況と比べればまだまだ現実的な時間だろう。なんて考えている間にボールをキャッチ。

キーパーとの間に誰もいないのでモロにオフサイド判定だ。

「が」

「？」

「そもそも学校の球技大会なんかでいちいちオフサイドなんて取るかああー!!」

「ゴオオオオル！無論オフサイド判定無し！」

△組歡喜、D組絶望。

頭をヤカンにしたイケメン君が抗議に出る。

「ちょっと待ってくれ、あれくらいマジなオフサイドならとるべきじゃねーのか?！」

しかし現実是非常である。

井モノの一言で残された僅かな希望は崩れる。

「第23条、サッカーにおいてオフサイド判定をとらない」

「ふざけるなあああー！」

「落ちてけ池沼。まだここから逆転すれば……」

グラウンドの真上の青空に、悲しげなホイッスルが響く。  
あっけに取られるリーダー。

「試合終了ー！」

「早ッ！」

「だって球技大会だからなあ……」

この後、組とD組は乱闘

その場を高峰麗香が治める

お互いにいい汗をかいたらしく友情が芽生える  
点鈍曰く「少年漫画でありがち感じ」とのこと

## 第49戦 VS 球技大会「なサッカー」(後書き)

お待たせしました。

リアルでの用事が新たか片付いたので何とか更新できました。

今回の書いた感想。

「二度とスポーツ系は書くものか」です。

サッカーボーイズとか本当に尊敬します。

そもそも私のサッカー知識は弟からと翼君のみです。

むしろテニス経験者なんでそっちにすりゃ良かった・・・

中々にツッコミどころがあると思いますので、容赦なく教えて下さい。



## 第50戦 VS 球技大会「オーガ」

「ナイツサー！」

ボールが音と共に大きく飛ぶ。

パステルカラーの模様が残像で混じりあって回転する。

数回宙を跳ねたあと、地面に落下し双方の快活な声をかき立てた。  
うーん、私もアイツに影響されてるかもね。

「惜しい、惜しい！」

「次に集中して！」

けど状況ははっきり言ってマズい。

準決勝まで来たけど、この点差でそのまま行くと絶対負けてベスト4に終わってまう。

バレー部が少なく、ここまで来ると士気だけではどうしようもない。  
というのが現状説明。

「櫂！」

力任せにスパイクを放つ。

相手は触れられないような位置とスピードだ。  
が・・・

「アウト！」

「う・・・」

「ドンマイ、櫂！」

駄目だ、コントロールがなってない。  
さっきから力みすぎでミスしている。

「櫂先輩、悪いけど勝たせてもらいます」

ネットの向こう側から嫌みったらしく微笑む真木ちゃん。

このアマ・・・ッ！

相手チームはメンバーのほとんどがバレー部のため、技術で圧倒されてしまう。

「ふっ！」

やっぱり技術がどうのこうの言ったことはなし。  
床をえぐるような大砲が体育館全体に響く。

「じ、ごめん・・・」

「仕方ないわよ。アレはどうしようもないわ」

本当にどうしようもないわ、アレは。

身長は目算で3メートル、影がきざした濃い顔。

隆々とした筋肉がさらに彼女をバケモノたらしめている。

「どうした、こちらをそんなに見つめて・・・」

「なんでもないわ」

ハスキーと言えば聞こえはいいものの、地獄のそこから聞こえるよ

うな低い声に少したじろぐ。  
色々と反則だと思う。

「フン・・・中々の強敵と聞いていたのだがなあ・・・」

「仕方ないよ、ウチのクラスが強いただけだよ」

「ふむ・・・」

その言葉（主にあのアマ）に怒りを覚えるが何も言い返せず、自分の中にイライラが募る。

しかし事実、彼女が出てきてから全く太刀打ち出来ていない。

真正面にスパイクが飛んできても、ほとんどの子がパワーに押されあらぬ方向へ飛んでしまう。

「ハイッ！」

前方にトスが上げられ、それに向って地面を蹴る。

あのマツチヨにボールが回る前に決めなくちゃいけない。

右端の開いた空間にスパイクを打ち込む。

誰もボールに触れることはない。

「アウト！」

また・・・

これじゃ全然駄目だ。

「リーダーたる者が冷静さを欠くとは論外だな。指揮官がこれではチームの底が見えるというものだ」

彼女のニイと吊り上げられた口元に、更にいらつきがつのる。  
このっ・・・

しかし引き締まった筋肉の塊の腕がボールを持つことで、我に返る。  
「さて私のサーブだ。そうだな、一発くらい本気で打ってやるとするか」

「頼んだよー」

「おおおおおおおおお！！！！」

砲弾。

そう呼ぶのにふさわしい球だった。

信じられないことに最低でも100キロは超えるだろう巨体が、自身の身長分空を飛ぶ。

振り下ろされる腕は恐らく、人の首を押し折るのに十分な威力だろう。

ボールに掌が触れたと同時に、大気が振動する気がした。

そしてアームストロング砲が自陣のコートをえぐる。

速さも尋常でなく、誰も触れられなかった。

「ハハハハ・・・フハハハハハ！」

これに勝つのは無理だ。

理性ではなく本能でそう感じた。

もう駄目だ・・・

「審判、タイムだ！」

戦意を失った私に、聞きなれた声がした。

同僚のあの男だった。

家人達はもう優勝を決めたようだった。

「皆集まってくれ」

正直、作戦タイムを取っても何の意味もない。  
アレを止められるはずがない。

「櫂！」

「は、はいっ!？」

急に名前を呼ばれて変に声が裏返る。

眉間に皺を寄せて、家人は話し始めた。

「無理に一発で決めようとするな。あの猛者を意識しすぎだ」

「でもアイツに打たせたら・・・」

「櫂」

今度の声の元はチームメイトだった。  
意志の強い瞳に私は少したじろぐ。

「次はちゃんと止めるから」

「だけど・・・」

「止めるから」

だよね？と皆に微笑み、チームはそれに答える。

「これだけ心強い仲間がいるんだ。もっと信頼してみろ」

「うん・・・」

誰が言い出すともなく、円陣を組む。

そして私は思いつきり息を吸い・・・

「絶対勝つわよ！」

『おー！』

気合を入れて配置につく。

サーバーの鬼が微笑んだ。

「どうした、逃げんのか？」

「ハ、あんた如きに誰がびびんのよ。私の相棒の母親はもっとすごいわ」

「ほう・・・」

不適に笑い返すと、彼女はまたにやりと微笑んだ。  
そして球を宙に浮かす。

「ほざくのは我のサーブを止めてからにしろ！」

大砲がまた飛んでくる。

止めると宣言した仲間の正面だ。

「う、うわああああ！」

まともに受けられるはずもなく、彼女は吹っ飛んだ。  
しかしボールは私の頭の上にあった。

吹っ飛びながらも彼女は役割を立派に果たしていた。  
スパイクに最適な位置。

トスを挟むまでもない。

コートを蹴つてとんだ瞬間、あの鬼と目が合う。

頭の中に思考が氾濫する。

これを外したら皆に合わせる顔がない。

しかもこの試合、私のスパイクはほとんどアウトになっている。

成功確立は……

「櫂！」

いつも家賃を取り立てるあの声が、私の負の思考を全て払った。  
ほぼ無我の状態でスパイクを打つ。

「っしやあああああ！」

ボールは相手コートに確かな足跡を残し、大きくバウンドしていた。

最終的に結果はA組の負け  
チームは全員で涙を流した  
例の巨漢の彼女は今回最大の強敵はA組だったと、後日の学校新聞  
で述べている



## 第50戦 VS 球技大会「オーガ」(後書き)

皆様お久しゅう、仙人掌です。

というわけで遂に50話突破です！

加えて一周年！！

(実はデータが一回ぶっ飛んだので二周年くらいですが)

コメントを下さった方の励ましもあり、何とかここまでたどり着くことができました。

読んでくれている方々、本当にありがとうございます！

そんな事情もあつてか、今回はガチです。

というか書いているうちにそうなっただけですが……

少しでも宝蓮莊を見守っている人がいるかぎり、連載は続けたいと思います。

気長に待っててください！

## 第51戦 VS 宴より生まれし食欲の黒

「それでは球技大会での我がクラスの優勝を祝って、乾杯！」

『乾杯！』

掲げられたジョッキから泡が溢れ出す。

あの後、他のグループが好成績だったので何だかんだで優勝した。そして喫茶カフェで宴とあいまった訳だ。

「こら、シャンパンをかけるな！」

「フリー！YEEー人お！」

「死にさらせえええ！」

「ブ！」

上手く銃身を乗せて放たれたパイは、クラスメイトの顔面にきれいにぶち込まれた。

ビクン、と彼の体が痙攣する。

「辛ああああ！！」

水を求めて暴れだす姿は実に滑稽。

辛さの余り、舌をかで紛らわそうとしているが恐らく無駄だろう。

「喫茶カフェ名物ハバナローニョパイ、ゆっくりと味わうがいい・・」

「ハインケル！」

誰だよハインケルって。

「ほろス、あひつらはへつたいにほろス！」

多分「殺す、あいつだけは絶対に殺す」だろうな。  
舌が上手く回らないほどの劇物だったらしい。

「テンション高いな、家人」

「ん、そうか？」

足を組んで、テーブルに右手をかけた谷山はお酒（子供の飲み物）  
に口をつける。

絶対カッコつけていると思う。

「まあ何でかんだで球技大会には燃えたしな。優勝したともなれば  
テンションが上がるのもやむを得ないだろう」

「そうか・・・店長、セブンフェイスチキンもう一つー！」

店の奥から妙に色っぽい店長がやってくる。

やたらしおらしいな。

忘れている人もいると思うので一応補足しよう。

店長はエプロンドレスを着こなす・・・着こなせていないスキンヘ  
ッドの自称日本人の黒人だ。

容姿は男性である私から見ても羨みを持つ美中年だがオカマだ。

「やだわ谷山君・・・店長じゃなくて店長さんってよ・ん・ではあと」

「い、家人ッ！」

「誠に残念ながら私は寡聞の身故、日本語を上手く理解することができないで候」

「何か色々間違ってるけど、お前の喋ってるそれが日本語おお！」  
しばらく放置しておくとし「アッ！」という余り青少年の成長に良くない音声が聞こえてきそうな状態になっている。  
そろそろ助け舟をだしてやるか。

「店長、そろそろオーダーが詰まってきているが」

「櫛ちゃんか家人ちゃんがどうにかしなさいよ。私はこの子と遊ぶわ」

そう言つて椅子越しに谷山を抱く店長。

駄々っ子のようなことを言う店長は子供のような目でありながら、妖艶な雰囲気を持っていた。

「あ・・・う・・・」

やばい、山谷が新たな世界へ目覚めてしまう。  
店長のテクをなめていた私の責任だ・・・ッ！

「私は今日は客だ。客に仕事をさせる店が何処にある？」

「派遣会社とか？」

とらえようによってはそうかもしれんが。

「では主人に家事を強要するお手伝いさんが何処にいる？」

「最近のメイドじゃ無いこともなさそうだけど？」

埒が明かない・・・

というか私の喻えが悪いから論破できないだけなのだな。  
そして濡れた谷山は空気。

「普通ならそのメイドはクビだろう？」

「少なくともここは普通じゃないわ。主人がマゾシヨタならそれも  
あり得るでしょう？」

何でシヨタ限定？

「少なくとも私はマゾではない」

「でも櫛ちゃんはわからないわよ？」

「あんなS中のSみたいな女が・・・違うよな、櫛？」

「へにゃ？」

・・・駄目だコイツ、早く何とかしないと。  
完全に酔ってやがる。

話を振った私が馬鹿だったということだろうか。

「今の自分をさらけ出した状態の樗ちゃんなら、例え家人ちゃんかはたいたらどうなるかしら？もしかしてそのまま赤面モノの状態へ・・・」

「やかましいっ、この歩く18禁！第一谷山は童貞なんだ。童貞卒業前に処女卒業なんて笑えないだろ」

本当に笑えないだろ・・・

ふと小三の時の記憶が、脳から洪水のようにあふれ出てくる。

「やらないか？」

彼の声が頭の中で反響する。

止めてくれ・・・止めてくれ・・・私はそんな・・・違うんだ・・・ッ！

「わかったわよ。やればいいんでしょっ」

店長が空気読んでくれたようだ。

そりゃ急に自分の体を抱えて震えだす悪魔憑きみたいな奴がいたらそうなるよな。

私のことだが。

「家人・・・もう俺はお嫁にいけない・・・」

「安心しろ。私が責任を持ってイキのいいマグロを実家から持って来よう」

「せめて・・・哺乳類が良かった・・・」

ガクリとそこで彼は手をダランとさせて、燃え尽きた。

私は彼のことを一生忘れないだろう。  
ありがとう山谷、ありがとう谷山！

この後喫茶カフェは更なる盛り上がりを見せ、店内は大惨事となる  
現場にいたA君の証言

「なんていうか・・・自分で自分が止められなかったんです。テン  
ションだけが先行して魂が体の2歩先を行っているような・・・皆  
そんな感じでした。あの現状を言い表すとしたら（長いので以下略）

## 第51戦 VS 宴より生まれし色欲の黒（後書き）

忘れた頃に更新、それが宝蓮荘クオリティ。

こんばんわ、仙人掌です。

やっと暇ができて、友達に触発されたこともあり久々に更新しました。

最近×組（何でこんな名前にしたんだろう）と真木以外出番がないのでそろそろ作っていききたいと思います。

今回はお祝い会の話ですが・・・いるよね、こういうテンション上がるとエロくなる人。

もつとも私のまわりは常時エロスフル装備な人ばかりですけど。

私も含めて。

寒さが厳しい季節となりましたが、頭の中はいつでも春真っ盛りです。

そんな春度を宝蓮荘に託して、皆様の過す厳しい冬の寒さをやわらげられたらと思います。

・・・作文？



## 第52戦 VSお泊り会「人生遊戯」

人は誰かを蹴落とせないと上には行けない。

現状に妥協するなら案外そうでもないかもしれないが、少なくとも毎日の食卓では否が応でも他の生物の糧とする。

私達は無意識の内にそういうことを感じないようにしているのかもしれない。

誰がいちいち飯を食べるごとに、魚や牛の気持ちを考えるだろうか。「いただきます」や「ごちそうさま」は人間の罪悪感を紛らわすためのものかもしれん。

ただ生命に感謝する気持ちが無いよりはマシだと私は思う。

しかし、他を殺すことを意識しないようにするのはなく、逆に意識するためにあるようなモノがある。

例えば・・・ゲームなんかがそれに当たるだろう。

「家人、裏切ったな！」

「サバイバルにおける同盟なぞ、マラソンの前に「ゆっくり走ろうぜ」とかいう約束よりずっと軽いわッ！」

「とか言ってるうちに墮天・ネガティブゾーン！」

「ぐああああ！」

「セーフ、範囲外へ・・・」

「残念賞！」

「零距离のファイアジャンプパンチだっ?！」

「ハイ終了」

「くっそー」

画面の「CONGRATULATION」の文字がゲーム終了を告げる。

これで井モノの6連勝目だ。  
中々勝てんものだな。

「あ、もうこんな時間か」

井モノが見上げた先の時計は戌の刻、即ち夜8時くらいをさしている。

遊んでいる間に大分時間が立っていたようだ。  
そろそろお開きか、と思ったら健児が床に大の字で倒れる。

「あー帰んのだりい」

「なら泊まって行くか？」

「親は？」

「私の家、今日は親居ないんだ……って何を言わせる」

「誰も言わせてないから」

それはともかく。

まあ布団は来客用が1つとソファアがあるしたまにはお泊り会もい  
いだろう。

とか思ったら健児の奴は勝手に押入れを空けて布団を出していた。  
手と気の早い奴だ。

男三人布団の上。

女が三人寄れば姦しいというが、男だと何になるだろか。

「さあ、家人よ・・・お泊り会の定番、エロトークか恋バナといこうか・・・」

「前者はともかく、後者は誰か話せる奴はいるのか？」

「・・・」

「・・・」

「・・・最近のラブプラスっていう恋愛ゲームについてなら」

「よせ井モノ、余計空しいだけだ」

辺りには気まずい雰囲気が漂う。

男が三人寄れば暗くなるらしいな。

気を使ったのか井モノが明るく振舞う。

「そ、そういえばハガレンの新刊でたよね？」

「無理に明るくすんな、井モノ。俺はもう死ぬ。家人、ロープとかねーか？」

「せめて滞納分の家賃を払ってからにしろ」

隣に自分より落ちている奴がいるため、逆にひいてあまり落ち込ま

ずに済んだ。

「フヒヒ」とかダークに笑ってる健児を見ていたらどうでも良かった。

「うだうだするな、それでも男か！とりあえず現実が上手くいかなくとも、ゲームの中だけなら結婚できるぞ」

よ・・・っと。

というわけで人生ゲームを押入れから引っ張り出してくる。

「これで結婚できないとか展開になったら・・・」

「いや、そういうこと無いように出来てるから」

確かに普通の人生ゲームは結婚のイベントが絶対に出来るようになってるよな。

製作者もこういう事態を想定して作ったのだろうか。

「ふう・・・家人の言うとおりグダグダしても仕方ないな。よし、俺赤い駒！」

「じゃあ私は白い車で」

「僕は青にするか」

大分年季の入った箱から、各々自分の分身となる駒の車を取り出す。先代の頃からのモノなので紛失している職業カードなんかもあったりする。

恐らく父さんや母さんも宝蓮荘に住んでいた頃、これを使っていたのだろう。

「一番手、俺！」

勢い良くルーレットが回りだす。

ちなみにサラリーマンになるルートとさまざまな職業につけるコースがあるが、ネタでもない限りリーマンコースは選ばない。

社会の歯車の象徴ともいえる職業に何故就かねばならん、というのは無くてそっちを選ぶと給料が十中八九低くなるからだ。

「3、えーと【リカちゃんと映画を見に行く。\$1000払う】だな」

「やっぱ俺なんか根本的に駄目なんだよな・・・しよっぱなからこれだよ」

俯いてブツブツ何かをつぶやいて再び落ち込む健児。  
アップダウン激しいな。

「健児君、落ち込まないでほら！彼女で来たって意味なんじゃない？」

「いいや、ぜってーこれサイフ代わりに使われてる、都合のいい男Aだってこれ・・・」

「馬鹿野郎おお！」

「グあつ！？」

俯いていた顔にアッパーを入れ、無理やり顔を上げさせる。

下ばかり見えていても近づいているトラックに気づかなかったりして

危ないからな。

「なにすんだよ！」

胸倉を掴んで、へこたれている奴にカツをいれる。  
この馬鹿はどうして・・・！

「どうしてお前はリカちゃんを信じてやれないんだ！付き合っているなら向こうのことを信じてやれ！！そうしないとその内大好きなリカちゃんに逃げられてしまうぞ？！」

「けどよ・・・」

「けどもクソもない！「人を信じて傷つく方がいい」って金八先生も歌っていただろうが！」

「そうか・・・だよな。俺、間違ってたよ！」

「君ら何の茶番だよ」

「「熱血」っこ」

ハイ次。

井モノのターンだ。

健児とは対照的に、コロコロとゆっくりルーレットを回す。

「8、医者だね。家人君」

「すまないが医者職業カードは紛失したので、代わりにお手製カードでもいいか？」

「じゃ、それで」

人生ゲームには無くした時のために、何でも書き込める白いカードが入っていたりするのだ。

家庭によつては手書きで「ぷろぐらまー」などと書かれていたりするのがあつたりして、中々に可愛げがあるものである。

「ってこれ可愛いけど医者って言うよりお医者さんだし！」

スパーンと淫乱な医者 of 職業カードが、メンコのように地面に叩きつけられる。

カードの内容に題名をつけるなら「幼女と医師」だろうか。

そういえばまともに聞こえるが幼女の顔は赤みを帯びており、本来はだけの意味のない部分までだけている。

「何がむかつくってこれ僕の好きなエロゲ絵師の画風とそっくりなんだよ！」

「知らんよ」

実際に本人でもおかしくは無いが。

そんな面子が集まる、それが宝蓮荘。

「じゃあ俺！」

健児はまたルーレットを高速回転させる。

止まった数字は……9。

「えーと、就職のマスに止まれなかったからフリーターだね」

フリーター・・・それ人生ゲームにおいて稀にしか出現しない最悪の職である。

後編に続け



## 第52戦 VSお泊り会「人生遊戯」(後書き)

序盤の恋バナの話を振ったら、誰もネタが無かったというのは実話です。

中3の修学旅行から女ツ気が皆無に等しかったんですね・・・私。

「女一瞬ダチ一生!」とも言いますしね、悔しくなんて無い。

ただ恋人達のクリスマスにコミケの会議をしているのは流石に空しくなりましたが・・・友達からの「今、彼女と家にいる」のメールには殺意を覚えたものです。

### 第53戦 VSお泊り会「原始の争い」

「何故・・・何故なのよおおおおお!!?!」

「落ちて着け健児。胸に手をあて、深く息を吸い、そのまま窓から飛び降りろ」

「家人君そういう冗談は・・・今の健児君ならやりかねないよ」

ゴンツと鈍い音が、開け放たれた窓から夜の寒い風と共に部屋へ入ってくる。

飛び降りたところで所詮ここは一階なので特に頭をぶつけるくらいだが。

「高二男児、一階から転落死」全国区の新聞で載りたくはないよな。

「健児ー、謝るから戻って来い」

「借金五十万ドルってどういうことだよ・・・円換算だと・・・」

「まあ四千万円は下らないよね」

察しの良い方はわかっているとは思いが、前編から少々時間が飛んでいるのであしからず。

無駄な部分は省くのが近今の風潮だ。今に始まったことではないと思うが。

しかし重要でない部分こそ必要だったりするものである。

学校の授業の内容とか。

そうでもないか。

「というか健児、あとゴールしてないのはお前だけだぞ」

「うわ、井モノ地味に終わってたのか」

ブツブツつぶやきつつルーレットを回す。

ひたすらひたすら狂々狂々と。

人生ゲームは最後の辺りに決算日というコマがあって、借金がある  
と通過できず、そこでルーレットを回し金を稼ぐ。

聞こえるのはカラカラ・・・と寂しげな音だけだ。

あまりにも借金の額が膨大で、長すぎるために井モノが痺れを切らした。

「健二君、結局は全額返済するんだから飛ばしてもいいよ」

「駄目だ・・・自己破産という道は通らない・・・もう二度とお金  
が借りられなくなる・・・」

駄目なのはお前だ。

ゲームとリアルの境界が大きく揺らいでいる。

チク、タク、チク、タク

カラララララ

静か過ぎて普段は聞こえないはずの、時計が秒針を刻む音さえ聞こえてくる。

嫌な雰囲気だ、空気が重い、変な汗が流れる、どこかへ逃げ出した  
い。

何故盛り上がるためのパーティゲームで盛り下がらねばなんのだ。  
室内の気圧が下がりきった頃、健児が地獄から戻ってきた。

「っしゃああああ！やつと全額返済！！」

長きにわたる戦いにようやく終止符が打たれようとしている。  
長すぎるわ。

健児の手によつて回されたルーレットは、軸から飛び出さんとばかりに回転している。

「2、バカンスで月に行く。\$250,000払う」

「家人、ロープと椅子」

「前回と同じ流れはやめろ」

健児は静かに握った拳を震わせた。

かろつじてでた声は、泣くのをなんとかこらえているようだった。

「何だよ・・・俺、何か悪いことしたかよ・・・」

「健児、お前の車には子供が沢山乗っている。それに比べて井モノの家は全く子供に恵まれていない」

「でもどうやったら俺はあいつらを養えるんだ・・・」

「ど阿呆！お前達の車の行く先を見てもろ！！」

「億万長者の土地・・・」

「そつだ！お前は」

「その流れもさつきやったから」

同じネタを二度繰り返すお笑いのテク、天井を知らんのか。  
井モノという名前だというのに何たる

「君がそのネタに触れるようなら、僕がその幻想をぶち殺す」

「ごめんなさい」

目が本気だったな。

私でも井モノに怯むことくらいある。

まあ名前ネタってのはいじめの原因だし、人によってはかなり触れられたくないものだからな・・・

今の時代、変な名前も珍しくないが。

入学式の時にアトムとウランという名前の生徒が同じクラスだったのには驚いたものだ。

アルだとかワキガだとか子供に名前をつける今の世を考えればまだマシか。

かくいう私も変な名前だから苦労したものだ。

「家人ー。ハラー・ヘッター」

「ん」

先刻まで世界が終わるといような状態だったのに、随分と早い立ち直りなことだな。

こういう健児の切り替えの良さは、私も見習いたいものだ。

テンションの上下が激しいだけでも言うか。

鬱と躁を繰り返すのも大分危ない精神状態だよなあ、と思いつつ茶菓子が入っているはずの戸を開く。

「・・・・・ほい」

「サンキュー、旨そうな猫缶じゃん・・・俺は人間だ！」

「味は薄めだけど、食べられるらしいよ」

「聞いてねーしつ。家人、次ふざけたの出したら、某後輩にお前がそろそろお前の料理を食べたがつてたつてゆーぞ」

それは怖い。

本当に怖い。

とても怖い。

「すまん。なんとなく目に入っただけだ」

「目に入っただけで出さなよ」

むしろ俺は狼だ、と健児は妙な主張をする。

猫缶に餓えた又又猫に引っかけられて大ダメージを食らう奴が狼というのも情けない話だ。

我が家では猫缶なんて滅多にお目にかかれない贅沢品だからな。又又猫がサイヤ人（猫）に覚醒するのも無理は無いか。

「ふうむ」

「僕もお腹へって来た・・・何も無かったの？」

「無いわけではないのだが・・・」

戸棚にあったのは何とも寂しげなたった1つのモンブランケーキ。  
喫茶カフェからお持ち帰りしたものだ。

「1人分しかない」

「へえ」

急に2人とも声のトーンが下がり、部屋は冷戦状態のような雰囲気  
に包まれる。

まったく、ここには相手に譲ろうという精神がある立派な若者はい  
ないようだ。

言うまでも無く私も含めてだが。

電車の席ならともかく、自分の食物を相手に譲るわけがない。

かの有名なイエス・キリスト様が「下着が2枚あったら、持ってな  
い者に与えなさい」とか言っていたような気がする。  
逆を言えば1つしかないケーキを与える道理は無い。

「当然ここは、一番初めに言った俺が頂くべきだよな？」

「必ずしも言い始めた奴と、実際に行く奴が同じとは限らんだろう」

「家主として客をもてなすべきじゃない？」

「ハ、料理である井モノが自分にご馳走しろだと？片腹痛いな」

プツンという音が聞こえた気がした。

黒いオーラを身に纏った井モノが、ゆっくりと立ち上がる。

「ふれるな、って、言っ、た、だろおおおおお！この地味目絶  
食系堅物型中二口調頭でっかち！！」

カチン

「いい度胸だな、おい！パックに詰めて吉野家に寄付してやろうかあ！？」

「僕は点吞克鈍だ！牛井の要素無いだろッ！！！」

「おまえらさあ・・・」

「薄幸馬鹿は黙ってる！！！」

ブッチン

「あんだとてめーらっあああああ！」

「全員まとめて0と1の境界に還元してやる！」

「来るが良い・・・ただしその瞬間に貴様らは終末を迎えることになるだろッ！」

さあ、命を掛けた死闘が今はじまる・・・と思いきや

「近所迷惑だっつーの！！！」

突如乱入してきた櫛によって、全員まとめてノックダウンされたことさ。



3人とも女性陣に説教を喰らうこととなる

後日、疲労により仲よく遅刻

教訓

お泊まり会は翌日のことを考えて

### 第53戦 VSお泊り会「原始の争い」（後書き）

私の家だと途中で母がマジギレして夜更かしもクソもあつたもんじやありませんでした。

そのくらい許してよ、マミー。

そろそろ最終編に取り掛かろうと思います。

この超うだうだな更新スピードに付き合ってくれる方、どうもありがとうございます。

## 第54戦 VS 町内会会長

戦後からずつと取り替えていないという、大分年季の入った畳の上で60人くらいの人数がひしめき合っている。

方々では「3丁目の山谷さんのせがれが・・・」「この間変なばあさんにひつたくらいけた」などと井戸端会議が。

しかしこの公民館はいい加減改築したほうがいいと思う。

古臭さはそれもそれで情緒があると思えばよいが、この人口密度だけは我慢できん。

今も髪の毛が風前のももし火といった年寄りが「すいません、ちょっと通してください」と連呼しながら部屋を出ようとしている。トイレに行くのも一苦労だ。

「おう、家人じゃねえか」

「マイケルか。商売の方はどうだ？」

「まあ最近は何処のしけちまってるんだ。なんとか生活できる程度にやか稼がせてもらってるがな」

ニヒヒ、と彼は笑った。

ねじり鉢巻に浅黒い肌、黒い前掛けといい伝統的といってよい程に全身で自分は魚屋と自己主張している格好だ。

仕事以外のときぐらい普通の服を着たらどうだと前に言ったら、本人いわく「これが俺のアイアンティティよ」だそうだ。

多分アイデンティティのことだろう。

彼の名は魚沼マイケル。

詳しくは第32戦参照だ。

ちなみに敬語を使わないのは私のアイデンティティである。良くも高校の面接を無事に通過できたものだ。

と思ったがそういえば、相手はあの校長だった。

敬語どうこう以前に暴言を浴びせ、拳句の果てにスリッパを投げつけてお開きにしたな。

しかしあれは「まだ童貞なのか、ん？」とか「1週間平均何発だ？」とか関係ないことを聞く校長が悪い。

「つかアレだな。華の高校生が町内会に真面目に出てんの今日日珍しいモンだ」

「華の〜」という言葉を男子高校生に使うのもなあ……。使わないことも無いかもしれんが、男を華に例えるのは微妙な気がする。

「私だってそんな毎回出るほど律儀でもないし暇でもない。しかし今日の議題はアレだろ？」

そういつてニヤリと笑ってみせると、彼も「そうだな」と言ってニヤリと笑った。

写真を撮ったら「悪代官と悪徳商人」という題名が良く似合うだろう。

それほどに私もマイケルも心底楽しそうに笑っていたと思う。

「んで、そっちの嬢ちゃん是谁だ？」

「……森林葉です……」

「俺あ魚沼マイケルっつー魚屋だ。宜しくな」

「・・・宜しく願いします、魚沼さん・・・」

「そんな堅苦しくなくていい、いい。マイケルで頼む」

「・・・マイケル・ジョーダンさん・・・」

「ってどっから苗字きた?!」

「はははは、面白えお嬢ちゃんだ!」

彼は膝を打ちながら大爆笑していた。  
ツボがよくわからん。

しかし林葉も昔と変わったものだ。

出合った頃はこんな人数の集団にいただけで苦痛だったろうに。  
やはり彼女は少しずつ成長していたのだろう。

その後3人で取り留めの無い話をしていると、前のほうから「静かにしろ」と声が聞こえてきた。

「大体集まったようだな。そろそろ町内会議を始める」

「おー」「待ってましたあ!」「よつ、大統領!」「明日は特売だあ!」「Ya / Fu - !」「俺の歌を聞けえええ」「光差す道となれ!」

会長が出ただけで室内が一気に盛り上がる。

どうやら既に酒が入ってしまっているようだ。

後半はもう自分の好きなことを叫んでいるだけで、全く関係ない。

「・・・」

会長が手を挙げて制止すると、皆大人しくなった。

さて、このように大人気の会長について説明しよう。

風貌はどてら姿にさらし、顔は斜めに目を横切る傷とそれを隠そうとしているが隠せていないサングラス、といったものである。

その上白鞄のドスのようなものを抱えている。

何処からどう見ても完全に「や」のつく自営業の方だ。

実際そうだったりする。

我らが会長【蒲公英極龍】そんな人物だ。

そしてその会長が頭目を務める一家が蒲公英組・・・ひらがな表記で【たんぽぽ組】である。

名前だけ聞けば幼稚園の学級なのだがなあ・・・

「そいじゃ会議を始める。今日は大和祭についてだ」

「おー」「待つてましたあ！」

以下先刻と同じ流れ。

会長も大変そうだな。

「シヨバ代は祭りが終わった次の町内会で回収する。とりあえず当日の日程だが・・・」

普通にシヨバ代とか発言する町内会会長とはいかがなものか。ウチに新しく越してきた人とかどうという反応をするのだろう。

「出店の申し込みは今日で最後だからな」

ちなみに宝蓮荘も毎年やると大変なので、隔年だが出店させてもらっている。

そして今年がその年なわけだ。

大和祭は少し大きめの祭りなため、儲けもがっばりと・・・もっと

も打ち上げの費用にほとんどが消えるのだが。

「一応去年と大して変わってねーが、注意書きみたいなのを紙にまとめて置いた」

がやがやと雑談を交えながら前からそのプリントが回ってくる。

そもそも列などなく入り乱れて座っているので、結構に適當だが。

・・・先程、プリントと形容したのは間違いだったな。

ワープロでうったというようなものではなく、それは見事なまでの達筆で書かれていた。

極道もデジタル化しているかと思いきや、少なくともたんぽぽ組はそうではない様だ。

にしても字上手いな。

「にしても組長は字がうめえな！」

「・・・おう」

照れた。

ウチの会長は皆にマスコットキャラ的に愛されるのもわかる。

彼は強面だが、そこそこかわいらしい一面を備えている。

趣味は園芸と手芸ときたまんだ・・・まあ多少引いたけど。

「続いてこの近辺で最近ひつたくりが多発しているが」

「林葉急用を思い出した」

これ異常ないという程に無駄のない完璧な動作で立ち上がり、全身の五感をフルに活用し現在位置を確認する。

ここから出口まで恐らく飛べば7秒位・・・止めるような人物は・・・

「・・・何・・・？」

「荷物が重いのに腰を痛めてしまったお年寄りの助ける声が聞こえた」

「変な電波受信すんなよ。最近って言うてんだから花ちゃんじゃねえって」

マイケルにどうどうと諷められる。

引ったくりというと、それを趣味にしている私の親戚しか頭に思いつかない。

とぼつちりを喰らう前に逃げようとしたが、確かに魚屋の言うとおりにだ。

なんだかんだで慣れた町民は、花をある種のイベントとして楽しんでいるしな。

とか思ったら組長から呼び出しが。

「そこら辺含めて家人、お前は少し終わったら残れ」

ほらああ！

結局話の内容は大和花子と関係なかった



## 第54戦 VS 町内会会長（後書き）

まだ俺のバトルフェイズは終了してないぜ！

お久しぶりです。

更新スピードが遅い作品でも質も量もある良作は多いですが、両方ともないウチはどうしようもないですねww

結局2月末に更新するつもりが話が詰まって3月に・・・  
最終話のためにストーリーに制限があると、キャラが動かし辛いです。

適当にうだうだやってるのは楽ですが・・・オチさえつけば。

一応明日から暫く何もない休みが何週間が続くのでそのうちに1、2話は更新したいと思います。

ただpixivで底辺をうろついたり、たまった小説（同人誌ですが・・・）があるのでどうなるかわかりません。

司馬遼太郎とか何冊かこの休みに読む予定なので。

ラノベみたいに軽いのはガンガン読めますけどね、最近読んでるのは刀語りくらいなモンですが。

あれラノベでいいんでしたっけ？

昔はハリポタとか2日で上下巻読破とかできたのですが・・・時間のなさとか老いは恐ろしいです。

あんまり期待しないで待っててくださいねw

## 第55戦 VSネオ・引つたくり

南国植物が生い茂っている、というより蠢いている。

下手をしたらこいつらに食われてしまうのではなかるうか、という小さな恐怖心すら抱いてしまう。

前回来たときよりも私の親戚、こと大和花子のお花屋さんは進化していた。

もつとも今はお花屋さんというよりタダのジャングルだ。

しかしそれには目もくれず、レジで同人誌を読んでいる茨姫・・・無理があるか。

ツタや触手、麻薬が精製できそうな花に囲まれた老人を見据える。

「もう一度言う。暫く引つたくりを止めろ」

「ひどいのう・・・近頃の高校生は老人のささやかな楽しみさえ奪うなんて非道じゃ・・・」

老人といっても口調の割には、まだ五十代後半だがな。

それにこのババアが全力で走れば、かのボルトーもメではない。

「だから何度も言わせるな。最近引つたくりが多発しているんだ」

「わっちは関係のう言つとるじゃろ」

「紛らわしいしからだ。今町民はピリピリしているのだ。てかわつちつて初めて聞いたぞ」

警察がそこそこ頑張っている上、悪さをすると法で裁かれなくとも極道（たんぼぼ組）にしめられる。

治安はかなり良い町なのだ。

たまに出現する素手で建物を破壊するバケモノや、気まぐれでトンデモ校則を出すセクハラ校長などの問題児を除けばの話だが。

・・・問題児のほとんどが身内だったな。

不名誉極まりない事実のため息を試みる、はあ。

「い、家人さん・・・助けて・・・」

「ってユカ?!」

そう言えばガーデニングのために肥料を買いに来たユカがついてきていた。

とかその前に生きている（あたりまえだが）ような植物に取り込まれているユカを助けねば!

「で、どうすればよいのだ?」

「枯葉剤はおいとらんよ」

「何でそんな冷静なんですか!?!」

や、別にこの前にウチで発生したモンスタープラントと違って口がついてるといっわけでもないしな。

放って置いても害はなさそうな気がする。

むしろ猫が猫じゃらし相手に戯れているだけの様な感じにも見受けられる。

「そもそも何故こんなのを飼っているのだ?」

「物好きな富豪に売りつけるためだよ。観賞用だそうさね」

確かに見る分には飽きなさそうだな。

先程からずっと元気一杯にうごめき続けている。

「無視しないで下さい！泣きますよ?!」

「仕方ないな、そろそろ助けてやってくれ」

「そしたら引ったくりしてもええのか?」

成る程、そう来るか。

だが町内会長に頼まれてきている以上、はいそうですかと言って引き下がることもできない。

「というわけでユカ。君のことは忘れない」

「見捨てられた?!」

「まあ冗談は置いといて、そいつらをなだめてくれ」

「仕方ないの」

花屋が触手をなでると、急に触手がしゅんとなった。  
萎えたのか。

「一言余計じゃ」

「あだっ」

ばあさんが手元のスイッチを押すと、上からタライが落ちてきた。

ここは本当に花屋か。

「家人さーん・・・酷いですよぉ・・・」

泣きついてくるユカを適当になでてやる。

ふむ、悪くない髪質だ。

ずっとこうしていたいが、ばあさんをどうにかせねば。

「引ったくりが捕まるまでの我慢だ。な？」

「えー」

「可愛さのカケラも無いな・・・」

「家人さん、口に出てます」

おっとつと。

花屋は中々諦めないようだ。

そんなに引ったくりを止めるのが嫌なものなのだろうか。

こんなことは言いたくないのだが、致し方ない。

「ババア、ここで売ってる栽培・取引が禁止されているモノを全て警察様に献上してもいいんだぞ」

「うぐつ・・・だがしかし甘いね、坊や。この私が根回しを行っていないとでも思うのかい？」

「頼みの綱の警察やつてるお前の兄上は買収済みだ」

「何やてえ!？」

「関西人でしたっけ？」

買収済みというか花子婆さんに手を焼いている、とこの間相談したらこのことをカードに使えと言われたただだが。  
大切なのはノリだ、ノリ。  
しよげている花屋に釘をさしておく。

「約束をやぶったらブタ箱行きだからな？」

「・・・チツ。わぁーったよ」

何かとキャラが安定せんな。

さて、用事も済んだし今日の夕飯を買って変えるか。

「行くぞ、ユカ」

「あ、まだ肥料が・・・」

「ん」

ユカを待っている間、腕組みをしつつ壁にもたれて往来をぼんやりと見る。

この歩いている人、一人一人に各々の人生があると考えると不思議なものだ。

それをほとんど知ることができないが、色んな人が自分と同じように泣いたり笑ったりして生きている。

私にとっては背景に過ぎないエキストラが、それぞれにとっては自らが主役なのだ。

焦燥に近い不安を顔に浮かべた少年を見やる。

待ち合わせの時間を過ぎているに、未だ待ち人来ず、といった状況なのだろうか。

バックれたのか　　すると今の彼には歩いている人が皆、自分を嘲笑っているかのような錯覚に陥っているのかもしれない。

我が家へと続く道を眺めれば、自転車を限界まで酷使してこちらの方角へ走る青年がいる。

この先は駅だ。

もしかしたら恋人に対して誤解を抱いてきたことがわかり、遠くへ行ってしまう思い人に最後に一目会いたいが為に必死に走っているのか。

・・・我ながら恥ずかしい妄想だな。

「いや、待てよ？」

その状況だとしたら全力疾走しているにも関わらず、マスクとサングラスをしているのは何故か。

花粉症の季節がやってきたから、そのような格好もおかしくないかもしれない。

だったら明らかにオバさんモノのバッグを持っているのは何故だ？ふと抱いた疑問が、青年が花屋を通り過ぎる頃に確信へと変わる。

はるか後方から聞こえてきた聞こえるか否やという、使い古されたあのワードと共に。

「ひったくりよおおお!!」

「・・・私の純情をかえせっ!」

「家人さん？」

「何言ってるんですか」とでも言いたげなユカには目もくれず、商店街をダッシュする。

こんな人通りの多いところで犯らかすとは血迷ったか！

しかし足では自転車にも適わないから当然・・・

「引ったくりだ！捕まえてくれ！！」

「応ッ！」

やたらと体格の良いすし屋の旦那が引ったくりの道を阻む。

二メートルを超えるであろう身長から発せられる威圧に、流石の引ったくりもビビっている。

「う・・・うあああああ！」

「む？！」

自転車の前輪が華麗に宙を舞う。

ワイリー走行か。

追い詰められた獣の如く彼は爆発的な力を発したのか、更に二メートルはあるすし屋の巨体を自転車が飛び超えた。

「あ・・・うあっ・・・！」

激しく車体を揺らしながらも自転車は止まらない。

あのスピードでは最早止めることもできない。

「八百屋！借りるぞ！！」



「え？」

通り過ぎる瞬間に適当に八百屋から商品を引ったくる  
後で代金はどうにかするでしょう。

「喰らえ小松菜！」

ゴ  
ン  
ツ

お馴染みの鈍い音がする。

小松菜自体が硬いのか、それとも入れ物が硬いのか。それは神のみぞ知るところである。

「つてえ……くそ！」

自転車から落下した引ったくりは、そのまま駅の方へ向っていく。不味い、丁度着いた電車に乗っていた客のせいで見失ってしまう。小松菜では一瞬動きを止めるだけ精一杯だった。否、その一瞬だけで彼女には十分だったようだ。私の横を亜音速へと達したアイツが爆走して行き、そして地面を思い切り蹴ってからの回し蹴りが炸裂した。

「引つたくりはキャッチ・アンド・リリースが基本じゃボケええええええええええ！！！」

引ったくりは誇り高き引ったくりの下へ跪いた。  
というかそれは間違ってるだろうに・・・

待ち合わせをしていた少年は、結局相手が電車を乗り違えたただけだ  
ったそうな  
めでたしめでたし

## 第55戦 VSネオ・引つたくり（後書き）

途中で出てきたすし屋は痴漢男のスシグルイにしようかと思ったのをやめたのは絶対に秘密です。

読んでも人も少ないのにこの後書きを読んでも人はもっと少ないのに何人がそんなマニアックなネタわかるんだろう・・・

今回はいつもより長めです。

オチを最初に決めていればグダグダやってるだけでいいので、非常に楽です。

昔の1・5倍くらいでしょうか。

このくらい長くても大丈夫ですかね？

元々一話が短いので大差ない気も・・・

## 第56戦 VS イイソー

「あ．．．」

版書を間違えて【アウストラロピテクス】を【アウトロウピクルス】と書いてしまった。

退屈な授業でボーっとしていたとはいえ、我ながら酷い間違え方だ。是非とも食べたくないピクルスだ。

心の中で「スティッキーフインガーズ！」とほざきながら、筆箱のチャックを開ける。

「あ．．．」

消しゴムが影も形も無い。

そういえば昨夜に勉強したとき机に置きっぱなしにしていたような気もする。

机の上にポツンと置き去りにされた寂しい思いをしている消しゴムを思うと、胸が締め付けられる。わけがない。

仕方ないので隣の席に座っている櫛から借りさせていただくとしようか。

「悪いが消しゴムを貸してくれ」

と声を潜めながら聞いてみると、同じく潜めながら返ってきた答えはNOだった。

「嫌よ」

「何故だ。三十文字丁度で答えよ」

「私の消しゴム、買ったばかりの一度も手をつけていないヤツなのよ」

本当に句読点を含めて三十文字ぴったりで答えやがってくれた。新品なら仕方ないな。

あのカドを使う快感は、他の誰にも使わせたくないものだ。それだからこそあのカドケシといった商品がヒットしたのだろう。

「ちょっと消しゴムを貸してくれ」

今度は前の席の井モノに聞いてみる。  
ちなみに私の席は教室の一番下の列、右端から二番目だ。

「ごめん、僕はボールペン派なんだ」

「そうか・・・」

どこかの本で読んだが、ボールペンで版書を取った方がよく覚えられるらしい。

私も前に一回試してみたが、余りの誤字の多さに修正液の使用頻度が多すぎて、シャーペンを使ったほうが効率的だろうという結論に至った。

「ちょっと待ってて」

「ん」

代わりと言ってはなんだが、どうやら隣から借りてくれようとして

いる。

だが何故だかその隣の女子は渋っている。

ほほう、私に消しゴムを貸すと穢れるとでもいうのかい？

しかし良く見ると若干顔を赤らめ、うろたえている。

・・・成る程、わかったぞ。

後ろから井モノをつつく。

「左隣から借りるからいい」

「え、いいの？」

「誰から借りようとも変わらんさ」

そう・・・といって井モノは授業へ戻った。

隣の女子は私にはにかみながら、手刀を突き出した。

とはいえ攻撃宣言ではなく、多分謝罪と感謝の意なのだろう。

私も手をふって「良い良い」と返してやる。

あの女子は井モノが好きな子のうちの一人だと聞いたことがある。

そして少し前に消しゴムに好きな人の名前を書いて、誰にも見られずに使い切ると両思いになれるというおまじないが流行った。

ついでにあの反応。

以上の三つから導き出される結論は簡単だ。

消しゴムには恐らく井モノの名前が書いてあるのだろう。

まあ見られたら嫌だろうな。

なんて考えながらにやける、青春しているなあ。

つと櫂にでも見られたら気持ち悪がられる。

「というわけだ、A君。消しゴムを貸してくれ」

「ちゃんとした名前で呼べよ」

いや、一発限りのキャラに迂闊に名前をつけるのはどうかと思うのだ。

無駄にキャラ数が多いから読者様も「こんなヤツいたっけ？」となつてゐるだろう。

適当にクラスメイト出すと健児とキャラがかぶりそうになるし。とか危ない発言は置いとして。

「松井デラックス、頼む」

「松井がすごくなったのか、マツコデラックスの親戚か・・・ってどっちでもいいわ」

「じゃあルドル・フォン・シュトロハイム」

「何処の国籍の方だよ」

「ドイツの国籍の方だよ」

「どうでもいい」

怒ってしまったのか、シカトし始めた。  
今のは私が悪いか。  
次は斜め前だ。

「谷山、消しゴムを貸してくれ」

「だが断る」

「……山谷、消しゴムを貸してくれ」

「あいよ」

どうやら名前を逆に言ったのがいけなかったらしい。

ニッケネームのようなものなんだから、そこまで気にせんでも。

「あ……」

このリアクションから察するところは一つしかあるまい。

というか五人に借りようとして、五人とも駄目という私の運は素晴らしいものがあるな。

畜生！

「はあ……全く」

「何呆れてんだよ。そもそもお前が俺を違う名前で呼ぶから消しゴムがどっか行っただよ！」

「最近の消しゴムは自我が芽生えているのか……って馬鹿か?! そんなワケ無いだろ！」

「うるさい！それがモノを頼んだ人間の態度かッ?!」

ガンッ！

「……………」

「……………」



そういえば今の授業は日本史Aのじじいだっとな。

先程のは教卓を思い切り叩いた音のようだ。

第8戦以来の一年以上たつてからの再登場だ。

何かストレスでもたまっていたのか、80%以上の生徒が騒がなくなもきれた。

もつともアレだけ騒げば普通の先生でも怒るだろうか。

「手前ら、表へ出る」

「……はい」

くそつ、絶対に今日の私はついていない。

私はただ消しゴムを借りたかっただけだと言うのに。

「はあ……」

谷山と仲よく廊下に立つ。

この年になってまで、こんなことをするとは思わなんだか。

「つかさ、家人。今思ったらシャーペンの頭に消しゴムついてなかったっけ？」

「あ……」

ノートをとるときは、消しゴムを使うより二重線で訂正した方が時

間が短縮できていいらしい

## 第56戦 VS イエイソー（後書き）

と言って置きながら私はボールペン派で、いちいち修正液を使っているのですが。

小学生の人は、友達のケシゴムに女子の名前が書いてあったら、十中八九その子が好きなんだと優しい目で見てやって下さい。

小学生がこの小説読んでたら読んでたで驚きますが。

私も友達のケシゴムに同じクラスの女子の名前を見つけてテンションMAXになっていた時期がありました。

今では友達に好きな子がいることを知ると、落ち込みます。  
青春できて良いな・・・と。

男友達からは女性恐怖症なんじゃ？とか言われますよ、ハハッ。  
1年たつても顔と名前が一致するクラスの女子が2人、ハハッ。  
そんなんだからたまにゲイと疑われることすら・・・、ハハッ。  
この程度、まだまだだな、と誰か言ってくださいorz

## 第57戦 VS 餓えた料理下手

人にはやはりどうしようもない欠点というものがあるものだ。私は敬語を使えないし、櫂はすぐ手を上げるクセは直らない。

しかしそれは欠点と一口に言い切ってよいものではない。

敬語が使えない分、裏表が無くてよいと言われることもあるし、櫂は痴漢にあっても大丈夫だろう。

つまりはどうしようもないなら、ポジティブ思考でいるしかないのだろう。

どうせ最終的な意味づけをするのは本人なのだから。

それに欠点の奴にだって一長一短とはいかなくても一長百短位でいさせてやって良いと思う。

・・・ただ真木の調理だけは例外かもしれんなあ。

「先輩、通い妻みたいですねっ」

「そして通い妻は男に愛想をつかして会いに来なくなるのであった」

「冗談ですって、まあまあ」

エプロンのまま台所から華麗な動作で帰ろうとすると、目が笑っていない真木に袖を掴まれた。

このスピードについてこれるか・・・ッ！

何故通い妻どうこう呼ばなければならんかと言うと、真木に拉致られて料理を無理やり作らされるという強制労働を強いられているのだ。

「今日は麗香先生もカンナちゃんもいないからご飯をたかる人がいなくて、アハハハハ」

口だけ笑ってみせるが、目はガチだ。

獲物を絶対に逃さないという餓えた獣の目だ。

「インドの方には断食の習慣があるそうだ。お前も試してみたらどうだ？」

「別にいいですけど、空腹の余り先輩の冷蔵庫の食材を勝手に使って、尚且つ先輩の口に間違ってこぼしちゃうかもしれませんね」

「・・・チクショー」

こいつ自分の料理の下手さを利用しやがった・・・！

導入部でどんな欠点も長所に成り得ると言ったが、真木の短所も例外ではなかったようだ。

食べ物ではなく生物兵器として使うなら中々に有用らしい。

「というか未だに麗香にたかっているのか」

「材料費はちゃんと、一緒に買い物に行ったときに出してますよ」

「・・・毎日か？」

「ほぼ毎日で」

あ、少しだけ軽い頭痛が。

真木ならきつと、いい奥さんになれるだろうな。

勿論皮肉だ。

いくら料理が作れないからって他人に全面依存なのは考え物だ。

「カップラーメンくらいは誰でも作れるだろ？」

「お湯を注ぐことしかしてないのに、スープが紫と白のマールに変色する人は【誰でも】に入らない、か・・・」

フフ、と顔を俯かせて自嘲気味に彼女は笑った。  
正直に言っただけ、すまん。

「まあ別に食費が出るのなら少しくらい料理人になるのも悪くない」  
「ありがとうございますっ！」

とりあえず冷蔵庫の中のモノを、雑炊にする作業を続けようか。  
私が調理している後ろで、真木はドラクエに興じていた。

「せんぱーい」

「ん？」

カチャカチャとモンスターを虐待する手を止めずに、とんでもないことを言い出しやがってくれた。

「先輩って童貞ですか？」

「真木、包丁の持ち手が壊れてしまった。二本目はあるか？」

「どんな握力してんですか・・・」

別に童貞であることをコンプレックスに感じているわけではない。  
いいじゃないか、童貞。

三十歳を迎えれば魔法だつて使えるようになるんだぞ？

むしろ一度だけ童貞を失いかけたことに問題があるのだ。

相手は男だったから、捨てかけたのはもしかしたら処女だったかもしれないがな！！

「もしかして先輩、そっちの気があると・・・か・・・」

「真木、手が滑ってしまった。そこに突き刺さった包丁を取ってくれ」

「・・・ごめんなさい」

何故謝るのだろうか。

私はただ単に手が滑って、包丁を投げ飛ばしてしまったただけだというのにな。

「そういう話題もいいがな。勉強の方は大丈夫なのか？」

「あ、レベル上がった」

「おおーそうか！じゃあこの間の中間考査はどうだった？」

「ちっ」

「下がったんだな」

「はい・・・」

勉強云々に私が首を突っ込むことも無いんだがな。

赤点を取られてると補習になって、ウチの妹と遊ぶ暇がなくなつて、

暇になった妹が私の邪魔をしに来るといふ最悪の未来が見える。

「とにかく、わからないことがあつたら私に聞けよ？」

「はい」

画面から目を逸らさない生返事だ。

来るときは言わなくても来るか、と結論付けて雑炊をちゃぶ台の上に置いてやった。

ついでに茶を注いでやる。

「雑炊ですか・・・もつとエレガントで豪勢なご飯が欲しかったなあ・・・」

「あの冷蔵庫で何を期待してるんだか。早く食べないと冷めるぞ」

「はいはい」

なるう。

作ってもらったというのに何たる言い草。

それでは・・・

「いただきます」

パクリとさつそく一口目を食べる。

流石は私、美味だ。

「やっぱり先輩の料理はおいしいですね」

「そうそう。我ながらこの舌がしびれるような辛さが・・・えっ



「？」

視界がゆがむ。

頭がぼんやりと痺れ、力が奪われて激しい嫌悪感のような・・・

「な・・・何故・・・」

「ぐ・・・多分私が買ってきた材料だったから・・・」

「食材ですら・・・侵食されると・・・いう・・・の・・・」  
「か」

ばたんきゅー

翌日、お泊り会から帰ってきた橋カシナに発見され、その後病院に運ばれる

## 第57戦 VS 餓えた料理下手（後書き）

最近、偶然にも「X月X - 1日」更新なのでわざと合わせてみました。

次も合わせるかというかどうか・・・

小休止　その上流にあるもの（前書き）

いつもより長いです。

コメディ成分が欠乏しているかもしれません。

その分ほのぼの成分が多めです。

読むのがかったるくても責任は取りません。

すっごい暇で学校とか会社には疲れている人、特にどうぞ。

と思ったけどそうでもありませんでした。

## 小休止 その上流にあるもの

小鳥のさえずる声が聞こえる。

姿は見えないず、それこそ絵に描いたような音だ。

なんとなく鳥との距離を感じてそれが「こちら側」では無いように感じた。

「ぬゝん」

「ふむ・・・お前は風情とはあまり縁が無い鳴き声だからな」

「ぬうゝん・・・」

「悪かった、そう落ち込むな。少なくとも人を癒す力はあるさ」

抱き上げて撫でてやると気持ちよさそうにあの独特な声でひと鳴きした。

ときどき思っのだが、コイツは完全に人語を解しているのではなからうか？

そういえば何歳かも謎である。

私が宝蓮荘に訪れる前から又は管理人部屋に住み着いていた。

「まあどうでもいいか」

「ぬゝん」

日光による殺菌効果も今なら理屈ぬきでよくわかる。

今日は心が洗われるような心地よい日差した。

しかしこの日の光はもう少し季節が過ぎると、容赦なく人を殺しに

かかっているような直射日光に変化する。  
これがいわゆるツンデレか。

暇で暇で仕様が無いので、暢気にお天道様の下を闊歩している。  
バイトの為に部活をやめているので、バイトが無い日は授業の予習復習を済ませるとやる事が無い。

また本を借りに図書館へとも思ったが、外があまりにも気持ちよさそうだったので散歩に繰り出したわけだ。  
又又はいつまのにか付いてきていた。

「おっしや、四連続！」

「あまいな、これを見ろ、エターナルフォースドライブッ！」

「うお、スゲー！五回飛んだ・・・それなら六回とばしてやる！いい石ないかな」

川辺で小学生が戯れている。

水きり石か、懐かしい。

私も何回水面を跳ねさせられるか友達と競い合ったものだ。

乱入した母さんが石を投げただけでモーゼの如く川を一瞬割ったせいで、皆その場から散り散りに逃げ出したが。

たまにしか家に居ないくせに、居ても容赦なく暴れるだけだもんな・

「・・・・」

ふとこの川の上流はどうなっているのだろうか、という疑問が胸のうちに生じた。

どれ、どうせ行くあてのない旅だ。

気まぐれに身を任せてみるのもいいだろう。

「さて、川の源泉は何処だろうな」

「ぬ〜ん」

何だか童心に戻った気分で楽しいな。

「どうしてもあの頃に戻りたい！」なんて駄々はこねやしないが。思い出は大分美化されているのだろうしな。

とはいえ私の子供の記憶はそんなに美しいものでもない。

一番克明に思い出せる最初の記憶は、何も無い広大な屋敷の畳の上で、一人でいる映像だ。

体が小さい分、屋敷はただでさえ大きいのに更に大きく感じた。

小学校に行くまで同年代の子供との交流は皆無で、ただひたすら色んな事を詰め込まれた記憶しかない。

けど何となく母さんや父さんがたまにその座敷牢から連れ出してくれたときは、とても楽しかったように思う。

「あー駄目だ」

「又ん？」

この天気の下でしかたを考えるのは勿体無さ過ぎる。

それ相応の明るいことを考えたいものだ。

気分転換だ、気分転換。

しかし温かいというには少し温度が高くなりすぎだな。

汗が右頬を伝うのを放って置く。

夏本番に比べれば、そんなに嫌な粘っこくてじめじめした暑さでも

ない。

むしろ青春のような心地よい汗だ。  
と言い切りたいところだが喉が渴いた。

「お」

丁度よいところに自販機がある。

数メートル先の真つ赤な自販機は砂漠の中のオアシスのようだ。

ジーパンの後ろのポケットから財布を取り出し、ラインナップを見つめる。

コーラにポカリ、ファンタ、おいしいお茶、b o s s といった良く見かけるレギュラー陣の中に、ひと際異色を放つ明らかに浮いたドリンクがある。

「ジンギスカン・ジュース・・・？」

名前だけで不味そうだと9割判断を下せる。

他の120円、150円といった価格の中で、それだけは80円と破格だった。

ちなみにパッケージは松岡修造だ、暑苦しい。

「しかし・・・」

私は基本的に新商品は一度試すタイプだ。

購買や自販、喫茶カフェなどで新商品が出ているときは、いつも挑戦している。

一応製品化しているのだからそこまで不味くは無いだろう、きっと。

「ヌーン」

「じゃあ試してみるか」

財布の十円以下ゾーンから十円玉をかき集めて自販に連投する。  
ボタンを押すと人氣が無い川辺の通りに、ガコオンと空元氣のよう  
な音が響いた。

「どれ」

フタを開けると灰色に近い茶色のジュースの海が波打っているのが  
見えた。

ドブの色一步手前なのだが・・・不味そう。  
だがゲテモノは美味いと相場が決まってるもんだ、とも良く聞くん  
な。

見た目だけでモノを決めるのは浅はかだろう。  
恐る恐るジュースに口をつけてみる。

「・・・」

不味い。

味を形容するなら冷えたジンギスカンを液化化したもの、としか言  
えない。

名前のままだ、名は体を表す。

これで私は８０円をドブに捨てた訳か。  
もといドブに使った訳か。

「ぬっ」

「ん、飲みたいのか？」

再び歩を進めながら、抱いた又々にジンギスカンジュースを飲ませ



る。

どうやらお気に召した様子で、しばらくしたら両手と舌を器用に使って自分で飲んでいた。

「うまいか？」

「ヌーン」

やはり猫と人では味覚に大きな差があるらしい。

このジュースを作ったドリンク会社はキャットフードに方向転換することを奨めたい。

商品の名前は多分「ジンギス缶」あたりになるのではないだろうか。勝手に会社のこれからの展望を考えながら歩いていたら、二つ目の自動販売機を見つけた。

「ふうむ・・・」

アンダースローで空き缶となったジンギスカンジュースを投げると、きれいにゴミ箱へダストシュートされた。

さて、またジュースを買おうか、と思ったがそれほど喉が乾いていないのに気づいた。

飲みたくない訳ではないが、もう今日はジンギスカンがハズレだったからやめておくか。

おみくじだって一日に何度も引くものでは無いだろう。

「おお」

川の上流は深い森の緑に呑み込まれていた。

日が沈むまでにはまだまだある。

一人と一匹は山の中へ足を踏み入れた。

「ヌーヌーぬー、ぬーヌーぬー、ぬぬっヌぬーぬぬヌ」

「あーるくのっだいすきー……っってお前は歌まで歌えるのか」

「ヌん」

朝飯前だぜ、とドヤ顔で笑ったような気がした。

ちなみに音程はテノールぐらいの低い声で、リズムがやたらとゆっくりにしているので何の歌か判るのに時間がかかった。

しかし猫が歌うとは。

こいつ……ただモンじゃない……ッ！

とはいえ猫が「ヌ」と鳴いている時点で普通の領域を既に出ている。

「にしても涼しいな、ここは」

「ヌンぬん」

森の中は涼しく、大分歩いてきたので火照った体も冷やされた。

空気が澄んでいて、ツンデレ太陽は木々の間から恨めしそうに顔を覗かせている。

足元はちよくちよくと人が通るらしく、獣道よりかも遙かに歩きやすい。

「ふむ」

道はまだ川に沿って続いている。

川から外れたらどうしようかと思ったが、どうやら杞憂で終わりそうだ。

という予想を裏切り、杞の国の人が憂いた通りに天が降って来た。道の暫く先は明らかに川から外れていた。

「まあ仕方ないか」

「又う・・・」

引き返そうかとも悩んだが、結局無理やりにも進むことにした。ここまで来て諦めるのも後味が悪い。気の向かないらしい猫を引っ張って、獣道に突入した。

「ぬー」

「お前も獣の端くれなら根性を見せろ」

「ぬ・・・」

少しカチンと来たのか、又又は私より数メートル先を歩き始めた。私に似て負けず嫌いらしい。

いや、むしろ又又が先代に似て、私も先代に似ているだけなのだろうか。

「おーい、少しペースを下げってくれ」

「又ッ」

私の声を無視して、又又はペースを落とさないまま歩き続けた。そんなにヘソを曲げんでもいいだろうに。

道は徐々に狭く、険しくなっている。今更だが何でこんな必死になって川の上流を目指しているのだろうか。

別には是非でも行きたいと言うよりは、ここまで来てしまったら引き返せなくなってしまうただけだが。

いや、そういうわけでもないか。

何処となく私は楽しいと感じてしまっている。理由さえ必要ない。

一心に目標へ向って歩くのがただ楽しい。

「ぬっ」

又又の耳がピクンと動き、ほとんど間を置かず走り出した。どうやら何かを察知したようだ。

私もそれについていく。

すっかり視界が悪くなり、枝にぶつかりながらも走る。

呼吸が乱れ、汗もまた流れ始めたが苦しくは無い。

この先には何があるのか、その素朴で純粋な疑問だけが私を走らせていた。

「又！」

木々が途切れ視界が開ける。

さえぎられていた太陽が再び眩しい顔を覗かせる。

その先にあったのは

ロマンの無い無機質なダムから流れる大河に、今まで追ってきた川  
が飲み込まれている様だった。  
ト  
ト  
ト  
ト  
ト  
ト

「又ウーん・・・」

小休止 その上流にあるもの（後書き）

そもそもこの話、短編にする予定でした。

ただオチが微妙な上にこっちでやっても問題なかったので、宝蓮荘のお話とさせていただきます。

本当はコメディはラストだけで、あとは純文学っぽく延々と川を辿らせるつもりが・・・難しいです。

とか製作事情はどうでもいいんですが。

一気に寝ぼけながらうったので、五時があつたら報告お願いします。  
という誤字w

## 第58戦 VS彼女の告白

「先輩・・・好きです。付き合ってください!」

「だが断る」

ある夏の日の夕暮れ。

後藤真木高校一年生の告白は、容赦なく、そして軽く跳ね除けられた。

少しまで満開だった駅前桜の花は、数日見なかったうちにほとんど散っていた。

前に見たときはそんな兆候など一切感じられなかったのに。

人の別れとかも、案外そんな突然なものかも、とか言ってみたり。少なくともこの私にとってはそうだった。

「本当、お母さん?!」

「ええ、本当よ」

それでは説明です!

私の家は母子家庭で、お母さんの稼ぎはお世辞にも子供を養うには

苦しい額でした。

更に私は料理を作っている人が一緒に住んでくれないといけないうちに、お母さんは忙しくてその暇さえ無し。

そんな訳で私は当時宝蓮荘の近所で暮らしていたおばあちゃんの元で育った。

おばあちゃんも私を育てられるような状態で無くなり、結果宝蓮荘で部屋を借りることになる。

と、ゴタゴタ色々あったものの、まとめてしまえばたった四行になっってしまう内容。

「何とか貴女と一緒に暮らせる位に、仕事が落ち着いてきたのよ」

「お客様、アンドーナツケーキを注文したのは・・・」

「私です、櫛先輩っ！」

「はいはい」

先輩がテキトーに紅茶とケーキをテーブルに置く。

味はともかく、接客態度とか難ありな店な気がします。  
主に某管理人だとか。

この店は店員と客の距離が近いというのがウリだけど。

「初めまして。真木の母です」

「あ、初めまして。櫛野木櫛です」

あいさつをしながら頭を下げる先輩を、少し離れた位置から男性が凝視している。

絶対にあの人の脳内は「あともう少しで<至宝を守護する腰布>の

スカート



中身がつ！」でしょーね。

と思ったので私が睨みを利かせると、何食わぬ顔で鼻歌を歌いながら視線を右上前方の宙へ向けた。

心なしか冷や汗も垂れている。  
非常にわかりやすい漫画のような反応をどうもありがとございませう。

「お腹いっぱい食べられないよお、むにゃむにゃ」とか寝言で聞く位レアだ。

「てか先輩、制服変わったんですね」

「相変わらず店長の手作りよ。今回は翠星石仕様だとか何とか」

「へえー手作りなんてすごいわね。どんな感じの店長さん？」

「知らない方が幸せだと思います」

喫茶カフェの店員はこれ以上言及されるのを恐れたのか、制服のフリフリをフリフリさせながら、厨房へと帰っていった。

いやー先輩はいつ見ても可愛いです。

目の保養、目の保養

「で、話を戻すけど。一緒に住むってなると真木には悪いんだけど・・・」

「うん、それはわかってる」

お母さんの職場と宝蓮荘は余りに離れすぎている。

その距離を通勤するのは、少し酷すぎる。

私が料理さえ作ればなんとかはなるんだけど・・・こればかり

は仕方ない。

それにいつまでも入院しているおばあちゃんに、生活費と家賃を負担してもらうわけにもいかない。

「真木が嫌だつて言うのならそれでいいんだけど・・・」

「・・・一週間だけ悩ませて」

どうしたものか。

とはいえ大体答えは出ている。

ただあの人もし・・・なんて事があるのなら。

無かったとしても自分の中でケジメはつけておきたい。

で、冒頭部分。

来客用のお菓子と飲み物が置かれたちゃぶ台の前で正座していたら足が痺れそうになってきた。

その向こう側には先輩が商店街で当てた周りとの兼ね合いを無視した椅子に座つてくつろいでる。

膝の上の又又ちゃんは気だるそうに「ぬ〜」と鳴く。

くそう、人の気も知らないで。

これだから猫って生き物は。

「・・・軽すぎやしませんかね？」

元々大して期待なんてしてなかったけど、これはかなり傷つく。

この人は乙女心をなんだと思っているのでしょうかね。  
割とも余計なこと考えまくって平静に努めているだけだ。  
あ、ヤバい、泣きそう。

「相手が重く来たら重く返すさ」

「結構重く言ったつもりですが」

「真木にしては、な」

うわぁ殴りたい。

一応この台詞を言うまでに色々とそれっぽい流れをつくったのに。  
でも何となく家人先輩の考えてることが判ってきた気がする。

「ちなみに理由は？」

「一人の時間がなくなるのが辛い」

「うらぁ！」

嚙先輩の見よう見まねでボディーブローをかましてみる。

悶えてる先輩の様子は何処となくクセになりそうだ。

そろそろこの「ごっこ」にも飽きてきたので、核心に触れてみよう。

「先輩。あえて嫌われようとか考えてるなら無意味ですよ？」

「.....」

先輩は黙り込んで又又をなで始めた。  
バレてしまったのがそこそこシヨックらしかった。

どこから見抜かれない自信がきたんだろう？

「ぬ」

「にゃあ」

「鳴いて誤魔化さないで下さい」

参考までに言えば上が又又猫で、下が家人先輩です。  
どっちが人間なのか言わないとわからない猫っていたい・・・  
先輩は俯いて頭を掻いた後、顔を上げて私を言った。

「お前は本当に私が好きなのか？」

「二発目っ」

今度は顔面に叩き込んでやった。  
椅子が近所迷惑な音をたてて倒れていく様は、若干スローモーションでちよっとおもしろい。  
乙女の心を疑うとかマジ心外です。  
虐待するのが楽しいとかそんな気持ちは微塵もありませんよ、本当に。

外道男は顔を抑えながらも続けました。

「お前の気持ちは父親へ抱く感情のようなモノじゃないのか？」

「・・・」

今度は私が黙る番だった。  
そう言われると弱いものが無きにしも非ず。

元々私は父親を知らずに育ってますし、先輩と一緒に居るとドキドキするっ、というわけでもありませんし。

「ついでに私を意識し始めたのは、体育祭に私が行った時じゃないか？」

「・・・」

グウの音でもない。

いつもリレーの選手に選ばれたりしても、家族が見に来てくれたときは一度も無く。

初めて来てくれたのは家人先輩でした。

大声で応援されたのは恥ずかしくもあり、うれしくもあり・・・

「でも」

次の瞬間、私は心臓さえ止まったんじゃないかという勢いで動きが全停止した。

先輩に抱きしめられたからだ。

「話は櫛から聞いた。ここを出て行って母親と暮らすそうだな」

「・・・」

最初から先輩はこの告白がただのケジメだと知っていたみたいだ。

だからスッパリと断った。

「自分が料理ができないせいだなんてなんて絶対に思っなよ。どうにもできないことには妥協してもいいんだぞ？」

「・・・・・・・・・・」

またしても何も言えない。

この人は自己中なのに人のことを考えている。

「ただあの母親を支えてやるのはお前にしかできないんだ。そしてお前のことを親として支えてくれるのは母親しか居ない」

「・・・・・・・・はい」

こうやって抱きしめられるのなんて何年ぶりだろうか。  
先輩の温もりが伝わってくる。

「新しい場所で、学校で暮らすのは不安だろう。でも、少なくともずっとここはお前の居場所だから」

「・・・・・・・・・・はい・・・・・・・・・・」

目頭が熱い、涙が溢れてくる。

完全にじゃないけど、不安が解けていく。

「辛くなったら・・・・いつでも遊びに来いよ？」

「・・・・・・・・・・はい・・・・・・・・・・！」

その後もしばらく、先輩の胸を借りて泣いた。

「もう・・・大丈夫です」

「ん、そうか」

まだ目は赤いだろうけど大分すつきりした。  
涙にはやっぱりそういう感情を整理する力があるらしい。  
玄関で靴を履くために顔を俯けながら言った。

「まだ、諦めませんか」

「ご自由に」

顔は見えなかったけど、何となく先輩は優しく微笑んだ気がした。  
私も俯いたまま微笑んでみた。  
うん、大丈夫。

「それじゃ」

「おう、また来いよ」

手を振ってから扉を閉じた。

少し扉に寄りかかって空を見上げると、真っ暗でもう完全に日は暮れていた。

まばらだけど星がいくつか見えてきた。

「・・・・」

何でもいいからこの夜空の下を歩き回りたい気分だ。

近所のコンビニに適当にアイスでも買いに行くことにしよう。

「あー、もう一発殴っても良かったかも」

ドアから離れ、自分の家を背にして歩き始めた。

後藤真木の引越しが決定



## 第58戦 VS彼女の告白（後書き）

読み終えてくれた方、ご苦勞様でした。

昔に比べれば少しはマトモなシリアスのお話を書けた気がするのですが・・・それでもまだまだですね。

泣かせるどころか目頭を熱くするような文を書くのもかなり難しいです。

真木視点だと地の文の口調が非常に書きづらい・・・  
本当少しでもいいんでアドバイスが欲しいです。

この後、もう一話ほどシリアスパートが続きます。  
日常ほのぼのに期待している方はすいません。

次回は割かし影が薄い妹、カンナのお話です。

## 第59戦 VS 閉じこもった妹

「本当に……今までありがとうございましたっ！」

晴天の空の下、宝蓮荘の住民が巣立とうとしていた。

心なしか目は泣くのをこらえているのか、潤んでいるように見える。真木の荷物は先に麗子が知り合いから借りたトラックで持っていた。

残る引越しの作業は真木自身だけだ。

「真木ちゃん……向こうでも元気にしててください！」

本人がこらえているのをお構いなしに泣いているユカ。相変わらず涙もろい。

「また家人にあの料理を食べさせてやれよな！」

何だかはた迷惑なことを言う健児。  
あとで覚えとけよ。

「……………」

無言でプレゼントを差し出す林葉。

いや、泣くのに耐えてるんだろうが、普通に怖い。

「貸したゲーム、今度返しに戻ってね」

ふっとイケメンっぽく微笑む井モノ。  
なんだろう、この違和感。

「あんたのことだからあんまり心配はしてないけど、まあ何かあったら頼んなさいよ？」

姉御肌で励ます櫛。

やはり下級生の女子にもてそうだ。

「じゃあ最後に。語尾に」「とかつけるのは、イタいから止めた方がいいぞ」

『ここでそれを言うのかよッ！！』

と一同。

いや、湿っぽい雰囲気が耐え切れんなかな・・・

自分が口調については人のことを言えないのは勿論わかっている。

「えと・・・先輩。カンナちゃんは・・・」

彼女は不安げにその場にいない自分の友達のことに触れる。

我が妹は「何でそんな重要なこと言ってくれなかったの！」と真木に怒って部屋に引きこもっている。

どうやら引越しのことを直前まで告げなかったことがお気に召さなかったらしい。

無論、それだけではないだろうが。

まったく・・・はあ、と息を吐いてから、先輩らしく答えることにした。

「私に任せておけ。ただ一つほど後の電車に乗って欲しい。それまでには絶対に間に合わせる」

「お願い・・・します」

真木はらしくも無く、スカートのすそをぎゅっと握った。  
さて、我がまま娘をみっちり教育するでしょう。

「カナナ」

「・・・・・・・・・・」

部屋のドアをノックするも、返事は全くない。

しかし鼻をすする音がするので、部屋の中にいるのは間違いないのだが。

「お母さん、そんな子に育てた覚えは無いわよ！」

「・・・・・・・・・・」

うわ、私の十年に一度、見れるか見れないかという渾身のボケをスルーしやがってくれた。

滅茶苦茶に恥ずかしいのだが。

ボケるところでは無かったか、まあ空気が読めない私はそんなことは気にせん。

「……お母さんはそんなこと言わない」

「だろうな」

とりあえずは会話する意志はあると思って大丈夫だろう。  
ドアに寄りかかって腕を組む、戦闘態勢だ。

「お前は何に怒っているんだ？」

「だって、真木ちゃん、ボクに一言も相談なかった……」

「嘘だな」

「……！」

正確に言えばそれだけではない、だろう。  
実際そういう思いもあってしかるべきかもしれん。

「お前が小三だったかな。私のドラクエを進めていないと弁解したときも、今みたいな喋り方だった」

「……」

実はほぼハツタリなのだが当たったらしいので結果オーライだ。  
もっともそんな法則に頼らずとも、カンナの嘘は大体わかる。

「いいのか、このままで。こんな酷い追い出し方をして、また会ったときにお前はあわせる顔を持ち合わせているのか？」

何でもそのこと真木がカンナに告げたところ、急に怒り出して部屋

から追い出したらしい。

それはもうありったけの罵詈雑言で。

「・・・・・・・・」

しばしの沈黙。

顔は見えないが、ドアの向こう側にいる妹がどういう顔をしているか想像がつく。

そしてカンナはようやく口を開いた。

「・・・別に、怒る理由は何でも良かったよ。でも真木ちゃんが遠くへ行っちゃうって思ったら・・・何が何だか・・・何か・・・・・・・・・ものすごく嫌な・・・・・・・・気持ちになった」

だんだんと声は小さくなっていった。

カンナの心境は恐らく、ある種の現実逃避のようなものかもしれないな。

友達がいなくなるという事実を認めたくなかったのだろう。

驚愕、動揺、不安、そういった感情が行き場を失い、怒りという形で現れてしまったのだろう。

「じゃあお前が今しなくちゃいけないことはわかるな」

「・・・・・・・・でも、ボクは真木ちゃんに酷いことをしたんだよ？もう愛想を尽かされちゃったかもしれない・・・・・・・・」

「カンナがもし真木の立場なら嫌いになるか？」

カンナはしゃくりあげて泣いていて、声は聞き取りづらかったがハ

ツキリと自分の気持ちを言葉にした。

「……違う」

「四十秒で支度しな。先に外で待ってるぞ」

最後にそう告げて私は部屋を後にする。

私が靴を履く頃、止まっていた時間が動きだしたかのように、ドタバタとカンナが動き出す音が聞こえた。  
もう心配は要らないみたいだな。

ドアを開けながら自転車、最近空気が入れたっけかとか考えていると、目の前に受け入れたくない現実があった。  
受け入れたくないの、その事実に関わりなくそのまま階段を下りる。

しかし先程、カンナの行動を現実逃避と評した自分自身が逃避するのはいかな。

よし、叫ぼう。

「なんじゃこりゃあああああ！」

先刻までの晴天は打って変わって、外は土砂降りの大雨だった。

不味いな、非常に不味い。

ここから自転車の二人乗りをかつ飛ばす予定だったが、雨が降っているとなれば時間がかかる。

元々ギリギリのラインだったのに、雨のせいで完全にアウト側へと押し出された。

もし私が見栄を張らずに、二つ位先の電車で、と言っていれば……

私の大馬鹿野郎ッ！！



仕方がない、このまま一か八か足を磨り潰すつもりで自転車を漕ぐしかないか……

「家人さんっ！」

「ユカ?!」

ユカだけではない。

先程真木を見送って解散したはずの皆が、土砂降りの中から宝蓮荘のほうへ駆けて来た。

遅れること数秒、黒い自動車が走ってきた。

「林葉君がこの雨だと自転車を走らせるのはキツイだろうって。皆で近所の人運転を頼んできたんだよ」

井モノはそう言って髪をかき上げた。

今なら言える、お前は確実にイケメンだ！

「事情はもう私達が話したから」

「皆……ありがとう」

「水臭えよ、家人」

車を手配することに思い当たった林葉の方を、彼女は少しだけ微笑んで、そして少しだけ恥ずかしそうに右手を挙げた。

私もそれに応え、右手で手の平を叩いた。

手が湿っていたせいか、土砂降りの中でも聞こえるほどいい音がした。

「お兄ちゃん、その車……」

「話は後だ、行くぞ！」

「う、うん！」

私達兄妹はその黒い自動車に飛び乗った。

カンナは後ろの席に乗り、私は助手席に乗ってすぐに頭を下げた。

「すまない！」

「お願いします！」

「いい、いい。気にすんな、家人にカンナちゃん。橘の阿ネさんには色々と借りがあるんや」

サングラスを掛けていたのでわかり辛かったが、運転席に乗っていたのは蒲公英組の人だった。

クイツとサングラスを掛けなおすその仕草は、「若頭あああ！」と呼びたくなる位格好いい。

いや、ちょっと怖くなってきた。

グラサンだけでなくパンチパーマに紫のシャツ、という絵に描いたようなヤーさんの助手席に座るとは思わなかった。

「超特急で頼む」

「ああ、これでもワシはルイージを使わせりゃ、組内の誰にも負けたコトがねーんや」

「いやそれマリオカートの話じゃ……」

何だか嫌な予感がしてきた。

組員同士でマリオカートに興じる極道もどうかと思うが、そんなコトではない。

遠慮がちに不安の核心に触れてみた。

「前に運転したのは？」

「免許取ったのが・・・何年前やったっけ？」

「ぎゃあああああ！！」

やーさんがアクセルをベタ踏みし、車が急発進した。

慣性の法則のせいで異常なGが体にかかる。

バックミラーを見ると、カンナがうずくまって震えていた。  
し、シートベルトを掛けねば・・・

一言言わせて欲しい、人選絶対ミスってるだろこれええええええええええ！！

明らかに交通違反な速度で反対車線を行ったりきたりもしている。  
ちよくちよくとクラクションが鳴っているのが聞こえる。

良くこれだけの豪雨の中、このスピードで走れるな・・・

「クソッ邪魔くさいな。スターがあれば避ける必要も無いんやけどなあ」

「現実の運転にマリオカートの話を持ち出すのはやめてくれ！」

「まあまあ。久々にしちゃ今日は調子がええで」

あろうことがマリカーやくざは、鼻歌を歌い始めた。

スターを取ったときのBGMだろうが、どこか音程が外れている。

「お兄ちゃん……」

「大丈夫だ、もしものときは一緒に死んでやる」

「何や、失礼なやつちな」

とかいいつつ言葉とは裏腹に、彼は上機嫌そうだった。

そうしているうちにも前にいた車が次々と後ろで豆粒になっていく。赤信号でドリフトを決めたり、車体が片方浮いたりといつ今月の交通事故数に数えられてもおかしくない運転だ。

やばい、死ぬってこれ。

「うおう！」

歩道に一瞬乗り上げたため、ガクンと振動が伝わる。

やはり私に変な見栄さえ張らなかつたら……

「着いたで」

「い……生きてる。よし、カンナ！」

「うん！」

私の妹は車を降りて、土砂降りの中を走って駅へ向った。

雨の向こう側のその背中では先程部屋に籠っている人物とは別人のようだった。

何となく小鳥が巣立っているようにも見えて少し寂しい。

付いていくのは野暮というものだろう。

時計を見ると十分に別れの言葉を言える時間だ。

むしろこの運転で間に合わなかったら本当に泣くぞ……若干もう涙目になっているが。

「話し込んで電車を乗り損ねるかもしれんしな。後で誰かのメールで連絡すればいいから先に帰るとするか……」

「よし、まかせな」

「いや。コンビにで傘でも買って帰るから、後はだいじょうあああああああ?!!」

母さん、父さん。

私は親より先に死ぬ、相当な親不孝者のようだ……

後藤真木引越し完了

橘家人はそのまま、マリカーヤクザにドライブに連れて行かれる

## 第59戦 VS 閉じこもった妹（後書き）

本当はこの話、シリアス調で進めるつもりだったんですが、マリカ  
ーヤクザが出てきたせいでコメディに、ついでに長くなってしまう  
ました、とほほ。

ちなみにマリカー＝マリオカートです。  
わからなかった人すいません。

ここからは宣伝になってしまいますが「猫 in the 地球最  
後の日」という短編を書きました。

又又猫は出てきません、あしからず。  
是非読んで下さい。

あとシリアスパートにジブリネタをブックコンでしましたが・・・  
・  
何人くらい気づいてくれるでしょうか。

## 第60戦 VS 地球温暖化

「家人、あぢぢぞ」

「なんでクーラーが無いんだよ……」

「やかましい、文句があるなら帰れ……」

熱い……暑すぎて畳から煙が出ているような気さえする。

林葉から借りたSF小説を読み進めようと思ったが、暑さが邪魔をして集中できないので中々本の世界に入り込めない。

これ以上の読書続行は不可能と判断し、現実とは相反する極寒惑星を探索するページをわざとらしく音を立てて閉じた。

健児と井モノが暑さでダレている現実を見ると、ますます先程のページへ逃避したくなってくる。

そもそも何故私の部屋に野郎が三人も集まっているのだ。むさ苦しくて仕方ない。

「井モノは部屋にクーラーがあつただろ」

「毎日フル稼働してたら壊れちゃったんだよ。そうでなきゃこんなむさ苦しいトコ来ないよ」

「健児」

「光熱費ケチつたら電気止められた……」

で、唯一扇風機が残っていた我が家にわらわらと集まってきたわけか。

何だか今回は私が被害者のようだ。

ちゃぶ台にうつぶせてアニメのうちわを扇ぐ井モノが、うめくようにして声を上げた。

「女性陣の部屋に押しかけるのは無しかな……」

「櫂と林葉の部屋は間違いなく櫂が追い返すだろうし、ユカは里帰り中。カンナは真木の家へ遊びに行っていて、麗香は絶賛仕事中、というところだろうなあ」

今度はダンスにもたれかかってジョーの如く燃え尽きた健児がうめく。

ゾンビのパーティがあつたらこんな陰気な感じだろうか。

「合鍵使つて勝手に部屋を借りるのは……」

「やつてもいいが後でどうなっても知らんぞ……」

だよなあ、少しアブない提案をした男はと更にうつむいた。そのまま横に倒れてゆっくりと転がり、呪怨チックな感じで半身を起こした、もつとも呪怨を見たことはないが。

「なんか涼しくなるコトしよーぜ」

「ああ……?」

「うわ、家人ガラ悪……」

これだけ熱ければ、人の一人や二人グレても全く不思議ではなからう。



目を閉じて不良から一瞬で更生してから健児に尋ねた。

「で、涼しくなるコトとは？」

「怪談話だよ、怪談」

汗だくの顔ながらもドヤ顔で健児が答えた。

定石と言えば定石、夏の定番だ。

健児が緩やかといおうか気だるそうにカーテンをしめた。

部屋が一気に薄暗くなり、稲川淳二か松崎しげるが出没しそうな雰  
囲気になる、嘘だ。

井モノがうつぶせのまま「じゃあ言いだしっぺからどうぞ」と喋っ  
た。

何か怖い。

「悪の十字架、という話だ・・・あるスーパーの前で一人の老婆  
が・・・」

「開くの十時か、だろ。んな使い古されてカビが生えたような話さ  
れても・・・」

「開くの十時か？」と「悪の十字架」をかけた話は「布団が吹っ飛  
んだ」と同じ位使い古された小噺だ。

少なくとも私達の世代では常識だが、知らん奴はグーグル先生に聞  
いてみるといい。

「せめて最後まで話さしてくれよ」

「別の意味で寒くなったからいいんじゃない・・・？」

「たまに酷いコトいうよな、お前……じゃあ次、家人」

「そんな急に言われてもネタのストックがあるわけないだろ」

一応、この宝蓮荘に亡霊が住んでいた、という話はあるが大して怖い話でもないしな。

ん、一個思いついた。

「じゃあちよつと話させてもらおう……」

月のない新月の晩、その日に限って殺人鬼が自分の仕事をする。

彼は死体を解体してからパーツを再び縫い合わせるのを好んだ、マトモではない形に。

喉から手が出るほど、という表現をを実際にやってみたり、男性の死体の股間の部分に首を縫い付けて「女じゃなくても出産できるみてえだな」なんて声を押し殺して歪んだ顔で笑いながら。

その日の仕事は猫を連れて歩く少女だった。

口をふさがれて涙目であがく姿はどことなく扇情的で、男は興奮し、インスピレーションを刺激されたのかいつもより人間離れた姿に縫い付けた。

良い作品を仕上げた達成感に酔っていると、いっしょに歩いていた猫がいないことに気付く。

まあ猫に見られたところで、目撃されたとは言わねえだろ、と男は帰った。

三日月の晩、殺人鬼はコンビニで雑誌と晩飯を買って帰る途中ことだ。

少女を芸術作品に仕立てた路地の入り口に猫がいた。

「又う……又う……」と変な声で鳴いていた。

ついでにコイツで作品を作り上げるとするか、と猫についていつて路地裏に入り、彼はナイフを取り出す。

ナイフが頭へ振り下ろされる直前、猫と目があった。

その金色の目は、男を指一本筋肉一繊維自由に動かせない金縛りの状態にした。

全身が動かなくなった彼に向って猫がもう一度鳴いた。

冥府のそこから響くような、到底猫とは思えない低い声で

「又う……ぬう……縫う……？」と。

次の晩、人型をしていたとは思えないほどに、全身をバラされて縫い付けられた男性の死体が発見された。

「……検視の結果によると、どうやら生きたままそういう風にされたそうだ……終わり」

誰も口を開かない真つ暗な部屋。

ノーリアクションというのは話し手にとって辛いものがある。

ではなく皆ビビっているようにも思えるが。

かく言う私も話しておきながら、背筋の寒気が一向に止まる気配がない。

強がらずにはいられないという風に健児が無理やり声を絞り出した。

「あ、あれだな。途中でオチが読めたけど中々じゃねーか？」

「でも又、又又ちゃんをネタにしたのは面白かったよ」

「・・・・・・・・・・又う・・・・・・・・」

「「「うおおおおおうつ？！！？！」「」」

いきなり背後に現れた又又猫は、役目を終えたと言わんばかりに去っていった。

心臓に悪いやつめ・・・・・・・・

「何ビビってるんだか、健児」

「お前も今、思いっきりビビってだろーが！」

私だって怖いのは得意ではないんだ・・・・・・・・

下手したら私より年上かもしれない猫の話だからな。  
本当にその通りだったら嫌なので、未だに誰にも確認はとっていない。

「で、でもさ。この話ってフィクションだよね？」

「さあ・・・・・・・・先代の管理人から聞いた話だからな」

「そー言やこないだアイツが勝手に俺の部屋に入ったときに、後ろ足で襖を閉めてた気が・・・・・・・・」

「サッカー部の先輩にそんな連続殺人事件があるって聞いたことがあった様な・・・・・・・・」

「「「・・・・・・・・・・」」」

全員、ダッシュで叫びながら櫓と林葉の部屋に向った。  
皆まとめて殴られたのは言っまでもない。

「又ん」

殺人鬼がいた話は事実である

## 第60戦 VS 地球温暖化（後書き）

日常が帰ってきました。

夏コミが曇っていても安心の汗だく度だったのでこんな話になりました、嘘だけど。

しかしキーボードを叩く指を見やると皮がむけている・・・嘘だけど。

嘘つきみーくんと壊れたまーちゃんというラノベを読んだあとなので「嘘だけど」を多用してます、嘘だけど。

割とそういう感じに書きたくなるのは元々です、嘘だけど。というのも嘘だけど。

・・・しつこい。

第61戦 VSゴスロリ「幼女」(前書き)

幼女がタイトルなので過去最大の長さかもしれません。

## 第61戦 VSゴスロリ「幼女」

同じ趣味の友人がいるというのは本当にありがたい。

読書家な私としては、やはり読んだ本について語り合いたいし、本を貸し借りできるなら懐にも非常に優しい。

小学生の頃からの読書仲間がいるのだが、今日はそいつの家に遊びに行っていた。

午後から部活があると言われ追い出されてしまったが、読みたかった本を借りることができてホクホクしている。  
いや、むしろ今日の気温は暑すぎる位だが。

その友達の家と最寄の駅はかなり離れていて徒歩だと辛いものがある。

余りにも太陽が張り切っているので、結構な距離を歩いてきた私は公園の木陰でベンチにたたずんで休んでいる。

残暑と言いたい時期に入っているとは思うが、全く持って酷暑にしか感じられない。

とは言ってみたが残暑と酷暑の違いなどわからんのだが。

酷暑のせいで沸騰した、下らないことを考える脳を水分補給で冷やすしよう。

ちなみに今飲んでいるのはジンスカンジュースなんてゲテモノではなく、知らない日本人はほとんどいないであろうスポーツドリンク、アクエリアスだ。

「はぁ・・・」

いくらなんでも一気飲みする気は無いので、アクエリから口を離して一息つく。

前かがみにダレたまま目線を正面にやると噴水があつて、たくさん



の人がその周りをたむろっている。

やはり人は暑いと自然、水場に群がるらしい。

デートの待ち合わせと思われる少女がしきりに時間を気にしていたり、還暦を迎えた後ぐらいの夫婦が噴水のふちで日向ぼっこしている。

熱中症にかからねばよいが。

他にも犬の散歩中の中年女性や、うるちよると動き回るゴスロリ幼女が。

「え？」

うるちよると動き回るゴスロリ幼女？

脳内で反復してから現実を意識に戻すと、やはりそこにはうるちよると動き回るゴスロリ幼女がいた。

凝視して変態扱いされたくもないので、ベンチの背に身を任せてアケリを再び口につけ、見下す感じで凝視する。

年はまだ幼稚園生といったところだろうか。

ジト目気味だが顔も可愛くて、ロリコンではない私でも成長してその美しさが変わらないのを願うくらいだ。

ただこの季節に黒いゴスロリは暑いらしく、全身から汗が噴出している。

あれではいつ暑さにやられて倒れてもおかしくないだろう。

というか実際倒れた。

「っておいっ?！」

朝起きるとき、意識が中途半端なときに「そういや今日部活・・・!」と気づいて跳ね起きるときの感じで、私はベンチからゴスロリ幼女ヘダッシュした。

律儀にアケリをこぼさないように持ったまま。

どうでもいいが先程述べた比喻の場合、大体日にちの勘違いとかそんな感じがする。  
本当にどうでもいいな！

「大丈夫か?!」

ゴスロリ少女の呼吸は浅く、顔色も悪い。

こ、こういうときは心臓マッサージだっけ?!

それとも人工呼吸?!!

いや熱中症だから・・・というか人工呼吸は絵ヅラの的に問題があるな。

「み、水を・・・」

「ああ、私の飲みかけだが許してくれ」

飲みかけのアクエリアスを口に注いでやると、むせながらも少女は全て飲みきった。

しかし顔色は一向に悪いままだ、まだ足りないみたいだな。

自販の位置はどのくらい離れていたか・・・という思考を遮って、後ろから女性の声が聞こえた。

「すいません、水分といえばこれくらいしか・・・」

犬の散歩をしていたおばさんがおずおずと水の入ったペットボトルを差し出してきた。

良く考えたらこれは最近良く見るようになった、犬の小便を流すための水か。

「嫌・・・」

自分の命がかかっているときに贅沢な奴だ。  
同じ立場なら全力で拒否するだろう私の言えたことではないが。  
犬の散歩おばさんにペットボトルを悪くもないのに私が謝りながら  
返すと、今度は日向ぼっこ夫妻が銀色の水筒を提供してくれた。

「すまない」

「アンタの言うことじゃないやろ。はよせえ」

「ああ」

面倒なので直で水筒の中身をくれてやった。

口からあふれ出すくらいに飲ませてやると、幼女は途中でギブアップを宣告してきた。

その後も若干無理を押しして水分補給させたので、もう飲み物は大丈夫だろう。

となると汗を拭くものが欲しいな。

私が服でタオルの代用など使用ものなら、この我が俤ロリはやはり全力で拒否するだろうな。

「これを使ってくれ！」

ジョギング中のおじいさんが首に巻いていたタオル、もとい手ぬぐいを息を切らしながら貸してくれた。

のはいいんだが、コースは公園で折り返し地点だったのだろうか。  
大分長い距離を走ってきたかと思われるほど手ぬぐいは汗で濡れていた。

地の句なので容赦なく言わせてもらうが、全くもって使い物にならない！

「ちょっとそれ貸して」

デートの待ちあわせ中だったらしき少女は言うや否や私から汗でびっちょりの手ぬぐいをひたたくって走り去る。

今気づいたが少女の周りには沢山の人が集まっていた。

皆親切な人なのか好奇心が強いだけの野次馬なのか。

見る人の心の曲がり方次第だろうな。

無論私は後者だが。

という思考を挟んでデート待ち少女が戻ってきたときには、手ぬぐいは噴水で洗われて雑巾絞りされた後だった。

「ん……」

手際よく少女は少女の体を拭いていく。

ただゴスロリの服の構造がわからないらしく、服の隙間から手をつ込んで拭くという手法をとっている。

少女が意識を取り戻し始めたので一応聞いてみた。

「救急車を呼ぶか？」

「……涼しいトコで休めば大丈夫だ」

どうやら熱中症というより歩いてきた疲労が大きいらしい。

こんな生意気な口がきけるなら病院に行く必要も無かろう。

一番最初に駆け寄ったということもあるし、私がクーラーのきいたどっかの店に連れて行くでしょう。

「よいせ」

私がお嬢さん抱っこで幼女を抱えあげると、人々は雑談を交わしながらゆつくりと散っていった。  
そのまま去ろうとしたが救急に参加した面子が声を掛けてきた。

「いい子ね、飴玉あげようかい？」

日向ぼっこ夫妻の妻の申し出を断らせてもらったが、幼女に与えるという妥協案に落ち着いた。

この年ではーちゃんから飴玉を貰うのもな・・・  
互いにご苦労様などと労わったり褒めあったりしながら、ひとまず近くの喫茶店に向うことにした。

「・・・恥ずかしいからおんぶにしてくれ」

「あ、すまん」

流石に性に敏感なお年頃の野郎にお姫様抱っこは嫌か。  
別におんぶでも大して変わりはないと思うが。

「わかってないようだから言っとくけど、僕は男だからな」

「ああ、百も承知って男?!」

まさかの誤解、幼女は幼女ではなかった。  
こんな可愛いのが女の子なはずがない・・・ッ!  
逆か。

幼女の対義語が意外と無かったことが発覚

## 第61戦 VSゴスロリ「幼女」(後書き)

今回の後書きは見ない、もしくは見なかったことにするのをオススメします。

明らかにセリフと地の文がいつもと変わりすぎました・・・  
原因は幼女ではなく、今夏ラノベの読みすぎかと。  
そもそもそんなにロリコンでもない。  
読みすぎると文章に力を入れなくなる。

以下そのラインナップ

- ・俺の妹がこんなに可愛いわけが無い
- ・狼と香辛料
- ・パパの言うことを聞きなさいっ！
- ・僕には友達が少ない
- ・薔薇のマリア
- ・嘘つきみーくんと壊れたまーちゃん
- ・電波女と青春男
- ・東方同人小説(ラノベ？)

誰得ってか俺得です。

単に自慢したかっただけです・・・すいません。  
勿論全巻読んだわけじゃないどころか数冊ずつなんで全部あわせても20ちよつと位。

忙しい割には読んだねってだけです・・・

ちなみに自分で買ったのは下から4つ、残りは友達からの借り物です。

財布にエコ。

どうもはためーわくな後書きを読んでもくれた方ありがとうございます。

でも書きたかった……

ただの自己満足ですが、「俺もこれ読んだな」と思ってにやりとした方がいれば幸いです。

そもそも読者の方がわからない後書きつても問題ですよ……反省してこういうネタは控えようと思います。

無理ですが。

他人に自分を理解してもらいたいと思うのが人のサガ……ッ！



## 第62戦 VSゴスロリ「幼女？」（前書き）

そして過去最大の長さをまた更新。

## 第62戦 VSゴスロリ「幼女？」

「僕は今、家出をしているんだ」

「・・・へー」

左手で頬杖をつき、反対の手でアイステイーをカラカラとかき混ぜる手を止めないまま私は応えた。

幼女・・・もとい黒いゴシッククロリータに身を包んだ少年は、何だか誇らしげに胸を張っている。

ちよつと悪ぶったことを、子供は格好いいと思うのは今の時代も変わらないらしい。

ファミレスの涼しいエアコンは、少年を得意げにさせるまでその責務を果たしたようだ。

と思ったら少年は私の反応の薄さのせいでスネた。

「・・・なんだよ、それ。パフエ、おかわりするぞ」

「へえ、そいつは知らなんだー格好いいなー」

アイステイーをかき混ぜながら無表情で応えてみた。

おお、睨んでる睨んでる。

手を止めて元幼女だった少年の方を見ると、顔を真っ赤にして涙目になりながら睨んでいた。

どう見ても「カワイイ」という形容しかできないロリのそれだった。可愛いのだが非常に心苦しいものがあるな。

いじめすぎたようだ。

「で、どうして家出なんぞしてるんだ？」

元少女はお冷を口につけてから、口を開いた。

「家出つて言つてもまだ一日も経つてないけどね。あ、すいません、パフェもう一つ」

「こんの糞餓鬼が……」

人がせつかく涼しいファミレスに連れてきたというのに、なんてふてぶてしい奴だ。

しかし話題を逸らされたところ辺り、あまり動機は話したくないようだな。

もしくは打ち明けるほど心を開いていないか。

どちらかと言うと後者の色合いが強そうだ。

「お前、これからどうするつもりだ？」

「……」

無言のまま少年は再びお冷に口をつける。

ノープラン、か。

このまま交番に突き出して、ハイさよならつてのも後味が悪いしなよし。

「行くアテがないのなら、服を買いに行くのに付き合ってくれないか？」

どうせ近々買いに行く予定だったのだからいい機会だ。

このままコイツを放って宝蓮荘に直帰するわけにはいかんだろう。

「知らないオジサンについていっちゃ駄目、ってお母さんは言ってたぞ」

「知らないオジサンにアメを貰ってはいけない、とは言われなかったか？」

「言われた、でもこれはパフェだ。だから大丈夫」

「・・・へえー」

本日2へえー。

金の脳はいづこへ。

「でもまあパフェが食べ終わったら行つてあげてもいいよ」

「へえへえ」

たまには頑張つてへりくだつた形にして4へえーまで稼いでみた。100へえーまで残すところ96へえーだ。

しかしコイツ、このえらそうなやつ何処かにいたな。

あ、私か。

結局この後、元少女の今年の先生についての話を、私がぬるくなつたアイステイーをかき混ぜながら聞く描写が続くので割愛させてもらう。

ちなみにへえーポイントは途中で飽きて数えるのを止めた。

「ほ、本当に買ってもいいのか？」

「パフェを何杯もおかわりしておいて、ここで遠慮するなよ」

私達の現在地点は偶然近くにあったユニクロだ。

流石にゴスロリ幼女を連れ歩くのは私の精神衛生上、非常によろしくないなので男服を着せてみることにした。

前話で触れた小学校時代からの友達の母親に頼むのも悪いので、ユニクロ案を採用。

それ以前にゴスロリ幼女を連れたまま友達の母親に会えるか。

しかし精神ダメージを回避しても、財布へのダメージは大きいかな・

今月はバイトが多い月でよかった。

「でも・・・」

なにやら渋っていたが、面倒なので無視してレジを通る。

子供なら人に遠慮なく頼ればよかるうに。

「えっと・・・その・・・ありがとう」

「おう」

よく言えました、という意味を込めて俯いた頭を軽く撫でてやる。  
やはり子供は髪がサラサラだ。

「ほら、さつさと着替えろ」

試着室に少年をぶち込む。

これで脱・ゴスロリだ。

割とあんな街中であんな格好をしていたのだから、ゴスロリに何らかの拘りを持っているかと思えばそういうわけではないようだ。それなら何故・・・と暫く考えているとカーテンが開いた。

「お待たせ」

「・・・・・・・・」

「何だよ、その顔」

下が黒めのジーンズで、上がテキトーな柄がプリントされた白いTシャツ。

更にその上に帽子をかぶっている・・・と文章にすればさほど変でもない。

ただ少年というよりは、どちらかというと男装した少女といった方がしっくりくる。

ファッションのおかげか先程よりかは大人っぽくなっているが。

「お前、本当に男か？」

「ぶれいもの！なんなら・・・触ってみるか？」

「それはいい」

全力で手を突き出して拒否。

周りからどんな風に見られるかわかったものではないからな。そもそも人として大切なモノを見失いそうで怖い。とりあえずそこまで言うのなら本当なんだろう。

「おし、隣の公民館に行くぞ」

「ん」

自動ドアを抜けてしばしの地獄、暑い。

右手に持ったゴスロリの入った袋が熱源な気がしてきた。

ちらりと横で暑そうにしている元少女を見て思う。  
服を買ってやって恩を売ったのだから、そろそろ聞いてもいいだろう。

「結局、そうして家出したんだ？」

「・・・・・・・・」

一瞬だけ動きを止めてまた歩き出す。

先程よりしかめっ面になった表情はためらっているように見える。  
数歩歩いた後、決心したのかようやく口を開いた。

「お姉ちゃんが、僕に女の子のカッコをするように言うから」

「・・・・・・・・へえ」

私も同じように僅かな間、動きを止めさせられた。  
なんともリアクションに困る話である。

再び自動ドアを抜けて公民館に入り、その辺にあった椅子に並んで

腰掛けた。

「イヤだってちゃんと言ったのか？」

「お母さんがあまり家にいないからお姉ちゃんはいつも家事とかで忙しそうで……だからお姉ちゃんになんかしたいけどできないから……」

「そして本当は嫌だけど姉がそれで安らぐのなら、と」

深刻そうな顔のまま元少女は小さく首を縦に振った。  
そして話を続ける。

「でもこないだクラスの友達にたまたま見られて……それをからかわれて……」

「……」

で、姉に止めてもらうつようにも言えず、かといってこれ以上続けたくない。

その板ばさみをどうしようもなくして逃げようと家出したわけだ。  
随分と優しい子だな。

息を長々と吐いてから、説教役を買って出ることにした。

「あんなあ」

「何」

不機嫌そうに俯いたまま声を出す元少女に、言葉を続ける。



「弟に女装させるよう言われるのと、家出されるの、姉がどっちの方が嫌と思うかわからないわけでもないだろう?」

「だけど……」

「それを拒否するくらいの我が侏……いや、姉の我が侏をハイハイと言つて全部飲んでやる必要は無いんだ」

私は正面を向きながら話しているからわからないが、何となくこっちの方を向いた気がした。

「姉が忙しいのを気にしてるなら、お前が家事を手伝えればいいだろ。できないなら私が教えてやってもいいし、そういうことができる友達に頼つてもいい。直接言えないのなら母親に言つのだって別に悪いことじゃないだろ」

「うん……」

「つまりだ」

椅子立ち上がって振り返り、熱中症の原因となったゴスロリが入った袋を手渡した。

これ以上私が持っていたら、私がこれを持って帰ることになってしまう。

「もう少し人を頼れてことだ。甘えろってことだ。家出なんかして心配かけるより、何万倍もいい」

手を掴んで椅子から立たせる。

「だから早く家へ帰れ、な？」

「……………わかった」

何とか一件落着だ。

最近どうにも説教臭くなってる気がするがまあいいか。

「これで途中で誘拐とかされたらお前の姉に合わせる顔が無いから、一応途中まで送ってくぞ」

「まだ昼間なのに……………別にいいけど」

そして二人並んで炎天下の中を歩き続ける。

気のせいかもしれないが、先刻よりは涼しくなった気がする。

「あ、一応これが私の家の電話番号な」

手帳に番号を殴り書きしたものをから切り取って渡してやった。

連絡先もよこさずに、何かあったら私を頼れ、ってのもおかしいしな。

元少女はそれをたたんで袋の中にしまう。

「じゃあ僕のケータイ番号、今から言うから」

「…………お前その年でもうケータイなんか持ってたのか。というか番号覚えてるのか？」

「じーぴーえすってヤツがついてるからケータイは家。番号は前にお母さんが迷子カードみたいの買ってくれて、それに書いてある」

多分、家族はコイツのことを溺愛しているのだろう。

忙しいから放任になつてはいるが、時間があつたら恐らく超過保護になるだろうな・・・

なんてことを考えながら言われたとおりに手帳のアドレス帳に名前を書いてみると、とある事実に気づく。

「そういえばお前、なんて名前だ？」

「名前は自分から名乗るものだよ」

生意気な・・・

「橘家人。お前は？」

「大和薫。あんま好きな名前じゃないけど」

「私は年寄りになつて恥ずかしい名前でなければ、大体良い名前と思うがな」

世界は大分狭いな・・・

そういえば先代管理人が昔「甥が超可愛いの！」と言っていたが、確かその名前が薫だった気がする。

「もうすぐだから大丈夫」

「ああ。じゃあな」

「うん。また今度」

手を上げて別れる。

良いことをした後は気分が良いな、ハッハッハ。  
そして天を仰ぐ。  
まだ灼熱の太陽に手をかざしながら

「ここは何処だ……」

やはり世界は広いかもしれない。

橘家人が宝蓮荘に帰還したのは結局日が暮れてからだった。

## 第62戦 VSゴスロリ「幼女？」（後書き）

男の娘は性格付けが難しいです。

・ 家人みたいな偉そうなキャラにしようとしてもキャラが立たない・

てことで一ヶ月以上空けてすいませんでした。

近頃、大学受験が近づいてきて逃げたいです・・・

### 第63戦 VS 眠れぬ夜

布団にくるまったまま、天井をぼうつと見つめる。

暗く静寂に包まれた室内にはたまに通る自動車の音が良く響く。

少し前まで暑さに苦しんでいたのが嘘のように、布団の外は肌寒い。カーテン僅かな隙間から月の光が差し込んでいた。

古典的とも呼べるような形の目覚まし時計が、舞台上の俳優のように月光のスポットライトに照らされている姿はどこか滑稽だ。

現在時刻 0 : 32

「眠れない・・・」

私は時間の使い方には自信がある。

普段から全く無駄がない、常に動いているようなスケジュールを組んでいる。

散歩とかできる日は極々稀なのだ。

酷使された体はいつもはいい具合に疲れているので、布団に入るとすぐに寝入ってしまう。

しかしこの前、徹夜でゲーム大会をしたので、生活リズムが狂ってしまった。

「どうしたものか」

そういえば子供の頃は母さんと一緒に布団にもぐって、本をよんでもらって・・・ないな。

なんにせよ眠れぬ秋の夜に読書と言うのも風情があって良いだろう。今は重さが無いとかそういうレベルのまぶたも、その内重くなるはずだ。

体温を奪われたくは無かったので、本棚から読みかけの小説を取り出してついでに蛍光灯の明かりをつける。  
月の明かりで読書に耽るのも悪くは無いが、情緒よりも目の健康を優先すべきだろう。  
みの虫よろしく布団をかぶり、ページをめくってしおりを探し当てる。

私は本の中の世界へと落ちていった。

現在時刻 1 : 10

「あれ？」

とは言えどこかでこんなオチになるとは思っていたが。  
左手の方にあつた紙は束は今やほとんどが右手側に移ってしまい、残すところは広告部分と裏表紙だけである。

要約すると本の内容が面白すぎて読みきってしまったわけだ。

駄目大学生の話なのだが、気取った文体と中身というか主人公自身の軽さが妙にマッチしていた。

全四章で、四つのサークル内一つを選択した場合を章ごとに描いている、という構成も中々面白い。

同じ状態、心境描写する際にコピー＆ペーストを乱用するのはどうかと思つたが。

ギャグにしては……って読んでいた本の内容をおさらいしている場合ではなくて、だ。

蛍光灯の光を血圧を上げないよう最小限の動きで蛍光灯の光を落と

す。

「眠れないときと言えば

」

やはり羊を数えるのが王道か。

羊が一匹、羊が二匹、羊が三匹、羊が四匹。

羊が五匹、羊が六匹、羊が七匹、羊が八匹……

そういえば何故人は眠れないときに羊を数えるのだろうか。

別に山椒魚だろうと朱鷺だろうとイリオモテヤマネコだろうと構わなかったように思う。

何故羊なのか、それはイメージに拠ってのことかもしれない。

羊と言えばフカフカとした毛皮が特徴だ。

その印象が安眠へとつながり、やがては眠るための民間療法になったのか。

あるいはいつも羊を数えているうちに居眠りしてしまう羊飼いがいて、彼が眠れぬ夜に羊を数えてみようと思ったのか。

いや、羊のスペルは s h e e p だから……

現在時刻 2 : 4 3

結局下らないことばかり考える私の脳みそは「本当に社会主義く資本主義なのだろうか？」というところまで行き着いてしまった。どうやって羊の話がマルクスやエンゲルスまで到達出来たのか自分に問いかけたいものである。



「・・・・・・・・」

不味い、非常に不味い。

明日は七時間授業で且つ、音楽などの休憩教科が無い主要教科だけのハードな曜日だ。

授業中に眠るのは私の主義に反する。

そもそも席が教卓のまん前の時点で居眠りするはずができれば、いや出来ない。

反語表現を用いなければならないほど不可能だ。

「よし」

暖房器具という概念が存在しない布団の外へ赤裸々にダイブ。

今までの敗因は精神状態を上手く操作して寝ようとしたからだ。

そんな自己暗示程度のもものではもう駄目だ。

睡眠薬などで体を直接眠らせるべきだ。

「・・・・・・・・くっ・・・・・・・・」

二、三回程間合いを取り直すことによって、やっとこさ電気のとモを掴む。

急に明るくなった台所は少し不気味だ。

ゴキブリが出るかもしれないからな。

「っつ」

観音開きの棚をを早くもかじかんできた手で開ける。

眠れないときはコカインを摂取すれば良く眠れるという。

ってコカインは麻薬だ。

カテキンだったか？

いや、カフェインだったかもしれない。

・ ・ ・ ・ ・ とりあえずコーヒーでも飲んでみるか。

「カフェ」としているのだから何かゆったりとした感じになるの  
だろう。

少なくともカテキンは角ばった音なので多分ハズレだ。

現在時刻 3:15

ハズレだつたろこれええええええ！

「カフェ」とついているからと言って優雅でゆったりしているわけではないようである。

良く考えればウチの喫茶カフェなんかは、ほとんど居酒屋のようなものだ。

「私にどうしろと言っただ！」

念のため近所迷惑にならないような音量で叫ぶ。

布団の中はすっかり温かくなっており、不快指数は最高潮へと達していた。

駄目だ駄目だ駄目だ駄目だ！

今からでも遅くない、体を疲れさせれば何とかなるはず。

寝間着のままに靴だけスニーカーを履く。

ドアを勢いよく開け放つ、やはり近所迷惑を考慮しながら。

暗闇を優しく月光が照らす町へと、私は「睡眠」という人類最上の

命題を抱えて飛び込んだ。

現在時刻 8：30

「という夢を見た」

「夢だと言いつれのない微妙な夢才子よね、それ・・・」

この世界が蝶の夢でないと誰が言いつれるだろうか

### 第63戦 VS 眠れぬ夜（後書き）

ということで皆様の安眠の手助けになったでしょうか？

一応説明しときますと、主人公が読んでいる本は「四畳半神話体系」です。

最近一押しの小説。

嗚呼、大学行きたくない・・・就職は尚更。

ついでにもう一つ一押し。

「ラピユタ効果と夏の夕暮れ」というのを読んでみてください。

珍しくシリアス短編。

四面楚歌の人比良さんの東方夢十夜の読了後すぐ書いたので雰囲気  
が別に似てないです。

夢現再販に狂喜したのは私だけではないはず。

## 第64戦 VS 蒲公英組組長

帰りのホームルームも終わり、ざわざわと会話する声で教室が満たされている。

クラスという括りでまとまっていた者達が、部活や遊びで散り散りになる時間だ。

私はバイト、井モノは部活開始時刻まで教室で粘ろうとしていると、クラスのざわめきが一層大きくなり、興奮を伴ったものとなった。

気がつけば私達二人以外全員、窓際に集まって地上三階から校庭の方を見降ろしていた。

「なんだろ、この騒ぎ」

井モノの疑問を解消すべく、窓際の野次馬と化している者共に話しかけてみることにした。

「嚙。芸能人でも来たのか？」

「というか有名人だけど……ローカルな。まあ見ればわかるでしょうけど」

まさか私の母親ではなからうな、という一抹の不安が脳をよぎる。席を立て井モノと野次馬に加わると、ドラマとかでしかなさそうな光景が広がっていた。

「あれって……」

「蒲公英組だな。しかもオールスターで」

校門の前には黒い高級車が何台も止まっている。そこからヤクザとしか形容のしようが無い方達が、続々と降りてきた。

組長兼町内会会長の人柄を知っている生徒は、多少ビビりつつも挨拶をしながら校門を通過し、知らない生徒は裏門から帰ったり、勇気を出して校門をそそくさと帰ったりしている。

好奇心の強いものは少し離れた所から様子を観察している。

ただ全体として蒲公英組がどういう所なのか知っている人が多いので、校門に大量のヤクザ、割と普段通りに下校する生徒達という、微妙にシニールな絵面になっていた。

「何故、蒲公英組が学校に来ているのだ……」

「漫画とかなら、討ち入り前に普段は一学生を装っている組長を迎えに来た、とか」

「組長あそこにいるけどね」

もしくは下っ端ズを一人でぶちのめした、伝説の不良がこの学び舎にいたとか。

私達が様々な推測を好き勝手に楽しんでいると、新入りらし組員が大きく息を吸い込み、そして叫んだ。

『橘家人〜！迎えに来たぞ〜！』

「…………え？」

「だつてさ」

「いつてらっしゃい、若旦那」

両隣の井モノと櫂が、私の肩をポンと叩いた。

何故私が…………何にせよ、この状況が長い事続くのはいただけない。

麗香の影響を受けてルーズになっている教師陣が重い腰を上げたら、余計に面倒くさい事になる。

他の級友からも冷やかし、同情、心配なんかをそれぞれ受け取りながら、私は教室を出た。

悲しい事に、三つのうち最後の一つが一番少なかった。

私は随分と友人関係に恵まれているようだ。

そもそも、うちのクラスのほとんどが組長のことを知っているというのもあるが。

何にせよ明日から学校に行き辛くなるのは間違いなかった。

鬱だ…………

ししおどしの音に風情を感じた次の瞬間、そばを通過するトラックの騒音が雰囲気崩壊させる。

黒車で町内に総回診を行うこと十数分、蒲公英組組長の家についた。

組長の庭は町内のモノにしてはかなり広いが、私の実家ほどではない。

しかし住宅街から浮くには十分すぎる風情を持った日本庭園だった。

「待たせたな」

「いや」

ふすまが開けられ、グラサンに甚兵衛を身に纏った組長が入ってきた。

ちなみに組員はあの後すぐに帰った。

どうやら校門の前にヤクザというシチュエーションがやりたかっただけらしい。

この人たち極道というよりコスプレ集団なんかじゃなかろうか。あながち的外れでもなさそうな推測をしていると、木製の高そうな机の向こう側に、組長が胡坐をかいて腰を下ろしていた。

「……」

「……」

今気づいた。

……この人、とんでもなく怖い。

「坊主……」

「は、はい」

グラサンから僅かに覗く眼光が、鋭くこちらを射抜いている。



眉間には不機嫌そうにしわが寄せられていた。

なんだか背後に「ドドドド」と効果音が出ている気がするのだが……

「なあ」

大分冷え込んできたというのに、一筋の汗が顔を流れ落ちる。

気づいたら私は、座布団の上で正座した膝の上に手をぎゅっと握っていた。

一步選択肢を間違えれば、奈落の底へと飲み込まれるかもしれない。

「最近、学校はどうだ？」

バランスを崩して前のめりになる。

「父親かッ！」というツツコミを脳内で即切り捨てる。

何を言えば良いかという思考が一瞬のうちに頭の中をぐるぐると廻り、結局絞り出された答えは、全く中身のない台詞だった。

「まあ、ぼちぼちという所だ」

「そうか……」

その後は私も組長も無言となった。

気まづくなると、彼への恐怖心が胸の中でじりじりと燃え上がり始める。

ちらりと相手の方を見やると、瞬き一つせず私のことをガン見していた。

私が何かしたかよおおおお！

握りしめた拳も汗をかいているのが不快で、手を開いてスボンでぬぐうが、一時凌ぎに過ぎず、またじんわりと手汗がにじむ。

何か、何か話すんだ！

「えっと、その縁側に置いてある鉢植えの花は奥さんのモノか？中々可愛らしいが、少し日本庭園には場違いな感じが……」

「それは俺のだ」

私の大馬鹿野郎おおおおおおお！！

組長の趣味が園芸だというのは知っていただろうが！

そもそもなんでタメ口なんだよッ！

キャラ付けってレベルじゃねーぞ！

……落ち着け、落ち着くんのだ。

本来の私はエクスクラメーションマークを多用する性分ではなかったはずだ、多分。

第一何でいつもマススコットキャラクターのように思っていた組長が、こんなにも怖いんだ。

あれか、いつもは集団心理で「赤信号、皆で渡れば怖くない状態」だったとでも言うのか。

そう考えるといじめっ子みたいで嫌だなあ……

否、この状況はそれだけに起因しているモノではないはずだ。

いつもと彼の様子は明らかに違う。

恐らくその原因は、私が呼び出されていたことに関係するだろう。というか私バイトあるんだった。

「す、すまないがバイトがあるから、早く帰りたいん……だが……」

「よく聞こえん。何か言ったか？」

「いいえ……」

途中で明らかに殺気を放っていると思われる目と視線がぶつかってしまい、言葉はほとんど尻すばみになってしまった。

しかしここで勇気を出さなくてどうする、橘家人！

自分に湯を入れて、背筋を伸ばして座りなおる。

からからに乾いた口内に、無理やり唾液を分泌させて喉を湿らせた。最後に肺の中の息をゆっくりと吐き出し、眼前の男を睨みつける。

「今日は喫茶カフェのバイトがあるから、そろそろ帰らせて欲しい」  
言った、言ったぞ！

途中声が少し震えた気もしたが、組長とサシのこの状況を鑑みれば上出来だろう。

「その必要はない」

「え？」

脳が、認識を、拒む。

コンマ数秒経ってから、自分の中にマトモな思考能力が戻る。

必要はないと言うことは、どうせ死ぬのだからバイトなんて行く必要がないということか？！

そんな馬鹿な……流石に殺人なんて……

「今、茶が来るから少し待っている……その間に（話を聞く）覚悟をしておけ」

「あ……ハイ……」

その時、私は、地獄の釜が音を立てて開くのが確かに聞こえた。

組長は大事な話をしようとして緊張というか遠慮していただけである

## 第64戦 VS 蒲公英組組長（後書き）

任天堂的にはキリの良い話数にもなりましたし、次回から最終編に移行したいと思います。

ちなみにSFモノの短編も更新したので、よろしければどうぞ。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n5015f/>

---

宝蓮荘の高校生管理人

2011年5月18日01時35分発行